

豊後大野市所在
かみ た はら ひがし
上 田 原 東 遺 跡

— 県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2） —

（第1冊分）

2024

豊後大野市所在
かみ た はら ひがし
上田原東遺跡

— 県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2） —

（第1冊分）

2024

序 文

本書は、県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部豊後大野土木事務所の依頼を受けて実施した、上田原東遺跡の発掘調査報告書です。

上田原東遺跡は豊後大野市三重町の北方、大辻山－牟礼岳山塊の北西に張り出す台地上に所在します。眼下に蛇行する大野川を見下ろし、三重盆地の北端を押さえる要衝といえる場所にあたります。

発掘調査の結果、縄文時代後期後葉～晩期後葉、弥生時代中期～後期初頭、古墳時代前期後半、古墳時代後期後半の4つの時期を中心に、竪穴建物をはじめとした多数の遺構や遺物が確認されました。中でも、これまで県内でほとんど確認されていなかった、縄文時代晩期後葉の多数の竪穴建物や、遺跡の南に位置する県指定史跡で4世紀後半の築造とされる前方後円墳の立野古墳とほぼ同時期の集落を初めて確認できたことは大きな成果で、今後の地域研究に資する良好な資料となることが期待されます。本書が、埋蔵文化財の保護と啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和6年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター
所 長 後 藤 晃 一

例 言

1. 本書は令和2年度に実施した、大分県豊後大野市三重町上田原に所在する上田原東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道三重新殿線(牟礼前田工区)道路改良事業に伴い、大分県土木建築部豊後大野土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 上田原東遺跡の発掘調査は令和2年5月8日～令和3年1月21日にかけて実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第一課 副主幹 横澤 慈、調査第二課会計年度任用職員 綿貫俊一を主担当者として実施した。
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
・株式会社イビソク大分営業所(調査技師 佐藤孝則、木付雄大、調査助手 高木啓司、幸重由香)
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、写真撮影、トレース等の整理作業は令和3～5年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した。遺構・遺物図版の作成は横澤が行った。
6. 土器の表出瓦痕分析は令和5年度に熊本大学大学院人文社会科学部教授 小畑弘己氏に依頼し、第8章に分析結果を掲載した。
7. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター(大分市牧緑町1番61号)で保管している。
8. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
9. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SH(竪穴建物)、SB(掘立柱建物)、SK(土坑)、SD(溝)、SA(柱穴列)、SP(柱穴)、SX(埋納遺構及び性格不明遺構、攪乱)
10. 各遺構の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』(1997年度版)を参照した。
11. 本書の執筆及び編集は横澤が行った。

目次

【第1分冊】

序文

例言

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	3
第3節 資料整理・報告書作成の経過	5
第4節 調査組織の構成	5
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 1区の発掘調査成果	9
第1節 調査区の設定と基本層序	9
第2節 縄文時代の遺構と遺物	12
第3節 弥生時代の遺構と遺物	21
第4節 古墳時代の遺構と遺物	24
第5節 古代・中世の遺構と遺物	46
第6節 近世以降の遺構と遺物	57
第7節 その他の遺構・遺物	61
第8節 1区出土遺物	68
第9節 旧石器時代の確認調査	68
第4章 2区の発掘調査成果	69
第1節 調査区の設定と基本層序	69
第2節 縄文時代の遺構と遺物	72
第3節 弥生時代の遺構と遺物	100
第4節 古墳時代の遺構と遺物	112
第5節 古代・中世の遺構と遺物	162
第6節 その他の遺構	164
第7節 包含層その他の出土遺物	164
遺物観察表	166

【第2分冊】

第5章 3区の発掘調査成果

 第1節 発掘調査の概要

 第2節 調査区の基本層序

 第3節 遺構と遺物

 (1) 縄文時代の遺構と遺物

 (2) 弥生時代の遺構と遺物

- (3) 古墳時代の遺構と遺物
- (4) 古代・中世の遺構と遺物
- (5) その他の遺構と遺物
- (6) 包含層その他の出土遺物
- (7) 旧石器時代の確認調査

遺物観察表

【第3分冊】

第6章 4区の発掘調査成果

- 第1節 発掘調査の概要
- 第2節 調査区の基本層序
- 第3節 遺構と遺物
 - (1) 縄文時代の遺構と遺物
 - (2) 弥生時代の遺構と遺物
 - (3) 古墳時代の遺構と遺物
 - (4) 古代・中世の遺構と遺物
 - (5) その他の遺構と遺物
 - (6) 包含層その他の出土遺物

第7章 5区の発掘調査成果

- 第1節 発掘調査の概要
 - 第2節 調査区の基本層序
 - 第3節 出土遺物
 - 第8章 自然科学分析
 - 第9章 総括
 - 遺跡の年代的変遷
 - 縄文時代晩期の遺構と遺物について
 - 弥生時代の遺構と遺物について
 - 古墳時代の遺構と遺物について
 - 古代・中世の遺構と遺物について
- 遺物観察表

【第4分冊】

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図	県道三重新設線バイパスの計画路線と発掘調査遺跡 (1/50000)	1
第2図	上田原東遺跡の調査区配置図 (1/1500)	2
第3図	確認調査出土遺物実測図 (1/1)	2
第4図	上田原東遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院発行2万5000分の1地形図「大剣」・「三重町」に加筆)	8
第5図	上田原東遺跡の調査区配置と1区的位置図 (1/1500)	9
第6図	上田原東遺跡1区の遺構配置図 (1/200)	10
第7図	1区土層断面図 (1/60)	11
第8図	SH662 実測図 (1/30)	12
第9図	SH662 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	13
第10図	SK557 実測図 (1/30)	13
第11図	SK557 出土遺物実測図 (1/2)	13
第12図	SK571 実測図 (1/30)	14
第13図	SK571 出土遺物実測図 (1/3)	14
第14図	SK579 実測図 (1/30)	14
第15図	SK579 出土遺物実測図 (1/3)	14
第16図	SK591 実測図 (1/30)	15
第17図	SK591 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	16
第18図	SK595 実測図 (1/30)	17
第19図	SK595 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	18
第20図	SK642 実測図 (1/30)	19
第21図	SK642 出土遺物実測図 (1/3)	19
第22図	SK651 実測図 (1/30)	19
第23図	SK651 出土遺物実測図 (1/3)	19
第24図	SK664 実測図 (1/30)	20
第25図	SK664 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	20
第26図	SK666 実測図 (1/30)	21
第27図	SK666 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	22
第28図	SK675 実測図 (1/30)	22
第29図	SK675 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	23
第30図	SK691 実測図 (1/30)	23
第31図	SK691 出土遺物実測図 (1/2・1/3)	24
第32図	SH600 実測図 (1/30)	25
第33図	SH600 出土遺物実測図 (1/3)	25
第34図	SH667 実測図 (1/30)	26
第35図	SH667 出土遺物実測図 (1/3)	26
第36図	SH687 実測図 (1/50)	27
第37図	SH687 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	27
第38図	SK665 実測図 (1/30)	28
第39図	SK665 出土遺物実測図 (1/2)	28
第40図	SD589 実測図 (1/50)	29

第 41 图	SD589 出土遗物实测图 (1/3)	29
第 42 图	SD690 实测图 (1/30)	30
第 43 图	SD690 出土遗物实测图 (1/3)	30
第 44 图	SH535 实测图 (1/50 · 1/30)	32
第 45 图	SH535 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	33
第 46 图	SH536 实测图 (1/50 · 1/30 · 1/20)	34
第 47 图	SH536 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2 · 1/4)	35
第 48 图	SH537 实测图 (1/50)	37
第 49 图	SH537 出土遗物实测图① (1/3)	38
第 50 图	SH537 出土遗物实测图② (1/3)	39
第 51 图	SH537 出土遗物实测图③ (1/2)	40
第 52 图	SH537 出土遗物实测图④ (1/2 · 1/3 · 1/4)	41
第 53 图	SH610 实测图 (1/50)	42
第 54 图	SH610 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	43
第 55 图	SH620 实测图 (1/50)	44
第 56 图	SH620 出土遗物实测图① (1/3)	45
第 57 图	SH620 出土遗物实测图② (1/3 · 1/2 · 1/1)	46
第 58 图	SH620 出土遗物实测图③ (1/4)	47
第 59 图	SK604 实测图 (1/30)	48
第 60 图	SK604 出土遗物实测图 (1/3)	48
第 61 图	SK612 实测图 (1/30)	49
第 62 图	SK612 出土遗物实测图 (1/3)	49
第 63 图	SK674 实测图 (1/30)	49
第 64 图	SK674 出土遗物实测图 (1/3)	49
第 65 图	SD558 实测图 (1/50)	50
第 66 图	SD558 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	50
第 67 图	SH570 实测图 (1/50)	51
第 68 图	SH570 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	52
第 69 图	SA1 实测图 (1/50)	53
第 70 图	SA1 出土遗物实测图 (1/3)	53
第 71 图	SD556 A (SX556) 实测图 (1/60)	54
第 72 图	SX556 B 实测图 (1/50)	55
第 73 图	SD556 (SX556) 出土遗物实测图 (1/3 · 1/4)	56
第 74 图	SX619 实测图 (1/60)	57
第 75 图	SX619 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	58
第 76 图	SD554 实测图 (1/50)	59
第 77 图	SX534 出土遗物实测图 (1/4)	59
第 78 图	1 区扰乱分布图 (1/200)	60
第 79 图	1 区扰乱出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	61
第 80 图	SK568 实测图 (1/30)	61
第 81 图	SK596 · SK597 实测图 (1/30)	62
第 82 图	SK596 · 597 出土遗物实测图 (1/3)	62
第 83 图	SK616 实测图 (1/30)	62

第 84 図	SK616 出土遺物実測図 (1/2)	62
第 85 図	1 区遺構実測図 (1/30・1/20)	63
第 86 図	1 区遺構出土遺物実測図 (1/3)	63
第 87 図	1 区出土遺物実測図① (1/3・1/2)	65
第 88 図	1 区出土遺物実測図② (1/1・1/2・1/3)	66
第 89 図	1 区旧石器時代確認調査トレンチ配置 (1/200)	67
第 90 図	1 区旧石器時代確認調査トレンチ土層断面 (1/30)	68
第 91 図	上田原東遺跡の調査区配置と 2 区の調査位置 (1/1500)	69
第 92 図	2 区遺構配置図 (1/150)	70
第 93 図	2 区土層断面 (1/60)	71
第 94 図	SH770 実測図 (1/50)	72
第 95 図	SH770 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	73
第 96 図	SH785 実測図 (1/50・1/30)	74
第 97 図	SH785 出土遺物実測図 (1/3)	75
第 98 図	SH871 実測図 (1/50)	76
第 99 図	SH871 出土遺物実測図① (1/3・1/2)	77
第 100 図	SH871 出土遺物実測図② (1/2・1/4)	78
第 101 図	SH915 実測図 (1/50)	79
第 102 図	SH915 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	80
第 103 図	SH954 実測図 (1/50)	81
第 104 図	SH954 出土遺物実測図 (1/3)	82
第 105 図	SH955 実測図 (1/50)	83
第 106 図	SH955 出土遺物実測図 (1/3)	84
第 107 図	SH956 実測図 (1/50)	85
第 108 図	SH956 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	86
第 109 図	SH981 実測図 (1/50・1/30)	87
第 110 図	SH981 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	88
第 111 図	SH981 (SK1000) 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	89
第 112 図	SK782 実測図 (1/30)	90
第 113 図	SK782 出土遺物実測図 (1/3)	90
第 114 図	SK812 実測図 (1/30)	90
第 115 図	SK812 出土遺物実測図 (1/2)	91
第 116 図	SK898 実測図 (1/30)	91
第 117 図	SK898 出土遺物実測図 (1/3)	91
第 118 図	SK950 実測図 (1/30)	92
第 119 図	SK950 出土遺物実測図 (1/3)	92
第 120 図	SK970 実測図 (1/30)	92
第 121 図	SK970 出土遺物実測図 (1/3)	93
第 122 図	SK1053 実測図 (1/30)	93
第 123 図	SK1053 出土遺物実測図 (1/2)	94
第 124 図	SD774 実測図 (1/30)	95
第 125 図	SD774 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	96
第 126 図	SH815 実測図 (1/50)	96

第 127 图	SH815 出土遗物实测图 (1/3)	97
第 128 图	SH860 实测图 (1/50)	97
第 129 图	SH860 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2 · 1/1)	98
第 130 图	SK776 实测图 (1/30)	99
第 131 图	SK776 出土遗物实测图 (1/2)	99
第 132 图	SH29 实测图 (1/50)	100
第 133 图	SH29 出土遗物实测图① (1/3)	101
第 134 图	SH29 出土遗物实测图② (1/3)	102
第 135 图	SH29 出土遗物实测图③ (1/3)	103
第 136 图	SH29 出土遗物实测图④ (1/3 · 1/2)	104
第 137 图	SH29 出土遗物实测图⑤ (1/4)	105
第 138 图	SH724 实测图 (1/50)	106
第 139 图	SH724 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	106
第 140 图	SH726 实测图 (1/50)	107
第 141 图	SH726 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	107
第 142 图	SH730 实测图 (1/50 · 1/30)	108
第 143 图	SH730 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	109
第 144 图	SH731 实测图 (1/50)	110
第 145 图	SH731 出土遗物实测图① (1/3 · 1/2)	111
第 146 图	SH731 出土遗物实测图② (1/4)	112
第 147 图	SH750 实测图 (1/50 · 1/40)	113
第 148 图	SH750 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	114
第 149 图	SH760 实测图 (1/50 · 1/40)	115
第 150 图	SH760 出土遗物实测图① (1/3)	116
第 151 图	SH760 出土遗物实测图② (1/3)	117
第 152 图	SH760 出土遗物实测图③ (1/2 · 1/4)	118
第 153 图	SH773 实测图 (1/50)	119
第 154 图	SH773 出土遗物实测图① (1/3 · 1/2)	120
第 155 图	SH773 出土遗物实测图② (1/2 · 1/3)	121
第 156 图	SH801 实测图 (1/60 · 1/40)	122
第 157 图	SH801 出土遗物实测图① (1/3)	123
第 158 图	SH801 出土遗物实测图② (1/3 · 1/1 · 1/2)	124
第 159 图	SH896 实测图 (1/80)	126
第 160 图	SH896 床面遗构实测图 (1/30)	127
第 161 图	SH896 出土遗物实测图① (1/3)	128
第 162 图	SH896 出土遗物实测图② (1/3)	129
第 163 图	SH896 出土遗物实测图③ (1/1 · 1/2)	130
第 164 图	SH896 出土遗物实测图④ (1/2)	131
第 165 图	SH896 出土遗物实测图⑤ (1/3 · 1/2)	132
第 166 图	SH916 实测图 (1/50)	133
第 167 图	SH916 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)	134
第 168 图	SH946 实测图 (1/50)	135
第 169 图	SH946 出土遗物实测图 (1/3)	135

第 170 园	SH1049 实测园 (1/50)	136
第 171 园	SH1049 出土遗物实测园① (1/3)	137
第 172 园	SH1049 出土遗物实测园② (1/2·1/3·1/4)	138
第 173 园	SK737 实测园 (1/30)	139
第 174 园	SK737 出土遗物实测园 (1/2)	139
第 175 园	SK761 实测园 (1/30)	140
第 176 园	SK761 出土遗物实测园 (1/2)	140
第 177 园	SK783 实测园 (1/30)	140
第 178 园	SK783 出土遗物实测园 (1/2)	140
第 179 园	SK789 实测园 (1/30)	141
第 180 园	SK789 出土遗物实测园 (1/3·1/1)	141
第 181 园	SK791 实测园 (1/30)	142
第 182 园	SK791 出土遗物实测园 (1/2)	142
第 183 园	SK851 实测园 (1/30)	142
第 184 园	SK851 出土遗物实测园 (1/3)	142
第 185 园	SK888 实测园 (1/30)	143
第 186 园	SK888 出土遗物实测园 (1/3)	143
第 187 园	SK933 实测园 (1/30)	144
第 188 园	SK933 出土遗物实测园 (1/3·1/1)	144
第 189 园	SK725 实测园 (1/30)	145
第 190 园	SK725 出土遗物实测园 (1/2)	145
第 191 园	SK736 实测园 (1/30)	145
第 192 园	SK736 出土遗物实测园 (1/3)	145
第 193 园	SK747 实测园 (1/30)	146
第 194 园	SK747 出土遗物实测园 (1/3)	147
第 195 园	SK940 实测园 (1/50)	147
第 196 园	SK940 出土遗物实测园 (1/3·1/2)	148
第 197 园	SP759 实测园 (1/20)	148
第 198 园	SP759 出土遗物实测园 (1/3)	148
第 199 园	SD728 实测园 (1/30)	148
第 200 园	SD728 出土遗物实测园 (1/2)	149
第 201 园	2 区道槽实测园 (1/30·1/20)	150
第 202 园	2 区道槽出土遗物实测园 (1/3·1/2·1/4)	151
第 203 园	2 区出土遗物实测园① (1/3)	153
第 204 园	2 区出土遗物实测园② (1/3)	154
第 205 园	2 区出土遗物实测园③ (1/3·1/1·1/2)	155
第 206 园	2 区出土遗物实测园④ (1/2)	156
第 207 园	2 区出土遗物实测园⑤ (1/2)	157
第 208 园	2 区出土遗物实测园⑥ (1/2·1/3)	158
第 209 园	2 区出土遗物实测园⑦ (1/3·1/4)	159
第 210 园	1·2 区出土遗物实测园 (1/3·1/2·1/1)	160

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

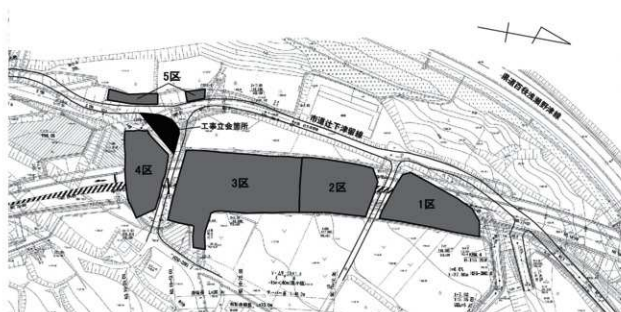
大分県道519号三重新殿線は、豊後大野市三重町(旧三重町)の中心部から豊後大野市千歳町新殿(旧千歳村の中心部)へ至る一般県道である。この県道三重新殿線は、地域の基幹的な道路として豊後大野市中心部(三重町)では特に自動車交通量も多く、通学路として歩行者や自転車の交通量も多いものの、現況では道路幅員が狭く安全な歩行空間が確保されているとはいえず、また、JR豊肥本線三重町駅北東の下田踏切では、市道高市停車場線との交差点と踏切が近接して存在するため慢性的な交通渋滞が発生するなど、課題となっていた。

このような中で、豊後大野市三重町秋葉から国道57号中九州横断道路千歳インターチェンジを結ぶバイパス工事が計画された。地域高規格道路である国道57号中九州横断道路と豊後大野市中心部の国道326号とを結ぶことで、県内内陸部の広域交流を支えるとともに、豊後大野市中心部の交通渋滞の緩和と利用者や周辺住民の利便性や安全性の向上を図り、地域の発展を目指す計画である。平成30年度にはこの三重新殿線バイパスの愛称が「豊後花咲きロード」に決定した。

バイパス工事は、三重町秋葉で国道326号から分岐し、三重町中心部を抜けて国道57号(中九州自動車道)千歳インターチェンジへ接続する、延長約10kmの計画路線である(第1図)。工事は平成10年度から着手し、既に前田新殿工区(千歳IC～千歳町前田間、延長2.3km)が平成16年4月、国道326号を高架で跨ぐ赤嶺工区(延長0.8km)が平成20年2月、内田赤嶺工区(延長0.74km)が平成25年8月、赤嶺牟礼工区(延長1.04km)が平成29年2月、内田工区(延長0.96km)が平成29年12月にそれぞれ供用を開始している。この間、道路建設と埋蔵文化財の保護の両立を図るため、随時計画路線内の試掘確認調査を行い、遺跡が確認された地点の発掘調査を実施してきた。県道三重新殿線バイパス工事に伴い発掘調査を実施した遺跡は、大園



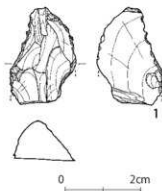
第1図 県道三重新殿線バイパスの計画路線と発掘調査遺跡
(1/50000)



第2図 上田原東遺跡の調査区配置図 (1/1500)

遺跡¹⁾(古代の集落)・上門手遺跡²⁾(中世城郭・近世墓地)・茶屋久保遺跡群³⁾(茶屋久保B遺跡、旧石器時代の文化層)である。

上記の内、残る工区は秋葉内田工区(延長1.31km)と牟礼前田工区(延長3.04km)である。秋葉内田工区では令和2年度に試掘調査⁴⁾、令和3年度に立会調査を実施したが、遺跡は確認されず、本調査対象となった箇所はなかった。一方、牟礼前田工区は木ノ元山・大辻山山塊の西裾を通り、大野川を渡って前田新殿工区に接続する計画であるが、この計画路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地である原田第1遺跡や上田原遺跡群、上田原東遺跡が所在するほか、周辺には県指定史跡である立野古墳(前方後円墳)や石棺群、豊後大野市指定有形文化財の円福寺石輪が所在するなど、遺跡や文化財の点在する地域であることから、遺跡の存在が予想されていた。



第3図 確認調査出土遺物実測図 (1/1)

千歳町前田～大野川間については平成26年度に原田第1遺跡の確認調査を実施した結果、一部で旧石器時代の遺跡が確認されたため、約180mの本調査を実施した⁵⁾。大野川～三重町牟礼間については、平成31年4月に木ノ元山西麓周辺の試掘調査を実施したところ、若干の遺物の出土を見たが遺構は確認されなかった。続いて令和元年8月に上田原遺跡群・上田原東遺跡の確認調査を実施したところ、上田原遺跡群では遺構は確認されなかったが、上田原東遺跡では弥生時代とみられる堅穴建物等の遺構を検出し、弥生時代の集落が広範囲に展開する可能性が示された⁶⁾(第2図)。また、1点ではあるが流紋岩製の角錐状石器(第3図1)の破片も採集され、旧石器時代の遺跡の存在も予想された。こうした結果を受け、関係機関と埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、令和2年度に記録作成のための本調査を実施することとなった。

- 1) 後藤一重編 2001『大洞遺跡—県道三重新幹線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県文化財調査報告書第120輯、大分県教育委員会
- 2) 五十川雄也編 2004『上門手遺跡—県道三重新幹線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県文化財調査報告書第172輯、大分県教育委員会
- 3) 総貫俊一編「茶屋久保B遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第45集、大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 4) 横澤 慈編 2021『大分県内遺跡発掘調査概報24』、大分県立埋蔵文化財センター
- 5) 総貫俊一 2018『原田第1遺跡—一般県道三重新幹線(牟礼前田工区)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集、大分県立埋蔵文化財センター
- 6) 横澤 慈編 2020『大分県内遺跡発掘調査概報23』、大分県立埋蔵文化財センター

第2節 発掘調査の経過

令和元年9月27日付で豊後大野土木事務所長から大分県立埋蔵文化財センター所長あて埋蔵文化財発掘調査(本調査)の依頼が提出された。これを受け事業者と発掘調査の実施時期や期間・経費等について調整を重ね、令和2年1月31日付けで発掘調査の実施計画及び所要経費見積について回答した。令和2年4月23日には大分県教育庁文化課へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、豊後大野市教育委員会及び豊後大野警察署へ発掘調査への協力を依頼した。

本調査の実施にあたっては、重機での表土除去、人力掘削(遺構検出・遺構発掘)、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等を埋蔵文化財発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。作業班は2班とし、作業班1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員15名を基本とした。令和2年4月10日に大分県と株式会社島田組大分支部の間で上田原東遺跡の発掘調査支援業務委託契約を締結し(契約担当者:大分県知事 広瀬勝貞、業務受託者:株式会社島田組大分支部店長 佐藤孝則)、令和2年8月31日までの調査期間で発掘調査に着手した。

本調査は周辺で行われている工事の都合も勘案し、3区→1・2区→4・5区の順に実施した。令和2年5月8日に3区の表土掘削に着手し、人力による遺構検出作業、遺構発掘作業、写真及び実測図による記録作成作業、空中写真撮影を経て、令和3年1月21日に調査区全体の埋戻し・調査事務所及び調査器材等の撤収を完了し、現地での発掘調査を終了した。この間、検出された遺構や出土遺物が膨大であり、また遺構同士の重複が多い上に周辺土壌と遺構埋土の識別が難しいといった条件も重なり、豊後大野土木事務所と協議の上、最終的に現地での調査期間を令和3年1月29日まで延長するとともに、発掘調査支援業務の期間を令和3年3月11日までとする契約の変更を行った。発掘作業は12月25日に遺構の発掘作業を完了、翌1月5日まで実測作業を行い、1月20日に調査区の埋戻し、調査器材等の撤収を完了した。1月21日には豊後大野土木事務所を交えて発掘調査の完了確認を行った。以上を受け令和3年1月26日付けで大分県教育委員会、豊後大野市教育委員会及び大分県土木建築部豊後大野土木事務所へ発掘調査の終了を報告・通知するとともに、1月29日付けで豊後大野警察署へ文化財保護法第100条第2項に基づく埋蔵文化財の発見を通知した。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄製品等、コンテナボックスにして387箱であった。3月11日に株式会社島田組大分支部から遺構実測図・遺構等の写真記録等調査成果物の納入を受け、3月19日の完了検査を経て委託業務を完了した。この間の発掘調査の経過は以下のとおりである。

調査日誌抄録

- 5月8日 3区の表土掘削開始
- 5月12日 作業員により調査区の整形作業、調査区周囲の環境整備を行う。豊後大野市教育委員会諸岡 郁氏、長屋佳歩氏来跡。
- 5月20日 3区の表土掘削終了。九州大学学生 諸岡初音氏来跡。
- 5月21日 3区の遺構検出作業開始。弥生時代の円形堅穴建物、方形堅穴建物等、弥生の堅穴を切る掘立柱建物を確認。
- 5月28日 堅穴建物等主要遺構の検出状況写真撮影。遺構の掘り下げ開始。
- 6月4日 大分県立埋蔵文化財センター 小柳和宏氏来跡。
- 6月10日 豊後大野市教育委員会 諸岡 郁氏来跡。
- 6月22日 大分県立埋蔵文化財センター 池見佳輔主事来跡。
- 7月2日 文化庁文化財第二課主任文化財調査官 近江俊秀氏、同文化財調査官 芝康次郎氏、豊後大野市教育委員会 高野弘之氏・諸岡 郁氏、大分県教育庁文化課 三重野誠氏、大分県立埋蔵文化財センター

後藤見一調査第一課長来跡。

- 8月7日 3区の空中写真撮影。大分県教育庁文化課 井 大樹氏・津田佑美氏来跡。大分県土木建築部豊後大野土木事務所と発掘調査期間の延長について協議。
- 8月19日 3区に旧石器確認トレンチを4箇所設定、重機を使用し掘り下げる。
- 8月20日 旧石器確認トレンチの記録作成、終了後トレンチの埋戻し。埋蔵文化財センターインターンシップ生の現場見学。3区の調査終了。
- 8月21日 3区の埋戻し。
- 8月27日 1区の表土掘削開始、この日では掘削終了。
- 8月28日 2区の表土掘削開始。工事関係者による工程会議で発掘調査の今後の予定を協議。
- 9月1日 2区の表土掘削完了。台風接近の予報のためシート・テント等を撤収、強風対策を行う。
- 9月3日 1区の遺構検出開始。
- 9月4日 1区で方形の竪穴建物4基を確認。台風10号接近に伴い対策実施。
- 9月9日 1区の遺構検出状況写真撮影。遺構の掘り下げ開始。
- 9月14日 工事ヤードの都合で現場事務所・駐車場を3区跡へ移設。
- 9月29日 豊後大野市教育委員会 諸岡 郁氏来跡。
- 10月2日 2区の遺構検出開始。
- 10月12日 2区の遺構掘り下げ開始。
- 11月4日 現地説明会の開催について埋蔵文化財センターで協議。11月14日に開催を決定。新型コロナウイルス感染症対策として地元住民対象とし、報道発表等大々的な宣伝は行わない方針。
- 11月5日 現地説明会の開催について、地元区長への挨拶と、地区住民への周知を依頼。同日大分県土木建築部建設政策課・豊後大野土木事務所、大分県教育庁文化課、豊後大野市教育委員会へ現地説明会の開催を連絡。
- 11月13日 現地説明会のために調査区の全体清掃、導線及び遺構表示の設置。
- 11月14日 現地説明会開催。地元住民を中心に、47名が参加。
- 11月25日 1・2区の全体清掃。4区の表土掘削開始。
- 11月26日 1・2区の空中写真撮影。
- 11月30日 4区の表土掘削完了。
- 12月1日 寒気により現場に霜降。4区の遺構検出開始。
- 12月3日 4区の東側で大型の円形竪穴建物に方形の張り出しを複数確認。花弁形建物の可能性あり。
- 12月7日 豊後大野市立百枝小学校6年生現場見学（児童・教員等21名）。豊後大野市教育委員会 諸岡 郁氏、三重史談会会長 川原久芳氏来跡。
- 12月11日 5区の表土掘削開始。全体がローム層まで大きく削平を受けており、遺構が全く確認されない状況を確認したため、トレンチ調査に切り替え。
- 12月14日 5区の記録作成。旧地権者から清掃工場建設時に砕石を搬入し土地をかさ上げたことを聞き取る。
- 12月16日 三重町史談会 川原久芳氏来跡。
- 12月17日 別府大学教授 田中裕介氏来跡。花弁形建物について教示。
- 12月18日 三重史談会の現場視察（約20名）。
- 12月22日 1区に5m×5mの旧石器確認グリッドを設定し重機で掘り下げ。旧石器の出土なし。
- 12月23日 1区旧石器確認グリッドの記録作成。4区全体写真撮影。1～4区の人力発掘作業を完了。大分県立埋蔵文化財センター 植田絰正主事来跡。
- 12月24日 調査区の埋戻し。
- 1月21日 調査区の埋戻し、機材撤収完了。完了確認の立会。以上で調査を全て終了。

第3節 資料整理・報告書作成の経過

発掘調査記録の整理及び出土品の整理は令和3～5年度にかけて実施した。出土品の整理作業は民間調査組織への委託により実施することとし、上田原東遺跡を含む当該年度整理実施調査を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。委託業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。作業内容は出土物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原因のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業である。業務では作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。

遺構・遺物図版作成や原稿執筆、編集等報告書作成は整理作業と並行して行い、令和6年1月から原稿を入稿し、3度の校正を経て令和6年3月末に本書を刊行した。これを以て上田原東遺跡の発掘調査業務をすべて完了した。

第4節 調査組織の構成

上田原東遺跡の発掘調査に係る体制は以下のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査機関 大分県立埋蔵文化財センター

令和2年度（本発掘調査）

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長兼調査第一課長）

調査事務 神田 淳（大分県立埋蔵文化財センター総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慈（同 調査第一課副主幹、本調査主担当）

土谷崇夫（同 調査第一課主査）

服部真和（同 調査第二課主査）

綿貫俊一（同 調査第二課会計年度任用職員、本調査主担当）

埋蔵文化財発掘調査支援業務委託受託者 株式会社イビソク大分営業所

調査技師 佐藤孝則・木付雄大、調査助手 高木裕司・幸重由希

令和3年度 資料整理

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

調査事務 藤原邦夫（大分県立埋蔵文化財センター総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慈（同 調査第一課副主幹、整理作業担当）

吉田 寛（同 調査第二課長、整理作業総括）

小堀高史（同 調査第二課主事、整理作業委託監理）

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

令和4年度 資料整理

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

調査事務 藤原邦夫（大分県立埋蔵文化財センター総務課長）

山田哲也（同 総務課主査）

平田愛香（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慧（同 調査第一課副主幹、整理作業担当）

吉田 寛（同 調査第二課長、整理作業総括）

小堀嵩史（同 調査第二課主事、整理作業委託監理）

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

令和5年度 資料整理・報告書作成

調査責任者 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 染矢和徳（大分県立埋蔵文化財センター調査第一課長兼調査第二課長）

調査事務 藤原邦夫（大分県立埋蔵文化財センター総務課長） ※5月14日まで

上條年明（同 副所長兼総務課長） ※5月15日から

山田哲也（同 総務課主査）

平田愛香（同 総務課主事） ※6月まで

吉川小百合（同 総務課臨時職員） ※7～9月

岩男修太（同 総務課主事） ※10月から

調査担当 横澤 慧（同 調査第一課副主幹、整理作業・報告書作成担当）

染矢和徳（同 調査第二課長、整理作業総括）

小堀嵩史（同 調査第二課主事、整理作業委託監理）

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

発掘調査の期間中、事業者である大分県土木建築部豊後大野土木事務所をはじめ、地元の上田原地区、豊後大野市教育委員会には発掘調査への理解と多大な協力を賜った。また、発掘調査現場には以下の方々の来訪があり、発掘調査に関する種々の指導助言をいただいた（所属は当時）。

近江俊秀（文化庁）、芝康次郎（文化庁）、田中裕介（別府大学）、三重野誠（大分県教育庁文化課）、井 大樹（大分県教育庁文化課）、高野弘之（豊後大野市教育委員会）、諸岡 郁（豊後大野市教育委員会）、長屋佳歩（豊後大野市教育委員会）、川原久芳（三重史談会）、渡辺圓世（三重史談会・豊後大野の古墳を見る会）、諸岡初音（九州大学学生）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

上田原東遺跡の所在する豊後大野市は、大分県の中部に位置し、北は大分市、東は臼杵市、南は佐伯市、宮崎県、西は竹田市と接し、市域は603.14km²、人口は令和5年12月31日時点で32,765人である。市の周囲は、北は鎧ヶ岳や御座ヶ岳、天面山等、西は倉木山・小富士山等、東に佩懸山・大峠山等の300～1,000m級の山々が、南に祖母・傾山系の九州山地を構成する標高1,600～1,700m級の高山が連なり、その中に三重盆地や緒方盆地等、いくつもの盆地地形を形成している。この盆地を縫うように、阿蘇外輪山に源を発する大野川が蛇行しながら別府湾に流れ注いでいる。地質はAso-IVと呼ばれる約9万年前の阿蘇山の火砕流堆積物が厚く堆積し、大野川等の河川がこの堆積物を開析して各地に河岸段丘や開析谷を発達させ、盆地内に沖積平野を形成している。この台地や河岸段丘、沖積平野が生活基盤となり、農業を基幹産業として発展を続けている。交通は熊本と大分を結ぶJR豊肥本線が朝地～清川～三重～大洞を通り、国道は大分から阿蘇を経て熊本、長崎へ通じる国道57号、宮崎県延岡市と豊後大野市を結ぶ国道326号、臼杵市と竹田市を結ぶ国道502号等が交わる交通の要衝となっている。

上田原東遺跡は三重盆地の北端部に位置し、東に大辻山-木ノ元山の山塊があり、北に大野川が大きく蛇行しながら東へ流れている。遺跡はこの大辻山の西側に張り出す台地状の緩斜面に立地している。大野川を眼下に見下ろし、三重盆地の北端を扼する要地ともいえる場所である。

第2節 歴史的環境

上田原東遺跡の周辺の遺跡について概観する。旧石器時代の遺跡では、牟礼ノ越遺跡(28)では、暗色帯の下部から石器が出土しており、後期旧石器時代の初期に属する最古級の石器群である。また、百枝(小学校)遺跡(22)や茶屋久保遺跡群(29)、原田第1遺跡(40)等で複数の文化層が確認されている。

縄文時代の遺跡として、中期・後期中葉の土器が出土した惣田遺跡(14)、後期～晩期の土器が出土した宇対瀬遺跡(6)が挙げられるが、この周辺で明確な遺構は確認されていない。

弥生時代では、惣田遺跡で中期の内形堅穴建物2棟が発掘されている。陣箱遺跡(23)は後期～古墳時代初頭にかけての多数の堅穴建物群が確認されており、花卉形建物も含まれる。折立遺跡(34)も同時期の集落遺跡で、百枝(小学校)遺跡も含めこれまでに150棟余りの堅穴建物が確認されており、県内でも有数の大規模集落とみられている。また、上田原遺跡群(3)でも弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴建物5棟を検出している。

古墳時代の遺跡として、まず立野古墳(8)が挙げられる。全長約65mの前方後円墳で、4世紀後半の築造とみられている。鉢ノ窪石棺群(4)は舟形石棺5基、箱式石棺1基で構成され、石棺の形状から中期に比定されている。下津留古墳群(B)はわずかに残存する墳丘に石棺が確認されるが、不明な点が多い。

古代の遺跡については調査事例に乏しい。中世では惣田遺跡で堀状の溝や掘立柱建物群が出土しており、豊後国守護の被官で三重郷の方分であった森迫氏の居館跡とみられる。回春庵跡(12)は15世紀中頃～17世紀末の石塔が残存している。回春庵は森迫氏の菩提寺と推定され、これら石塔類は森迫氏及び回春庵寺僧の墓碑である。このほかに中世石造物は各多く分布している。大辻山(G)山頂には回春庵の文叔座元正周により文禄5年(1596)～慶長8年(1603)に造立された角塔婆等の石塔22基が残されている。大辻山の南にある真言宗寺院の正福寺は、天文15年(1546)銘の宝篋印塔(I)をはじめとして境内に多数の中世石造物がある。また、西泉にある法泉庵宝篋印塔(K)は大野郡を中心に活躍した石大工「玄正」作の優品で、県の有形文化財に指定されている。大野川沿いの下津留墓碑群(B)は16世紀中頃～近世前期の小型の板碑・宝塔23基が群集している。

近世になると上田原一帯は臼杵藩稲葉家領に組み込まれ、幕末まで続いている。遺跡としては、上田原遺跡群(3)で近世の塚状遺構が発掘されている。

明治10年(1877)に発生した西南戦争は国内最後にして最大規模の士族反乱で、大分県でも竹田市、豊後大野市、大分市、臼杵市、津久見市、佐伯市が戦場となっている。木ノ元山の陣(27)は西南戦争に際して築かれた陣地跡で、一部発掘調査が行われている。



- | | | | | | |
|---------------|------------|-------------|-----------------|-------------|-----------|
| 1 上田原東遺跡 | 2 西原遺跡群 | 3 上田原遺跡群 | 4 鉢/窪石椀群 | 5 井立遺跡 | 6 宇村瀬城跡 |
| 7 正福寺 | 8 立野古墳 | 9 宇村遺跡 | 10 洗水遺跡 | 11 森立船跡遺跡 | 12 回春庵跡 |
| 13 一本原遺跡 | 14 惣田遺跡 | 15 又井遺跡 | 16 牟礼遺跡 | 17 金田遺跡群 | 18 向野遺跡群 |
| 19 浄土寺遺跡 | 20 法泉庵西遺跡群 | 21 法泉庵遺跡群 | 22 百枝(小学校)遺跡 | 23 陣踏遺跡 | 24 大原遺跡群 |
| 25 牟礼遺跡 | 26 富山遺跡 | 27 木ノ元山の陣 | 28 牟礼ノ越遺跡 | 29 茶原久保遺跡群 | 30 芦刈遺跡群 |
| 31 三重原遺跡群 | 32 穴井塚古墳群 | 33 梶原遺跡 | 34 折立遺跡 | 35 宮園・奥ノ上遺跡 | 36 庵の平遺跡 |
| 37 高畑遺跡 | 38 大木遺跡 | 39 法積寺跡 | 40 原田第1遺跡 | 41 中原遺跡群 | 42 田原園遺跡群 |
| 43 八山遺跡 | 44 妙光寺跡 | 45 新福寺西遺跡 | 46 新福寺遺跡 | 47 池ノ上六柱社遺跡 | 48 賢龍寺遺跡 |
| 49 原田第2(長田)遺跡 | 50 上門手遺跡 | 51 飛迫遺跡 | | | |
| A 下津留古墳群 | B 下津留石椀群 | C 馬塚石椀 | D 黒木石椀 | E 上田原石椀1号 | F 円福寺石椀 |
| G 大辻山 | H 正福寺宝篋印塔 | I 正福寺天文宝篋印塔 | J 森迫石椀 | K 法泉庵宝篋印塔 | L 宮山石椀 |
| M 大木の宝塔 | N 上津留の石椀 | O 庚申塔 | P 福生寺薬師堂系第3宝篋印塔 | Q 智福寺跡 | |

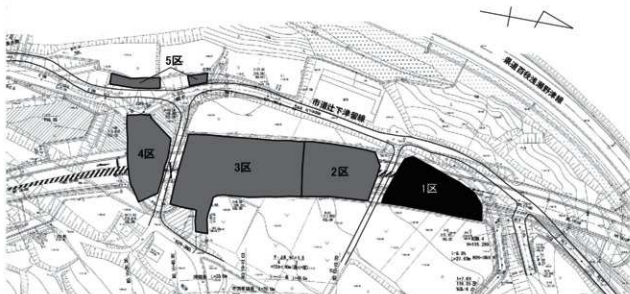
第4図 上田原東遺跡と周辺の遺跡(国土地理院発行2万5000分の1地形図「大綱」・「三重町」に加筆)

第3章 1区の発掘調査成果

第1節 調査区の設定と基本層序

県道三重新線(牟礼前田工区)道路改良事業に伴う上田原東遺跡の発掘調査は、豊後大野市三重町大字上田原地内、大辻山山塊の西側に張り出す台地上の緩斜面上である。事業用地内で発掘調査区と排土置場、調査事務所・駐車場等を確保するため、1～5区に分けて設定し、3区→1区→2区→4区→5区の順に発掘調査を実施した。調査地の地番は大字上田原字辻1618-2・3(5区)、同1681(4区)、同1688-2・3、1689-2、1690-2、1691-3、1696-3、1697-2(3区)、1695-3、1698-2(2区)、1724-3、1725-2、1726-2(1区)で、地目は4区が山林、他は畑である。1区はこのうち最も北側に設定した調査区で(第5図)、北は下位の河岸段丘面に向かって急激に落ちる斜面となっている。調査前の標高は約115.3～115.6m、崖下の段丘面とは比高差で17.6mを測る。この設定した調査区に対し、世界測地系の座標に基づいて10m方眼の調査グリッドを設定した。グリッド番号は、北から南にアルファベット、西から東にアラビア数字を付し、両者を組み合わせて使用した(第6図)。遺構は検出した順に「S●●」の遺構番号を付与した。遺構は写真及び実測図で記録し、出土遺物は調査区ごとに遺構又は調査グリッド単位で取上げた。遺構の性格に応じた遺構略号は報告書作成時に付し、遺構番号については混乱を避けるため調査時のものを踏襲した。

調査区の土層断面図を第7図に示す。第Ⅰ～Ⅵ層は各調査区に共通する基本となる堆積層序である。表土である第Ⅰ層は褐色を呈する現代耕作(畑作)土で、層厚は5～20cm程度、全体に耕起されており脆い。第Ⅱ層は暗褐色土で、層厚は約15～40cmを測り、縄文～近世の遺物を包含する。Ⅲ層との層界は北側では比較的安定しているが、中央から南にかけて、1mほどの間隔をあけて所々波打つように乱れている。この凹凸は畑の畝の痕跡と考えられ、近世頃の耕作土とみられる。第Ⅲ層はいわゆるクロボクと称される黒褐色土で、縄文～中世の遺物を包含し、層厚は約5～30cmを測る。上部は先述の耕作により乱れているが、Ⅳ層との層界は比較的安定している。なお、調査区の北端部、SD556Aから北側では様相がやや異なり、色調は同じだが白色砂粒や地山の黄褐色土粒の混じりが認められることから、これを3'層として区別した。クロボクを由来とするが、掘り返して整地した痕跡と考えられる。第Ⅳ層はアカホヤ風化土や黒褐色土が斑状に混じった黄褐色土で、この面が遺構検出面である。第Ⅴ層は約7,300年前の鬼界カルデラの噴火により飛来したK-Ah層、いわゆるアカホヤ火山灰である。粘性がなくサラサラとした明黄褐色土で、堆積は部分的に認められる。第Ⅵ層は黒褐色土で、粘性が強く硬く締ま



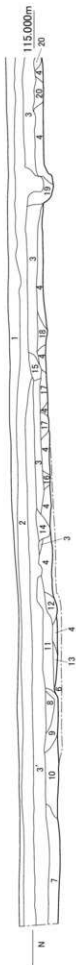
第5図 上田原東遺跡の調査区配置と1区の位置図(1/1500)



第6図 上田原東遺跡1区の遺構配置図(1/200)

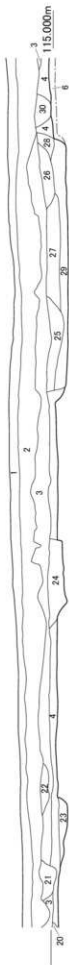
116,000m

115,000m



116,000m

115,000m



116,000m

115,000m



基本層序

1. 褐色土 (10YR4/3) 粘性弱、全体に凝結され細かい(第I層)
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性の強い旧耕作土(第II層)
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性の強い、クロロフン層(第III層)
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土・黒褐色土・プロックが斑状に混じる(第IV層)
5. 明灰褐色土 (10YR7/6) 粘性なくサラサラしたアカホヤ層(第V層)
6. 黒色土 (7.5YR2/2) 粘性強く硬くなる(第VI層)
- 3' 黒褐色土 (1) 3と同じだが白色砂粒・地山土粒が混じる

2m

7. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱くひつづく、アカホヤ風化土小粒混じる

8. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性弱、アカホヤ風化土小粒混じる

9. 黒褐色土 (10YR3/2) 7と同じ層質で、灰少量含む

10. 細かい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性弱くひつづく、アカホヤ風化土・プロックが混じる

11. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土・小粒少量・灰少量含む

12. 暗褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤプロック少量含む

13. 黒褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ凝結微塵含む

14. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック混じり

15. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む

16. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック少量含む

17. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む

18. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黒褐色土・プロック少量含む

19. 細かい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性弱、黒褐色土・プロック少量含む

20. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土小粒少量含む

21. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ凝結・白色砂粒少量含む

22. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、白色砂粒少量含む

23. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤプロック混じり (SH478)

24. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック少量含む (SH480)

25. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ小粒少量・灰少量含む (SH436)

26. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤプロック混じり、灰少量含む (SH438)

27. 黒褐色土 (10YR2/3) アカホヤ風化土・プロック混じり、灰少量含む (SH436)

28. 暗褐色土 (10YR2/4) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック少量含む (SH436)

29. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック少量含む (SH436)

30. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック少量含む (SH436)

31. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック少量含む (SH436)

32. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・プロック少量含む (SH436)

33. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土・プロックが斑状に混じる、灰少量含む (SH400)

第7図 1区土層断面図 (1/60)

る。縄文時代早期に相当する地層である。

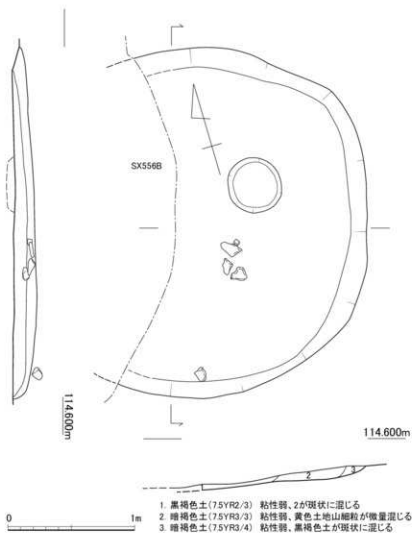
事前の確認調査では、第VI層より下位の黄褐色ローム質土の上面で遺構を検出していたため、当初は当該層まで重機で掘り下げ遺構検出作業を行う計画であったが、最初に着手した3区で、第III層や第IV層上面あたりから比較的大きな土器片や石器がまもって出土する状況が認められたため、機械による掘削は第IV層の上部付近で止め、第IV層上面を遺構確認面として人力により構検出作業を行った。その結果、堅穴建物をはじめとした多数の遺構を検出するに至った。しかし、第IV層は先述のとおり混じりが多いため遺構と自然堆積層との区別が難しい上に、多数の遺構が重複していたため、遺構の認定、前後関係の把握に多くの時間を費やすこととなった。結果として、縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世以降の遺構を確認し、旧石器時代～近世の遺物の出土を見た。以下、時期ごとに遺構・遺物の概要を報告する。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、堅穴建物1棟、土坑がある。上田原東遺跡の遺構埋土の多くは黒褐色土ないしは暗褐色土であるが、弥生時代以降の遺構では、マンセル表色系による色相が10YRであるのに対し、縄文時代の遺構埋土はやや赤みがかっているのが特徴で、色相が7.5YRとなるものが多い。遺物の出土がない遺構であっても、この色調の違いで年代を推定しているものもある。

SH662 (第8図)

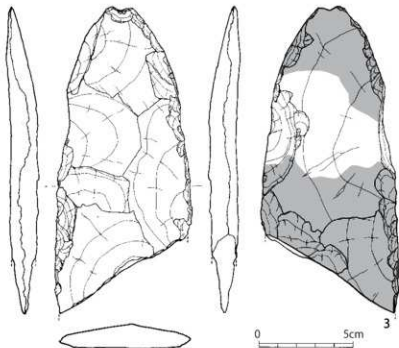
1区の南西部、D-4グリッドで検出した堅穴建物である。西半部はSX556Bに切られており全体の規模は明らかにできないが、南北2.72m、東西1.95m以上、深さ0.23mを測る。平面形状は略円形を呈し、内部は皿状に浅く掘り込む。床面でピット1基を検出しているが、掘り込みは浅く柱穴となるかは判然としない。埋土は3層に区分され、中央部に黒褐色土、周縁部に暗褐色土が認められる。遺構規模がやや小さく、土坑とすべきかもしれないが、上部が削平されていることを勘案すると直径3m程度の規模になると推定されることから堅穴建物として扱う。遺物は少量ながら縄文土器、扁平打製石斧が出土している。出土土器から後期中葉の遺構と推定される。



第8図 SH662 実測図 (1/30)

SH662出土遺物 (第9図)

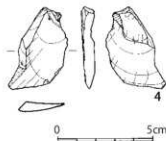
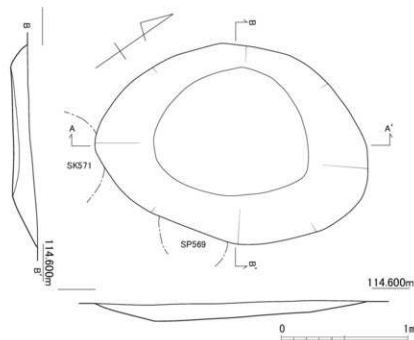
2は縄文土器である。上部に横位沈線及び細長い楕円形状を呈するとみられる区画沈線を施すもので、後期中葉に比定される。3は安山岩製の扁平打製石斧である。下部を折損するが、横長剥片を素材とし、周縁に粗い調整剥離を施す。腹面に煤の痕跡が認められるが、剥離面にも及ぶことから廃棄後に受熱したものとみられる。



SK557 (第10図)

1区のはほぼ中央、C-5グリッドで検出した土坑である。一部SK571と重複しているが、SK557がSK571を切っている。平面形状は楕円形状を呈し、長径2.17m、短径1.57m、深さ1.23mを測る。埋土は黒褐色土の単層である。内部は皿状を呈し掘り込みは浅い。遺物は流紋岩剥片1点だけが出土している。

第9図 SH662 出土遺物実測図 (1/3・1/2)



第11図 SK557 出土遺物実測図 (1/2)

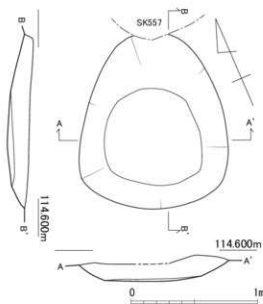
第10図 SK557 実測図 (1/30)

SK557出土遺物 (第11図)

4は流紋岩剥片で、旧石器時代の遺物である。

SK571 (第12図)

1区のはは中央、C-5グリッドで検出した土坑である。先述のSK557の一部が切られているが、平面形状は鶏卵形を呈し、長径1.34m以上、短径1.13m、深さ0.21mを測る。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は少量ながら縄文土器片が出土している。



第12図 SK571実測図 (1/30)

SK571出土遺物 (第13図)

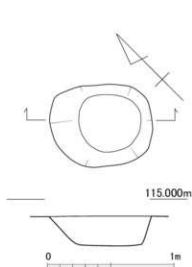
5は縄文土器浅鉢で、胴部が逆「く」字状に屈曲する。晩期に比定される。



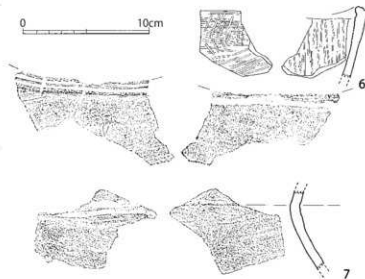
第13図 SK571出土遺物実測図 (1/3)

SK579 (第14図)

1区の中央東壁際、C-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形形状を呈し、長径0.81m、短径0.65m、深さ0.23mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。遺物は縄文土器の他に弥生土器の細片が出土しており、若干の混入がみられる。また攪乱SX539出土の縄文土器と接合関係がみられた。遺物から後期中葉の遺構と判断する。



第14図 SK579実測図 (1/30)



第15図 SK579出土遺物実測図 (1/3)

SK579出土遺物 (第15図)

6は縄文土器深鉢で、口縁部は短く内屈し、外面に2条の沈線と単節縄文、内面口縁直下に1条の沈線を施す。攪乱SX539出土の破片と接合関係が認められた。7は頸~胴部で、頸部ですばまり、胴部が影らむ器形を呈する。

SK591 (第16図)

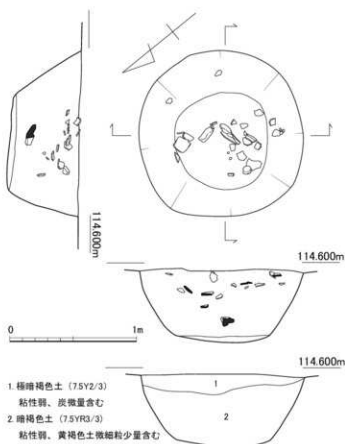
1区のはは中央、C-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径1.37m、短径1.36m、深さ0.61mを測る。埋土は2層に細分され、上層は微量の炭を含む極暗褐色土、下層は地山の黄褐色土微細粒を少量含む暗褐色土である。遺物は縄文土器や打製石斧が出土している。遺物から晩期後葉に比定される。

SK591出土遺物 (第17図)

8~14は縄文土器である。8・9は深鉢で、口縁部外面に断面三角形の凸帯を1条貼り付ける。いわゆる無刻目凸帯文土器で上着生B式に比定される。10・11は無文の深鉢、12は深鉢の胴部片である。13は深鉢で、外面に大型の種子状の圧痕が認められる。14は黒色磨研土器の浅鉢で、口縁部は鋸状に折れる。15・16は打製石斧で、いずれも安山岩を素材とする。以上は晩期後葉の良好な一括資料である。

SK595 (第18図)

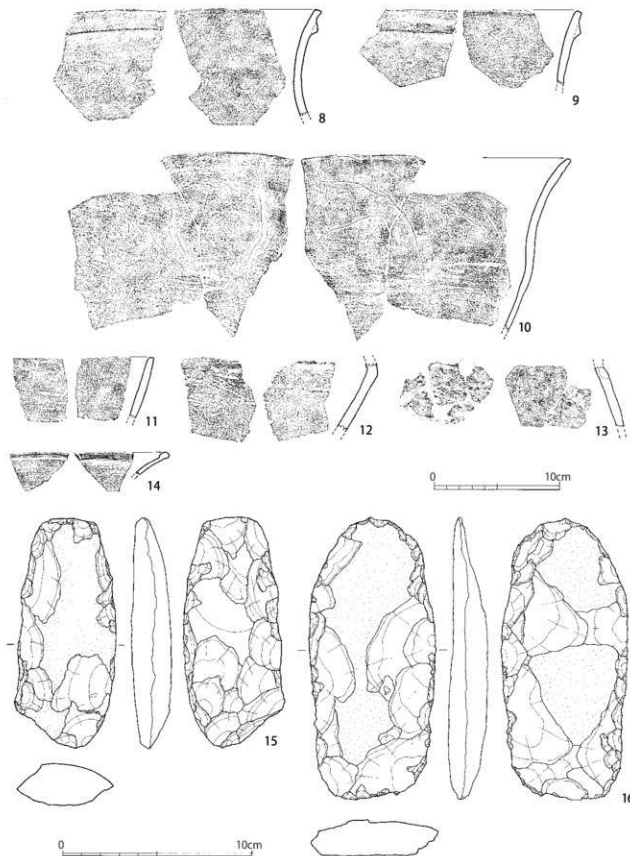
1区の中央部南寄り、D-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みをもつ三角形を呈し、長径2.50m、短径1.97m、深さ0.28mを測る。内部は2段掘りとなっていて、南側は皿状の浅い掘り込みであるのに対し、北側は一段深く掘り込まれている。埋土は5層に分層され、うち1層は土坑埋没後の掘り込みで、土色から弥生時代以降の堆積層である。2層・5層には炭を、3層・4層には炭とともに焼土小粒を含んでいる。遺物は縄文土器の他、打製石斧や楔形石器が出土している。遺物の詳細な時期は判然としないが、出土土器から後期以降のものである。なお、SK595はSK640・SK673と切り合い関係にあるが、両者ともSK595の完掘後にその存在を確認したため、切り合い関係については十分解明できていない。特にSK673からは土師器片が出土しており、本来はSK595を切る土坑であった可能性が高い。



第16図 SK591 実測図 (1/30)

SK595出土遺物 (第19図)

17は縄文土器である。外面に多条の横位凹線で施文し、口縁部には幅の太い刻みを施す。後期初頭の西和田式土器に比定される。18は腰岳産黒曜石を素材とする剥片石



第17图 SKS91 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

器で、対向する上下辺に微細な剥離が見られることから楔形石器とした。19～21は打製石斧である。19は横長剥片を素材とし、粗い調整剥離を施す。21は縦長剥片を素材都市、下辺に細かい調整剥離が見られるが側辺の調整は粗い。こうした点から19・21は未完成品である可能性が高い。石材は19はデイサイト、20・21は安山岩である。

SK642 (第20図)

1区の北部、B-5グリッドで検出した土坑である。SK651と重複しているが、SK642がSK651を切っている。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.28m、短径0.98m、深さ0.14mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。遺物は叩石が出土している。土色から縄文時代の遺構であるが、土器の出土がなく詳細な時期は明らかにできない。

SK642出土遺物 (第21図)

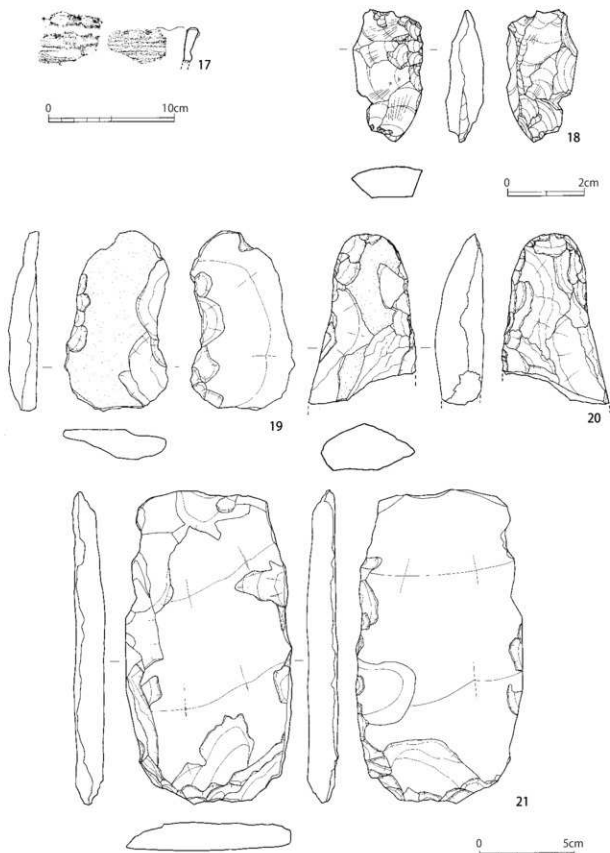
22は砂岩製の叩石である。上面・背面と上下両端に細かい敲打痕が残る。

SK651 (第22図)

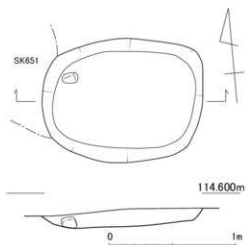
SK642と同じくB-5グリッドで検出した、SK642に切られる土坑である。平面形状はやや歪な楕円形を呈し、長径1.13m以上、短径0.74m、深さ0.43mを測る。遺物は縄文土器が少量出土しており、中には早期の押型文土器も含まれるが、小片でありこれが遺構の年代を決めるものかは判断が難しい。



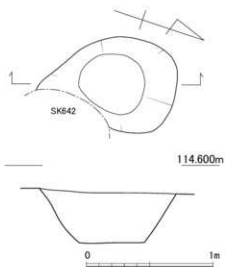
第18図 SK595実測図(1/30)



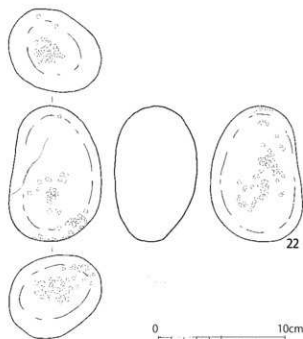
第19圖 SK595出土遺物実測図(1/3・1/2)



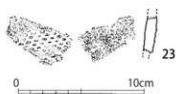
第20図 SK642 実測図 (1/30)



第22図 SK651 実測図 (1/30)



第21図 SK642 出土遺物実測図 (1/3)



第23図 SK651 出土遺物実測図 (1/3)

SK651出土遺物 (第23図)

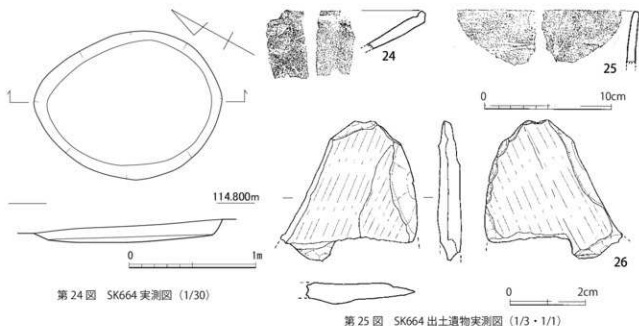
23は押型文土器である。無文部を扶んで横位の楕円文を施す、いわゆる帯状施文で、川原田式に比定される。

SK664 (第24図)

1区の中央部北寄り、B-5・C-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は鶏卵形を呈し、長径1.49m、短径1.18m、深さ0.18mを測る。掘り込みは浅く、内部は皿状を呈する。遺物は縄文土器、石器が出土している。後期後葉以降の遺構である。

SK664出土遺物 (第25図)

24・25は縄文土器である。24は深鉢で、内面の口縁部直下に1条の沈線を施す。後期後葉に比定される。25は無文土器の深鉢である。26は結晶片岩製の剥片石器で、両面が節理により剥離している。磨製石鏃の未製品と判断したが、その場合は混入ということになろう。あるいは打製石斧の未製品か。



第24図 SK664実測図 (1/30)

第25図 SK664出土遺物実測図 (1/3・1/1)

SK666 (第26図)

1区の南端部中央寄り、E-4・E-5グリッドで検出した土坑である。東側をSK612、西側を攪乱SX549に切られ、南は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、東西2.75m以上、南北1.77m以上、深さ0.33mを測る。埋土は3層に分層され、暗褐色土及び極暗褐色土からなり、いずれも地山の黄褐色土が混じる。床面では3基のピットを検出しており、うち南壁際のピットは深さが0.40m近くあることから柱穴になる可能性もある。検出が部分的であることから土坑としているが、本来は堅穴建物の可能性もある遺構である。遺物は縄文土器の他、打製石斧が出土している。出土土器が無文土器のため遺構の詳細な時期は明らかにできないが、後期以降の遺構である。

SK666出土遺物 (第27図)

27は縄文土器である。無文の深鉢で、内外面ともにナデ調整を施す。28は打製石斧で、下部を折損する。横長剥片を素材とし、側面に調整剥離を施す。石材は安山岩である。

SK675 (第28図)

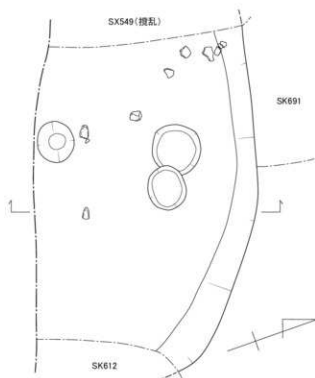
1区の南西側、D-4グリッドで検出した土坑である。西半部を落込み状遺構SX619、東側はSD589、南半部は攪乱SX542に切られている。残存状況は良くないものの、平面形状は楕円形状を呈し、長径1.70m以上、短径1.21m、深さ0.27mを測る。遺物は縄文土器、打製石斧の他、弥生土器の細片も出土しているが、弥生土器は重複遺構からの混入である。出土土器から晩期後葉の遺構と判断される。

SK675出土遺物 (第29図)

29は縄文土器で、黒色磨研土器の浅鉢である。胴部屈曲部から肩部にかけての破片で、本来は外反する口縁が付く。30は打製石斧である。横長剥片を素材とし、周縁に細かい調整剥離を施す。石材は安山岩である。

SK691 (第30図)

1区の南端部、E-4グリッドで検出した土坑である。南はSK666、西は攪乱SX549に切られるため全体の規模は明らかにできない。平面形状は楕円形状を呈するとみられ、長径2.31m以上、短径1.29m以上、深さ0.36m以上を測る。掘り込み壁面の立ち上がりは緩く、内部は皿状を呈する。遺物は縄文土器の他、剥片や叩石・磨石等の石器が出土しているが、時期比定のできる遺物に乏しく、詳細な時期は明らかにできない。

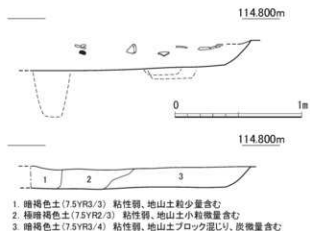


SK691出土遺物 (第31図)

31は流紋岩の剥片で、腹面上端中央に打点、打瘤が残る。旧石器時代の遺物の混入である。32は泥岩製の叩石で、側面を中心に敲打痕が残る。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構として、堅穴建物3棟、土坑1、溝状遺構2条を検出した。遺構の分布としては1区の南に展開する状況で、1区では弥生時代の遺構の分布は希薄である。遺構埋土は暗褐色ないしは黒褐色となるものが多い。ただし、土坑・ピットの中には出土遺物が少なく帰属時期が明確でないものも多く、その中に弥生時代の遺構が含まれる可能性を残している。



第26図 SK666実測図 (1/30)

SH600 (第32図)

1区の南東端部、E-6グリッドで検出した堅穴建物である。東側と南側の大部分が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、北側で緩くカーブしていることから円形を呈する可能性がある。規模は検出した範囲で、長径3.50m以上、短径1.78m以上、深さ0.19mを測る。埋土は4層に細分され、2~4層は中央に向かってレンズ状の堆積となる。第1層は堅穴埋没後の掘り込みで、灰黄褐色土を呈することから比較的新しい掘り込み(攪乱か)である。床面は平坦で、南北に細長く緩く湾曲する溝状の土坑1基、北側壁際でピット1基を検出したが、これら遺構と堅穴建物の関係は明確ではない。遺物は弥生土器の他に縄文土器や、混入したとみられる土師器の細片が出土しているが、全体として量は少ない。遺構の時期を判定できる遺物に乏しいが、出土土器から弥生時代中期以降である。

1. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、地山土粒少量含む
2. 棕褐色土(7.5YR2/3) 粘性弱、地山土小粒微量含む
3. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、地山土ブロック混じり、炭微量含む

SH600出土遺物 (第33図)

33は弥生土器で、外面口縁部下に2条の刻み目凸帯を施す下城式式の甕である。

SH667 (第34図)

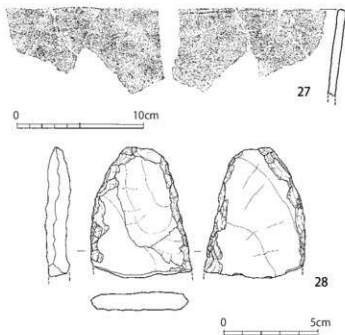
1区の南西端部近く、D-4グリッドで検出した竪穴建物である。東壁の一端を古墳時代の土坑SK604に切られ、さらに上部は落込み状遺構SX619や中世のSX556Bにより削平を受けている。平面形状は隅丸方形形状を呈し、長辺3.23m、短辺1.74m以上、深さ0.21mを測る。埋土は3層に分層され、第1層は黒褐色土、第2層は地山の黄褐色土粒が少量混じる暗褐色土、第3層の暗褐色土には黄褐色土ブロックが斑状に混じる。床面で3基のピット状遺構を検出しており、うち2基は浅い掘り込みみであるが、東側で検出したものは約75cmの深さがあり、これが支柱穴になる可能性が高い。竪穴建物の規模からすれば2本柱穴となる可能性が高く、恐らく西側にこれに対応する柱穴があるのだろう。遺物は弥生土器や混入したとみられる土師器の細片が出土しているが、全体として量は少ない。遺物から弥生時代の竪穴の可能性が高いが、時期判定できる遺物に乏しく、詳細な時期決定は困難である。

SH667出土遺物 (第35図)

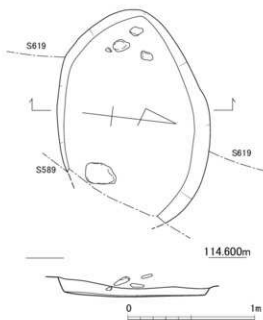
34は弥生土器甕の底部で、図示できるのはこの1点だけである。

SH687 (第36図)

調査区の南部中央寄り、D-5グリッドで検出した竪穴建物である。南西側を古墳時代前期の竪穴建物SH620に切られ、さらにいくつかの攪乱に切られているためか、形状はやや不整形であるが、西辺がやや直線的になることから本来は隅丸方形の形状をとるのであろうか。遺構の規模は長辺3.76m、短辺3.04m、深さ0.30mを測る。床面では4基のピット状遺構を検出しており、うち土層断面を示した2基が支柱穴になると思われる。埋土は4層を確認しており、うち第1層を除いて残りの3層は赤みがかかった色相を呈する。埋土としては縄文時代の遺構埋土に似ているが、弥生時代早期の刻目凸帯文土器が出土していることから、早期の竪穴建物の可能性が高い。縄文時代晩期後葉の集落から継続する、弥生時代初期の数少ない竪穴建物である。遺物は縄文土器、弥生土器、打製石斧、横刃型石器等が出土している。なお、若干土師器の細片が見られるが、これはSH620や攪乱といった構成の掘り込みからの混入であろう。



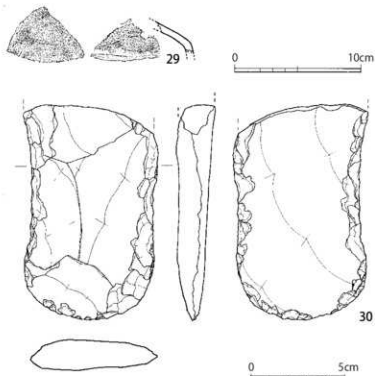
第27図 SK666出土遺物実測図(1/3・1/2)



第28図 SK675実測図(1/30)

SH687出土遺物（第37図）

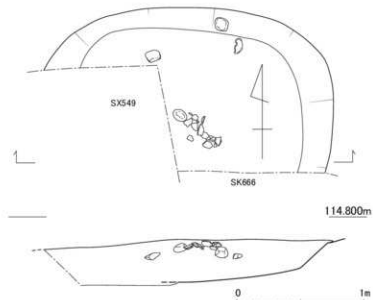
35は縄文土器の浅鉢である。ボウル形を呈するとみられ、口縁端部に右撚りRLの単節縄文を施す。36は内傾する口縁部に接して1条の刻目凸帯が付されるもので、弥生時代早期の下黒野式土器に比定される。上田原東遺跡で多く出土する、縄文時代晩期後葉の無刻目凸帯文土器（上菅生B式土器）は、大分平野では下黒野式土器と混在して出土することが多いが、上田原東遺跡では下黒野式土器はほとんど認められない。また、SH687から上菅生B式土器は出土していない。こうした点から両者には明確に時期差が存在するといえよう。37は安山岩の縦長剥片を素材とするもので、上辺頂部に面を持ち下辺が刃部となることから横刃型石器とした。38は安山岩製の打製石斧で、上半部を欠失する。



第29図 SK675出土遺物実測図（1/3・1/2）

SK665（第38図）

1区の南東部、E-5グリッドで検出した土坑である。遺構検出作業中に大型の打製石斧が出土したことから、その周囲を慎重に精査してプランを確認した。北から西側の半分を攪乱に切られるが、平面形状は円形状を呈し、長径0.69m以上、短径0.59m以上、深さ0.17mを測る。遺物は上述の打製石斧1点が出土しただけで、遺構の時期を決める資料に欠ける。埋土色相から弥生時代以降の遺構であり、大型の打製石斧の出土という点から弥生時代の遺構と位置付ける。



第30図 SK691実測図（1/30）

SK665出土遺物（第39図）

39は打製石斧である。背面は自然面を多く残し、側辺には粗い調整剥離を施すことから、打製石斧の未製品であろう。石材は安山岩で、長さ24.8cm、幅10.0cm、重量510gを測る。

SD589 (第40図)

1区の中央西寄り、C・5・D・4・D・5グリッドにかけて検出した溝状遺構である。南側は西へ緩くカーブしており、落ち込み状遺構SX619に切られている。また、中央西側では縄文時代の土坑SK675を切っている。長さ7.68m以上、幅は0.73~1.07m、深さは最大で0.32mを測る。埋土は黒褐色土で上下2層に分層され、下層には少量ながら灰黄褐色土粒が混じる。遺物は縄文土器の他、弥生土器とみられる土器片が出土しているが、量は少ない。遺構の時期比定は困難であるが、縄文晩期後葉のSK675を切ることや弥生土器の出土から、弥生時代の遺構と判断する。

SD589出土遺物 (第41図)

40は縄文土器の浅鉢である。外に開きながら立ち上がり頸部で上方へ屈曲させ、口縁部は内面側に三角形に肥厚する。外面には横位の沈線と、それを区切る曲線状の沈線を配する。頸部には1条の沈線と刻みを、口縁部には刻みを施す。縄文時代後期中葉の所産であろう。

SD690 (第42図)

1区の南部中央、E・5グリッドで検出した溝状遺構である。北は古墳時代の堅穴建物SH620に、東は攪乱SX615に切られている。

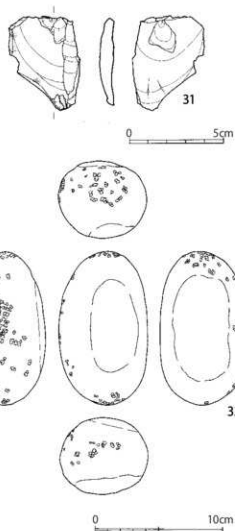
長さ2.50m以上、幅0.42~0.95m、深さは最大で0.55mを測る。南端部は土坑状に一段深く掘り込まれている。埋土は上下2層に分層され、上層は黒褐色土、下層は地山の黄褐色土粒が混じる暗褐色土である。遺物は弥生土器の他、時期不明の土器片が少量出土している。遺物が少なく、遺構の詳細な時期は明らかにできないが、弥生土器の出土から弥生時代の遺構と判断する。

SD690出土遺物 (第43図)

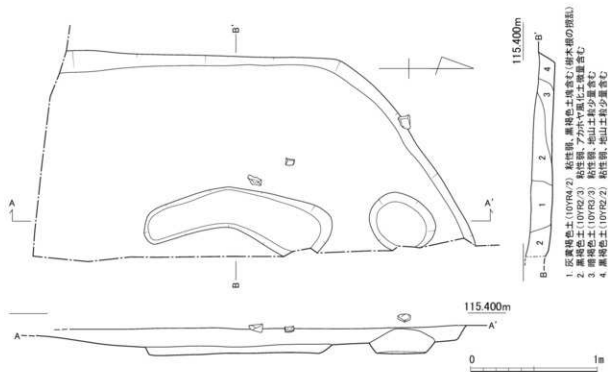
41は弥生土器甕の底部である。

第4節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構として、堅穴建物5棟、土坑3基、溝状遺構1条を検出した。古墳時代の遺構は大きく前期後葉と後期後葉の2時期に大別される。このうち堅穴建物は3棟が前期後葉、2棟が後期後葉で、後期後葉のものには竈が付く。遺構の分布はほぼ1区の全体に及ぶが、古墳時代前期の遺構は1区の南側に集中し、北半部には展開しない。時期によって土地利用のあり方に差があることが分かる。また、後期の堅穴建物は比較的浅いのに

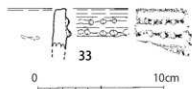


第31図 SK691出土遺物実測図(1/2・1/3)



第 32 図 SH600 実測図 (1/30)

対し、前期の堅穴建物は黄褐色ローム層を床面とするものがほとんどで他の磁器の遺構に比べてもひととき深く掘り込まれるのが特徴である。



第 33 図 SH600 出土遺物実測図 (1/3)

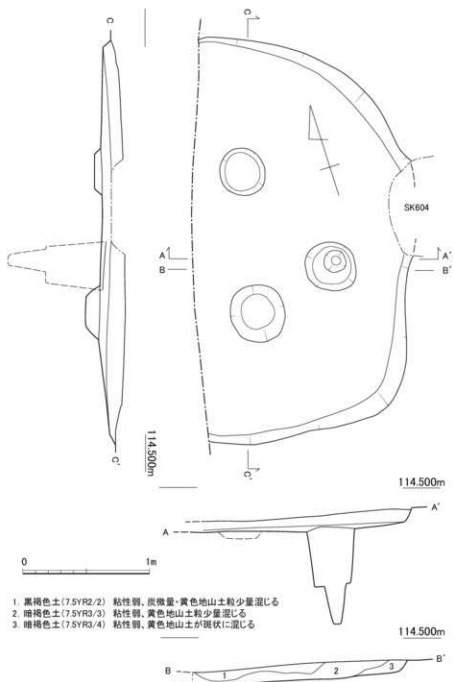
SH535 (第44図)

1区の北端近く、B-5・B-6グリッドで検出した堅穴建物である。

北辺を中世の溝SD556Aに切られている。平面形状は方形であるが、北辺と南辺の長さに差がありやや台形状を呈する。長辺5.84m、短辺5.04m、深さは比高で最大0.30mを測るが、平均的には0.1~0.15m前後である。埋土は6層で、中央に向かってレンズ状の堆積となる。貼り床は確認されなかったが、粘性が強くよく締まった基本層序の第Ⅵ層を床面とするためであろう。附属する遺構として、床面で9基のピットと、西壁の中央で竈を検出した。支柱穴は深さのある4本である。

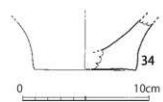
竈は西壁のほぼ中央部に位置する。壁に対し逆U字状に土を盛り、粘土を貼って袖部を構築している。袖部は長さ0.52m、幅0.81m、高さ0.26mを測る。袖部の湾曲した中に、厚い焼土面を検出しており、これが焚き口である。焚き口には支柱石やそれを抜き取った痕跡はみられなかった。また、竈を廃棄する際に土器を用いた祭祀を行う例があるが、ここではそのような痕跡は見られなかった。竈のすぐ西には煙出しのピットとみられる掘り込みがあり、明確には確認できなかったが袖部にトンネルを穿ち排煙していたとみられる。断ち割り断面でも煙出しピットから焚き口の方へ流入した土層を確認している。焼土面を除去した後に精査をしたところ、竈の下部に焼土や炭を含む土坑状のプランが検出された。土坑はやや歪な円形状を呈し、長径1.20m、短径1.03m、深さ0.33mを測る。この土坑を掘った後、細かく土を埋めて整地し、最後に焚き口下を掘り返して整形した状況が土層断面から読み取れる。埋土に焼土や炭を含むことから、この整地の際に何らかの目的で火を焚いたものとみられるが、地盤を強化する目的であろうか。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、打製石斧等が出土している。須恵器の出土から、6世紀後半に位置づける。

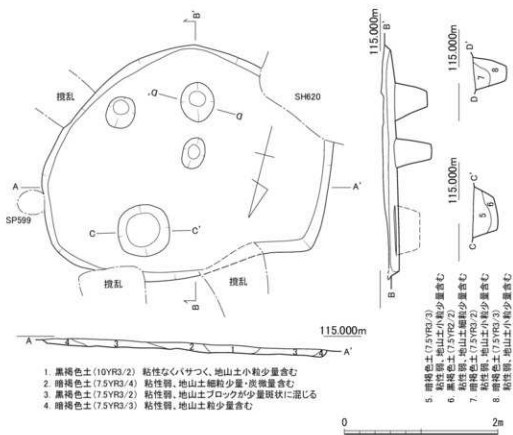


1. 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性弱、炭微量・黄色地山土粒少量混じる
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、黄色地山土粒少量混じる
3. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、黄色地山土が斑状に混じる

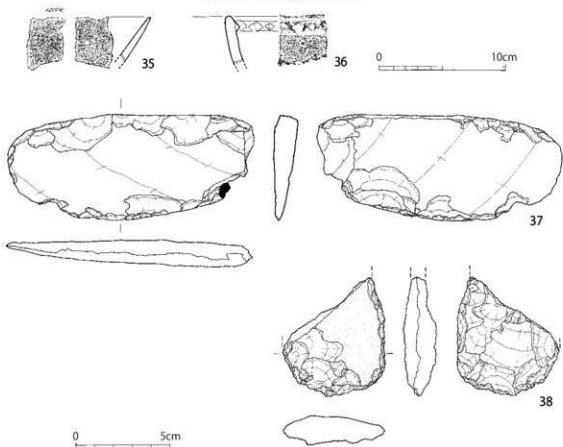
第 34 図 SH667 実測図 (1/30)



第 35 図 SH667 出土遺物実測図 (1/3)



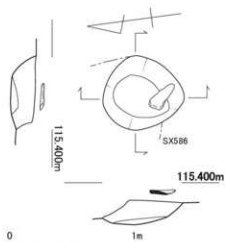
第 36 図 SH687 実測図 (1/50)



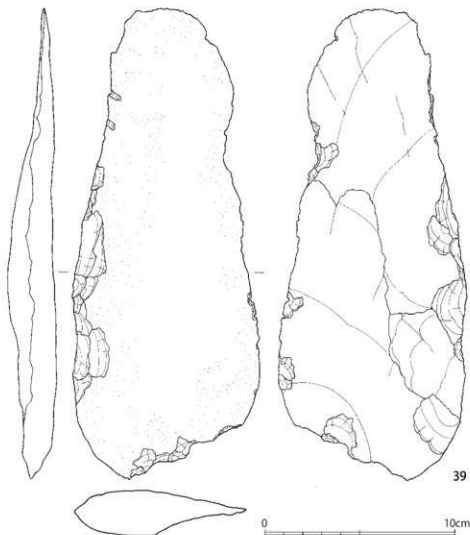
第 37 図 SH687 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SH535出土遺物（第45図）

42～47は縄文土器である。42・43は外面口縁部下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上管生B式に比定される。44は無文の深鉢である。45は浅鉢で、外面に2条の平行凹線文を施す特徴から後期後葉に位置付けられる。46は口縁部内面に段が付くもので、後期末葉の所産である。47は浅鉢で胴部が強く屈曲する晩期のもの。48は胴部片で、屈曲部に刻みを施す。弥生時代前期の土器片か。49は須恵器坏蓋、50は土師器の甕、51・52は土師器の鉢で、これらは古墳時代後期に位置付けられる。53は土器片を加工した円盤である。54は安山岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、側辺及び下端部に調整剥離を



第38図 SK665 実測図 (1/30)



第39図 SK665 出土遺物実測図 (1/2)

施す。調整刃離が全体に及んでいないことから未成品の可能性が高い。

SH536 (第46図)

1区の中央東寄り、D-5・D-6グリッドで検出した堅穴建物である。西辺の一部をSK596・SK597に切れ、東端部は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできない。平面形状は方形を呈し、長辺4.41m、短辺4.22m以上、深さ0.29mを測る。埋土は竈を含め13層に分層される。附属する遺構として、床面に支柱穴となるピット4基と、北壁の中央部に竈を検出した。

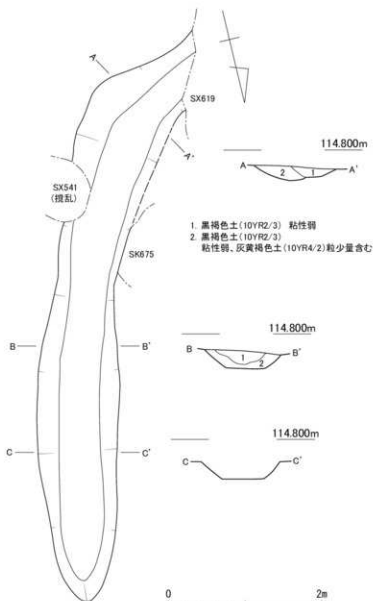
竈は北壁際ににぶい黄褐色の粘質土を塗り字状に盛って袖部を構築している。袖部は長さ0.59m、幅0.86m、高さ0.20m前後の規模を測る。この袖部は焼土混じりの暗褐色土や、袖部構築材であるにぶい黄褐色の粘土ブロックの混じった暗褐色土によって埋められ、その上に30cm大の扁平な安山岩板石が2箇所に置かれていた。この板石は竈封じのために置かれたものであろう。この竈の封土を取り除くと、焚口において袖部に接して土師器の瓶1点が据えられた状態で出土した。瓶は袖側の約半分が残存していたが、竈を封じる際の祭祀行為として置かれたものであろう。焚口は焼土に黒褐色土が

混じった赤褐色土が堆積していたが、明確な焼土面は見られなかった。また、竈のすぐ北には煙出しのための小ピットを検出した。袖部を除去した後、その下部を精査すると、やはり少量ながら焼土や炭が混じる土が認められ、南北に細長い楕円形状を検出した。土坑は長径0.94m、短径0.52mの細長い楕円形状を呈し、深さは0.21mを測る。竈を作る際に整地の目的で掘られたものであろう。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、砥石、石皿が出土している。出土遺物から、6世紀後半の遺構と判断する。

SH536出土遺物 (第47図)

55は縄文土器で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施す上菅生B式土器である。凸帯と口縁が平行にならないため、凸帯は口縁を1周せず、連弧状になる可能性がある。56は土師器の甕か。口縁部は緩く外反する。57は

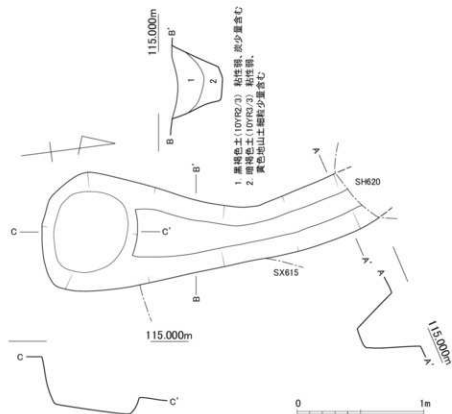


第40図 SH536実測図 (1/50)



第41図 SH536出土遺物実測図 (1/3)

土師器の甕で、頭部で緩く屈曲し、胴部の膨らみは弱い。58は土師器の鉢か。59は土師器の瓶である。59は焚口に据えられた状態で出土したもので、復元口径162cm、復元底径8.0cm、器高20.0cmを測る。底部は中空となっている。60は砂岩製の砥石で、台形柱状を呈し周囲の4面を使用面とする。61は安山岩の縦長剥片を素材とする打製石斧で、背面側左辺は欠失するが周囲に調整剥離を密に施す。62は南壁際から出土した、砂岩製の石皿である。上面を使用面として、無数の擦痕が残る。



第42図 SD690 実測図 (1/30)

SH537 (第48図)

1区の南部東寄り、D-5・D-6・E-5・E-6グリッドで検出した堅穴建物である。南壁の一部及び西壁の一部をそれぞれ攪乱に切られるが、残存状況は良い。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺4.16m、短辺3.52m、深さは最大で0.62mを測る。埋土は11層に細分されるが、南北土層ベルトの中層にあたる第5層は多量の炭を含む黒褐色土で、この層の下、北東隅部付近一帯において3箇所の焼土の広がりが検出された。このため焼失家屋の可能性も考えられたが、炭化部材の出土は顕著ではなく、焼失建物ではない。堅穴廃絶後に何らかの目的で火を焚く行為が行われたとみられる。この炭層の上部、上層の第1~3層からは多量の土器や石器が出土しており、火を焚く何らかの行為を行った後、廃絶した堅穴建物跡の窪地をならすために不要な土器などを一括して廃棄し、一度に埋め戻したものと考えられる。



第43図 SD690 出土遺物実測図 (1/3)

第5層の炭層及び焼土面を除去し、下層を掘り下げたところ、堅穴の北東コーナー近くの床面の少し上から、打製石斧4点がまとまって出土した。整理作業の過程で、これらのうち3点が接合することが判明し、またもう1点も接合こそしないが同一母岩から作られたものである可能性が高いことが分かった(第53図89A~C・90)。SH537廃絶時の確実な遺物であり、古墳時代前期においても打製石斧が用いられていたことを示す資料である。また、北側の主柱穴となるピットのすぐ傍で、やや床面からは浮いた状態ではあったが炭化した柱材が立った状態で出土した。主柱となる柱材が残存したものである可能性が考えられるが、主柱穴からは炭化材は出土しなかった。

黄褐色土ローム質土の床面上では、中央のやや東寄りで炉跡とみられる土坑を1基と、土坑を挟んで南北に主柱

穴となる2基の柱穴、その他3基のピットを検出した。土坑はやや歪な鶏卵形を呈し、長径0.62m、短径0.48m、深さ0.11mを測る。主柱穴は直径0.35m前後、深さは0.30~0.40m前後である。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器といった土器類の他、土製品、打製石斧、叩石、石皿が出土した。大部分は上層から出土したものであるが、下層から先述の打製石斧の接合資料や、跡となる土坑の上部からは叩石が出土している。出土遺物から、古墳時代前期後半の遺構である。

SH537出土遺物（第49~52図）

63~68は縄文土器である。63は早期の押型土器で、横位の楕円文を施す。64は波状口縁を呈する深鉢で、内面口縁部下に1条の沈線を施す。後期後葉に比定される。65は端部を欠くが、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施す深鉢で、晩期後葉の上管生B式土器である。66は無文土器の深鉢、67は後期末葉の浅鉢で、口縁部の内外面に1条の沈線を施す。68は深鉢の底部で、底面が凹む上げ底となる。69は弥生土器の甕で、口縁からやや下がった位置に1条の刻目凸帯を配する。70は壺の肩部で、横位の凸帯を巡らせる。これらは中期後半に属する。71~87は土師器である。71・72は小型の甕で、ともに底部内面に粒状の炭化物の痕跡が残る。73~77は甕で、口縁は外反し、頸部で屈曲して胴部は丸く膨らむ。77を除き、外面に煤が付着する。78は複合口縁となる甕で、瀬戸内系の影響を受けたものか。79・80は壺である。81は鉢で、外面に指頭圧痕が残る。82は平底となる器形で鉢の底部か。83は高坏のミニチュアで、脚裾部に指頭圧痕が顕著に残る。84~87は高坏で、84は坏部の見込みに線刻を施す。85は脚部で、坏部との接合は円盤充填である。86・87は坏部接合部まで中空となっており、これらも円盤充填により接合するものであろう。88は板状を呈する不明土製品である。

89~95は石器である。89は安山岩製の打製石斧で、固まって出土したA~Cの3点が接合する。90も89と同じ石材であるが、接合はしない。調整剥離は粗く、未製品であろう。91はアイサイト製の打製石斧であるが、下部の刃部調整がなされていない未製品か。92は安山岩製の打製石斧で、上部を欠失する。93は安山岩の剥片の周縁に調整剥離を施した、打製石斧の未製品である。94アイサイトの円礫を素材とした叩石で、上面・下面及び側面に敲打痕が残る。95は砂岩製の石皿・台石である。

SH610（第53図）

1区の南西隅部で検出した堅穴建物である。西側及び南側が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は隅丸方形である可能性が高い。検出した範囲で、東西・南北ともに3.50m以上、深さは最大で0.60mを測る。埋土は5層に細分でき、中心部に向かってレンズ状の堆積を呈する。黄褐色ローム質土の地山層を床面とし、この面で8基のピット状遺構を検出した。このうち、中央で2基が連結したピットの東側のものが50cm余りと深く、これが主柱穴になるとと思われる。建物規模からすれば2本柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、土製品、石器が出土している。土師器の出土や、黄褐色ローム湿度を床面とし深さを有することから、古墳時代前期の遺構と判断する。

SH610出土遺物（第54図）

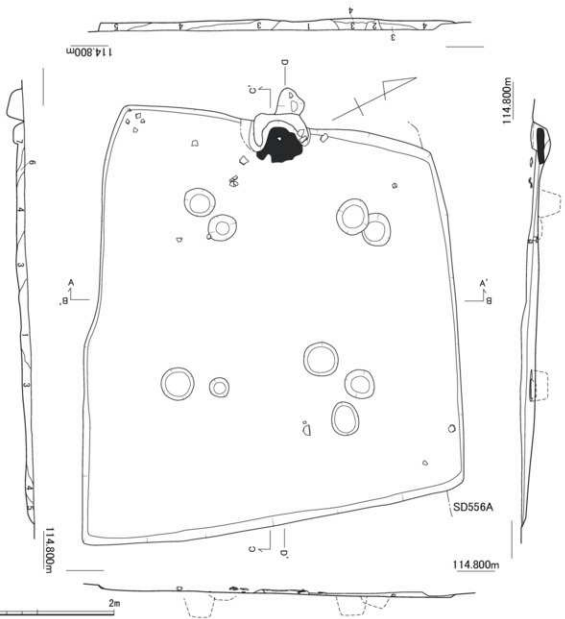
96は土師器の鉢である。口縁部は外反し、内面にはわずかに赤色顔料を塗彩した痕跡が残る。97は土器片を転用し半円形状に加工した土製品である。98は花崗岩の円礫を素材とした叩石で、特に上面・下面に顕著な敲打痕が認められる。99は白色チャートの剥片である。

SH620（第55図）

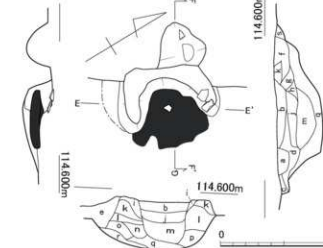
1区の南部中央、D・5・E・5グリッドで検出した堅穴建物である。南西部は上面が確認調査トレンチで少し削られているとおり、確認調査においてその存在を把握していた遺構である。また、北東隅部は弥生時代層の堅穴建物SH687を切っており、南東部では攪乱SX614に切られている。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺3.85m、短辺

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む

5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱
6. 灰褐色土 (10YR4/2) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む
7. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む



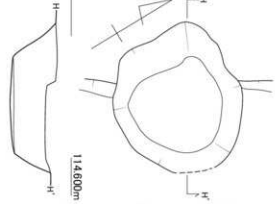
カマド平面・断面図



- a. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、黄土粒少量含む
- b. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、黄土粒少量含む
- c. 灰褐色土 (10YR4/2) 粘性弱、黄土粒少量含む
- d. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄土粒少量含む
- e. 暗褐色土 (7.5YR4/4) やや粘性あり、暗褐色土粒が顕微に混じる

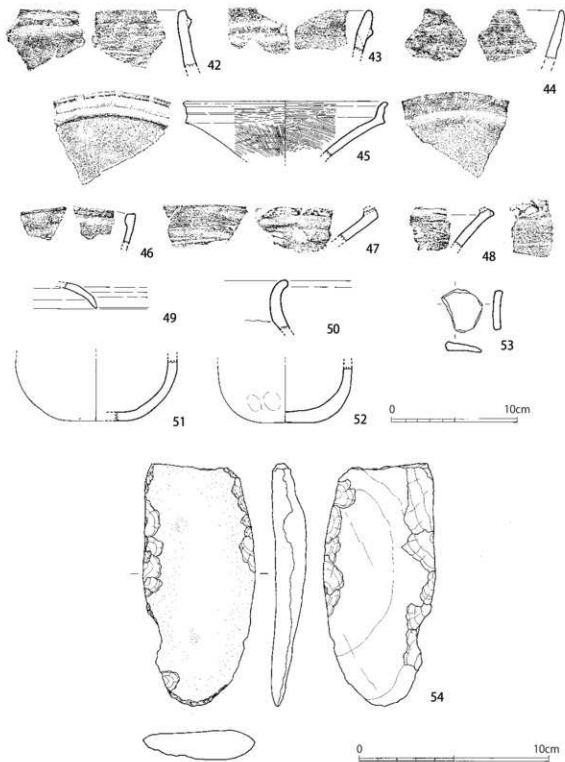
- f. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、上部に黄土粒を含む
- g. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、黄土粒混じる
- h. 暗褐色土 (10YR4/3) 粘性弱、黄土粒少量含む
- i. 暗褐色土 (5YR4/6) 粘性あり硬く締まる (横断面の硬熟層)

カマド完備



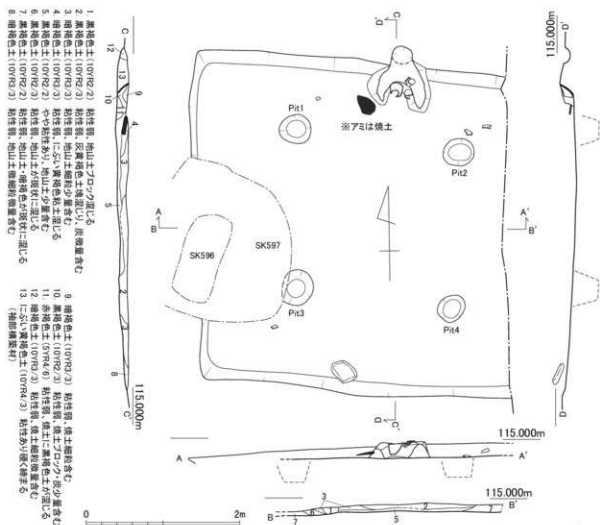
- j. 赤褐色土 (2.5YR4/6) 硬熟により硬化、上部に灰を含む
- k. 暗褐色土 (7.5YR4/3) 粘性あり硬く締まる、黄土細粒混じる
- l. 暗褐色土 (10YR4/5) 粘性弱
- m. 暗褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱、炭・焼土小塊少量含む
- n. 暗褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄土の大ブロック混じる
- o. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、白色砂粒少量含む
- p. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土少量含む
- q. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土少量含む
- r. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土少量含む
- s. 暗褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、暗褐色土粒が顕微に混じる

第44図 SH535実測図 (1/50・1/30)



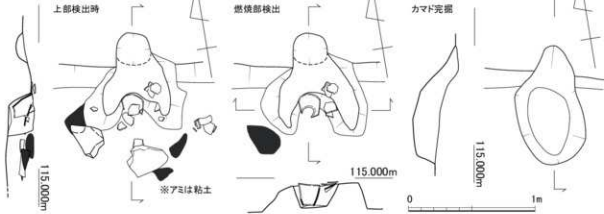
第45図 SH535 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

3.00 m、深さは最大で0.72 mを測る。床面までの埋土は5層に細分され、黒褐色土を主体として各層とも炭を含み、中央に向かってレンズ状の堆積となる。この1~4層中から、多量の土師器を主体とした遺物が出土した。土師器には甕、壺、器台、高坏といった当時の一般的な生活用具からなるが、中でも器台や高坏の出土が多い印象である。これらの遺物は、堅穴建物廃絶後にまとめて廃棄され埋められたものである。

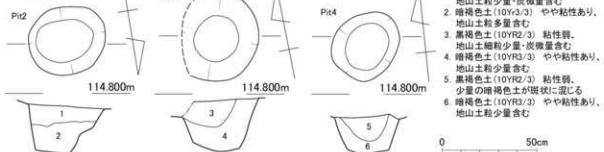


- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、地山土粒少・炭微量含む
 - 2 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土粒少量含む
 - 3 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土粒少量含む
 - 4 暗褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり、地山土少量含む
 - 5 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、地山土粒少量含む
 - 6 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、地山土粒少量含む
 - 7 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、地山土粒少量含む
 - 8 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土粒少量含む
 - 9 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、機土微量含む
 - 10 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、機土・アミ・炭少量含む
 - 11 赤褐色土 (5YR4/6) 粘性弱、機土・暗褐色土・炭含む
 - 12 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、機土微量含む
 - 13 赤褐色土 (5YR4/6) 粘性弱、機土微量含む
- (特記層材料)

カマド詳細図

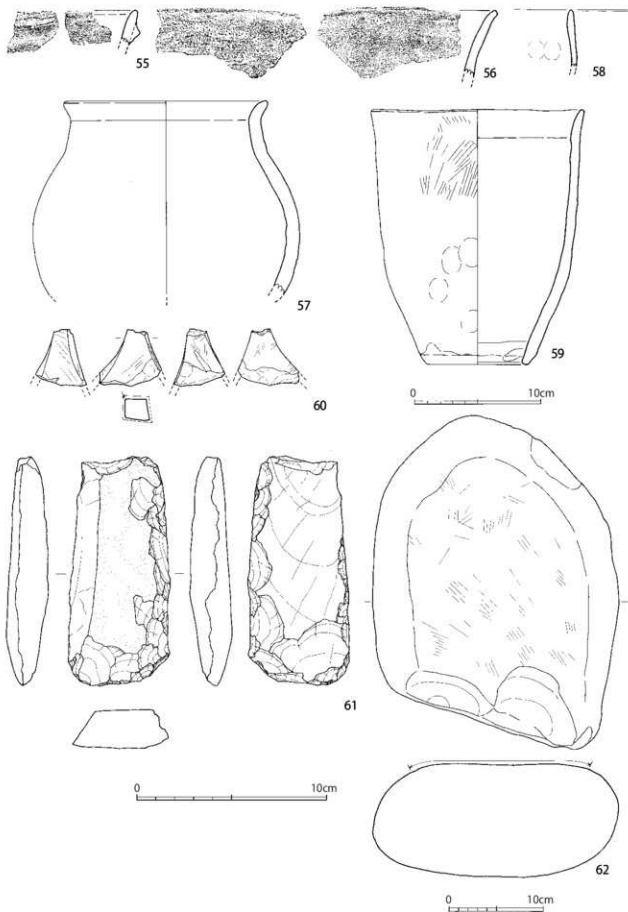


Pit個別図



- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、地山土粒少量・炭微量含む
- 2 暗褐色土 (10Y3/3) やや粘性あり、地山土粒少量含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、地山土粒少量・炭微量含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘性あり、地山土粒少量含む
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、少量の暗褐色土が斑状に混じる
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘性あり、地山土粒少量含む

第46図 SH536実測図 (1/50・1/30・1/20)



第47图 SH536出土遗物实测图(1/3·1/2·1/4)

さて、検出した遺物群は出土状況を記録しながら掘り下げ、床面の検出を行ったところ、北東隅部では黄褐色ローム質土の地山層があらわれたが、中央から南西側にかけては黒褐色土ブロックや黄褐色土ブロックの混じった暗褐色粘土の貼床層が面的に確認され、さらに南壁沿いには貼床面上で薄いながらも焼土の広がり認められた。貼床面上の遺構は、中央部に刃跡とみられる土坑があり、北及び西側の壁際には細長い溝状遺構が検出された。また、5基のピットを検出したが、いずれも掘り込みは浅く、主柱穴は明確ではない。この貼床面を除去して黄褐色ローム質土の地山面を全体に検出したところ、貼床面下でさらに遺構を検出できた。この面では、北側と東側中央の壁際にそれぞれ土坑があり、中央の南北には深さ0.35~0.45mの規模を持つ2基の主柱穴を検出した。その他4基の小ピットが見られたが、その性格は不明である。この面が最初の遺構で、ある段階で何らかの理由で貼り床整地を施して立て直したものとみられる。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器といった土器類の他、土製品、磨製石鏃、石皿、鉄刀子等が出土している。出土した土器から、本壁穴の帰属時期は古墳時代前期後半に位置付けられる。

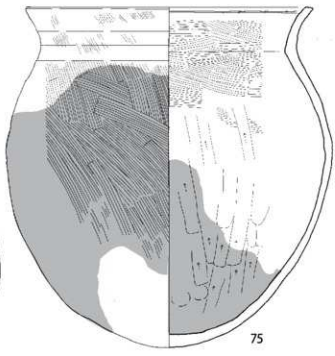
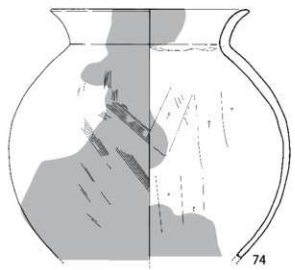
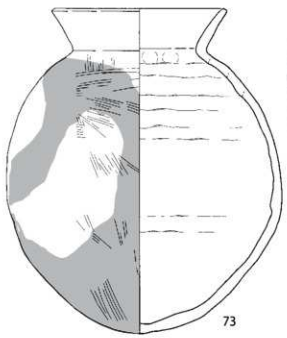
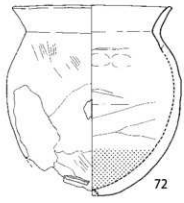
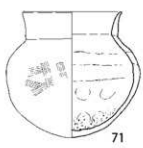
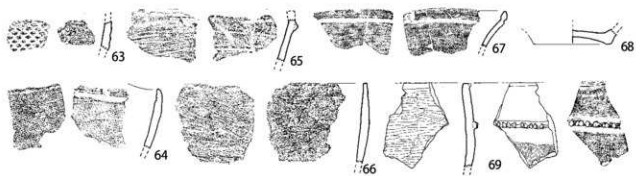
SH620出土遺物（第56~58図）

100~104は縄文土器である。100は波状口縁を呈する無文の深鉢で、内面口縁部下に1条の沈線を施す。101は頸部に2条の横位沈線を施す。これらは後期後葉に位置付けられる。102は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、凸帯の位置はやや下に下がっている。103・104は浅鉢で、103は口縁部に鰭状の突起が付く。104は鍵状口縁を呈し、壁面には補修孔を穿つ。これらは晩期後葉に比定される。105~109は弥生土器である、105は外面口縁下に1条の刻目凸帯を貼り付ける甕で、中期の下城式土器に比定される。106は甕で、外面に1条の凸帯を貼り付け、器面には粗いミガキを施す。107・108は壺で、外反する口縁の端部を上方に拡張し、外面に鋸歯状の刻みを、上面に円形浮文を施す。これらは後期初頭頃に位置付けられる。109は高坏の脚部で、両端がカットされていることから透かし部の破片である。

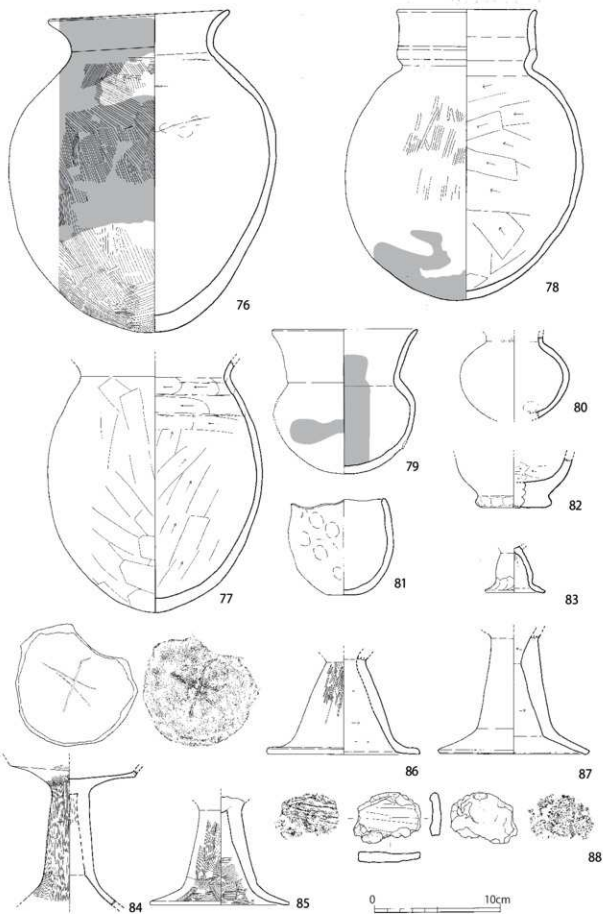
110~124は土師器で、このうち110~114は甕である。110・111は口縁部が外反し、頸部で屈曲して胴部が球状に膨らむ。110は外面に煤の付着が顕著に認められる。112・113は器壁がやや厚手で、胴部の膨らみは緩く寸胴形に近い形状を呈し、底部は平底気味となる。114は丸底の底部で、底面に1条の線刻が見られる。器形としては前者の形態をとるものであろう。115は口縁部を欠くが小型丸底甕であろう。内面の底部やや上に何らかの集中した粒状の圧痕が残る。116は鉢で、口縁部は緩い波状を呈する。117は器台で、脚部と受け部で同じような器形のものを含めたような形態をとる。118は厚手の器壁を有し、口縁部は緩く内湾するもので、これも器台であろうか。外面には粗いハケ目調整を施す。119・120は器台の脚部か。119は粗い調整で、118のようなもの、120は117のような器形のものにそれぞれ対応するとみられる。121~124は高坏である。121は坏部が頸部で折れて口縁部が外反し、脚部は下部で強く屈曲し裾部が広がる。坏部と脚部は円盤充填により接合する。122・123は坏部で、121と同様の形態をとる。脚部の接合はやはり円盤充填である。124は脚部で、裾部の広がりはない。坏部との接合部は中空であるが、ラッパ状に広がっており、これも円盤充填によるとみられる。125は土器片を転用し、半円形状に加工した土製品である。126は鉄刀子で、茎部あたりに一部木質が残存する。127は磨製石鏃で、基部は浅く凹み、先端部を欠失する。石材は粘板岩である。128は安山岩製の石皿で、上下両方の平坦面を使用面とする。長さ31.2cm、幅36.5cm、重さ1200gを測る。西辺壁際の中央付近の上層から出土した。

SK604（第59図）

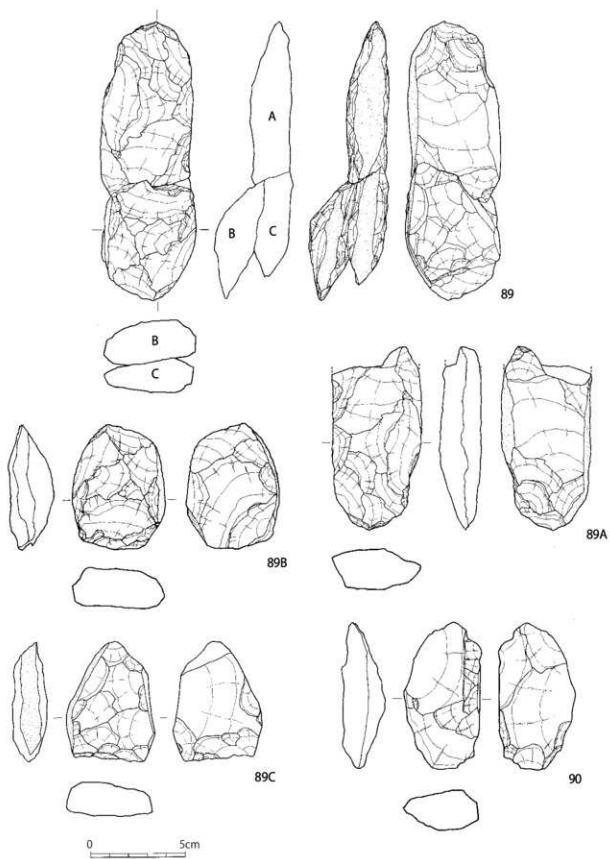
1区の南西隅部近く、D-4グリッドで検出した土坑である。弥生時代の堅穴建物SH667埋没後に穿たれたもので、平面形状は略円形を呈し、長径0.90m、短径0.76m、深さ0.17mを測る。土坑中央部の検出面から土師器甕の底部片が出土している。埋土は3層に分層され、第2・3層により土坑埋没後に第1層が掘り込まれ、この層の上部に先述の土師器甕が乗っていることから、第1層はこの甕を埋置するために掘られたものであることが分かる。遺物は他に弥生土器の小片が出土している。出土土器から遺構の年代は古墳時代前期後半に比定される。



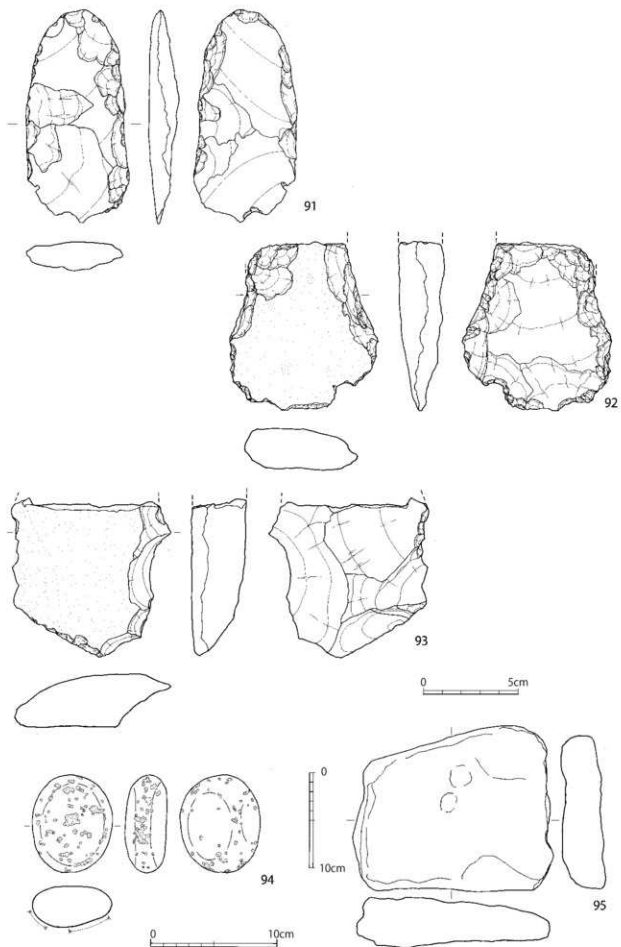
第 49 图 SH537 出土遗物实测图① (1/3)



第50图 SH537 出土物实测图② (1/3)



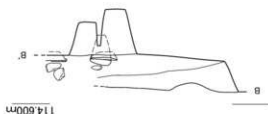
第 51 图 SH537 出土遺物実測図③ (1/2)



第52図 SH537出土遺物実測図④ (1/2・1/3・1/4)

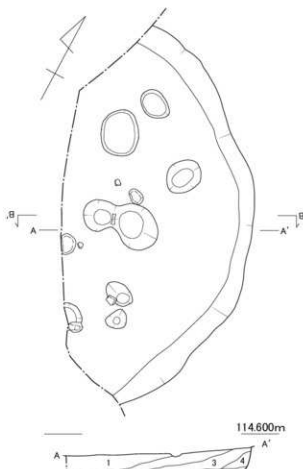
SK604出土遺物（第60図）

129は弥生土器である。内傾する口縁の外端に刻みを、口縁からやや下がった位置に刻目凸帯を貼り付ける甕で、中期の下城式土器に比定される。130は土師器の甕で、胴部は球状に膨らみ、底部は平底気味の丸底を呈する。先述のとおりSK604の中央部検出面から出土したもので、土層から何らかの目的で埋置されたものとみられる。



SK612（第61図）

1区の南端部中央、E-5グリッドで検出した土坑である。南半部は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、平面形状は隅丸方形形状を呈し、検出した範囲で長辺2.06m、短辺1.16m以上、深さ0.29mを測る。内部は逆台形状の掘り込みを呈し、掘り込み角度は緩く、底面はほぼ平坦である。遺物は縄文土器の他、土器片を加工した土製品が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、埋土の色相や遺物から弥生時代以降に位置づける。



1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、灰・黄色地山土粒微量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、灰・黄色地山土粒微量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄色地山土粒細粒少量、炭微量含む
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄色地山土ブロック少量含む
5. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄色地山土粒多量含む

0 2m

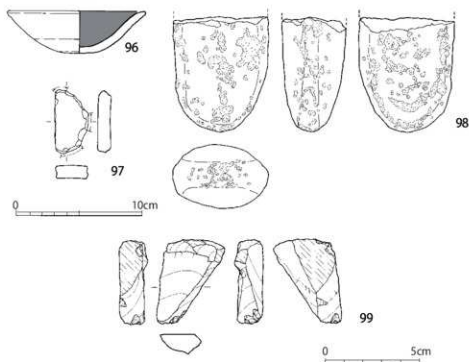
第53図 SH610実測図 (1/50)

SK612出土遺物（第62図）

131は縄文土器深鉢の底部である。底面周縁部が接地し、底面は凹む上げ底形態となる。132は土器片を転用し半円形状に加工した土製品である。

SK674（第63図）

1区の西部中央、C-4グリッドで検出した土坑である。西端部は中世の落ち込み状遺構SX556Bに、南辺の一部はビットSP650に切られている。平面形状は東西に長い楕円形状を呈すると見られ、長径1.56m以上、短径1.11m、深さ0.18mを測る。内部は皿状の浅い掘り込みで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器、土師器が出土しているが、その量は少なく小片が多い。土師器の出土から、古墳時代の遺構と推定する。



第54図 SH610出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK674出土遺物 (第64図)

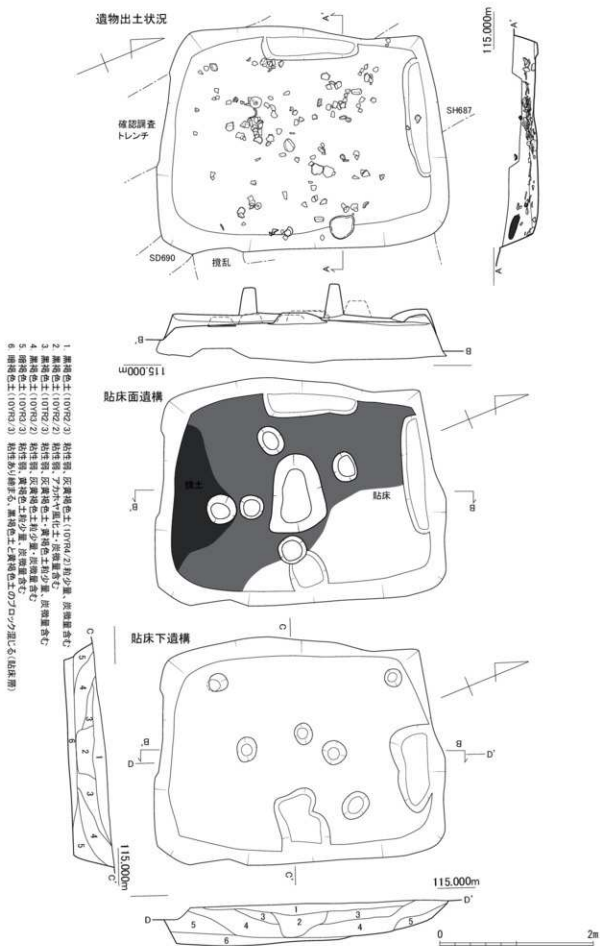
133は弥生土器の壺か。肩部に断面台形状の横位凸帯を巡らせる。

SD558 (第65図)

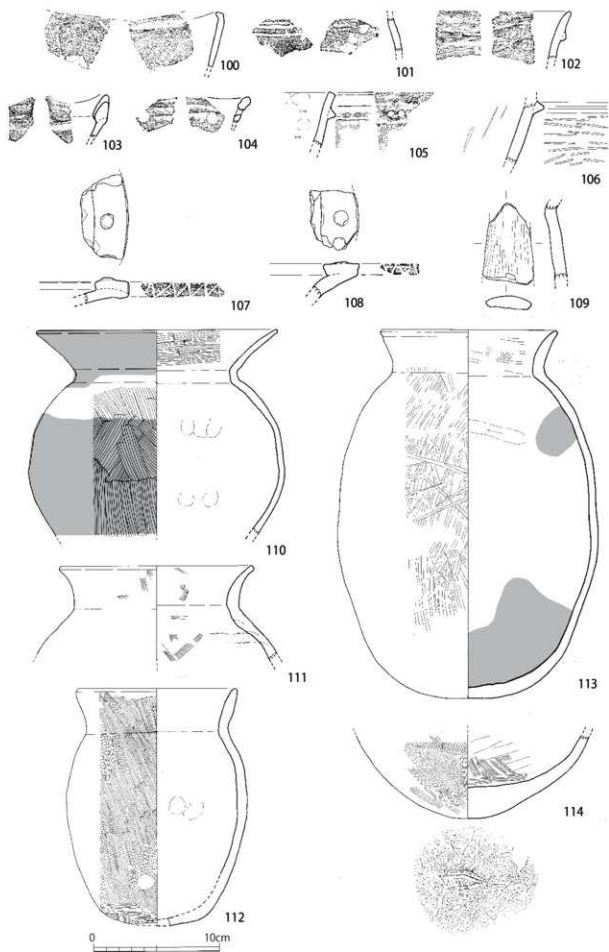
1区の北西部、B-5・C-4・C-5グリッドで検出した溝状遺構である。西半部は調査区外に続くため全容は明らかにできないが、隅丸方形に何かを圍繞するように掘られている。検出した範囲で、溝で区画される範囲の長辺は5.46m、短辺3.15m以上、溝の幅は0.53~0.99mを測る。周溝墓や、何らかの施設の区画の可能性を考えたが、区画の内側には3基の土坑SK823・SK824・SK575を検出したものの、これら土坑と溝との関係は明らかではなく、また年代的に同時共存するものかも判断がつかなかった。従って遺構の性格は不明ながら、何らかの区画のために掘られたものと考えたい。遺物は縄文土器、石器他に土師器の小片が出土している。縄文土器は早期の押型文土器を含む。全体として押型文土器の出土は少ないが、その中でもSK651を含めこの周辺で押型文土器が比較的出土している傾向があり、このエリアが早期の活動の場であった可能性を示す。遺物は縄文時代のものが目立つが、図示していないもの土師器の小片が出土していること、色相が縄文時代の遺構とは異なる点を勘案し、古墳時代の遺構と判断する。

SD558出土遺物 (第66図)

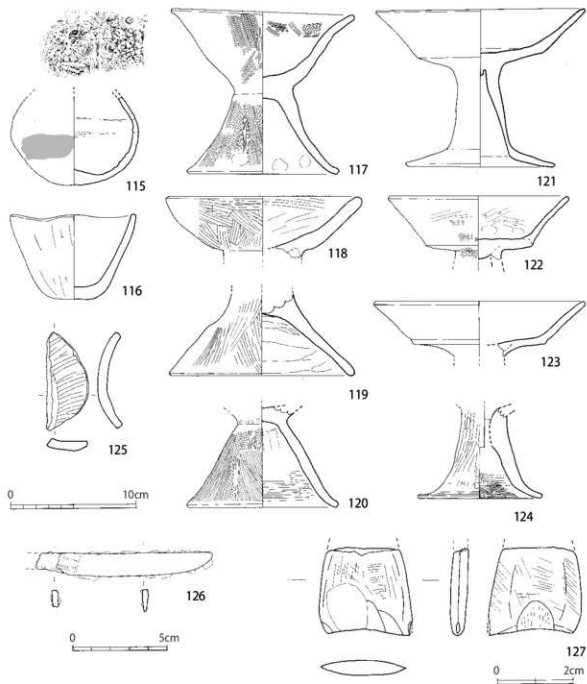
134・135は縄文時代早期の押型文土器である。134は外面及び内面の口縁部に接して横位の楕円文を回転施文する。135は外面に楕円文を施し、内面は無文である。136は縄文土器の胴部片で、器壁が厚手のナデ調整無文土器であり、早期の無文土器の可能性がある。137は後期後葉~晩期の無文土器深鉢で、胴部中位の屈曲部から内傾しながら立ち上がる肩部の破片である。138はチャート素材とする二次加工剥片で、側辺下方及び下辺に微細な剥離痕が残る。



第55図 SH620実測図(1/50)



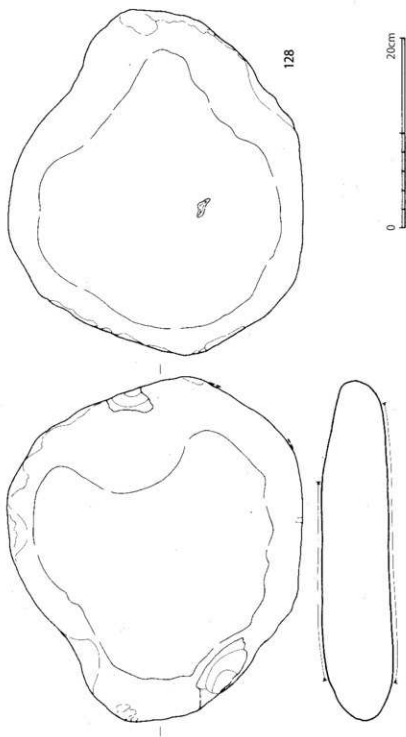
第 56 图 SH620 出土物实测图① (1/3)



第57図 SH620 出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)

第5節 古代・中世の遺構と遺物

古代・中世の遺構は全体的に少ない。古代の遺構は堅穴建物1棟、中世の遺構は溝状遺構SD556A及びそれに続いて調査区の南西方向へ地形に沿って続く落ち込み状遺構SX556B、落ち込み状遺構SX619がある。また横列としたSA1も、年代は不明ながらここに含めて報告する。



第 58 图 SH620 出土遺物実測図③ (1/4)

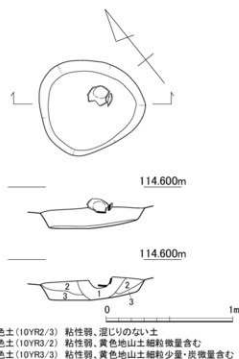
SH570 (第67図)

1区の西壁際中央、C-4・D-4グリッドで検出した竪穴建物である。検出できたのは東側の一部で大部分は調査区外に続く。平面形状は方形を呈し、長辺4.68m、短辺1.82m以上、深さ0.65mを測る。東辺の中央には竈が付属する。上田原東遺跡では竈の付属する竪穴建物を7棟確認しており、その多くは北側に竈が付されるが、東側に付くのはこのSH570だけである。

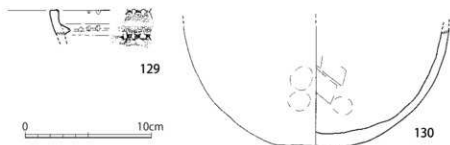
この竈については、SH570の上位に堆積していた中世の落ち込み状遺構SX556Bの深さを確認する目的でトレンチを設定し、地山まで掘り下げる過程で、安山岩の扁平な板石と、その下で完形に近い土師器甕と焼土のまとまりを確認した。土師器のそばには、方柱状の凝灰岩と、その両端に石材が立てられていた。さらにその周囲には黄白色の粘土が混じった層が認められたため、火を焚き、土器を用いた祭祀を行った後に何かを封じた祭祀行為、あるいは火葬墓の可能性を考え、まだ竪穴建物のプランを検出していなかったため竈とは認識せずに不用意に掘り下げてしまった。掘り下げを進める中で、床面で耳環1点が出土したことから、火葬墓とするには土器と年代が合わない点は気になりつつも墓の副葬品の可能性を考えてさらに掘り進めてしまい、竈であるとの認識に至ったのはほぼ完掘に近い状態になってからであった。従って竈の構造を正確に記録できなかったのは悔やまれる点である。

竈の構造と、廃絶寺の状況は次のように復元される。東壁の中央に逆U字状に黄白色粘土を積み上げて袖部を構築し、その稜線端に袖石となる立石を配している。その上に角柱状の凝灰岩を乗せて天井部とし、袖部との隙間に土器を置いて下から火を焚いて使用したものとみられる。袖部に囲まれた部分は焚口で、焼土層の堆積が認められた。竈廃絶後には、凝灰岩の天井材を床面に下ろし、焚口に土師器甕1点を据えた後に袖部を崩して埋めた後、安山岩の板石を乗せて封じたものとみられる。耳環は竈と関係するものかどうかは明らかではないが、位置的には袖部の下にあたる。竈を構築する際に意図的に置かれたか、あるいは混入したものであるのかは決し難い。

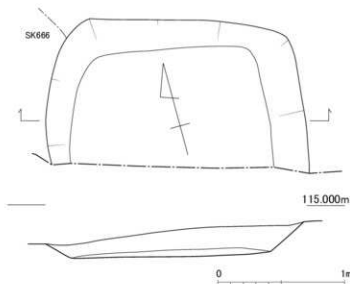
竪穴部は床面が北はやや高く南側へ緩やかに傾



第59図 SK604実測図 (1/30)



第60図 SK604出土遺物実測図 (1/3)

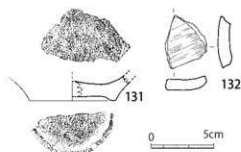


第61図 SK612 実測図 (1/30)

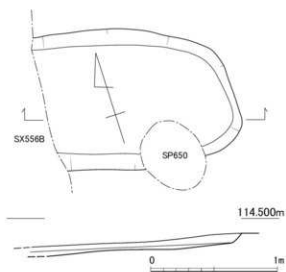
斜しており、南壁際にはテラス状の段が付く。竈と南東隅部の間で、完形の土師器や須恵器坏蓋等が置かれたような状態で出土している。床面では浅い掘り込みをいくつか検出しているが、いずれも主柱穴ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、叩石、耳環が出土している。出土した須恵器坏蓋の形状から、遺構の時期は7世紀前半に比定される。

SH570出土遺物 (第68図)

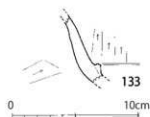
139～141は弥生土器である。139は甕で、口縁の外端部が凸帯状になり、刻みを施す。140は外面口縁部下に1条の刻目凸帯を巡らせる、下城式の甕である。141は壺形土器で、頭部～肩部に横位の凸帯を数条巡らせる。142～144は須恵器の坏蓋である。142・143は天井部が低く、口縁部は内側に短い嘴状の返しが付く。天井頂部には欠失した摘みの痕跡が残る。144は口縁部に返しがなく、天井部は丸く高さがあるもので、古墳時代後期のものである。145・146は土師器の甕である。145は口縁部が短く外反し、一端が小さな片口状となる。底部は平底気味の丸底である。146は口縁部が短く外反し、胴部が長く伸び胴の影らみは弱い。外面には煤の付着が顕著に認められる。竈の廃絶時に焚口に据えられていたものである。147は安山岩の円礫を素材とした叩石で、上面及び下面、側面に顕著な敲打痕が残る。148は銅を芯材として表面に鍍金を施した耳環である。直径2.7 cm、厚さ0.8 cm、重量14.3 gを測る。



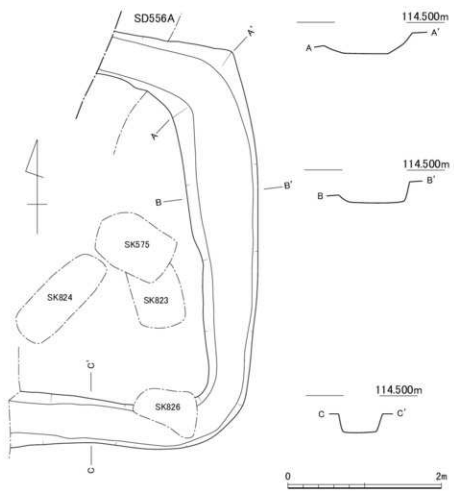
第62図 SK612 出土遺物実測図 (1/3)



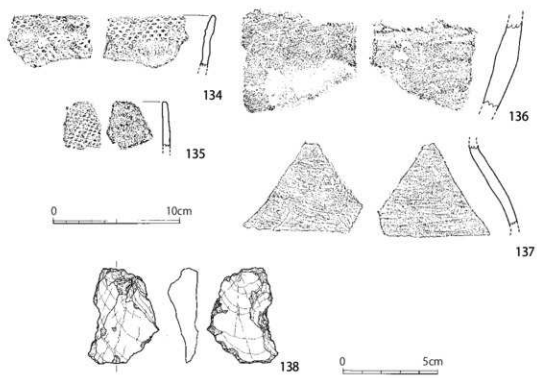
第63図 SK674 実測図 (1/30)



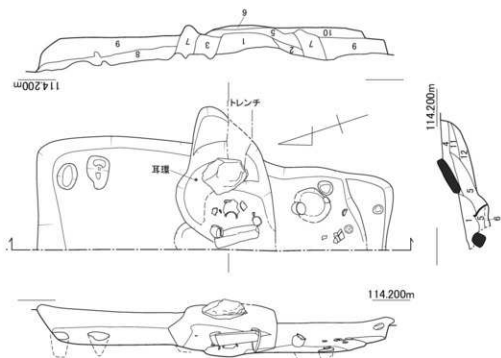
第64図 SK674 出土遺物実測図 (1/3)



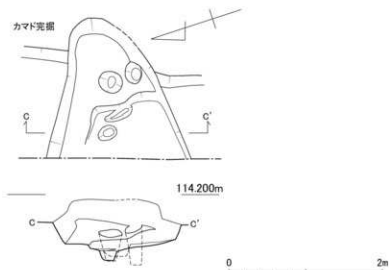
第 65 图 SD558 实测图 (1/50)



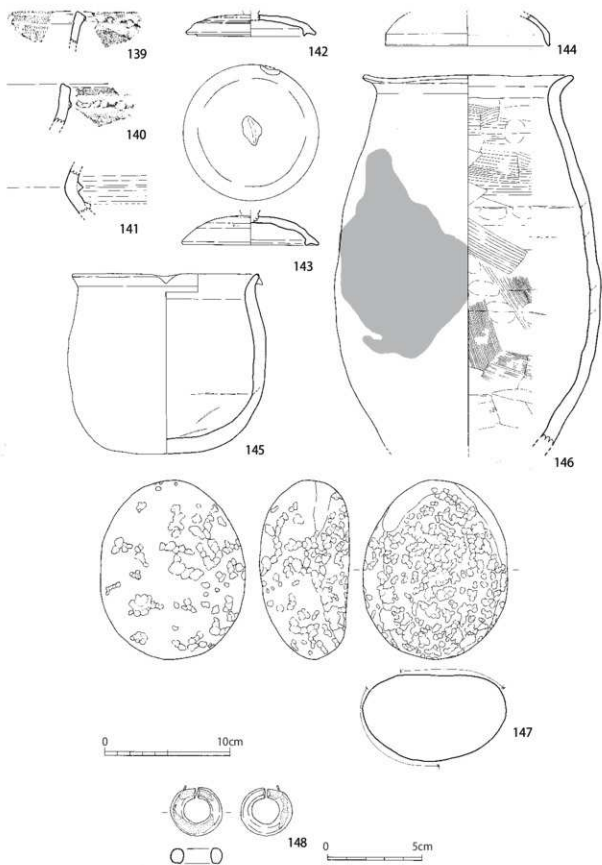
第 66 图 SD558 出土遺物实测图 (1/3 · 1/2)



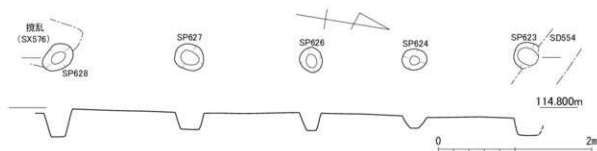
1. 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘性あり締まる。黒褐色土が斑状に混じり、アカホヤ・焼土細粒を含む
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、暗褐色土塊・焼土小粒・アカホヤ細粒少量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/4) やや粘性あり、黒褐色土塊混じり、黄褐色土・アカホヤ粒少量含む
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり締まる。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) の粘土混じり、焼土・炭少量含む
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、焼土ブロック・炭・黄褐色土小粒少量
6. 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土層、全体に被熱し硬化
7. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、暗褐色土塊・アカホヤ・黄褐色土小粒混じり、黄白色粘土小塊少量含む
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・黄褐色土小粒少量含む
9. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・黄褐色土小粒混じる
10. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土ブロック混じる
11. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む
12. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄褐色土細粒混じる



第 67 図 SH570 実測図 (1/50)



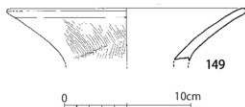
第 68 图 SH570 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)



第69図 SA1実測図 (1/50)

SA1 (第69図)

1区の中央北寄り、B-5・C-5グリッドで検出した柱穴列(横列)である。ビット5基の直線的な配列を確認したため、掘立柱建物の可能性を考え周囲を慎重に精査したが、これに対応するような柱穴の展開はみられなかった。北側のビットは近世以降の溝SD554に切られており、これから北への展開は見られない。全長で6.56m、ビット間の距離は1.35~1.75m、ビットの深さは0.16~0.25mを測る。軸線は長軸方向がN-95°-Wとやや西に振れる。出土遺物は殆どなく、南端のSP628から土師器1点が出土したに過ぎない。古墳時代前期の高塚であるが、これが遺構の年代を示すものかどうかは判断が難しい。



第70図 SA1出土物実測図 (1/3)

SA1出土遺物 (第70図)

149は土師器高塚の坏片である。口縁部は外に開き、中位の屈曲部から下は欠損する。器形から古墳時代前期後半に位置付けられよう。

SD556A・SX556B (第71・72図)

1区の北端部近く、B-5・B-6グリッドで検出した、東西方向に延びる溝SD556Aと、調査区北西壁際から調査区に沿うように南西方向へ続く、SX556Bからなる。SX556Bは、西端部を検出できておらず、これがSD556Aのような溝状を呈するのか、あるいは地形に沿って落ち込み状となるのか不明であり、SXの遺構略号とした。

SD556Aは古墳時代後期の竪穴建物SH535の北辺部を切っており、SH535の北西端部辺りで鉤手状にクランクし、西壁際で南西側へ続く。溝は幅0.80~1.74m、深さは0.1m前後と浅い。出土遺物は少ないが、土師器や石皿が出土している。

SX556BはSD556Aが調査区西壁に達した所から調査区の壁沿いに南西に続き、中世の落ち込み状遺構SX619、古代の竪穴建物SH570、縄文時代の竪穴建物SH662を切り、SH662の南西部で終端に至る。南端部付近では、東西約0.5m以上、南北約2.0mの範囲に、10~30cm大の礫約20点がまとまった状況が認められたが、これが人為的なものか自然堆積によるものかは判然としない。調査区の西側は切り立った崖となって市道に続いており、SX556Bの西側は落ちていく地形になると見られるが、この傾斜部を埋めて平地を造成するために礫や土砂を入れた可能性もある。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。土師器には古代、中世の遺物も含まれ

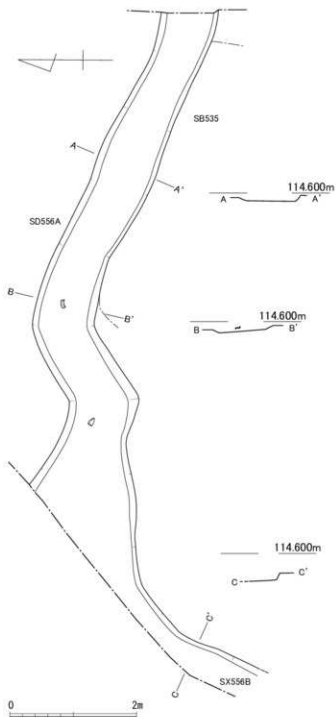
る。埋土はSD556A・SX556Bともに共通するため、両遺構は同時期に存在したものである可能性は高い。中世土器の出土や、中世のSX619を切ることから、SD556A・SX556Bともに中世の遺構と判断される。

SD556A・SX556B出土遺物（第73図）

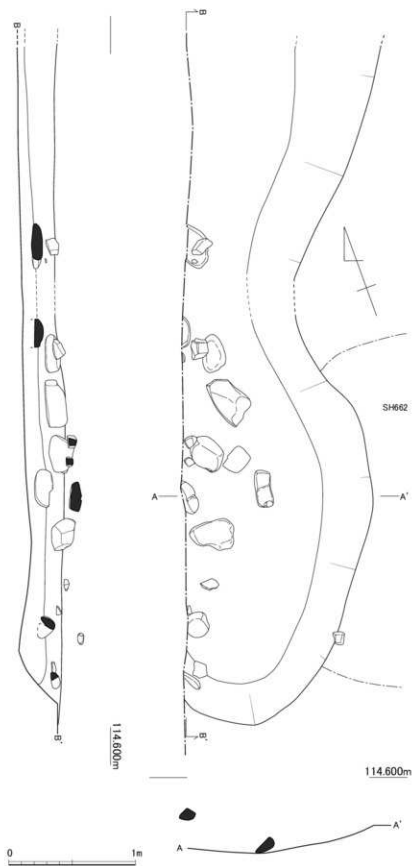
150・151は縄文土器であるどちらも外面口縁部下に1条の無刻み目凸帯を貼り付けるもので、150は凸帯の断面形状が台形状を呈する。晩期後葉の上管生B式土器に比定される。152は弥生土器の甕で、外面口縁下に1条の刻み目帯を配し、口縁部外端部に刻みを施す。中期の下城式土器に比定される。153は土師器の甕で、口縁部の外反は弱く直口状となり、頸部の屈曲も弱い。古墳時代後期の所産である。154は土師器の高台付き椀で、底部に断面逆台形状の高台を貼り付け、外面には粗いミガキを施す特徴から古代に位置付けられる。155は土器片を転用し、周縁を加工して半円形状に整形した土製品である。156は円礫を用いた投擲か。157は磨石で、石材は安山岩である。158・159は石皿ないしは台石で、いずれも上面を使用面とし粗い擦痕が認められる。

SX619（第74図）

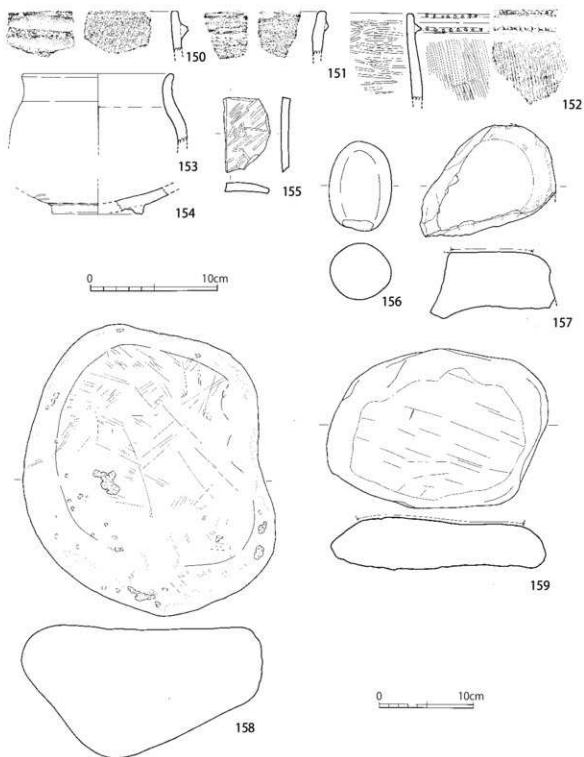
1区の中央西壁際から南西隅部にかけて、D4・E4グリッドで検出した落ち込み状遺構である。北は捜乱SX560に、北西端から中央壁際にかけてはSX556Bにそれぞれ切られている。検出範囲は長さ11.04m以上、幅4.20m以上、深さ0.30m前後を測る。埋土は4層に細分され、西側の傾斜部に向かうように順に堆積する。いずれの層も黄褐色土や暗褐色土、灰黄褐色土のブロックが混じることから、自然堆積



第71図 SD556A (SX556) 実測図 (1/60)



第72図 SX556B 実測図 (1/50)



第73图 SD556 (SX556) 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

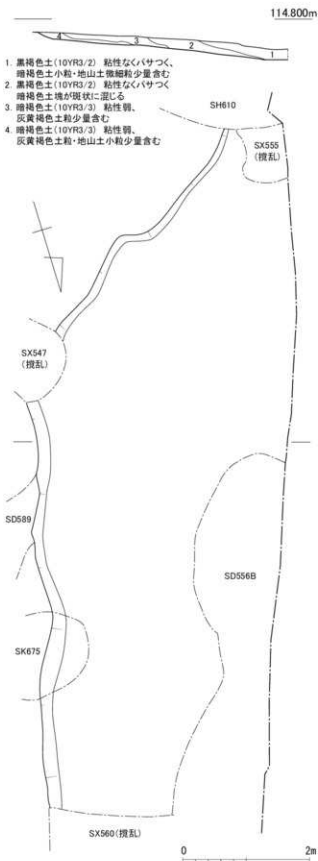
ではなく意図的に埋めた土層である。人為的な構造物というよりは、調査区の西側が崖となって落ちている自然地形を埋めて平地を造る目的で土をいれたものであろう。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、石錘が出土している。中世土器の出土から、中世に埋没したものと思われる。

SX619出土遺物（第75図）

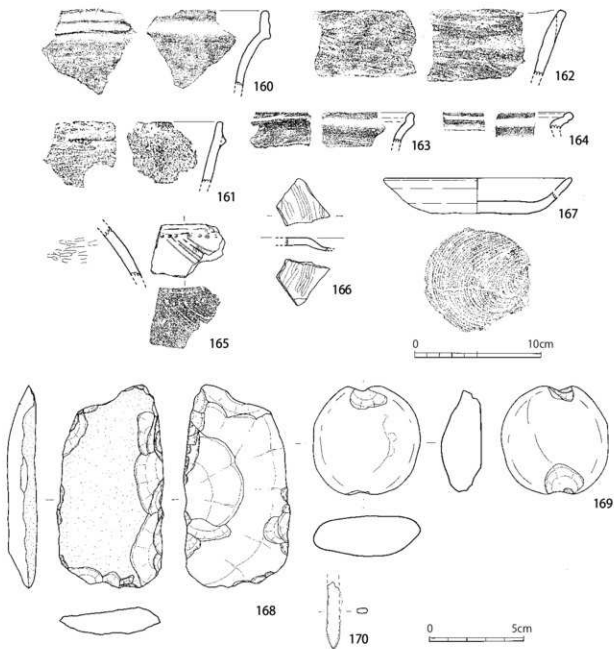
160～164は縄文土器である。160は外反する頸部から口縁部が上方に折れ、外面に2条の平行凹線を施す。後期後葉三万田式の深鉢である。161は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施す深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。162は無文の深鉢で、外面に粗い条痕を施す。163・164は黒色磨研土器の浅鉢で、口縁部は外反し端部は短く上方に折れ、外面に沈線を施し、内面には段が付く。後期末葉に位置付けられる。165は弥生土器の壺で、肩部上方に横位の多条沈線の痕跡がわずかに認められ、その下に半截竹管状工具による列点刺突文と、弧状の多重沈線文を施す。166は古代の土師器の坏壺で、内外面ともに粗いヘラミガキを施す。167は土師器の坏で、底面に回転糸切り痕が残る。14世紀代のものであろう。168は打製石斧である。珩岩の横長剥片を素材とし、周縁に粗い調整剥離を施すが、剥離が十分ではなく未製品と思われる。169は安山岩の円礫を素材とした打欠石錘で、上下両端を打欠いて縄掛け部を作り出す。

第6節 近世以降の遺構と遺物

近世以降の確実な遺構としては、溝状遺構SD554が挙げられる。落ち込み状遺構SX534は自然地形に由来するものとみられるが、SD554とともに第2層の耕作面に関連する遺構の可能性が高い。また、1区では他の調査区に比べ攪乱が数多く確認され、縄文時代以降の遺物が混入している。それらについても本節で報告する。



第74図 SX619実測図(1/60)



第75図 SX619出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SD554 (第76図)

1区の北部、B-5・B-6・C-5・C-6グリッドで検出した溝状遺構である。東側は調査区外に続くが、検出した範囲で長さ8.93m以上、幅0.36~0.55m、深さは最大で0.35mを測る。溝の東壁際と、西端部はそれぞれ土坑状やピット状に1段深く掘り込んでいる。埋土は黒褐色土ブロックが少量混じるにふい黄褐色土で、標準土層の第Ⅲ層上面から掘り込み、上部を標準土層の第Ⅱ層が被覆する。第Ⅱ層は旧耕作土であることから、SD554も近現代の耕作に伴う、畑地の境界溝のような施設である可能性が高い。遺物は土師器、磁器が出土している。

SX534 (第6・7図)

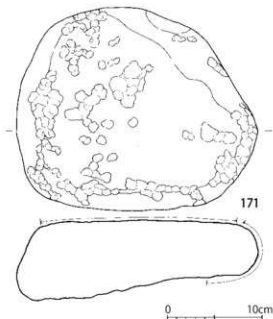
1区の北端部、B-5・B-6グリッドで検出した落ち込み状遺構である。第7図の堆積土層でも触れたが、北端部は標準の堆積土層とはやや異なった状況を示しており、おそらくは調査区の北側が崖面となって落ちていく地形であることから、北に向かって傾斜する低地を埋めて整地し平地を造成したものであろう。埋土が粘性を欠きバサついた黒褐色土であり、その上をクロボクに由来する第Ⅲ層を掘り返したとみられる第3層が被覆していることから、標準土層第Ⅱ層の農地を作るために造成した痕跡であると考えたい。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器の小片や石皿が出土しているが、造成時期を明らかにできるものはない。

SX534出土遺物 (第77図)

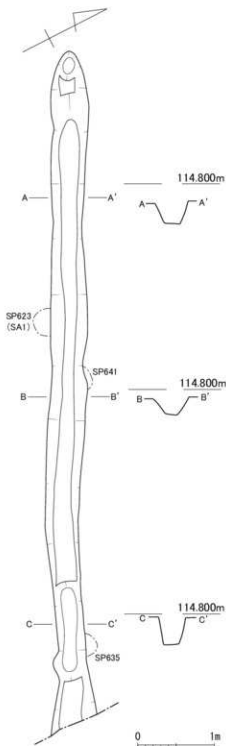
171は石皿で、上面を使用面として表面に敲打痕が顕著に認められる。

攪乱出土遺物 (第78・79図)

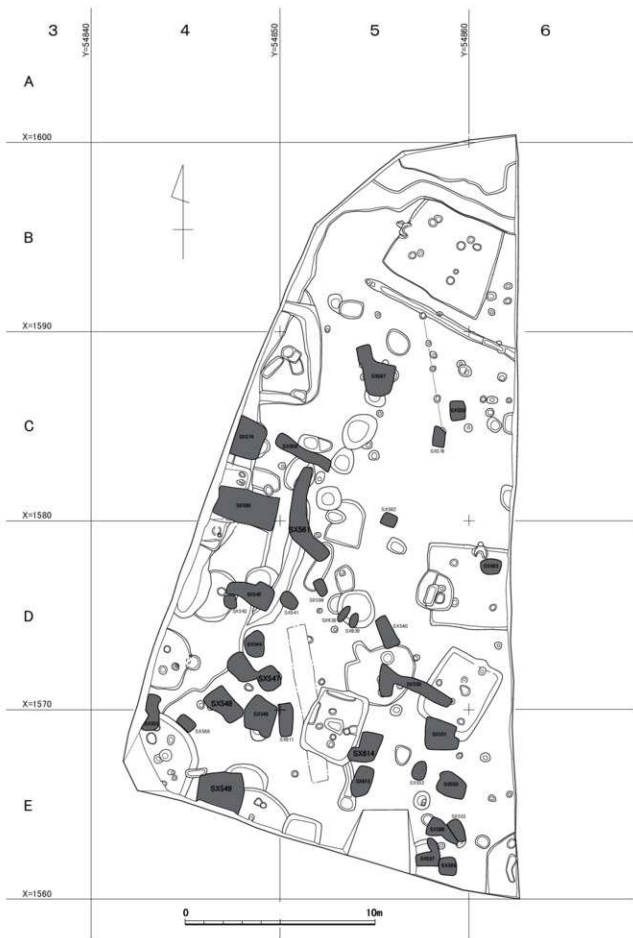
1区では多くの攪乱が認められたが、その多くは耕作土に似た埋土で占められており、農耕に関連して構築された廃棄土塊等の穴である。第78図は攪乱分布で、図中アミカケをした部分が攪乱で、文字ポイントの大きい攪乱は第79図に示した遺物の出土した攪乱を表す。172は縄文土器の深鉢で、外面に粗い条痕を施す。173は土器片を転用し、周縁を加工して半円形状にした土製品である。174は土師質焼成の管状土錘の完形品。175は砥石で、表面に刃物を研いだ鋭い使用痕



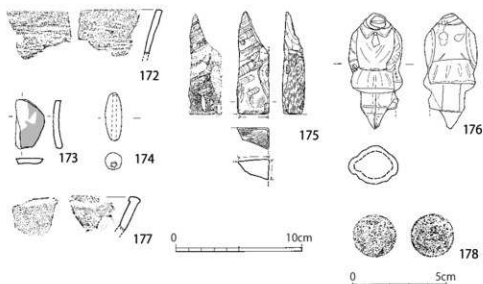
第77図 SX534出土遺物実測図 (1/4)



第76図 SD554実測図 (1/50)



第 78 图 1 区扰乱分布图 (1/200)



第79図 1区攪乱出土遺物実測図 (1/3・1/2)

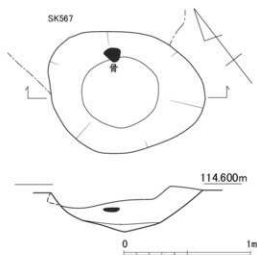
が残る。176はビニール製の人形で、制服を身に付けた女児を象っている。177は縄文土器。178は銅銭で、拓影では判然としなが一銭の銭文がかすかに判読できる。

第7節 その他の遺構・遺物

本節では、前節までに報告した以外の遺構で、帰属時期を決め難いものを扱う。

SK568 (第80図)

1区の中央北寄り、C-5グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形状を呈し、長径1.27m、短径0.97m、深さ0.36mを測る。内部の掘り込みは緩やかで、底面は平坦ではなく丸みを持つ。土坑の北端中央部の検出面近くから骨が出土しているが、状態が悪くほぼ形状を留めておらず、分析できるような状態ではなかった。この骨の他に遺物の出土は皆無であり、従って遺構の時期は明らかにできない。



第80図 SK568実測図 (1/30)

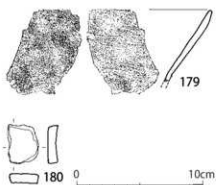
SK596・SK597 (第81図)

1区の中央東寄り、D-5グリッドで検出した土坑である。古墳時代後期の竪穴建物SH536の西辺の中央部辺りを切って構築しており、SK597を切ってSK596が掘り込んでいる。

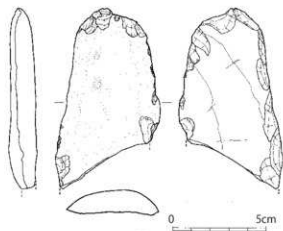
SK596はSK597のほぼ中央部に穿たれた土坑で、隅丸長方形の平面形状を呈し、長辺1.23m、短辺0.65m、深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色土で、混入物の差から上下2層に分層される。上層には灰黄褐色土粒や炭を含み、下層には少量ながら地山黄褐色土の粒が混じる。土坑の形状から墓の可能性を考えたが、それを裏付けるよ



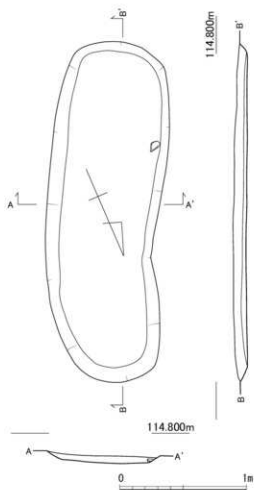
第 81 图 SK596·SK597 实测图 (1/30)



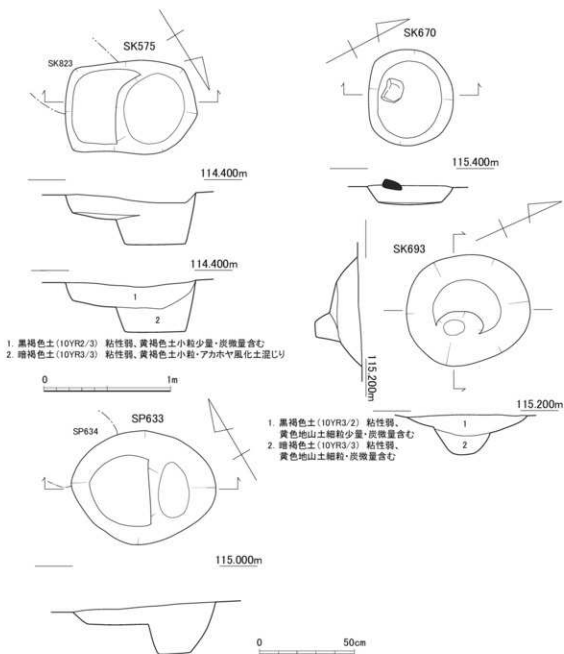
第 82 图 SK596·597 出土遗物实测图 (1/3)



第 84 图 SK616 出土遗物实测图 (1/2)



第 83 图 SK616 实测图 (1/30)



第85図 1区遺構実測図 (1/30・1/20)

うな遺物の出土や埋葬施設の痕跡は確認できなかった。遺物は少量ながら縄文土器、土師器片が出土しており、内1点を図示した。SH536との切り合い関係から、古墳時代後期以降の遺構であることは確実であるが、詳細な時期比定は困難である。

SK597はSK596に切られる土坑で、平面形状は北東隅部が丸みをもった隅丸方形形状を呈し、長辺1.97m、短辺1.96m、深さ0.31mを測る。埋土はSK596と同じ黒褐色土で、それがためにプランの確認は困難を極めた。上層はアカホヤ風化土混じりで微量ながら炭を含み、下層は地山黄褐色土の粒が少量混じる。遺物は少量ながら、土師器の他、土器片を半円形状に加工した土製品が出土している。



第86図 1区遺構出土遺物実測図 (1/3)

SK596と同様に、古墳時代後期以降に比定される遺構であるが、時期否定出来る遺物に乏しく詳細な帰属時期判定の決め手を欠く。

SK596・SK597出土遺物（第82図）

179はSK596から出土した縄文土器で、口縁部が外に開く無文の深鉢である。180はSK597の出土品で、土器片を転用し、周縁を加工して半円形状に仕上げた土製品である。

SK616（第83図）

1区のはほぼ中央部、D-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に細長い楕円形状を呈し、長径2.68m、短径0.92m、深さ0.10mを測る。内部は皿状を呈した緩やかな掘り込みで、床面は起伏がなくほぼ平坦である。遺物は打製石斧1点が出土しているが、他に土器等の出土は見られなかった。遺物の帰属時期を判定できる遺物がなく、遺構の時期は不明とせざるを得ない。

SK616出土遺物（第84図）

181は背面に自然面を残す珪岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、下半部が欠失する。周縁部に粗い調整剥離を施すが、剥離は密ではなく未製品の可能性もある。

SK575（第85図）

1区の北部西側、C-5グリッドで検出した土坑である。SD558に囲繞された中に位置するが、SD558との関係は明らかではない。SK823を切る土坑で、平面形状は長方形を呈するが、北西部が丸くカーブしている。長辺1.05m、短辺0.75m、深さ0.39mを測る。内部は二段掘りになっており、西側が円形に一段深く掘り込まれる。埋土は上下2層に分層され、第1層が一段浅いテラス部分、第2層が一段深い土坑部分の埋土となる。遺物は弥生土器と時期不明の土器小片が出土しているが、図示できるものはない。弥生時代以降の遺構であることは間違いないが、詳細な時期は不明である。

SK670（第85図）

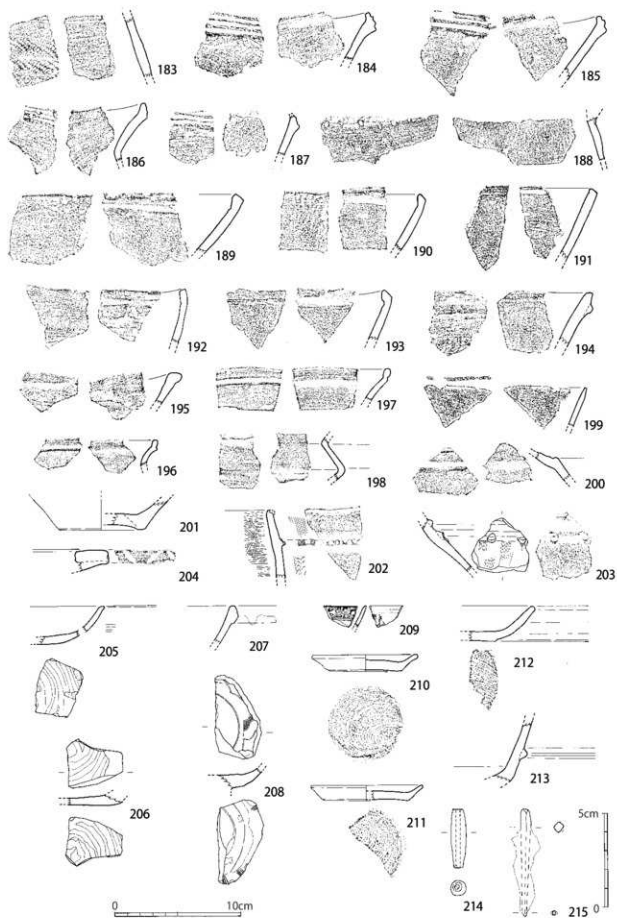
1区の南東隅部、E-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.77m、短径0.67m、深さ0.15mを測る。検出面付近から20cm弱の大きさの礫の出土がみられた。遺物は弥生土器とみられる小片が出土している程度である。時期比定できる遺物に乏しく、遺構の年代は明かにできない。

SK693（第85図）

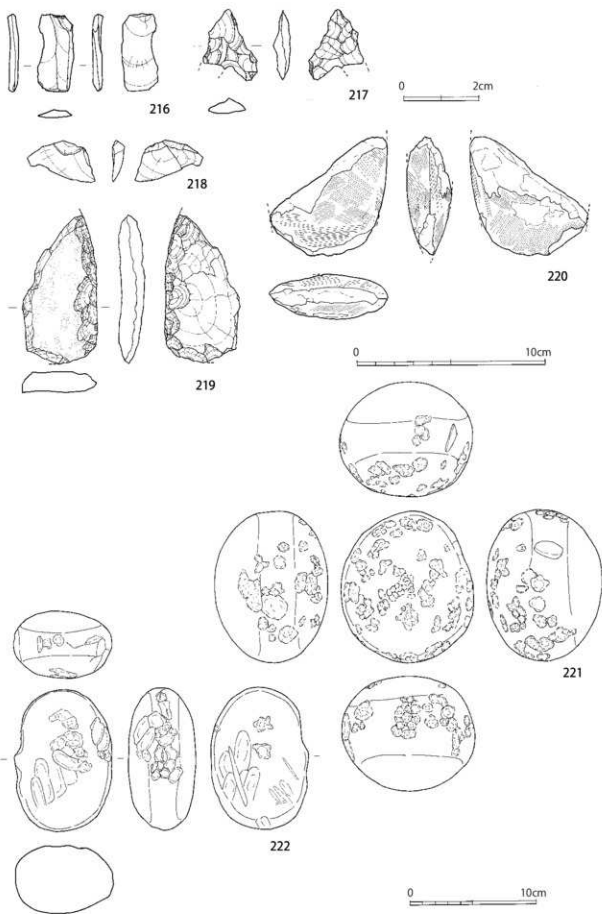
1区の南東部、E-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形状を呈し、長径0.97m、短径0.82m、深さ0.37mを測る。内部は二段掘りになっており、東端部はビット状に一段深く掘り込まれ、西側はテラス状の段が付く。埋土は上下2層を確認しており、第1層がテラス部を覆い、第2層は一段深い部分の埋土となる。遺物の出土がなく、遺構の時期は明かにできない。

SP633（第85図）

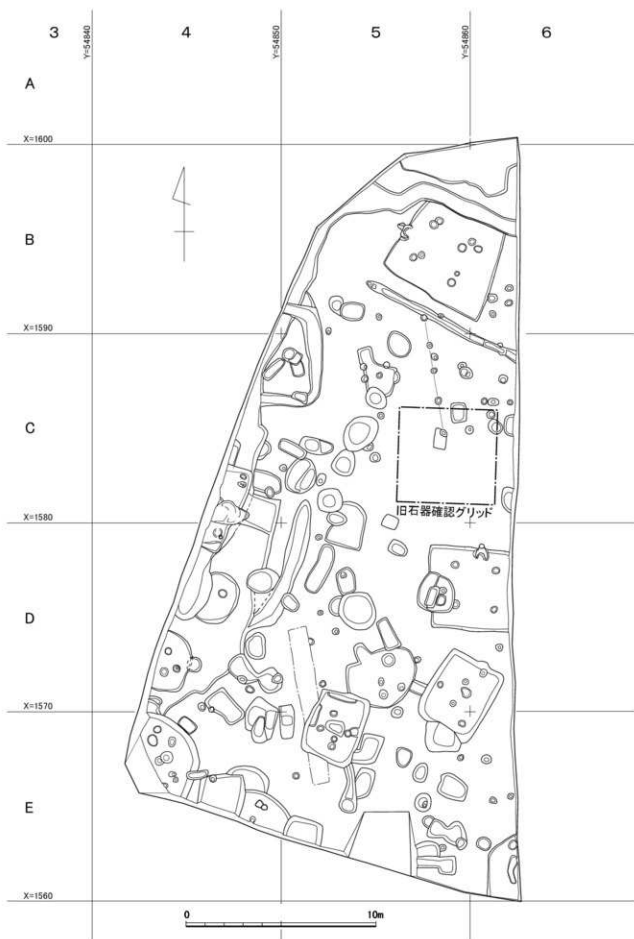
1区の中央北寄り、C-5・C-6グリッドで検出したビット状遺構で、北東部でSP634を切っている。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.77m、短径0.51m、深さ0.51mを測る。内部は二段掘りになっており、北側が一段深く掘り込まれ、南側はテラス状の段となる。遺物は縄文土器、時期不明の土器小片が出土しているが、時期比定できる遺物がなく、詳細な時期は明かにできない。



第 87 图 1 区出土遗物实测图① (1/3 · 1/2)



第88图 1区出土遗物实测图② (1/1·1/2·1/3)



第 89 図 1 区旧石器時代確認調査トレンチ配置 (1/200)

SP633出土遺物 (第86図)

182は縄文土器である。外面表面の剥落が著しいが無文の副部片で、内面上部隅に種子状の表出圧痕が認められた。この圧痕については分析を行ったものの、何に由来するものかを明らかにすることはできなかった。

第8節 1区出土遺物

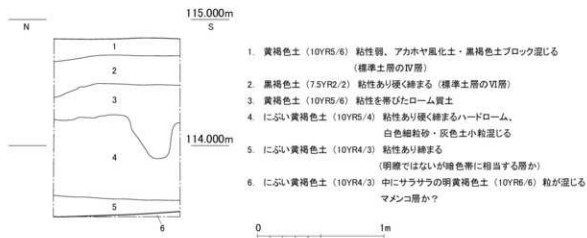
1区の表土や遺構検出時等に出土した遺物のうち、特徴的なものを第87図に示す。

216は流紋岩製の細石刃である。上部を打面とし、腹面上部に打点を残し、背面には3面の剥離痕が残る。217は流紋岩の剥片で、自然面を残す上端を打面とする。これらは旧石器時代の遺物である。218は打製石鏃で、基部の一端が欠失する。石材は姫島産黒曜石である。219は安山岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、側縁に顕著な調整剥離を施す。220は磨製石斧で、全体に研磨整形の擦痕が顕著に残る。石材は蛇紋岩である。221・222は叩石で、いずれも上下両面及び側面部に顕著な敲打痕が残る。石材は221は安山岩、222はアイサイトである。

第9節 旧石器時代の確認調査

標準土層の第IV層上面の遺構の調査後に、下位層における遺構・遺物の有無を確認する目的で、1区の一部に確認調査グリッドを設定した。調査区は記録作成作業が必要な堅穴建物等の主要遺構の分布する場所を避け、C-5・C-6グリッドの中に、東西5.2m、南北5.0mの範囲で設定した(第89図)。掘削には重機を使用し、堆積層を薄く慎重に剥ぎ取りながら掘り下げ、遺構や遺物の有無を確認する方法をとった。最終的にグリッド全体を1.5m程掘り下げ、底面でいわゆるマメンコ層と呼ばれる、サラサラの明黄褐色土粒が混じった層に達したため、これ以上の掘り下げを行わなかった。結果として、確認調査グリッドから遺構・遺物は全く確認されなかった。

確認調査グリッドの土層を第90図に示す。1はアカホヤ風化土や黒褐色土の混じった黄褐色土で、この層上面が縄文時代～古墳時代を主とする遺構面となる。標準土層の第IV層である。2は粘性を帯び硬く締まった黒褐色土で、縄文時代早期に相当する堆積層である。標準土層のVI層にあたる。3は粘性を帯びた黄褐色のローム質土で、古墳時代前期の堅穴建物はこの層上面を床面とするものが多い。4は粘性を帯び硬く締まったにぶい黄褐色土のハードローム層で、白色細粒砂や灰色土の小粒が混じる。5はにぶい黄褐色土を呈するローム層で、4よりも色相が暗い。このグリッドでは明瞭な暗色帯を確認していないが、この5層が暗色帯に該当する可能性がある。6はマメンコとみられるサラサラの明黄褐色土粒が混じるにぶい黄褐色土である。



第90図 1区旧石器時代確認調査トレンチ土層断面 (1/30)

第4章 2区の発掘調査成果

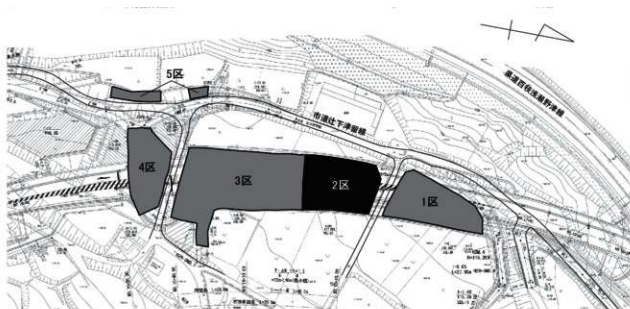
第1節 調査区の設定と基本層序

県道三重新線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う上田原東遺跡の発掘調査は、調査前の土地形状に応じて1～5区の調査区を設定して実施した。2区は3区に北接し、里道を挟んで北に1区が位置する（第91図）。調査地の地番は豊後大野市三重町大字上田原字辻1695-3・1696-3の一部、1697-2の一部、1698-2で、調査前の標高は約1160～1171mを測る。南東側から北西側にかけて緩やかに傾斜する。

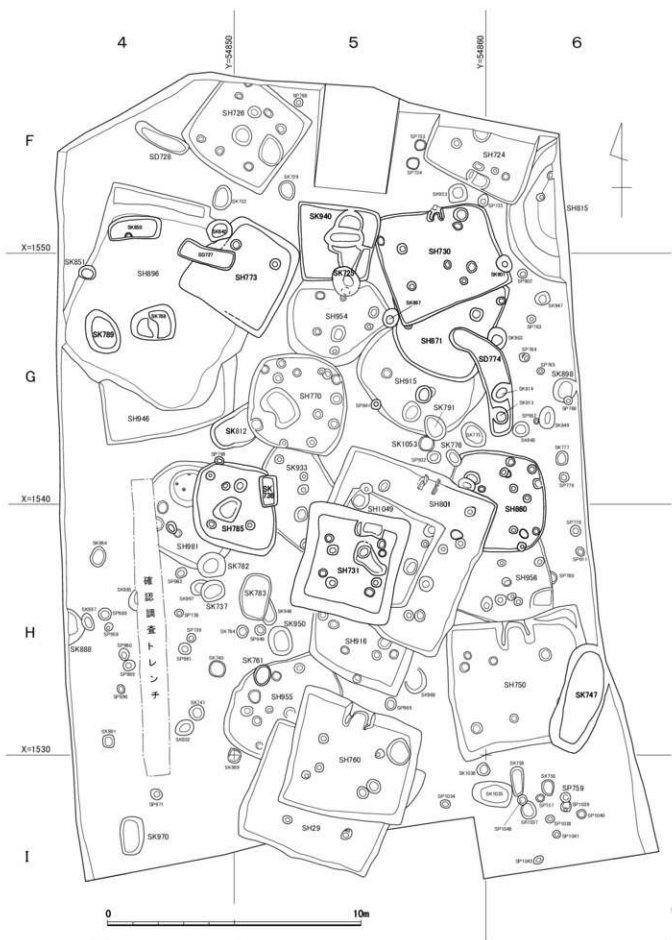
発掘調査区は計画路線形状に合わせて設定し、2区はほぼ長方形形状を呈している。発掘調査面積は約680㎡である。発掘調査では縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世の遺構を確認したが、2区では縄文時代・古墳時代前期・古墳時代後期の遺構・遺物が多く、弥生時代や古代・中世のものは少ない。また、遺構の分布はほぼ調査区の全体に認められ、特に空白域のような空間は存在しない。1・3・4区と同様に全体的に遺構の重複が激しく、また遺構埋土と基盤となる土層が酷似しており遺構プランや切り合い関係の把握は困難を極めた。そのため、ある遺構の発掘中に本来はそれを切る遺構を新たに把握するなど、切り合い関係を十分に押さえられなかったものも少なからず存在する。従って遺物の混在は完全には排除できなかった。

2区の土層断面を第93図に示す。基本となる土層は1区と共通する。第Ⅰ層は褐色を呈する、畑作による現代の耕作土で、層厚は約10～20cmを測る。全体に耕起されて締まりがなく脆い。第Ⅱ層は暗褐色を呈する旧耕作土で、層厚は約40～50cmを測る。2区の北側から中央部にかけて、第Ⅲ層との層界面に一定間隔で凹凸が認められるが、1区と同様に畑作に伴う畝の痕跡であると考えられる。第Ⅲ層は黒褐色を呈する土層で、クロボクと通称される土層である。層の厚さは約15～50cmで、縄文時代～古代を中心とした時期の遺物を多く包含する。第Ⅳ層はアカホヤ風化土や黒褐色土のブロックが混じった暗褐色土で、下部では黄色みが強くなる。この層の上面が遺構検出面となるが、遺構埋土と酷似するため遺構輪郭の把握は困難を極め、いくらか上部を下げた段階で検出したものもある。第Ⅴ層は約7,300年前の鬼界カルデラの噴火により飛来したK-Ah層、いわゆるアカホヤ火山灰である。粘性がなくサラサラとした明黄褐色土で、堆積は部分的に認められる。特に3区の南東部では面的にも広がりが認められた。第Ⅵ層は粘性を帯びる黒褐色土で、縄文時代早期に相当する。

発掘調査では遺構検出面である第Ⅳ層の上面までを重機を使用して慎重に除去し、第Ⅳ層上面で人力により遺構検出作業を行った。その結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、中世の遺構・遺物を検出した。このうち2区で中心となるのは縄文時代・古墳時代前期・古墳時代後期である。なお、旧石器時代については、2区では確



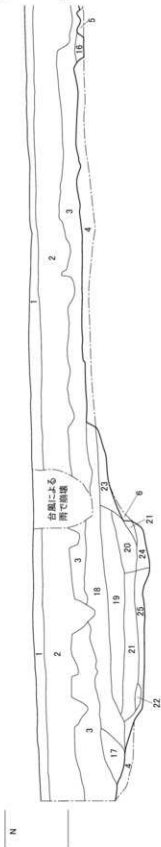
第91図 上田原東遺跡の調査区配置と2区の調査位置 (1/1500)



第 92 図 2 区遺構配置図 (1/150)

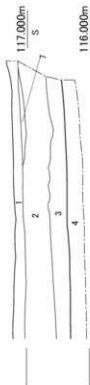
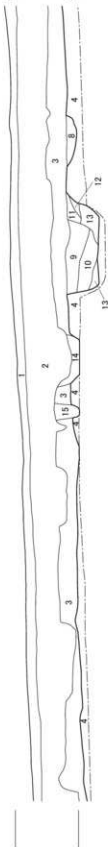
117,000m

116,000m



117,000m

116,000m



基本層序

1. 暗褐色土 (10YR6/2) 粘性弱、全体に埋没された低い崖 (第 I 層)
2. 暗褐色土 (10YR2/3) 粘性の強い NE 傾斜土 (第 II 層)
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性の強いプロック層 (第 III 層)
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土・黒褐色土プロックが斑状に混じる (第 IV 層)
5. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性なくサラサラしたアカホヤ層 (第 V 層)
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性強く深く締まる (第 VI 層)

7. 暗褐色土 (10YR5/4) 粘性弱、白色砂粒少量含む
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黒土小粒少量含む
9. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黒土小粒少量含む
10. 暗褐色土 (10YR3/4) やや粘性あり締まる、黒褐色土プロック多量・アカホヤ風粒少量含む
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、黒土小粒・赤小片少量含む
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、アカホヤプロック混じり、高粘層含む
13. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性あり締まる、黒褐色土プロックが斑状に混じり、微土プロック・炭片少量含む
14. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、灰黄褐色土小粒・黒褐色土小粒少量含む
15. 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、アカホヤ風化土少量、炭粒層含む
16. 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、黒褐色土小粒・赤小片少量含む
17. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、灰黄褐色土小粒少量含む
18. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む
19. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む
20. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒混じり
21. 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり、地山土小粒混じり
22. 暗褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり、地山土小粒少量含む
23. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、地山土小粒少量・高粘層含む
24. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性あり締まる、地山土プロック多量含む
25. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、地山土プロック混じり

0 2m

第 93 図 2 区土層断面 (1/60)

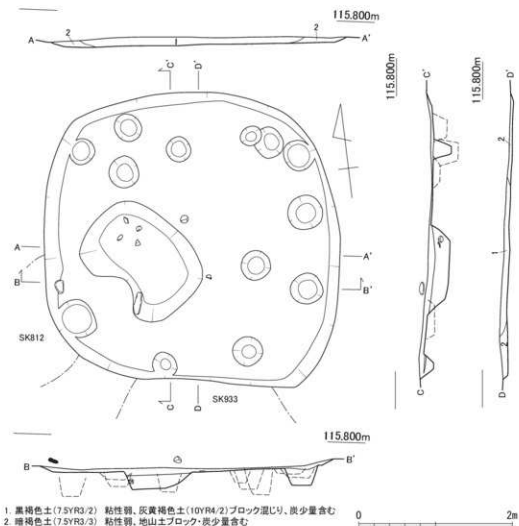
認調査の際に一部で下部ローム層まで深く掘り下げたものの遺構・遺物が確認されなかったこと、ローム層を掘り込む遺構がいくらかあるものの旧石器時代の遺物の出土がほとんど認められないことから、工期の都合もありこれ以上の調査は行わないこととした。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

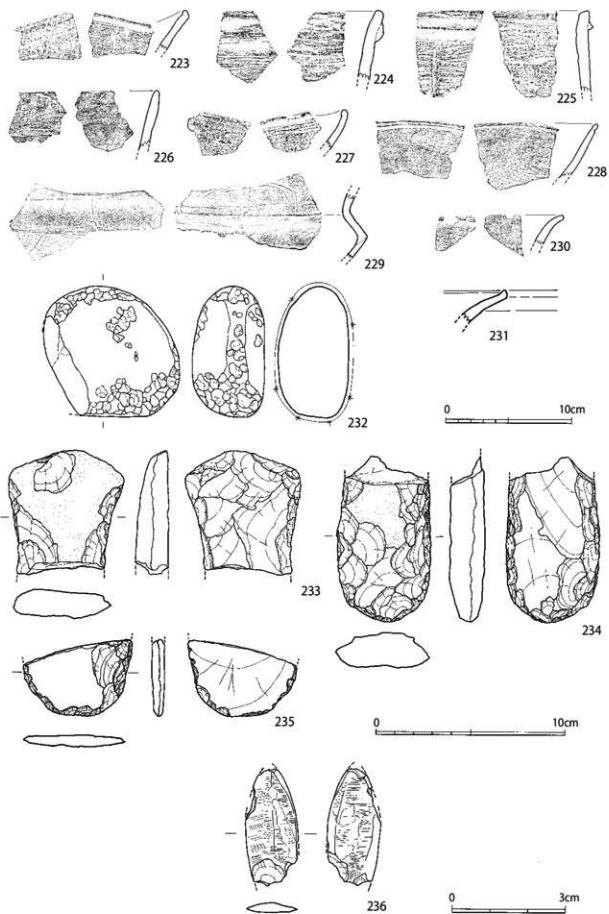
縄文時代の遺構としては、堅穴建物8棟、貯蔵穴を含む土坑7基、溝状遺構1条を検出している。全体的に遺構の重複が激しく、遺物が混在しているものも少なからず存在するため、遺構の数はこれより前後する可能性もある。縄文時代の遺構の特徴として、他の調査区と同様に、埋土が他の時代の遺構と比べ赤みがかった点挙げられる。具体的には弥生時代以降の遺構埋土の色相が10YRとなるものがほとんどであるのに対し、縄文時代の遺構埋土の色相はマンセル表色系の7.5YRとなるものがほとんどである。従って、遺物の出土がない場合であっても、この色相の違いを基に年代を判定している場合がある。

SH770 (第94図)

2区のほぼ中央、G-5グリッドで検出した堅穴建物である。南西隅部あたりを縄文時代の土坑SK812と、南辺の中央あたりを古墳時代の土坑SK933と重複している。しかし、これら重複する遺構はSH770の掘り下げ時にそのプランを確認しており、前後関係を明確に把握できたわけではない。特にSK933は出土遺物から本来はSH770を

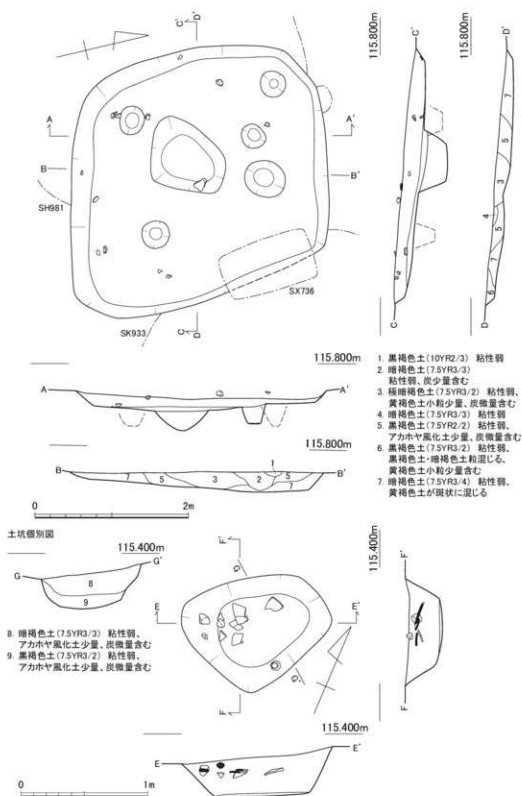


第94図 SH770 実測図 (1/50)

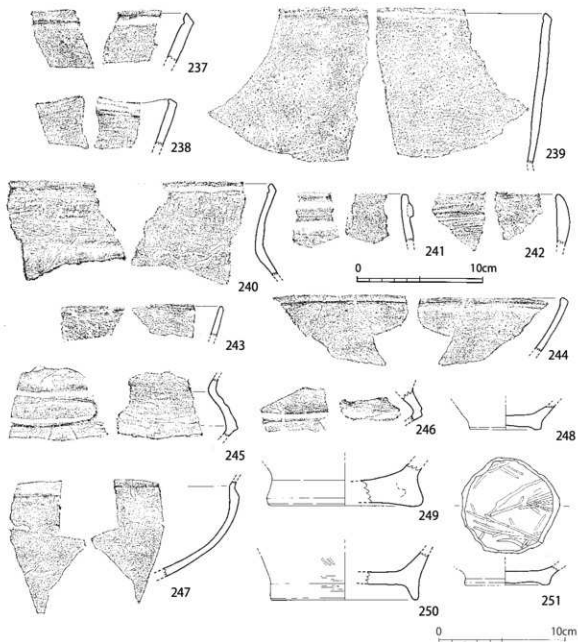


第 95 图 SH770 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2 · 1/1)

切る土坑であるはずだが、平面でその前後関係を押さえられず、一部遺物が混在する結果になっている。SH770の平面形状は隅丸形状を呈し、長辺3.82m、短辺3.80m、深さは比高で0.39mを測るが、地形の傾斜によるもので実際には10cm前後しかない。埋土は2層に分層され、中央部に堆積する1層は黒褐色土、周縁部に堆積する2層は暗褐色土である。床面では、中央やや西寄りで不定形の土坑1基と、13基のピット状遺構を検出してい



第96図 SH785 実測図 (1/50・1/30)

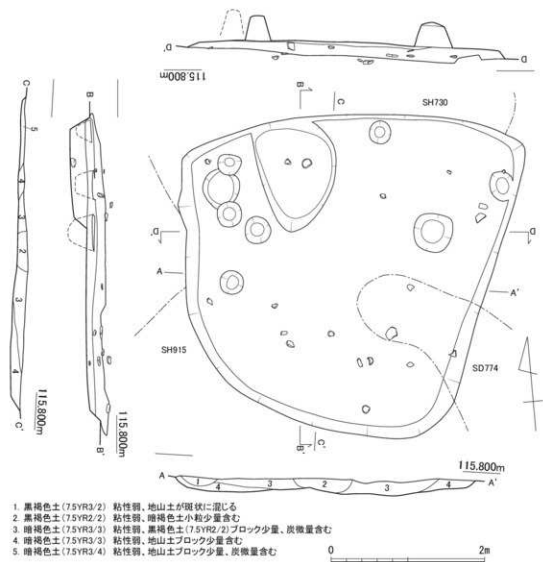


第97図 SH785出土遺物実測図(1/3)

る。ピットは壁際に沿って穿たれたものがあり、これが支柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器の他、弥生土器、土師器、須恵器、磨石・叩石、打製石斧、磨製石鎌が出土している。先述のとおり重複遺構の前後関係把握のミスがあり、弥生土器や土師器、須恵器、磨製石鎌といったものは混入したものである可能性が高い。遺構の時期は晩期後葉（上菅生B式期）に位置付ける。

SH770出土遺物（第95図）

223～230は縄文土器である。223は波状口縁を呈する深鉢で、口縁は外反し、内面口縁下に1条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。224・225は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。224の凸帯は幅広で丸みを持つ。226は無文の深鉢である。227は波状口縁を呈する後期末葉

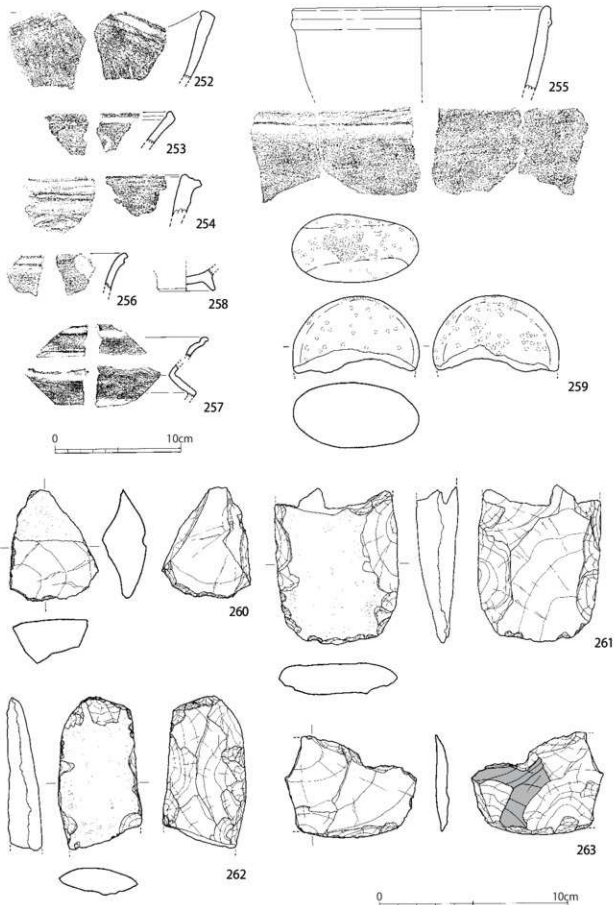


第98図 SH871 実測図 (1/50)

の浅鉢で、形態は223と共通する。228は口縁部が外反する浅鉢で、口縁部の内外面にそれぞれ沈線を施す。229は浅鉢の胴部で、胴部中位で強く屈曲する。晩期後葉に属する。230の浅鉢は口縁が強く外反する。231は須恵器の甕である。重複する古墳時代の土坑SK933からは須恵器が出土しており、231も本来はSK933に帰属するものである可能性が高い。232～236は石器である。232は安山岩の円礫を素材とする叩石・磨石で、上下両面を磨面とし、側面には顕著な敲打痕が残る。233～235は打製石斧で、石材はいずれも安山岩である。236は黒色粘板岩を素材とする磨製石鏃で、先端部及び基部を欠失する。混入したものである可能性が高い。

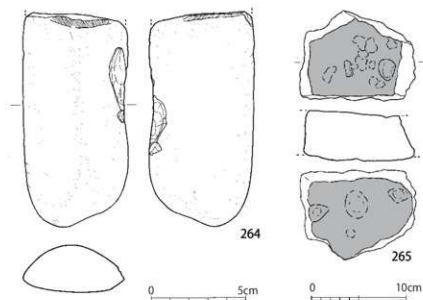
SH785 (第96図)

2区のはほぼ中央、先述のSH770のすぐ南西そばで検出した堅穴建物である。堅穴のちょうど中央あたりがグリッド交点で、G-4・G-5・H-4・H-5グリッドに位置する。南西側は縄文時代の堅穴建物SH981と、東側は古墳時代の土坑SK933と重複しており、SH981を切っている。SK933は本来SH785を切る土坑であるが、SH770と同様に検出がSH785の掘り下げ後であったために平面的には前後関係を押しえられていない。SH785の平面形状は隅丸方形形状であるが、やや形が歪で平行四辺形に近い形状となる。長辺3.41m、短辺3.28m、深さ0.48mを測る。埋土は7層認められ、1・2層は埋没後の掘り込みであるが、3～7層はレンズ状の堆積を示す。床面では中央部で台



第99图 SH871 出土物実測図① (1/3・1/2)

形状を呈する土坑1基と、5基のピットを検出した。土坑は丸みのある台形状の平面形状で、長径1.10m、短径0.89m、深さ0.39mを測る。埋土は上下2層に分かれ、いずれも微量ながら炭を含む。土坑の上位から検出面からは土器がまとまって出土している。主柱穴の配置はやや不揃いであるが、土坑の傍にある3基のピットと、北西隅部のピット1基の計4基が主柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器の他に土師器の細片が出土しているが、先述のとおり重複遺構を把握できないまま掘り下げており、土師器は重複遺構等からの混入の可能性が高い。遺構の時期は、晩期後葉（上菅生B式）に位置付ける。



第100図 SH871 出土遺物実測図② (1/2・1/4)

SH785出土遺物（第97図）

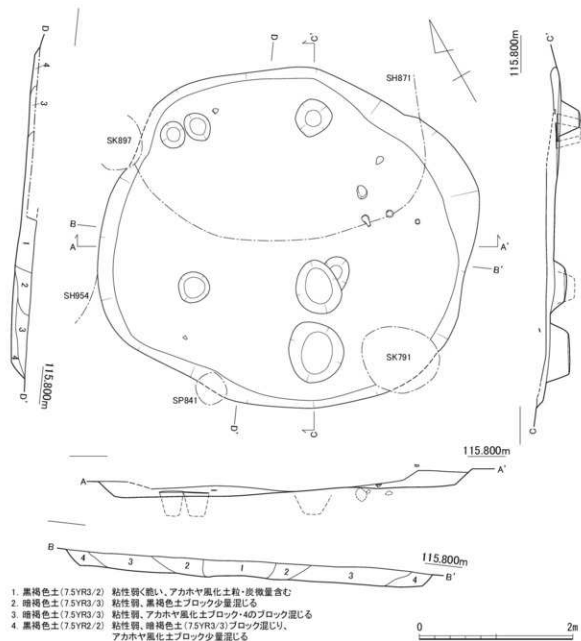
237～251は縄文土器である。237～240は無文を基調とする深鉢で、外反する口縁部の内側に1条の沈線を施す。238は口縁部が波状を呈する。これらは後期末葉に比定される。241は内傾する口縁部の外側に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、凸帯は丸みのある粘土紐状である。晩期後葉の上菅生B式に比定される。242・243は無文の深鉢である。244～247は浅鉢で、244は237～240と同様の特徴を持つことから後期末葉に属する。245・246は胴部中位で逆「く」字状に屈曲するもので、245は屈曲部上位に楕円形状の沈線文を施す。247はボウル形を呈する底部を有し、頸部で屈曲し外反する口縁へと続く。245～247は晩期後葉に比定される。248～251は底部で、いずれも周縁部が接地し、中央は浮く上げ底状となる。

SH871（第98図）

2区の北部、G-5グリッドで検出した竪穴建物である。北半部は古墳時代後期の竪穴建物SH730に大きく切られ、南半部は縄文時代の竪穴建物SH915を切っている。また、南東隅部あたりは縄文時代の溝状遺構SD774に切られている。平面形状は隅丸方形を基調とするが、台形状に近い形状となる。長辺4.56m、短辺4.31m、深さは最大で0.38mを測る。埋土は5層確認され、うち1層は埋没後の掘り込みで、2～5層は中央に向かってレンズ状の堆積を示す。遺構は北壁際のやや西寄り土坑1基を、その他8基のピットを検出した。土坑は長径1.48m、短径1.05mの鶏卵形を呈し、深さ0.24mを測る。遺物は縄文土器。打製石斧、横刃型石器等の縄文時代の遺物の他に土師器の細片が出土しているが、土師器は重複するSH730からの混入の可能性が高い。遺構の時期は、晩期後葉（上菅生B式）に比定される。

SH871出土遺物（第99・100図）

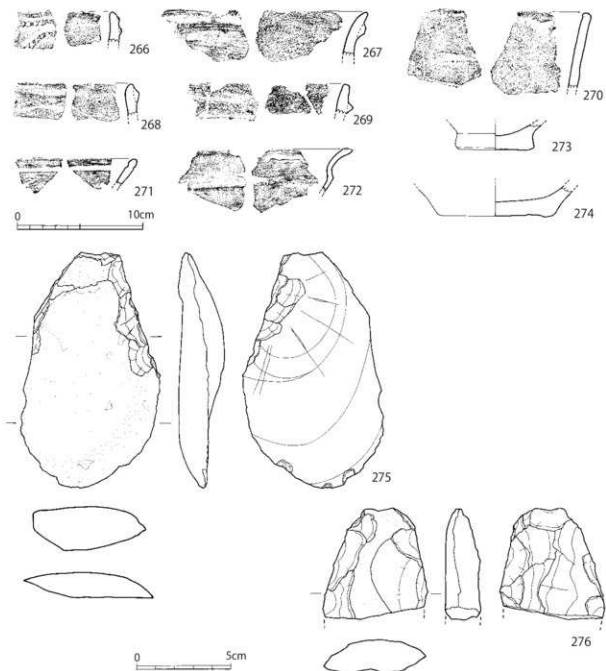
252～258は縄文土器である。252・253は無文を基調とする深鉢で、外反する口縁部の内側に1条の沈線を施



第101図 SH915実測図 (1/50)

す。252は波状口縁、253は平縁である。これらは後期末葉に比定される。254は厚手の器壁をもつ深鉢で、口縁部を外側に拡張するように引き延ばして凸帯状としている。無刻目凸帯文土器の上管生B式に比定されるが、やや異質な感じを受ける土器で、古相を示すものか。255は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、復元口径19.6cmを測る。256は浅鉢で、外反する口縁部に小さな無刻目凸帯を巡らせる。257は口縁部と胴～頭部が接合しないが同一個体で、胴部中位で屈曲・内傾し、頭部から口縁部が強く外反する浅鉢である。口縁端部は上方に折れ、外面に1条の沈線と、内面には沈線状の段が付く。258は浅鉢の底部であろう。

259～265は石器である。259は安山岩の円礫を素材とする叩石で、上下両面及び側縁部に敲打痕が残る。260は安山岩を素材とし、下辺に連続する微細な剝離痕を有するスクレイパーである。261・262は打製石斧で、いずれも背面に自然面を残し、周縁部に調整剝離を施す。石材はいずれも安山岩である。263は下辺に刃部調整の剝

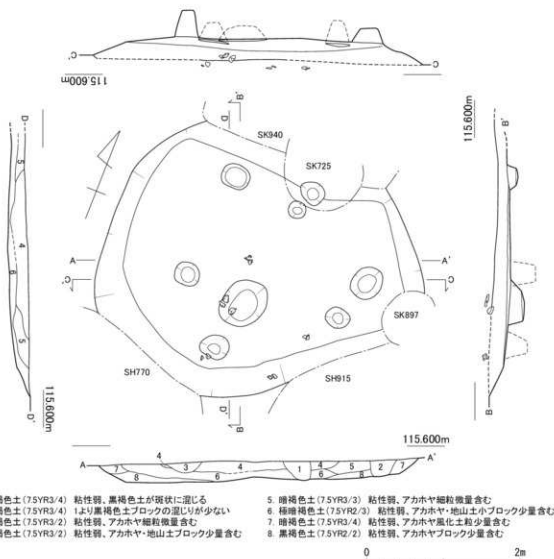


第102図 SH915出土遺物実測図 (1/3・1/2)

離を施すもので、横刃型石器であろう。石材は頁岩である。264は蒲鉾形を呈する素材礫にわずかに打欠きを施すもので、打製石斧の未製品であろう。石材は砂岩か。265は石皿の破片で、上下両面に被熱の痕跡が認められる。石材は輝賢安山岩である。

SH915 (第101図)

2区の中央北東寄り、G-5グリッドで検出した竪穴建物である。北半部は縄文時代の竪穴建物SH871に切られ、西側では縄文時代の竪穴建物SH954を切り、南側部では古墳時代の土坑SK791に切られている。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺4.86m、短辺4.52m、深さ0.43mを測る。埋土は4層に分層され、中央に向かってレンズ状

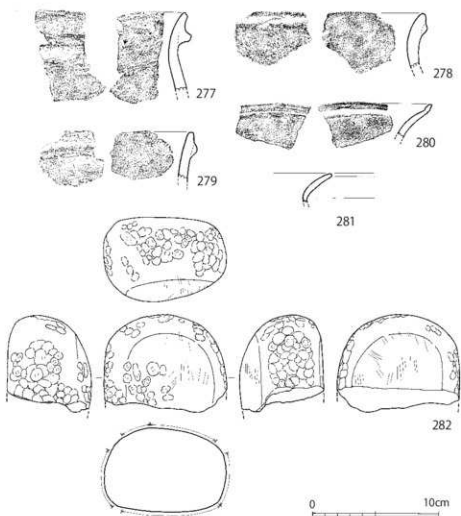


第103図 SH954実測図 (1/50)

の堆積状況を示す。床面では、南部で2基の小土坑が横並びで検出され、また5基のピットを確認できた。内4基のピットが方形に並ぶので、これが支柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器、が主体で、石器では打製石斧が出土している。他に土師器の小片が少量みられるが、これは混入したものである。出土遺物から、遺構の時期は晩期後葉（上菅生B式）期に比定される。

SH915出土遺物（第102図）

266～274は縄文土器である。266は内湾する口縁部をもち、外面に2条の刻みを施す隆帯が見られる。中期の船元式であろうか。267～269は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。267は凸帯の断面形状が台形状を呈する。270は無文の深鉢である。271・272は浅鉢で、271は外反する口縁の内外面にそれぞれ1条の沈線を施す。272は頸部で屈曲し口縁部が大きく外反するもので、口縁端部は肥厚する。273・274は深鉢の底部である。275は安山岩の縦長剥片を素材とし、上部に調整剥離を施す。打製石斧の未製品であろう。276は打製石斧で、下半部が欠失する。石材は砂岩である。



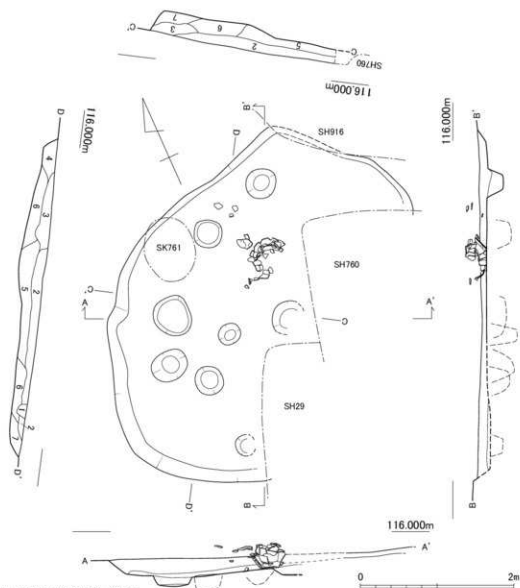
第104図 SH954出土遺物実測図(1/3)

SH954 (第103図)

2区の中央北寄り、G-5グリッドで検出した堅穴建物である。全体に重複が激しく、南は縄文時代の堅穴建物SH770に、南東は縄文時代の堅穴建物SH915及び時期不明のピットSP897に、北は古代の堅穴状遺構SK940と土坑SK725にそれぞれ切られている。そのため平面形状は明確ではないがやや歪な方形を基調とするとみられ、長辺4.36m、短辺3.65m以上、深さ0.38mを測る。埋土は8層に分層されるが、うち1~3層は堅穴埋没後の掘り込みで直接の関係はない。4~5層の上層と、下層の6~8層に大別される。床面では小土坑1基とピット7基を検出した。ピットは配置が不規則で、支柱穴を特定できない。遺物は縄文土器、叩石、土師器の小片が出土している。遺構の切り合いが激しいことから、土師器は重複遺構からの混入であろう。遺構の年代は晩期後葉(上菅生B式)期で、その中でも古手である可能性がある。

SH954出土遺物(第104図)

277~280は縄文土器である。277~279は深鉢で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける特徴から、晩期後葉の上菅生B式に比定される。277は凸帯が高く、断面形状は台形状を呈する。上菅生B式の中でも古相を示す可能性が高い。280は浅鉢で、外反する口縁部の端部を上方に曲げ、その屈曲部の内外面に沈線を施す。後期



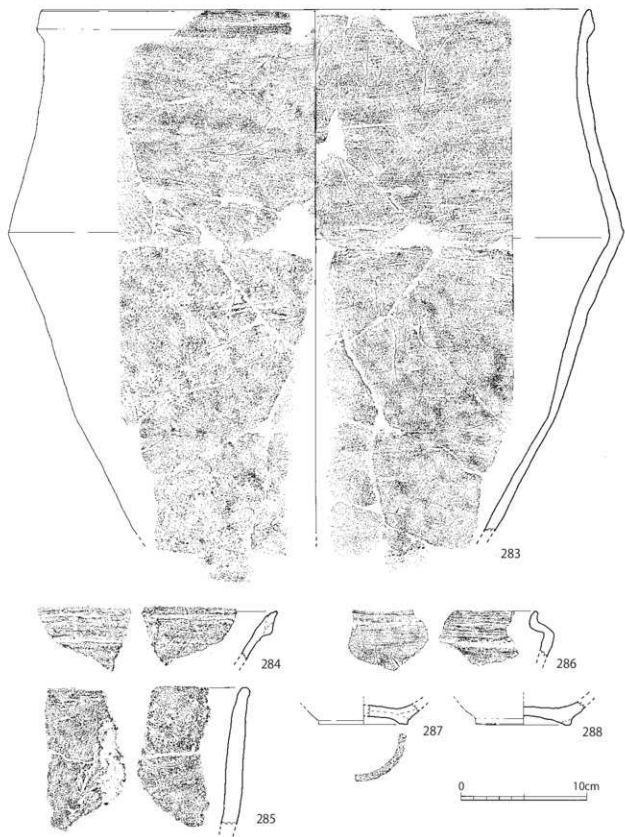
1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、黒褐色土ブロック少量含む
3. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、黒褐色土ブロック少量・アカホヤ風化土微量含む
4. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱、アカホヤブロック少量含む
5. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性弱、暗褐色土ブロック・アカホヤ風化土少量含む
7. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土少量・炭微量含む

第105図 SH955 実測図 (1/50)

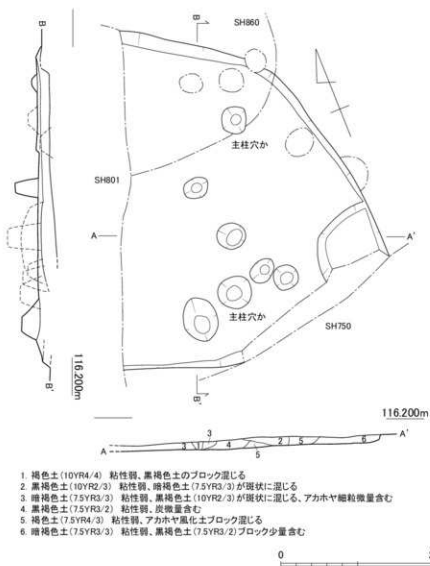
末葉に位置付けられる。281は古墳時代前期の土師器の甕で、混入したものであろう。282は砂岩の円礫を素材とした叩石・磨石で、上下両面の広い面を磨面として、側縁部を叩石としている。磨面には無数の擦痕が、側縁には敲打痕が顕著に認められる。

SH955 (第105図)

2区の南部、H・4・H・5・1・5グリッドで検出した竪穴建物である。東側及び南側の東半部を古墳時代後期の竪穴建物SH29・SH760に、北は古墳時代後期の竪穴建物SH916に、北西の一端を古墳時代の土坑SK761にそれぞれ切られている。平面形状は北西隅部が折れているが方形を基調とするとみられ、長辺4.73m以上、短辺2.75m以上、深さ0.46mを測る。埋土は7層に分層されるが、1層は竪穴埋没後の掘り込みで、2・3層の上層と、4~7層



第 106 圖 SH955 出土遺物実測圖 (1/3)

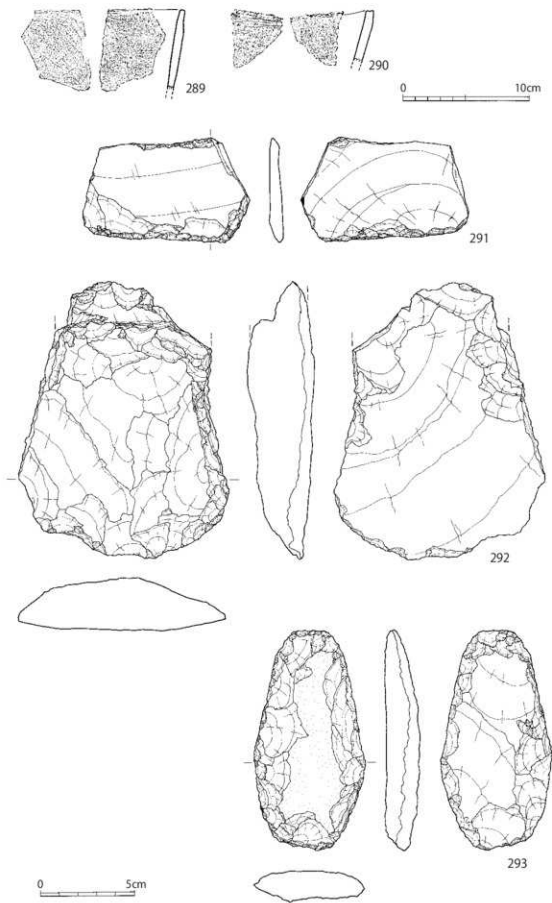


第107図 SH956 実測図 (1/50)

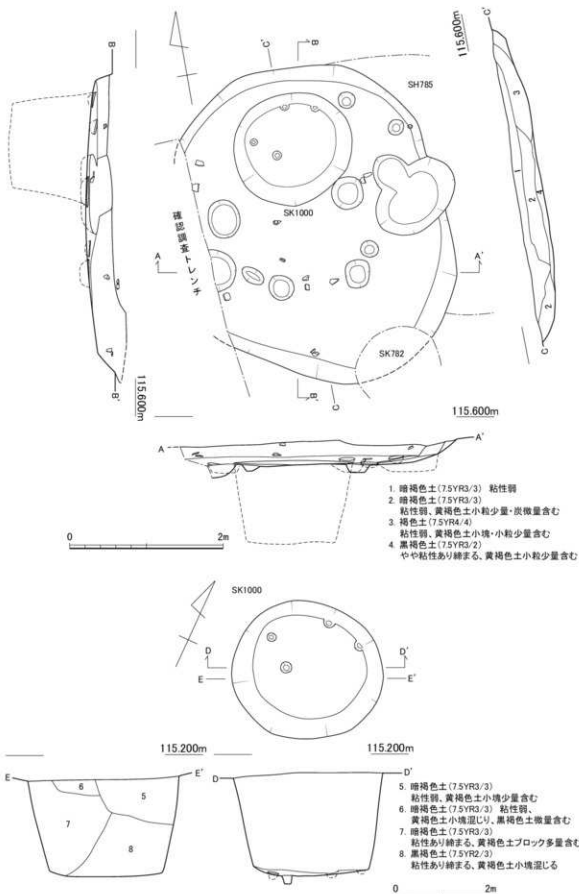
の下層に大別される。床面の中央やや北寄りでは、第106図の283の深鉢1個体がまとまって出土した。底部は欠いているが、底部を意図的に打ち欠いた深鉢を正位に埋設した埋亮の可能性が高い。床面では8基のピットを検出しているが、主柱穴を特定できない。遺物は縄文土器の他に弥生土器、土師器が少量出土しているが、これらは混入の可能性が高い。出土遺物から、遺構の時期は晩期後葉（上菅生B式）に比定される。

SH955出土遺物（第106図）

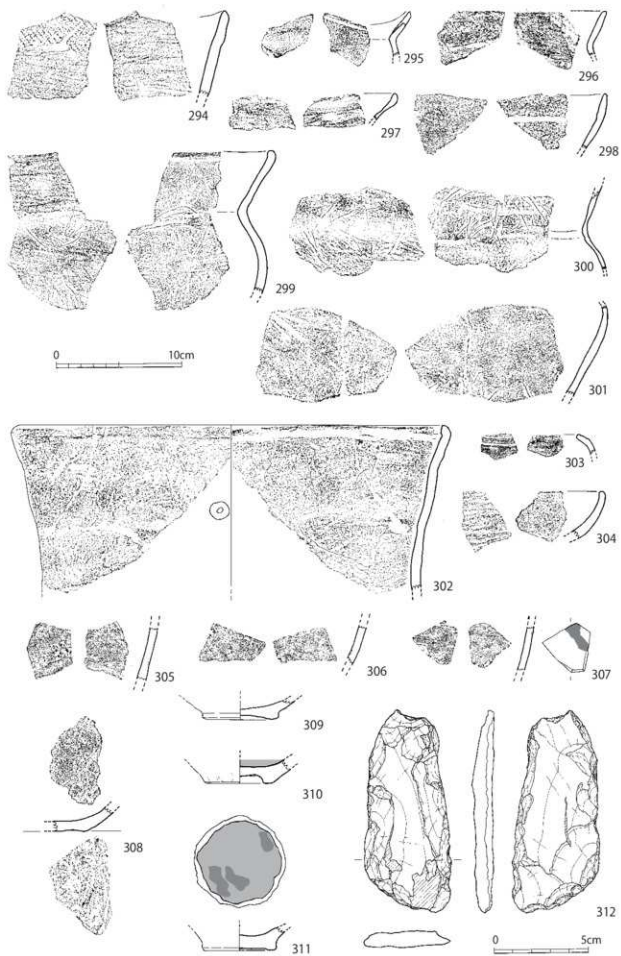
283～288は縄文土器である。283は埋亮に用いられた深鉢で、底部を欠く。胴部中位で屈曲し、内傾する頸部から口縁部は軽く外反する。口縁部外面には断面三角形の無刻目凸帯を巡らせる。284は外反する口縁に無刻目凸帯を貼り付ける。これらは上菅生B式に比定される。285は内外面ナデ調整の無文の深鉢で、器壁が厚く早期前半の無文土器の可能性が高い。286は浅鉢で、屈曲する肩部から口縁部が外に短く折れる。晩期後葉に位置付けられる。287～288は深鉢の底部で、底面の周縁が接地し中央は凹む上げ底となる。



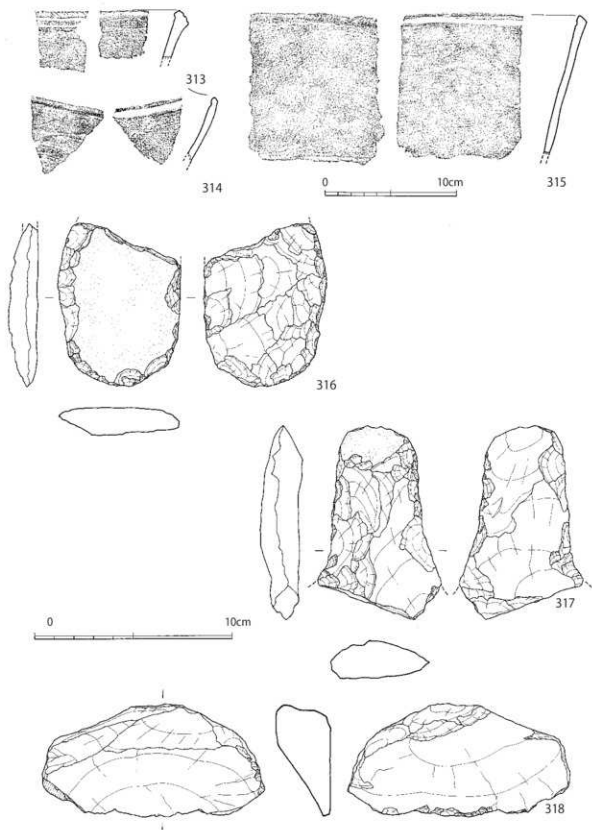
第108图 SH956出土遺物実測図(1/3・1/2)



第109図 SH981 実測図 (1/50・1/30)



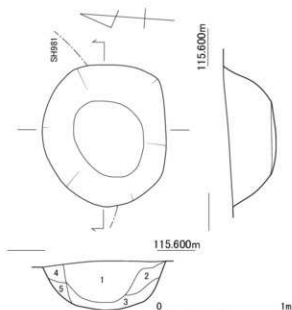
第110图 SH981出土遗物实测图 (1/3·1/2)



第 111 图 SH981 (SK1000) 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SH956 (第107図)

2区の中央南東側、H-5・H-6グリッドで検出した
 竪穴建物である。北は弥生時代の竪穴建物SH860
 に、西側と南東部をそれぞれ古墳時代後期の竪穴
 建物SH801とSH750に切られている。平面形状
 は東側がはみ出した歪な形状をとり、楕円形の可
 能性がある。長辺4.47m、短辺3.56m以上、深さ
 0.26mを測る。埋土は6層に分層されるが、1・2
 層は竪穴埋没後の掘り込みで、3～6層がレンズ状
 に堆積する。床面では南東部で1基の土坑と、10
 基のピットを検出している。主柱穴は決しがたい
 が、全体としては4本柱穴の可能性が高く、位置
 的に2基を推定している。遺物は縄文土器、土師
 器、打製石斧、スクレイパーが出土している。遺
 構の時期は、後期後葉～末葉に比定する。

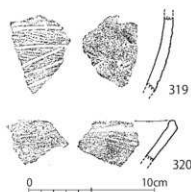


1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性弱、黄褐色土小ブロック少量・炭微量含む
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土が斑状に混じる
3. 黒褐色土(7.5YR2/2) やや粘性あり、黄褐色土小粒少量含む
4. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、炭微量含む
5. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小粒微量・炭微量含む

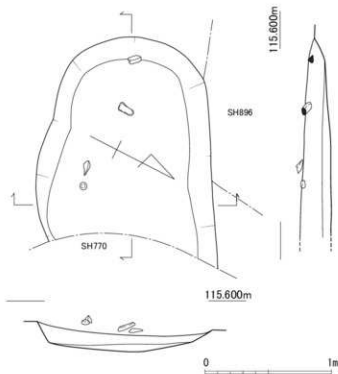
第112図 SK782実測図(1/30)

SH956出土遺物 (第108図)

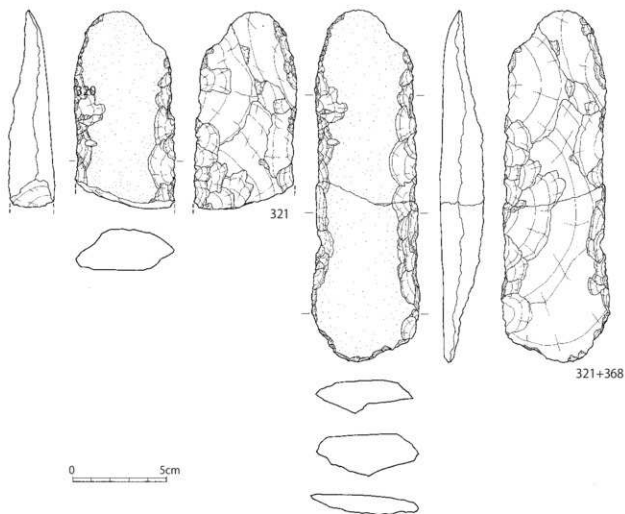
289・290は縄文土器である。いずれも無文の深
 鉢で、290は波状口縁となる。後期後葉～末葉頃に
 比定されようか。291～293は石器である。291は
 サスカイトの横長剥片を素材としたスクレイパー
 で、打点側を刃部として調整剥離を施す。292・
 293は打製石斧である。292は上部を欠失するが大
 型品とみられる。293は背面に自然面を残す剥片
 を素材とし、周囲に細かい調整剥離を施す。石材
 は292が凝灰岩、293はデイサイトである



第113図 SK782 出土遺物実測図(1/3)



第114図 SK812実測図(1/30)

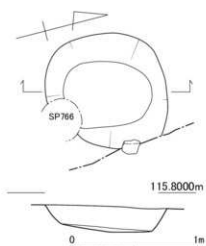


第115図 SK812出土遺物実測図 (1/2)

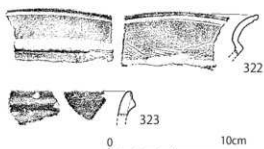
SH981・SK1000 (第109図)

2区の中央西寄り、G-4・H-4 グリッドで検出した竪穴建物及び土坑である。

SH981は東半部が縄文時代の竪穴建物SH785に大きく切られ、南の一部は縄文時代の土坑SK782に切られ、西端部は確認調査時のトレンチによって失われている。平面形状は略楕円形



第116図 SK898実測図 (1/30)



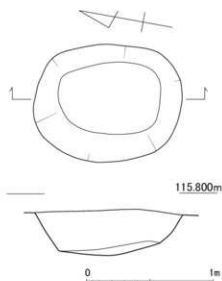
第117図 SK898出土遺物実測図 (1/3)

を呈し、長径4.27m以上、短径3.20m以上、深さ0.54mを測る。埋土は4層に分層され、1層は暗褐色土、2層は黄褐色土小粒を少量と微量の炭を含む暗褐色土、3層は黄褐色土の小ブロックと小粒が混じった褐色土、4層がやや粘性のある黒褐色土である。内部の掘り込みは丸みがあり、壁の立ち上がりも緩い。床面では、北壁際に略円形の土坑SK1000と、小土坑やピットを検出している。遺物は多量の縄文土器と打製石斧が出土している。遺構の時期は、後期中～後葉に比定される。

SK1000はSH981の床面で検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径1.60m、短径1.46m、深さ1.10mを測る。埋土は4層に分層され、いずれも地山ローム層に由来する黄褐色土の小ブロックや小粒を含む土で一気に埋められたものとみられる。床面は平坦で、4基の小ピットを検出している。遺構の機能としては貯蔵穴と判断される。遺物は縄文土器や石器が出土しているが、出土している土器は後期後葉のもので、SH981と同じ型式で両者に時期差を認め難い。SK1000の時期はSH981より後出することはないが、これがSK1000の埋没後にSH981が構築されたのか、あるいはSH981とSK1000が同時共存したのかは判断が難しい。ただし、堅穴建物の床面に貯蔵穴が穿たれていると、居住スペースが大きく制約を受けることから、両者の同時共存は可能性としては低いと考えるのが自然であろう。上田原東跡では堅穴建物と重複した貯蔵穴の例がいくつかあり、3区のSH280は堅穴建物SH280Bを切って貯蔵穴SK280Aが穿たれ、また同3区の貯蔵穴SK516はその埋没後に弥生時代の堅穴建物SH260が構築されているように、堅穴建物と貯蔵穴が同時共存している例はない。こうした点を勘案すると、本例もSK1000の埋没後にSH981が構築された可能性を考えたい。

SH981出土遺物 (第110図)

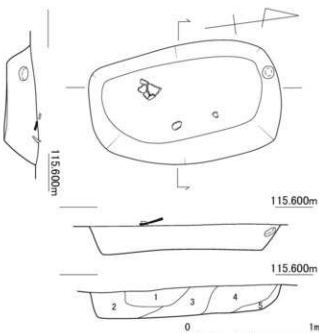
294～311は縄文土器である。294は口縁部が小さい波状を呈するもので、口縁部外面に端節縄文RLを施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものの可能性が高い。295～301は外に開く口縁から頸部で屈曲し、胴部が球状に膨らむ器形と



第118図 SK950実測図 (1/30)

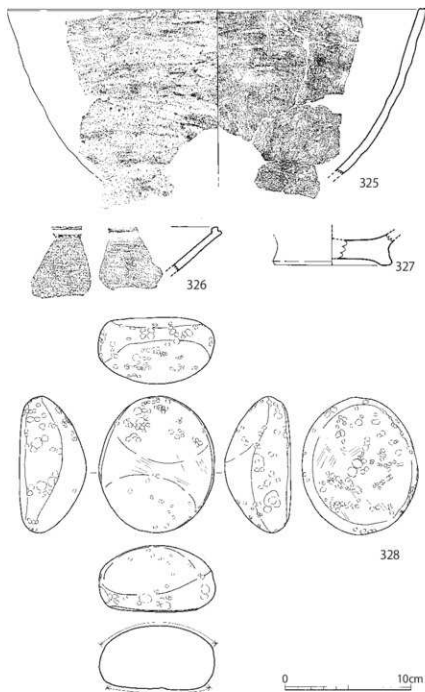


第119図 SK950出土遺物実測図 (1/3)



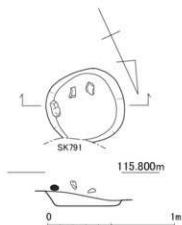
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
- 2 暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
- 4 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小粒微量含む
- 5 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり硬く締まる、アカホヤ小粒微量含む

第120図 SK970実測図 (1/30)



第121図 SK970出土遺物実測図(1/3)

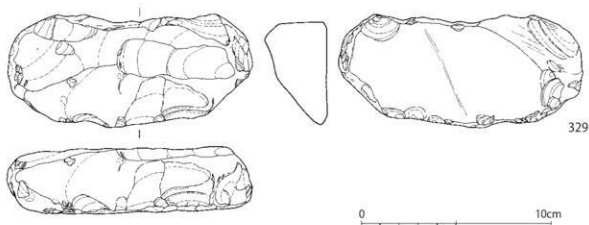
313~315は縄文土器である。313は口縁部が断面三角形状に肥厚し、外面に2条の平行沈線と、端部縄文RLを施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。314は波状口縁の深鉢で、内面口縁直下に1条の沈線を施す。315は平口縁の深鉢で、内面口縁直下に1条の沈線を施す。これらは後期中葉~後葉に位置付けられる。316~318は石器である。316は打製石斧で、背面に自然面を残す剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。石材はアイサイトである。317は打製石斧に似るが、下部が聞く形状をとることから十字形石器の可能性もある。石材は砂岩である。318は二次加工剥片で、アイサイトの横長剥片の下部に連続した微細な剥離が残る。



第122図 SK1053実測図(1/30)

なる深鉢で、295・298・299は口縁部内面に1条の沈線を施す。後期中葉の太郎迫式に該当しよう。302は口縁部内面に1条の沈線を施す深鉢で、頸部の屈曲はみられない。後期後葉に比定されよう。303は内湾する口縁部で、外面に2条の細沈線を施す。注口土器であろう。304はボウル形の浅鉢である。305・306は深鉢、307は浅鉢の胴部破片で、それぞれ種子状の圧痕が認められる。いずれも分析を行ったが、圧痕については不明であった。308~311は底部で、底面周縁が接地し中央は凹む上げ底となる。312は打製石斧で、周縁部に調整剥離を密に施す。石材は千枚岩である。

SK1000出土遺物(第111図)



第123図 SK1053 出土遺物実測図 (1/2)

SK782 (第112図)

2区の中央南西寄り、H-4 グリッドで検出した土坑である。土坑の中ほどから北側は縄文時代の堅穴建物SH981を切っている。平面形状は略円形を呈し、長径1.12 m、短径0.98 m、深さ0.47 mを測る。掘り込みは丸みを持ち、床面中央は縦く凹む。埋土は5層を確認しており、4・5層を1~3層が掘り込んで切っている状況が窺える。遺物は縄文土器の他に、少量ながら土師器の細片が出土している。出土遺物及びSH981との切り合い関係から、後期中葉~後葉の遺構と判断する。

SK782出土遺物 (第113図)

319・320は縄文土器である。319は胴部下半の文様帯部で、区画沈線内に縄文を施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものであろう。320は外に開く口縁部で内面に1条の沈線を施す。口縁は波状口縁である。後期中葉の太郎迫式に比定されよう。

SK812

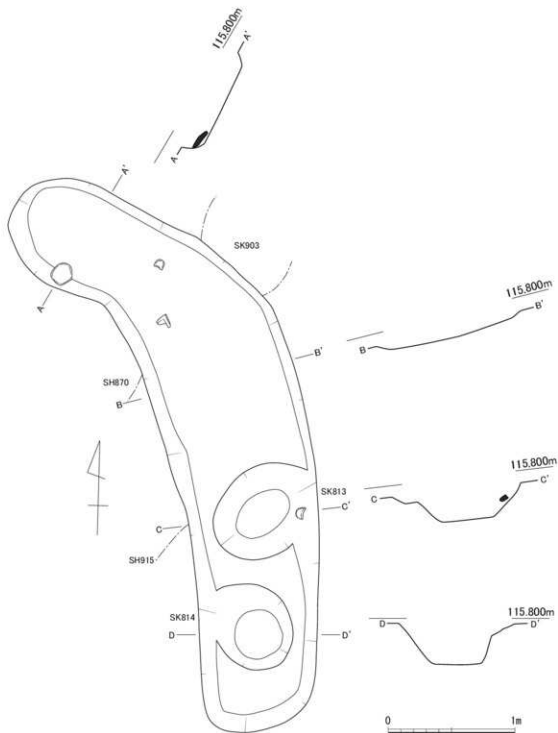
2区の中央西寄り、G-4・G-5グリッドで検出した土坑である。東側は縄文時代の堅穴建物SH770に切られているため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は楕円形を呈すると見られ、長径1.60 m以上、短径1.38 m、深さ0.26 mを測る。遺物は縄文土器、打製石斧、土師器の小片が出土している。特筆されるのは打製石斧で、SK812から出土した破片と、古墳時代後期の堅穴建物SH29から出土した破片が接合している(第115図)。SH29はSK812とは12~13 mほど離れた位置関係にある。遺構の時期は縄文時代であるが、年代比定出来る遺物に乏しく詳細な時期までは明らかにできない。

SK812出土遺物 (第115図)

321は打製石斧である。背面に自然面を残す安山岩の剥片を素材とし、側面に調整剥離を施す。上述のとおりSH29から出土した破片と接合関係が認められ、接合面を横に示した。接合した状態で完形となり、長さ18.5 cm、幅5.7 cm、厚さ2.3 cm、重量2640 gを測る。

SK898 (第116図)

2区の中央東側、G-6グリッドの調査区東壁際で検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、一端をビットSP766に切られている。遺構の規模は長径0.99 m、短径0.91 m、深さ0.24 mを測る。遺物は縄文土器が出土している。出土遺物から、遺構の時期は晩期後葉(上菅生B式)に比定される。



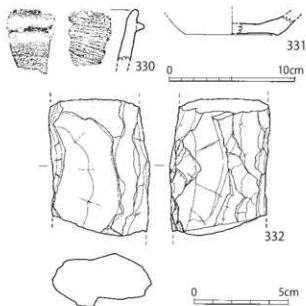
第124図 SD774実測図 (1/30)

SK898出土遺物 (第117図)

322・323は縄文土器である。322は浅鉢で、胴部で屈曲した後、口縁部が外反し、口縁の内外面に1条の沈線を施す。後期後葉に比定される。323は深鉢で、口縁に接して外面に1条の無刻目凸帯を貼り付ける。晩期後葉の上普生B式に比定される。なお、口縁部に種子状の圧痕が認められたためその分析を行ったが、圧痕については不明であった。

SK950 (第118図)

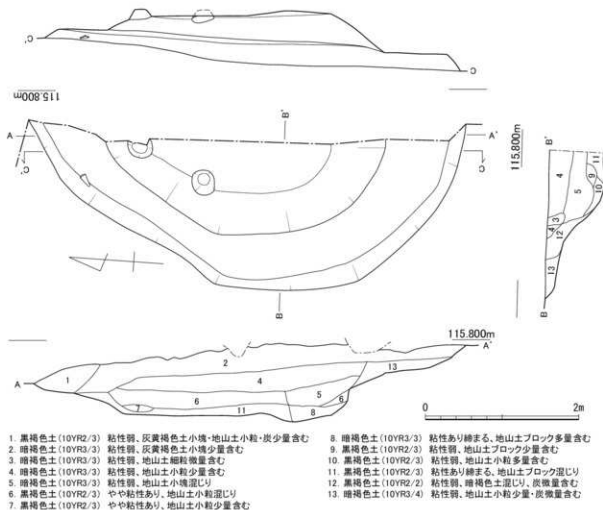
2区の南部中央寄り、H-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、長径1.20m、短径0.93m、深さ0.36mを測る。遺物は少量ながら縄文土器が出土していることから、縄文時代の土坑とみられ、その時期は晩期後葉（上菅生B式）に比定されよう。



第125図 SD774 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK950出土遺物 (第119図)

324は縄文土器である。外反する口縁部の外面に、断面三角形の無刻目凸帯を1条貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。

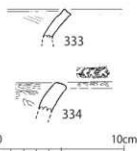


- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土小塊・地山土小粒・炭少量含む | 8. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性あり締まる、地山土ブロック多量含む |
| 2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、灰黄褐色土小塊少量含む | 9. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土ブロック少量含む |
| 3. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土細粒微量含む | 10. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土小粒多量含む |
| 4. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む | 11. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり締まる、地山土ブロック混じり |
| 5. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土小塊混じり | 12. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱、暗褐色土混じり、炭微量含む |
| 6. 黒褐色土(10YR2/3) やや粘性あり、地山土小粒混じり | 13. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、地山土小粒少量・炭微量含む |
| 7. 黒褐色土(10YR2/3) やや粘性あり、地山土小粒少量含む | |

第126図 SH815 実測図 (1/50)

SK970 (第120図)

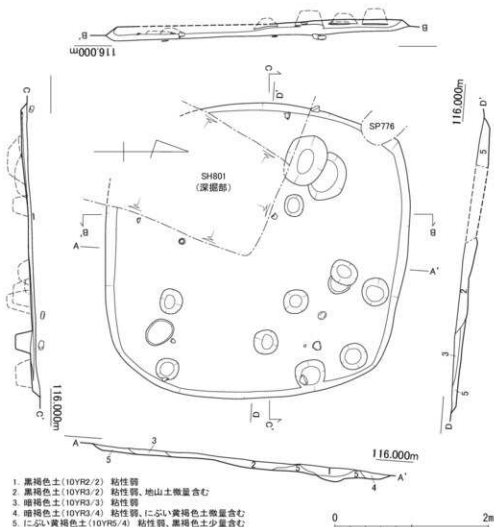
2区の南西隅部、14グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に長い楕円形状を呈し、長径1.52m、短径0.95m、深さ0.30mを測る。埋土は5層に分層され、いずれも縄文時代の遺構埋土の色相を示す。5～2層にかけて順に埋没した状況が見て取れ、埋没後に1層が掘り込んでいる。遺物は検出面から土坑中位にかけて、縄文土器や石器がややまとまって出土している。出土遺物から、遺構の時期は縄文時代後期末葉頃に位置付けられる。



第127図 SH815 出土遺物実測図 (1/3)

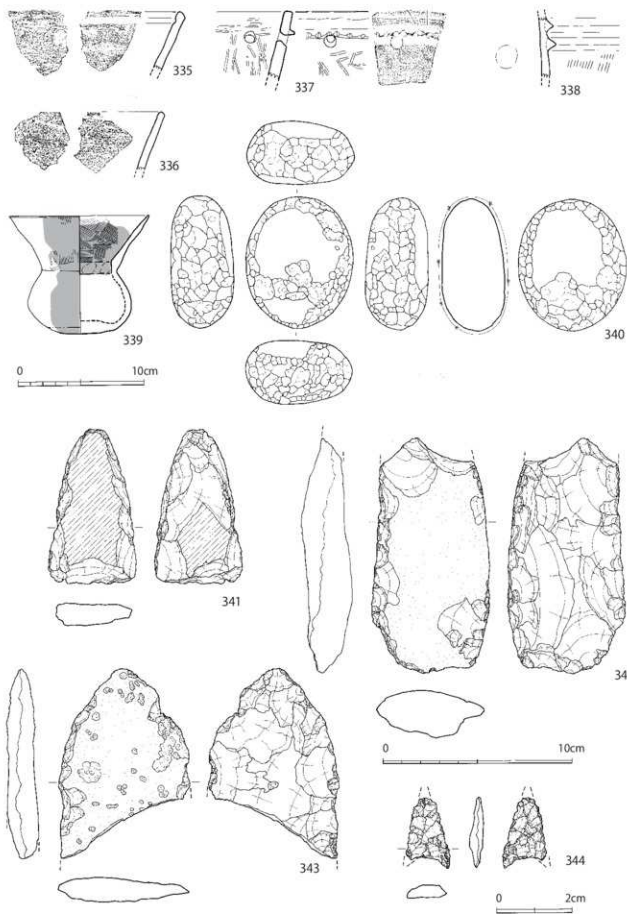
SK970出土遺物 (第121図)

325～327は縄文土器である。325はボウル形を呈する無文の鉢で、外面に粗い条痕を施す。326は浅鉢で、口縁は外に開き、口縁部の外面に1条の沈線を描き、内面には沈線状の段が付く。後期後葉～末葉に位置付けられよう。327は深鉢の底部で、底面の周縁が接地し、中央は凹む上げ底となる。328は砂岩の円礫を素材とした叩石・磨石である。下面は磨面として平坦になっており、上下両面及び側面に敲打痕が認められる。

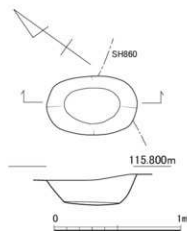


第128図 SH860 実測図 (1/50)

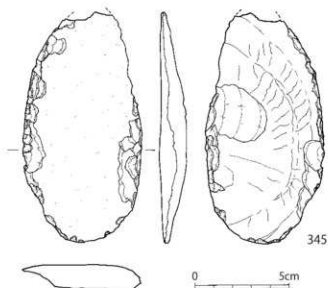
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、地山土微量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、にぶい黄褐色土微量含む
5. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性弱、黒褐色土少量含む



第 129 图 SH860 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2 · 1/1)



第130図 SK776実測図 (1/30)



第131図 SK776出土遺物実測図 (1/2)

SK1053 (第122図)

2区の中央部、G-5グリッドで検出した小土坑である。北側の一端を古墳時代の土坑SK791に切られるが、平面形状は略円形を呈し、長径0.62m、短径0.58m、深さ0.13mを測る。埋土はアカホヤや黒褐色土ブロックの混じる褐色土で、微量の炭を含む。遺物は少量ながら土器片と流紋岩の原石が出土している。埋土の色相から縄文時代の遺構と判断されるが、時期比定できる遺物に乏しく詳細な帰属時期は明らかにはできない。

SK1053出土遺物 (第123図)

329は流紋岩の原石である。長さ6.0cm、幅1.30cm、厚さ3.6cm、重量387.6gを測るサイズで、全体に摩滅している。上面には風化した剥離の痕跡が認められる。流紋岩は大野川流域で産出し、旧石器時代から縄文時代草創期頃にかけて石器石材として用いられているが、これが使用を意図して持ち込まれたものであるのか、あるいは旧石器時代の遺物が混入したものであるのかは判然としない。

SD774 (第124図)

2区の中央東寄り、G-5・G-6グリッドで検出した溝状遺構である。南北方向にやや湾曲しながら延びるもので、長辺4.69m、幅0.95～1.16m、深さ0.23mを測る。縄文時代の竪穴建物SH871とSH915、土坑SK903を切っており、底面ではSK813・SK814の縄文時代の土坑2基を検出している。遺物は縄文土器、打製石斧が出土している。後期中葉の土器も含まれるが、SH871やSH915の切り合い関係から、遺構の時期は晩期後葉（上管生B式）に比定される。

SD774出土遺物 (第125図) z

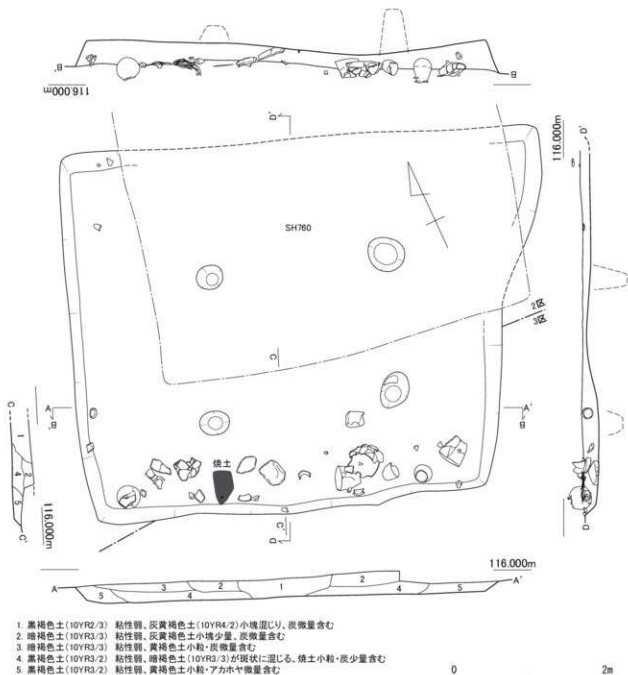
330・331は縄文土器である。330は深鉢で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける。凸帯はシャープで高さがある。晩期後葉の上管生B式に比定される。331は深鉢の底部で、底面の周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。332は安山石製の打製石斧で、上下両端を欠失する。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

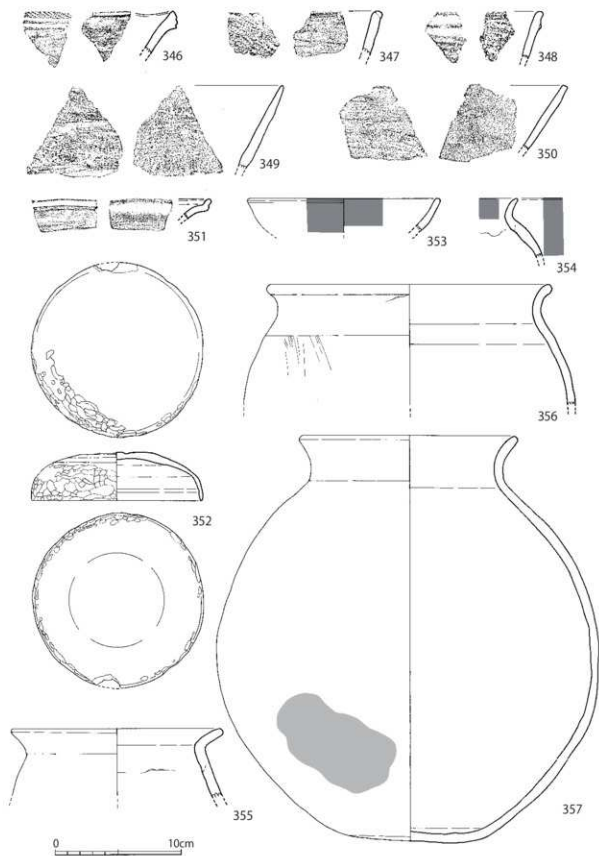
2区における弥生時代の遺構としては、竪穴建物2棟、土坑1基がある。土坑等は遺物の出土がなく帰属時期が不明なものが多々あり、その中に弥生時代の遺構が含まれる可能性はあるものの、その数は限定的であろう。3区・4区に比べ、当該期の遺構の少なさが際立っている。

SH815 (第126図)

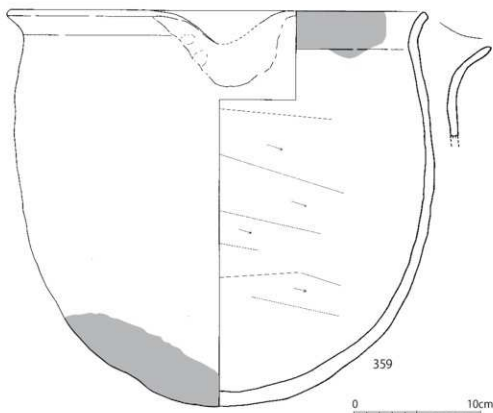
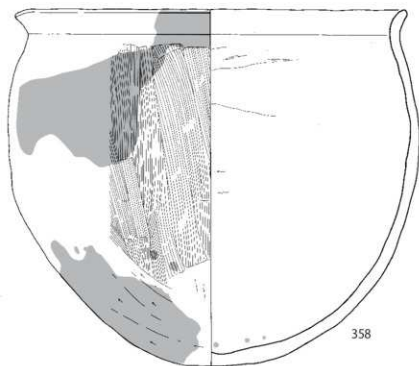
2区の北東隅部、F-6・G-6グリッドで検出した竪穴建物である。北西部の一端は古墳時代の竪穴建物SH724に切られている。東側の大半が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、検出した範囲で平面形状は円形を呈するとみられ、長径5.78m以上、短径1.95m以上、深さ0.84mを測る。内部は二段掘りとなって



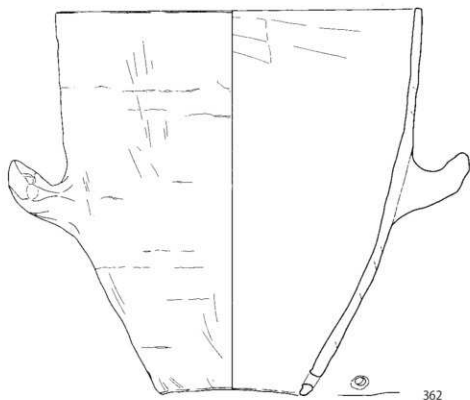
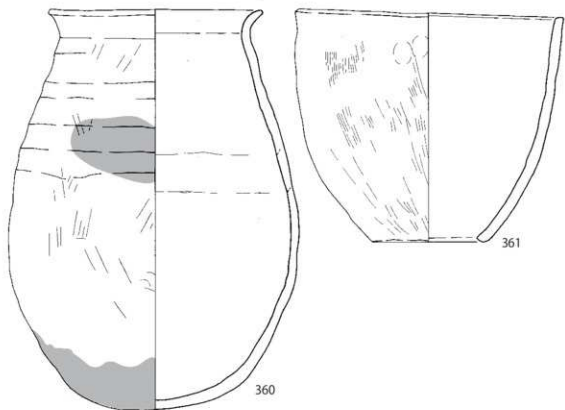
第132図 SH29実測図(1/50)



第 133 图 SH29 出土遺物実測図① (1/3)



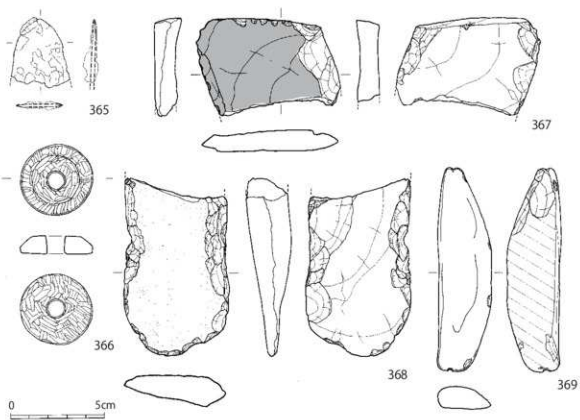
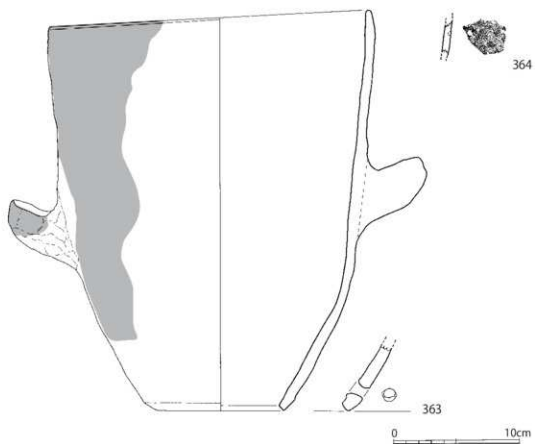
第134図 SH29出土遺物実測図② (1/3)



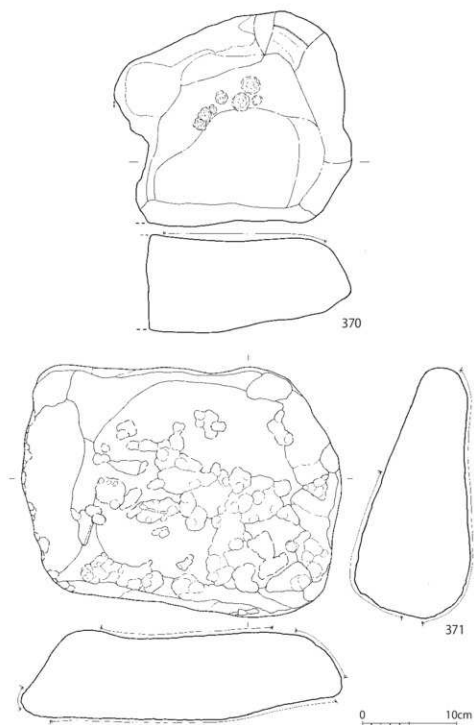
0 10cm



第 135 图 SH29 出土遺物実測図③ (1/3)

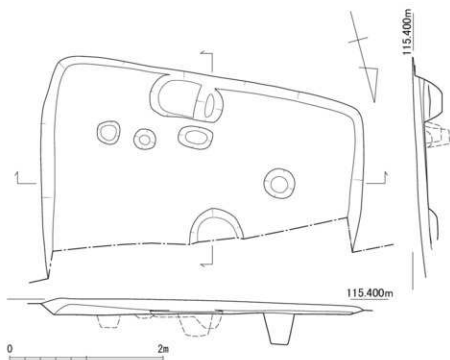


第 136 图 SH29 出土遺物実測図④ (1/3・1/2)

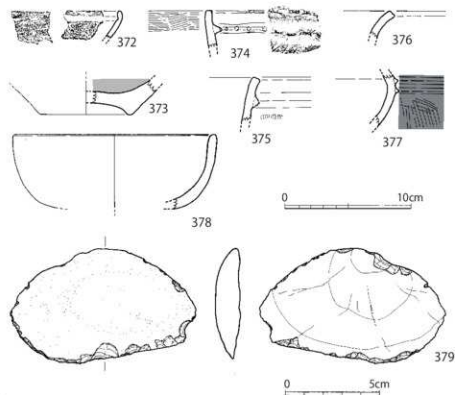


第137図 SH29出土遺物実測図⑤ (1/4)

おり、壁に沿ってテラス状の段が付き、中心部が円形に0.2~0.5mほど深く掘り込んでいる。遺構は二段掘りの深い部分でビット2基を検出しているが、支柱穴の配列は明確ではない。埋土は13層を確認しており、中心の二段掘り部分は複雑な堆積状況を示す。これを埋めた後、上層の1・2層が大きく全体を被覆している。遺構の検出が一部分にとどまるためか、遺物の出土量は極めて少ない。縄文土器、弥生土器が出土しており、また混入したものとして中世の白磁の細片が見られた。遺構の時期は、弥生時代後期初頭頃と推定する。



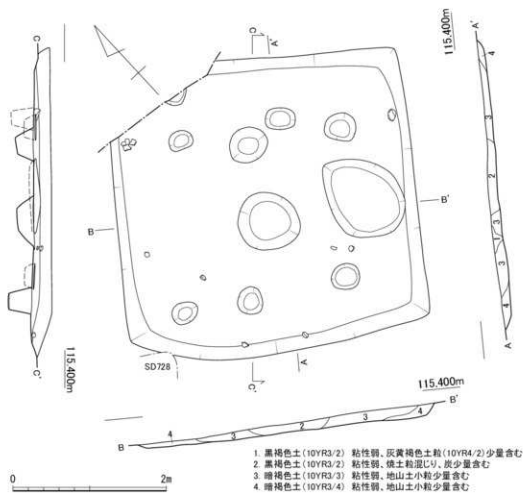
第138図 SH724 実測図 (1/50)



第139図 SH724 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SH815出土遺物 (第127図)

333・334は弥生土器である。333は甕の口縁部で端部を上方に摘み上げる。中期の北部九州形の甕である。334は甕の口縁部か。口縁部上端に矢羽根状の刻みを施す。

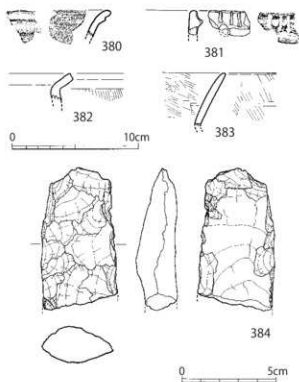


1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、灰黄褐色土粒(10YR4/2)少量含む
2. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、炭土粒混じり、炭少量含む
3. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む
4. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、地山土小粒少量含む

第140図 SH726 実測図 (1/50)

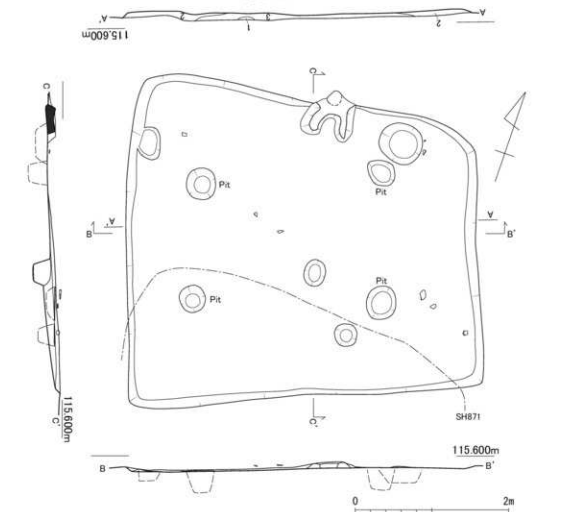
SH860 (第128図)

2区の中央東寄り、G-5・G-6・H-5・H-6グリッドで検出した竪穴建物である。全体に遺構の重複が激しく、南東部は縄文時代の竪穴建物SH956を切り、北西端部は弥生時代の土坑SK776に、南西部は古墳時代後期の竪穴建物SH801にそれぞれ切られている。ただ、当初はSH801との切り合いははっきりと確認できず、SH860を一段下げた段階で、SH801との前後関係を把握した状態であった。そのためいくらか遺物が混在した状態になっている。遺構は隅丸方形状の平面形を呈し、長辺4.02m、短辺3.92m、深さは比高で0.35mを測るが、標準的な深さは0.1~0.15m前後である。埋土は5層に分層され、中心に向かってレンズ状の堆積を示す。床面では多数のピットを検出しているが、主柱穴は明確ではなく特定できていない。また、炉

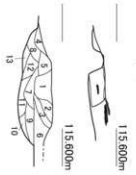


第141図 SH726 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

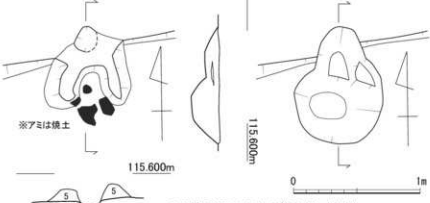
1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土顆粒少量含む
 2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/3)と地山土が斑状に混じる
 3. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/3)が斑状に混じる



カマド実測図

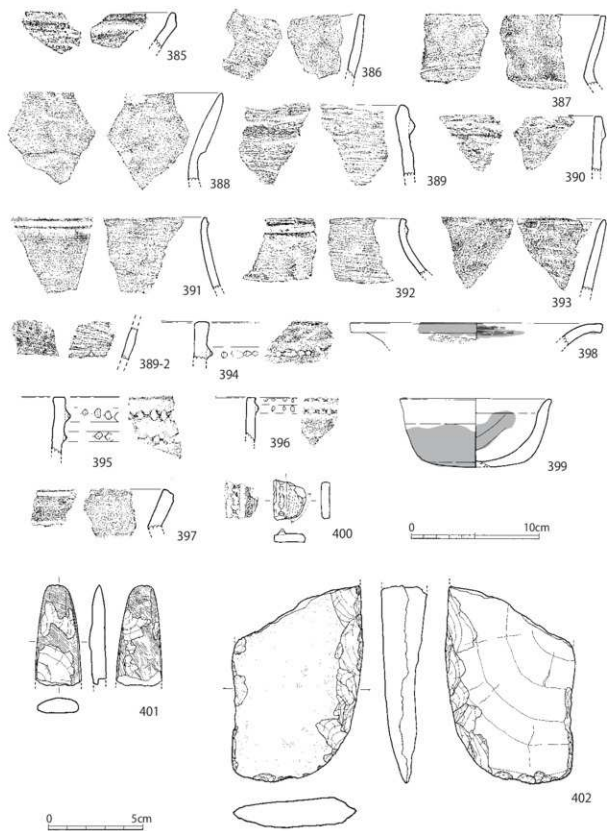


カマド完復

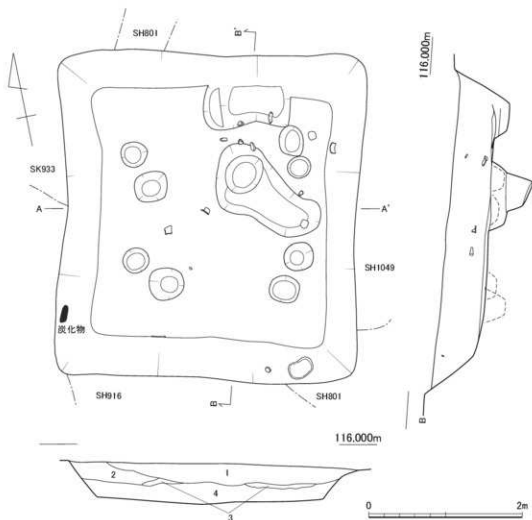


- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、焼土粒少量含む 2. 赤褐色土(5YR4/6) 粘性弱(焼土層) 3. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱 4. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、焼土細粒・炭微量含む 5. 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり硬く締まる(袖部構築材) 6. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/3)が斑状に混じる | <ol style="list-style-type: none"> 7. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、焼土小粒含む 8. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、焼土小粒少量含む 9. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、焼土粒微量、アカホヤ少量含む 10. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、焼土小粒少量含む 11. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、焼土小粒含む 12. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、地山土小粒微量含む 13. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ小粒少量含む |
|--|---|

第142図 SH730実測図 (1/50・1/30)



第 143 图 SH730 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)



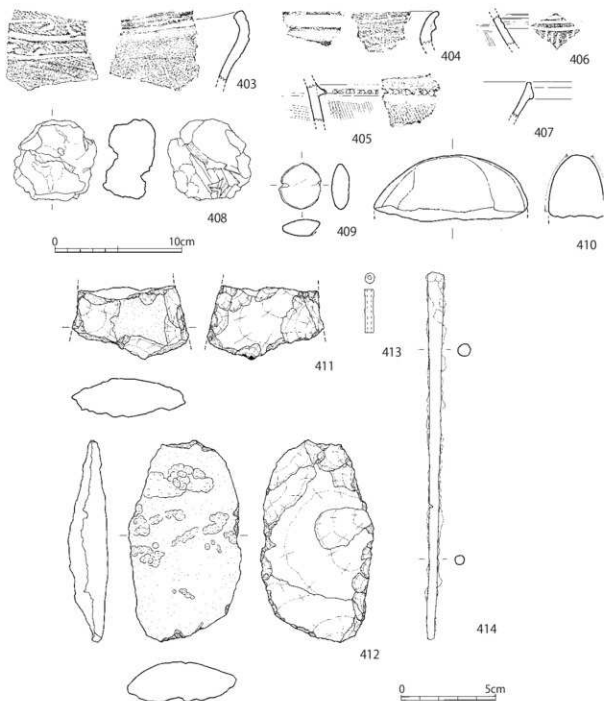
1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土小粒・炭微量含む(本来はSH801の埋土)
2. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、炭少量・焼土細粒微量含む(本来はSH801の埋土)
3. 黒褐色土(10YR2/3) アカホヤ風化土のブロック層じり
4. 黒褐色土(10YR2/2) やや粘性あり締まる、アカホヤ風化土・炭少量含む

第144図 SH731 実測図 (1/50)

跡もみられなかった。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、磁器、打製石鏃、打製石斧、叩石が出土している。先述のとおり遺構の切り合いをうまく押さえられなかったため、遺物が混在している。遺構の時期は、弥生時代中期と推定する。

SH860出土遺物 (第129図)

335・336は縄文土器である。335は深鉢で、内面口縁下に1状の沈線を描す。336は無文の深鉢で、内面口縁下がわずかに沈線状に凹む。これらは後期末葉に比定される。337・338は弥生土器である。337は甕で、外面口縁下に1条の刻目凸帯を巡らせる。凸帯下には補修孔を穿つ。中期の下城式に比定される。338は壺の胴部で、外面に横位の多条凸帯を巡らせる。339は土師器の小型丸底壺である。SH801との境目から出土しており、混在したものの可能性が高い。340～344は石器である。340は砂岩の円礫を素材とする叩石・磨石で、上下両面の広い面を磨面とし、周縁部を中心に敲打痕が顕著に認められる。341は泥岩製の打製石斧で、上下両面に節理面を残す。342・343は打製石斧で、上面に自然面のある剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。石材は342が安山



第145図 SH731出土遺物実測図① (1/3・1/2)

岩、343は石材不詳である。344は凹基無茎式の打製石鏃で、先端部及び基部の一端を欠失する。石材は姫島産黒曜石である。

SK776 (第130図)

2区の中央東寄り、G-5グリッドで検出した土坑である。弥生時代の竪穴建物SH860の北西隅部に位置し、SH860を切っている。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.71m、短径0.46m、深さ0.24mを測る。遺物は土器の細片とともに打製石斧が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しく、遺構の詳細な時期は明らかできない。SH860との切り合い関係から、弥生時代中期以降の遺構である。

SK776出土遺物（第131図）

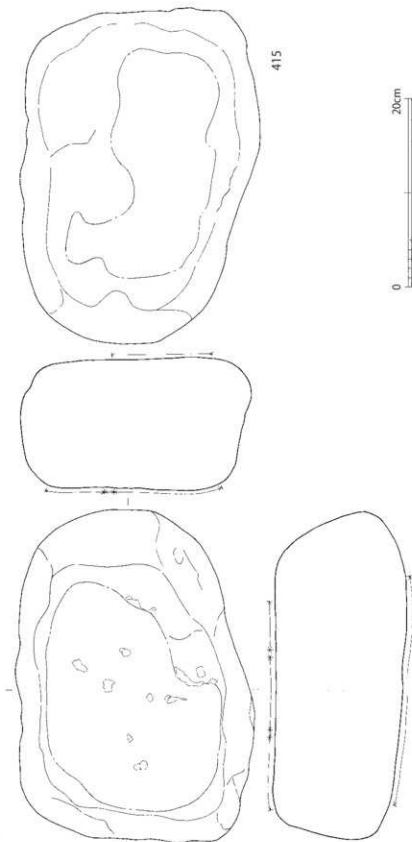
345は打製石斧である。表面に自然面のある横長剥片を素材とし、周縁部に細かい調整剥離を施す。打点と反対側の刃部調整が顕著であることから横刃型石器の可能性も考えたが、打点側にも剥離を加えており打製石斧とした。ただし下端部や打点側の剥離は十分ではなく、未成品の可能性もある。石材は安山岩である。

第4節 古墳時代の遺構と遺物

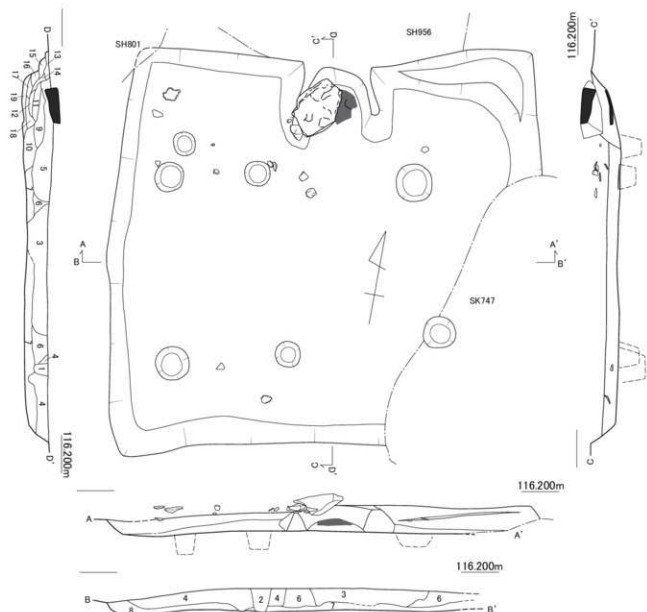
2区における古墳時代の遺構としては、竪穴建物13棟、土坑10基がある。遺構の時期は、古墳時代前期後半と、後期後半の2時期に大別される。前者は1区の南半部から区くにかけてほぼ全体に広がるが、後者はほぼ1区と2区に分布が限られ、その中でも2区が中心になる。古墳時代前期の竪穴建物の特徴として、他の時期のものより床面を深く掘り込みむ点が挙げられる。他の時期の竪穴建物は標準層序の第VI層を床面とするのが一般的であるが、古墳時代前期のものは第VI層を掘り抜き、黄褐色ローム質土に達している。古墳時代後期の竪穴建物には竈が付設されるものが多く、2区では遺存状態の良い竈もいくつか認められた。

SH29（第132図）

2区の南端部、2区と3区にまたがって検出した竪穴建物である。3区の調査時に、南東隅部を検出しており、多量の遺物



第146図 SH731出土遺物実測図②(1/4)



1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、反黄褐色土 (10YR4/2) 小塊混じる
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、反黄褐色土 (10YR4/2) 小塊少量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、暗褐色土 (10YR3/3) が斑状に混じり、
灰・反黄褐色土小塊少量含む

4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土が少量斑状に混じる、
反黄褐色土小塊、灰少量含む

5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、焼土小粒・灰少量含む

6. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、灰・反黄褐色土小塊少量含む

7. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黒褐色土 (10YR2/3) が少量
斑状に混じる、地山土小粒少量含む

8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、アカヤシ風化土少量含む

9. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり硬く締まる。

10. 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒少量、
に少し赤褐色土 (5YR4/4) 粘土塊混じる

11. に少し赤褐色土 (5YR4/4) 粘性弱、
焼土ブロックを主伴とし暗褐色土・黒褐色土ブロックが混じる

12. 赤褐色土 (5YR4/6) 全体的に固けて硬化

13. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり締まる、
褐色土 (10YR4/4) に混じる

14. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり締まる、焼土小粒混じる

15. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く締まる、
褐色土塊・焼土小粒少量含む

16. 褐色土 (10YR4/4) 粘性強く締まる、黒褐色土小粒少量含む

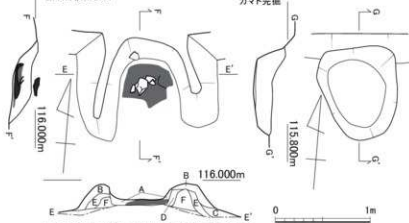
17. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、暗褐色土 (10YR3/3)・
焼土小粒少量含む

18. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く締まる、
褐色土塊・焼土小粒少量含む

19. 暗褐色土 (10YR3/3) を主伴とし、褐色土 (10YR4/4)・
黒褐色土 (10YR2/3) 少量の焼土が斑状に混じる、
やや粘性あり締まる。

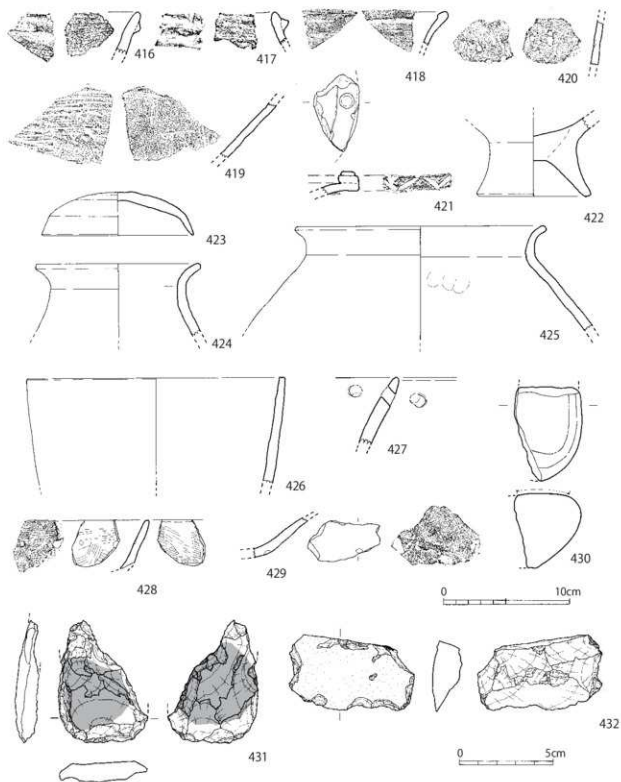
燃焼部核出状況

カマド完備



- A. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、焼土小塊・黒褐色土混じる
- B. 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土小粒・黒褐色土小塊少量含む
- C. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘質土で強く締まる
- D. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり締まる、焼土小粒少量含む
- E. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり締まる、アカヤシ風化土少量含む
- F. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性あり締まる、Eの小ブロック少量含む

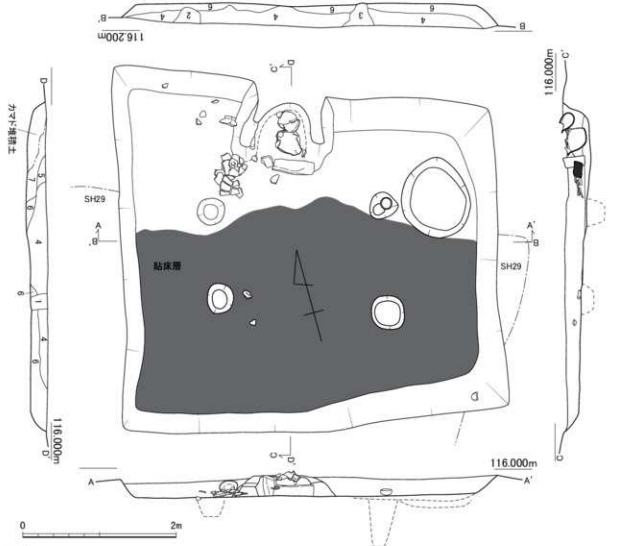
第147図 SH750実測図 (1/50・1/40)



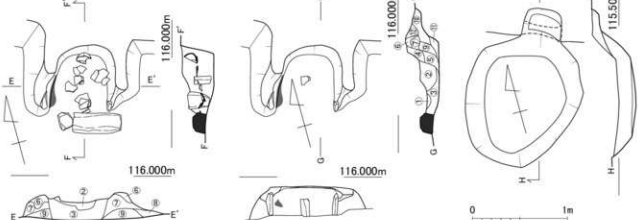
第148図 SH750 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

を確認していたため、3区調査時は検出に止め、2区の調査時に全体を調査することとした。北西端部では縄文時代の竪穴建物SH965を切り、北半部は古墳時代後期の竪穴建物SH760に大きく切られている。平面形状は方形を呈するが、北東隅部がやや東に張り出し、北辺が若干長い。長辺6.38m、短辺4.44m、深さは比高で0.63mを測るが、標準的な深さは0.2m前後である。埋土は5層に分層され、上層の1・2層と下層の3~5層に大別でき

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黒色土細粒少量含む
 2 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黒褐色土細粒少量含む
 3 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、灰質黒褐色土細粒少量含む
 4 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、灰質黒褐色土小塊が斑に混じり、灰質少量含む
 5 粘褐色土 (7.5YR2/3) 粘性弱、黒褐色土小粒混じり、灰質少量含む
 6 黒褐色土 (10YR2/2) や粘性あり締まる
 7 黒褐色土 (7.5YR2/2) や粘性あり締まる、黒褐色土小粒・灰・焼土小粒少量含む

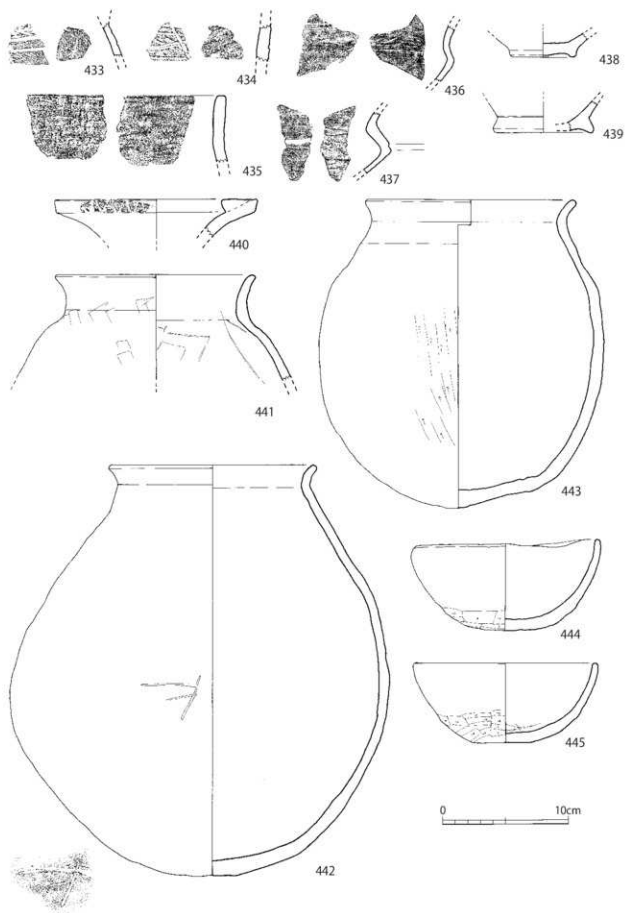


カマド個別図

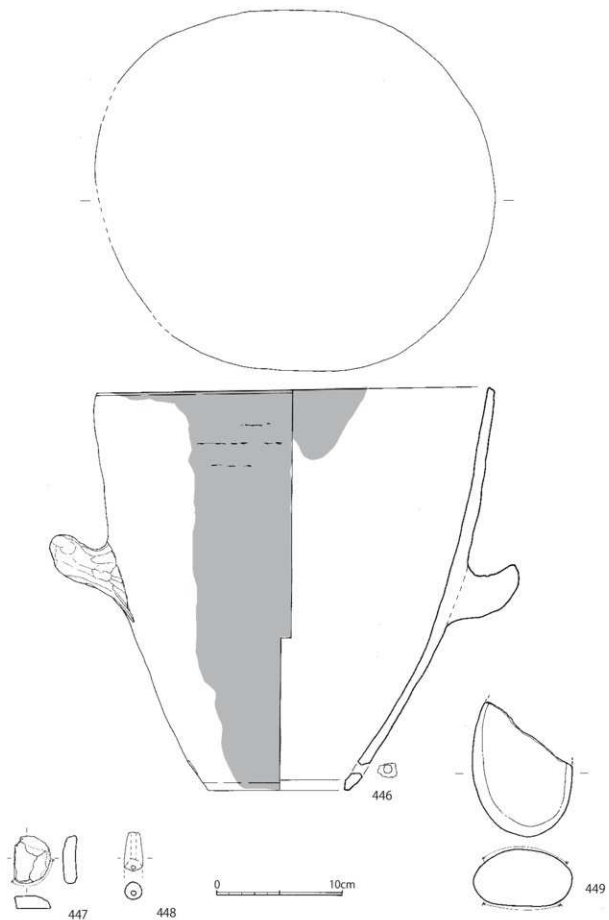


- ① 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、焼土小粒微量含む
 ② 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土少量含む
 ③ 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性弱、焼土ブロック・小粒主体
 ④ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、焼土小粒少量・灰質黒褐色土小粒少量含む
 ⑤ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、黒褐色土ブロック混じる
 ⑥ 暗褐色土 (10YR4/4) 粘性強(硬)締まる、焼土小粒少量・灰質少量含む
 ⑦ 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性強(硬)締まる、焼土ブロック混じる
 ⑧ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強(硬)締まる
 ⑨ 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土小粒微量・灰少量含む
 ⑩ 暗褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土小粒・アカホヤ風化土微量含む
 ⑪ 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土小粒・アカホヤ風化土微量含む
 ⑫ 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性弱、黒褐色土・アカホヤ細粒混じる

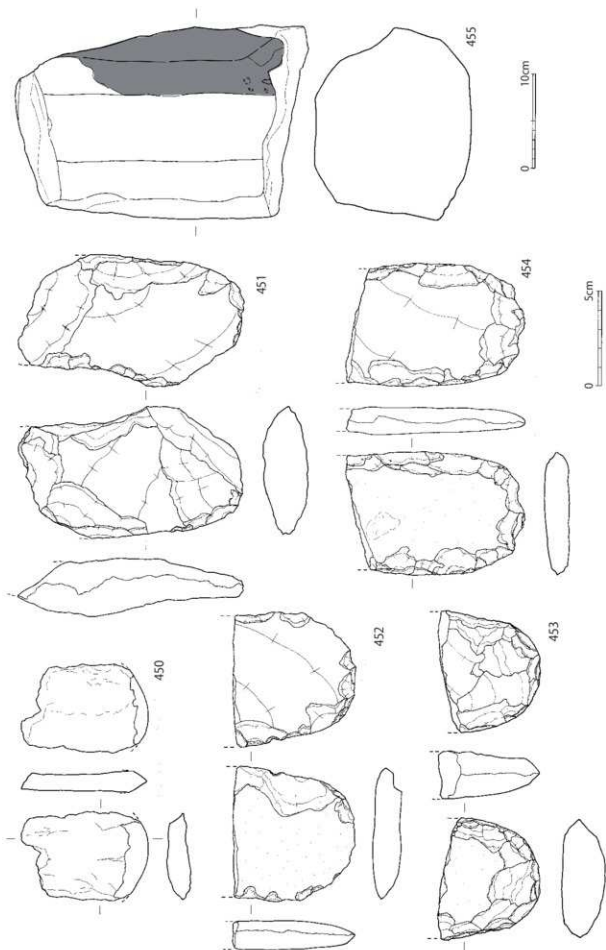
第149図 SH760実測図 (1/50・1/40)



第150图 SH760出土遺物実測図①(1/3)



第151图 SH760出土遺物実測図② (1/3)

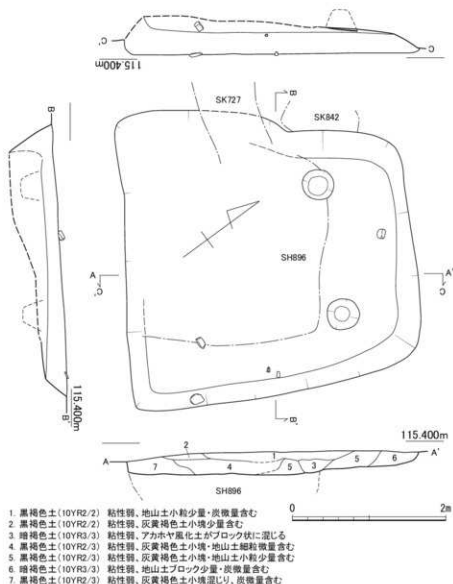


第152图 SH760出土遺物実測図③ (1/2・1/4)

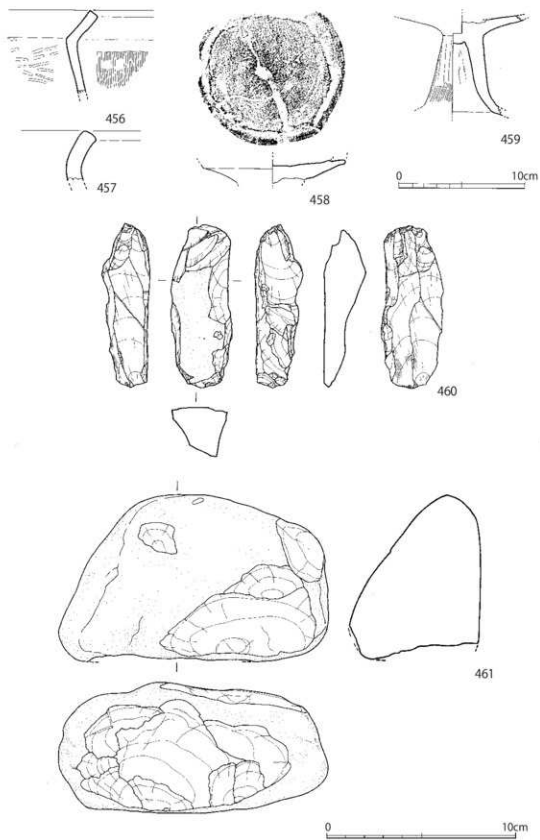
る。SH760 との重複を受けていない南部を中心に、多量の遺物が出土した。特に土師器の甕や瓶は完形ないしは関係に近い大破片が多く、堅穴廃絶の際に祭祀行為で埋置されたものである可能性が高い。また、石製紡錘車や鉄製品の出土も認められる。遺物は他に縄文土器や弥生土器、須恵器、打製石斧、石錘、石皿、軽石が出土している。遺構の時期は、古墳時代後期後半に比定される。

SH29出土遺物（第133～137図）

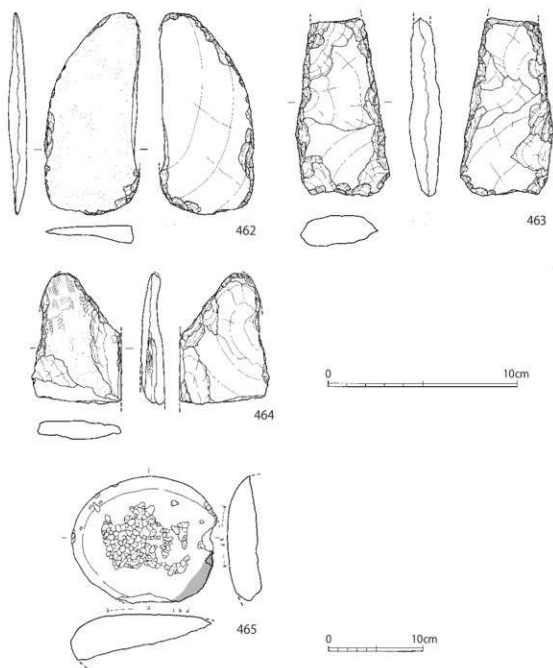
346～351は縄文土器である。346は深鉢で、口縁部を断面三角形に肥厚し、外面に2条の沈線と単節縄文RLを施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。347は外面に単節縄文RLを施す深鉢で、後期中葉の北久根山第二型式に併行するものか。348は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。349・350は無文の深鉢である。351は浅鉢で、外反する口縁の端部が上方に折れ、外面に1条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。352は須恵器の坏蓋である。外面及び口縁部に微細な刺彫が認められるが、これが意図的に打ち欠いたものか、製作時に刺彫したものであるのかは判断がつかない。古墳や横穴墓への副葬品には口縁部等へ打ち欠きを施す事例はあるが、もし人為的なものであるとすれば、堅穴建物の廃絶時の祭祀の際に何らかの理由で打ち欠いたものとみられる。353～364は土師器である。353は坏で、内外面に赤色顔料の塗



第153図 SH773 実測図 (1/50)

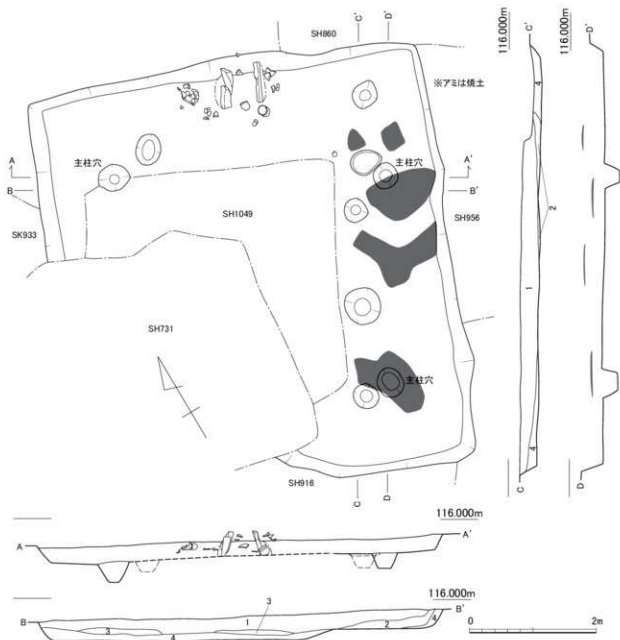


第154图 SH773 出土遺物実測図① (1/3・1/2)

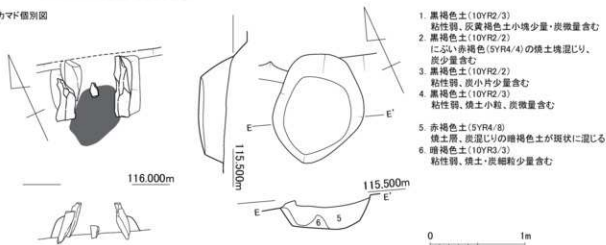


第155図 SH773 出土遺物実測図② (1/2・1/3)

彩が認められる。354～360は甕である。口縁部は外反し、胴部が丸く膨らむ。底部は丸底である。359は口縁部の一端が片口となる。360は胴が縦に長く伸びる。358は底面に内容物の痕跡とみられる炭化物が付着する。361～363は瓶である。361は小型の瓶で、把手は付かない。底部は中空となる。362・363は胴部中に2箇所の把手がつく。底部はいずれも中空であるが、底部のやや上に貫通する穿孔があり、それぞれ対置する位置にあることから、この穿孔部に棒を通した可能性がある。穿孔部は内面側に粘土のはみ出しが見られることから、穿孔は外面側から行ったことが分かる。362は穿孔の両側に貫通しない凹みがあり、穿孔を2回やり直したものとみられる。364は器種不明の胴部片で、外面に何らかの圧痕が認められたため分析を行った結果、何らかの茎の痕跡の可能性が示された(第3分冊の第8章参照)。365は上部が丸みを持つ板状の鉄製品である。366は蛇紋岩製の

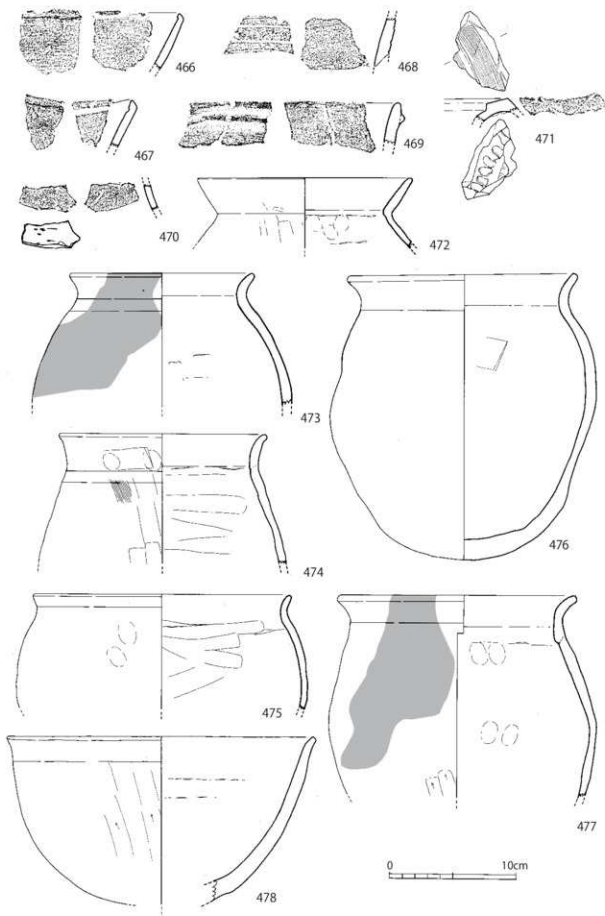


カマド個別図

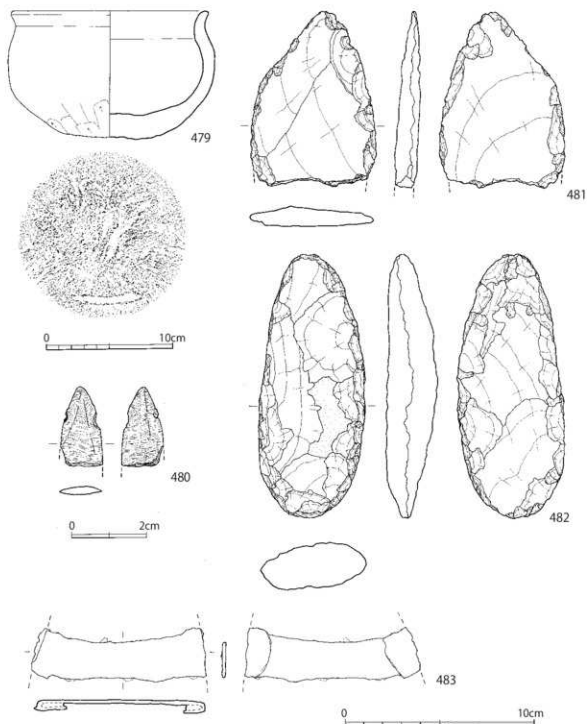


- 1 黒褐色土(10YR2/3)
粘性弱、灰黄褐色土小塊少量・炭微量含む
- 2 黒褐色土(10YR2/2)
にふい赤褐色(5YR4/4)の焼土塊混じり、
炭少量含む
- 3 黒褐色土(10YR2/2)
粘性弱、炭小片少量含む
- 4 黒褐色土(10YR2/3)
粘性弱、焼土小粒、炭微量含む
- 5 赤褐色土(SYR4/8)
焼土層、炭混じりの暗褐色土が斑状に混じる
- 6 暗褐色土(10YR3/3)
粘性弱、焼土・炭細粒少量含む

第156図 SH801 実測図 (1/60・1/40)



第157图 SH801出土遺物実測図① (1/3)



第158図 SH801出土遺物実測図② (1/3・1/1・1/2)

紡錘車で、表面には無数の整形痕（ケズリ痕）が残る。367・368は打製石斧で、367は片面に被熱の痕跡が認められる。石材はいずれも安山岩である。369は切目石錘で、長軸の両端部に小さくスリット状の切れ目を入れて縄掛け部を作り出す。石材は粘板岩である。370・371は石皿で、370は砂岩、371は安山岩を素材とする。

SH724 (第138図)

2区の北東隅部、F-5・F-6グリッドで検出した竪穴建物である。南東隅部は弥生時代の竪穴建物SH815を切っ

ている。北半部が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は隅丸方形を呈し、長辺 4.29 m、短辺 2.55 m 以上、深さ 0.27 m を測る。床面では中央と南壁際の中央部に土坑と、4 基のピットを検出している。最も西にあるピットは主柱穴の可能性が高いが、その他は明確ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土しているが、その量は多くはない。床面が浅いことや出土遺物から、遺構の時期は古墳時代後期に位置付けられる可能性が高い。

SH724 出土遺物 (第139図)

372・373 は縄文土器である。372 は深鉢で、内面口縁下に 1 条の沈線を施す。後期後葉に位置付けられる。373 は底部で、底面の周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。374～377 は弥生土器である。374・375 は甕で、いずれも外面口縁下に 1 状の凸帯が巡る。中期の下城式に比定される。376 は甕で、口縁が外反する。377 は壺の胴部で、横位の多条凸帯を巡らせる。378 は土師器の坏で、ボウル形の器形を呈する。内面に種子状圧痕が認められ、分析の結果イネ(モミ)の圧痕であることが判明した(分析の詳細は第3分冊の第8章参照)。379 は安山岩の剥片である。表面に自然面を残し、周縁に微細な剥離が認められる。打製石斧の素材剥片の可能性が高い。

SH726 (第140図)

2 区の北端部西寄り、F-4・F-5 グリッドで検出した堅穴建物である。北端部が調査区外に続くが、平面形状は方形を呈し、長辺 3.97 m、短辺 3.90 m、深さは比高で 0.31 m を測るが、標準的な深さは 0.2 m 前後である。埋土は 4 層に分層され、うち 1 層は堅穴建物埋設後の掘り込みであるが、その他は中央に向かってレンズ状の堆積となる。標準土層の第 VI 層を床面とし、中央と東壁際に土坑と、ピット 8 基を検出している。このうちの壁の隅部に近い 4 基のピットが主柱穴になる可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧が出土しているが、量としては少ない。掘り込みが浅いものの、堅穴の構造や出土遺物から遺構の時期は古墳時代前期に位置付けられる可能性が高い。

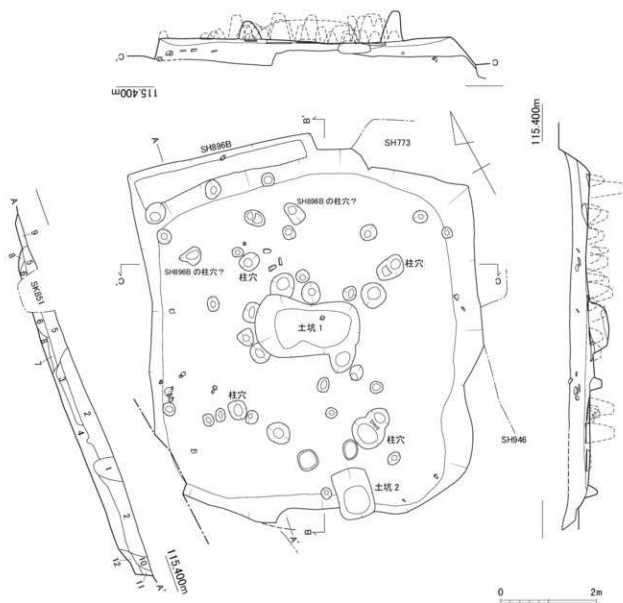
SH726 出土遺物 (第141図)

380 は縄文土器の浅鉢である。口縁部は外反し、外面に 1 条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。381 は弥生土器の甕か。口縁部に接して外面に 1 条の凸帯を貼り付け、凸帯上に丸棒状工具による刻みを施す。凸帯下には補修孔を穿つ。382 は弥生土器の甕で、口縁は外に折れる。383 は土師器の小型丸底壺の口縁部で、古墳時代前期の所産である。384 は安山岩の縦長剥片を素材とする打製石斧で、周縁に調整剥離を施す。

SH730 (第142図)

2 区の北部東寄り、F-5・F-6・G-5・G-6 グリッドで検出した堅穴建物である。南側は縄文時代の堅穴建物 SH871 を切っている。平面形状はやや歪な方形を呈し、長辺 4.69 m、短辺 4.43 m を測る。深さは比高で 0.21 m を測るが、全体に上部が削平を受けており、大部分では 10 cm あるかないかの厚さしかない。埋土は 3 層あるが、1 層は堅穴埋設後の堆積層で、2・3 層はレンズ状の堆積となる。標準土層の第 VI 層を床面とし、この面で 8 基のピットを検出した。このうちの方形に並ぶ 4 本が主柱穴となる。

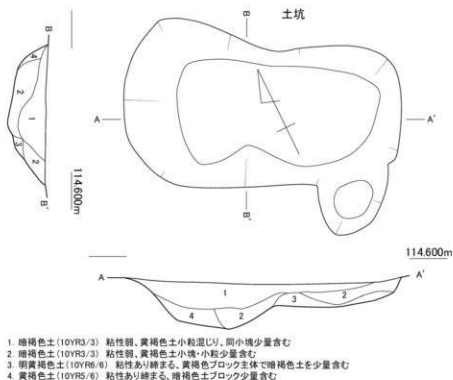
堅穴の北壁際には竈が付設される。竈は逆「U」字状に黒褐色の粘土を盛り上げて袖部を構築し、その中を焚口とする。竈の北側には煙出しとみられる小ピットを穿つ。焚口に土器を埋置するなどの、廃絶時の祭祀の痕跡は認められなかった。竈を完掘した後、その面を精査したところ、竈の下に焼土や炭片を含む土層の広がり認められ、最終的には土坑となった。土坑は内部が 2 段掘りとなり、北側にテラス状の段が付き、これが煙出しの穴に通じる部分となる。南側はこのテラスから 10 cm ほど丸く掘り込んでいる。この土坑部の埋土は細かく分層され、掘り込みを行った後に丁寧に埋め戻して整地した痕跡であるとみられる。全体に焼土の小粒が混じるため、整地の際に何らかの目的で火を用いた可能性が高い。



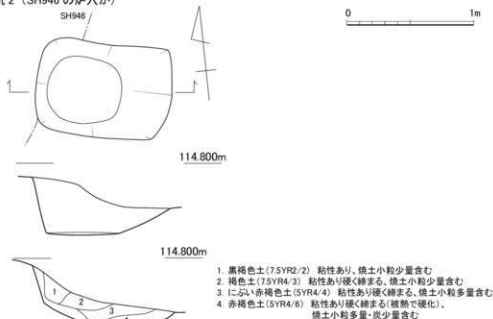
1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱。黄褐色土細粒微量含む
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱。黄褐色土細粒微量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱。黄褐色土小塊少量含む
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱。黄褐色土小塊混じる
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱。黄褐色土小粒微量含む
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱。黄褐色土小塊少量含む
7. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱。黄褐色土小塊混じる
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱。黄褐色土塊混じる
9. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱。黄褐色土細粒少量含む (SH896B 埋土)
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる。アカホヤブロック含む (SH946 埋土)
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる。黄褐色土小粒少量含む (SH946 埋土)
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる。黄褐色土細粒混じり。アカホヤブロック少量含む (SH946 埋土)

第159図 SH896 実測図 (1/80)

SH730からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、半円形土製品、石ノミ、打製石斧といった遺物が出土している。縄文時代の遺物が一定量出土しているが、これはSH871と重複しておりその遺物が紛れ込んだものである。遺構の時期は、古墳時代後期後半に位置付けられる。



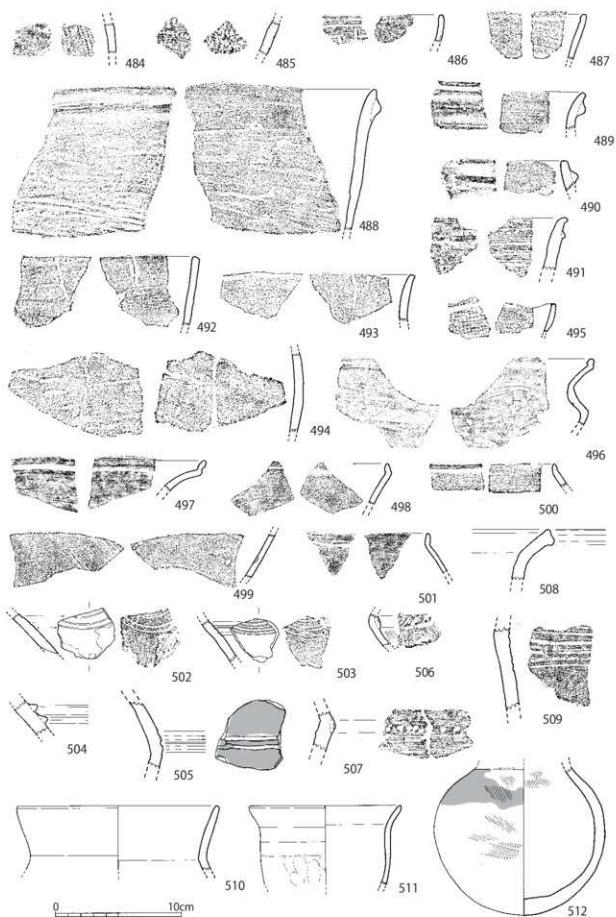
土坑 2 (SH946 の炉穴か)



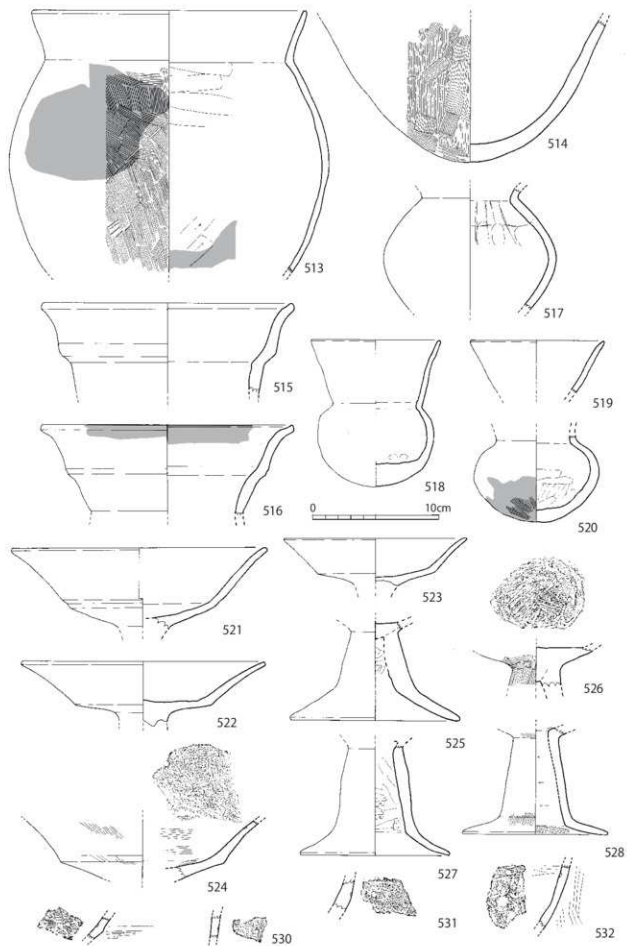
第 160 図 SH896 床面遺構実測図 (1/30)

SH730出土遺物 (第143図)

385～394は縄文土器である。385は深鉢で、口縁部内面に沈線状の段が付く。386～388は無文の深鉢で、388は口縁部を縦に長く肥厚・拡張し、その下端には段が付く。389～392は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施す。391・392は内傾が明瞭で、壺の可能性もある。393は無文の深鉢である。398-2は389と同一個体とみられる刷部片で、内面に種子状の圧痕が認められたため分析を行ったが、何に由来するものかは判明しなかった。385は後期後葉、388は晩期前半、389～932は晩期後葉の上菅生B式に比定される。394～398は弥生土器である。394～

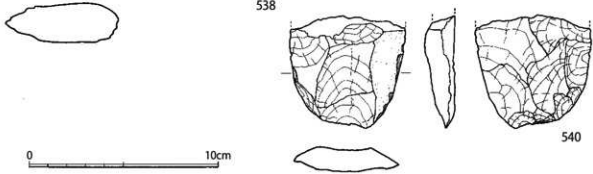
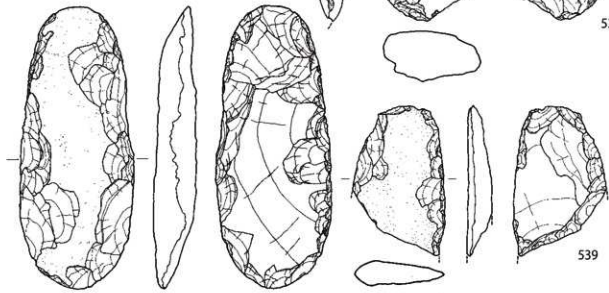
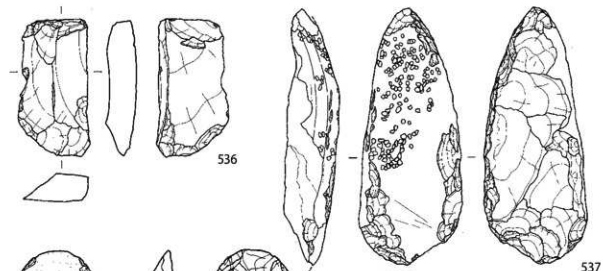
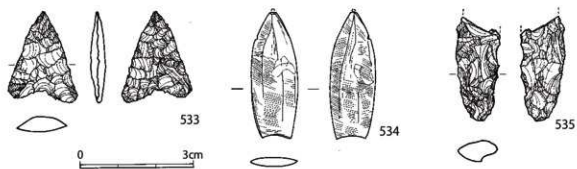


第 161 图 SH896 出土遺物実測図① (1/3)

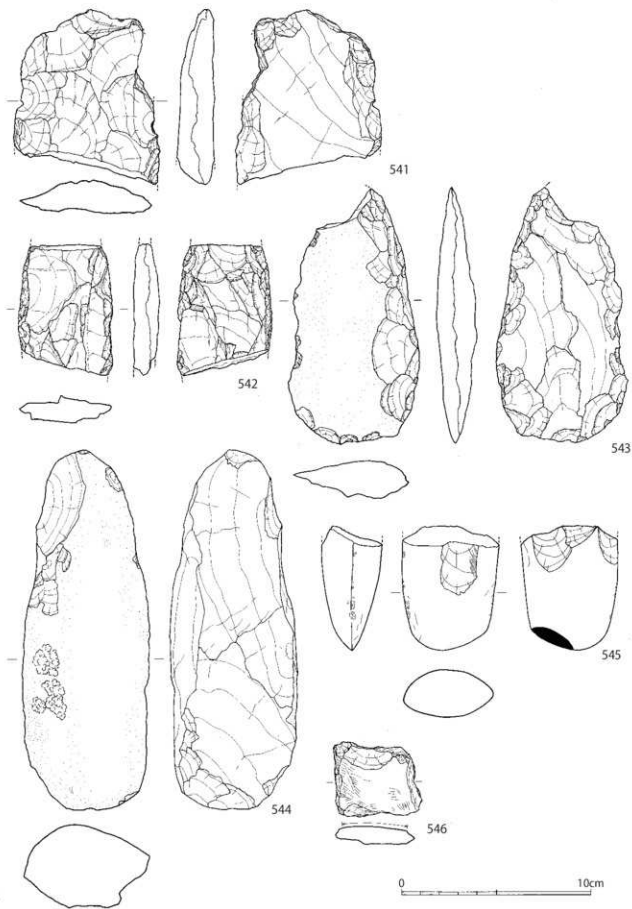


529

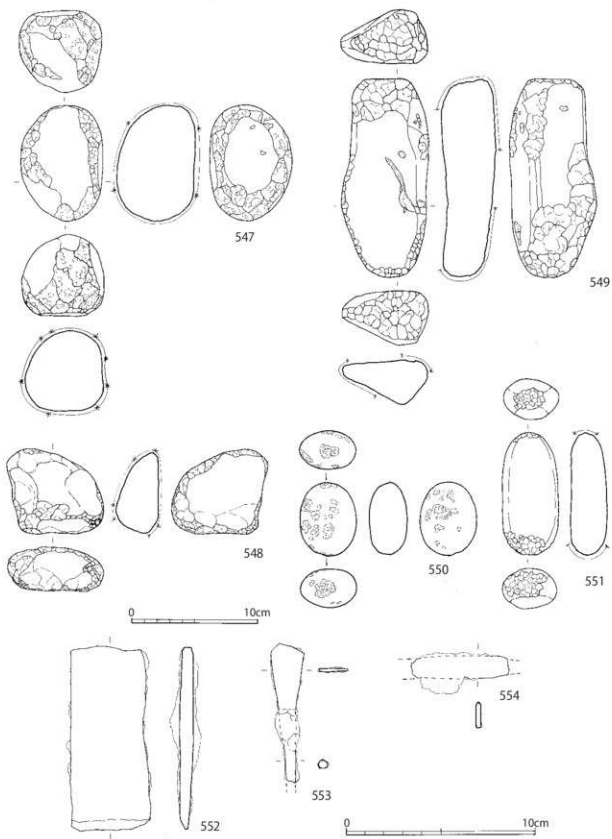
第162图 SH896出土遗物实测图② (1/3)



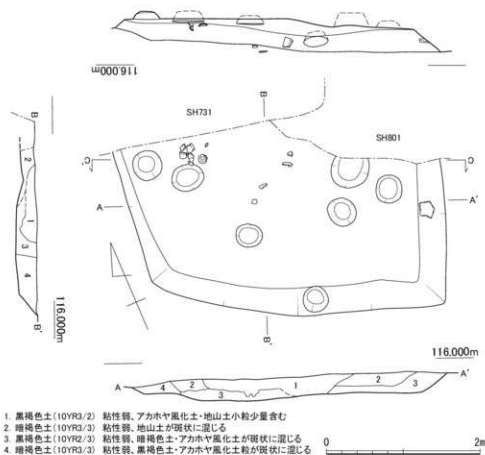
第163图 SH896 出土物実測図③ (1/1・1/2)



第164图 SH896出土物実測图④ (1/2)



第165图 SH896出土遺物実測図③ (1/3・1/2)



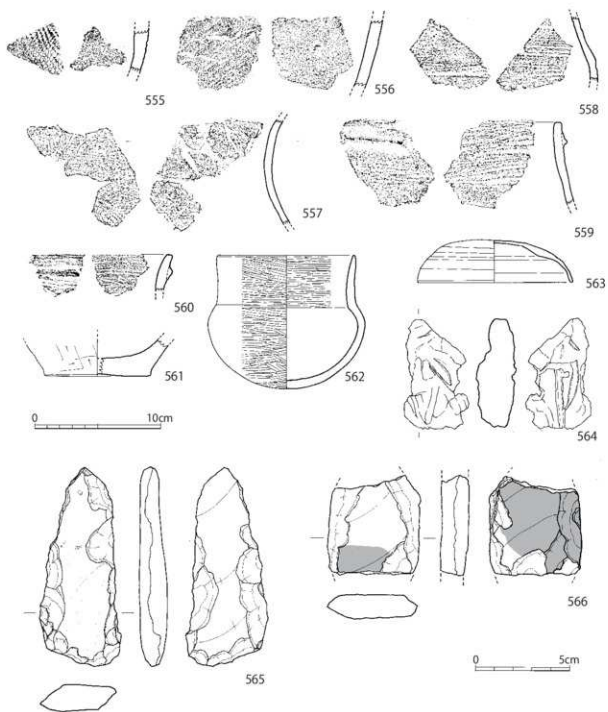
第166図 SH916実測図(1/50)

396は甕で、外面口縁下に刻目のある凸帯を巡らせる。397は厚手の粗製甕で、口縁外端部に沈線を施す。398は壺で、口縁部が大きく外反する。399は土師器の坏で、外面に黒斑が、内面には赤色顔料の塗彩が認められる。400は弥生土器下城式甕の口縁部破片を転用し、周縁を打ち欠いて半円形状にした土製品である。401は石ノミで刃部を欠失する。石材は砂岩である。402は安山岩の横長剥片を素材とした打製石斧で、周縁に調整剥離を施す。

SH731 (第144図)

2区の中央部、H-5グリッドで検出した竪穴建物である。遺構の重複が著しく、北半～東半部は古墳時代前期の竪穴建物SH1049と古墳時代後期の竪穴建物SH801、南は古墳時代後期の竪穴建物SH916、北西部は古墳時代後期の土坑SK933と重複している。しかしながら、遺構番号が示すようにSH731はこれら重複遺構よりも早くに検出しており、本来SH731を切るSH801やSH916・SK933の前後関係を押さえないまま掘り下げてしまっている。床面が黄褐色ロームを掘り込むことから、底面での壁の立ち上がりは明瞭で、これによって遺構の範囲が確定している状況である。切り合い関係が正しいのはSH731がSH1049を切ることで、後は全て間違えていることになる。

SH731は方形を呈し、長辺4.34m、短径4.10m、深さ0.76mを測る。埋土は4層に分層され、1～3層の上層と下層の4層に分けられる。壁面は斜めに立ち上がり、逆台形状の断面径を示す。床面では北壁際と中央から東壁際に土坑を、その他9基のピットを検出した。遺構の規模からすると主柱穴は2本の可能性が高いが、明確に対置するものではなく特定できない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、甕土、土製品、打製石斧、石皿、管玉、鉄鏃が出土しているが、先述のとおり遺構の切り合い関係を間違えており、須恵器など、本来は他の

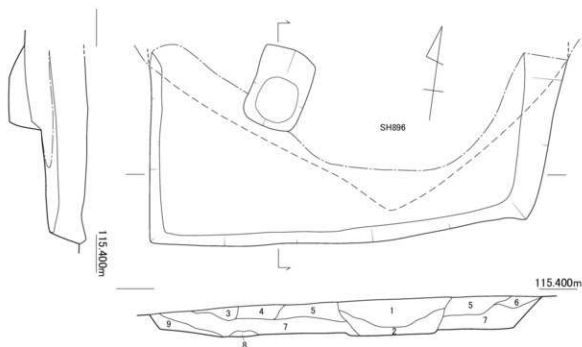


第167図 SH916出土遺物実測図(1/3・1/2)

遺構に帰属するものが混在している。黄褐色ロームを床面とすること、SH1049を切り、古墳時代後期の遺構に切られること等を勘案すると、古墳時代前期後半に位置付けられる可能性が高い。

SH731出土遺物(第145・146図)

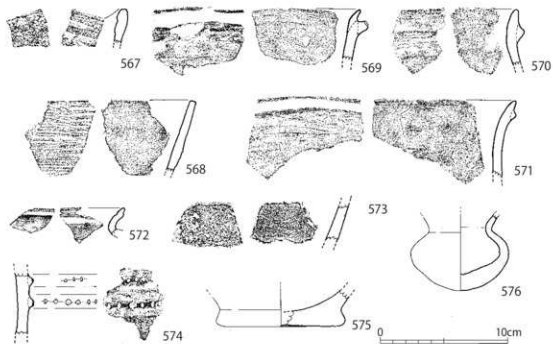
403・404は縄文土器である。外面に横位の区画沈線と末端が飛手状になる沈線と、区画沈線内にRLの単節縄文を施す。後期前葉に位置付けられようか。404は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。405・406は弥生土器である。405は口縁端部を欠くが口縁直下の破片で、外面に



1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、反黄褐色土小粒少量含む (SH896埋土)
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む (SH896埋土)
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、アカホヤブロック含む
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、地山土小粒少量含む
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土 (10YR2/2) ブロック混じり、アカホヤブロック少量含む
6. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、アカホヤブロック含む
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、地山土細粒混じり、アカホヤブロック少量含む
8. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、地山土ブロック混じる
9. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり締まる、地山土小粒少量含む

0 2m

第 168 図 SH946 実測図 (1/50)



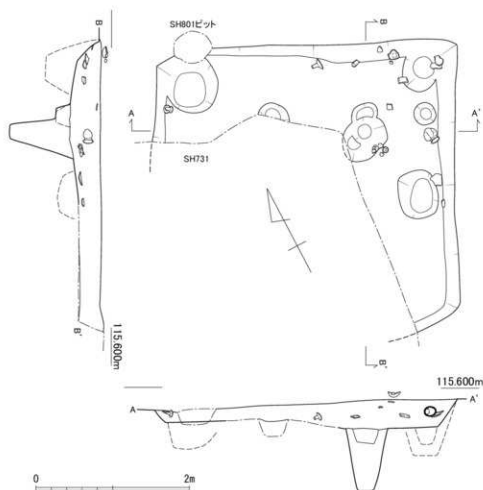
第 169 図 SH946 出土遺物実測図 (1/3)

1条の刻目凸帯を施す下城式の甕である。406は壺で、横位の多条沈線と、垂下する多条沈線を施す。下城式甕に伴う壺である。407は須恵器の器台であろう。408は壁土で、胎土にスサを含む。409は碁石形を呈する土製品である。410は安山岩の円礫を素材とする磨石で、上下両面を磨面とする。411・412は打製石斧である。いずれも表面に自然面を残す安山岩の剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。412は自然面に敲打痕がみられることから、石皿ないしは叩石から剥ぎ取った剥片を素材とした可能性がある。413は石製の管玉、414は鉄鏝の茎部である。415は石皿で、上下両面を使用面とする。

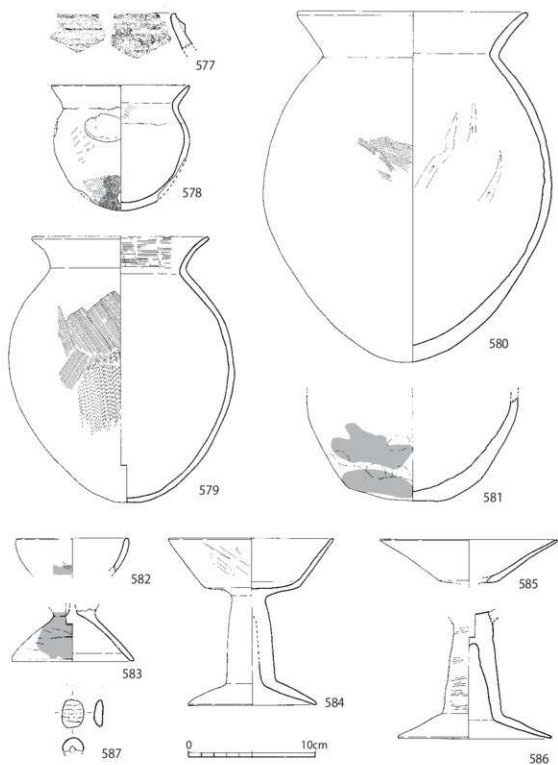
SH750 (第147図)

2区の南東隅部、H5・H6グリッドで検出した堅穴建物である。北部は縄文時代の堅穴建物SH956を切り、東端部は土坑SK747に切られている。北西隅部は古墳時代後期の堅穴建物SH801とわずかに重複するが、SH801を先に掘っており両者の前後関係は明らかではない。平面形状は方形を呈し、長辺5.28m以上、短辺5.06m、深さ0.44mを測る。壁面は斜めに立ち上がり、内部の断面形状は逆台形状を呈する。床面では7基のピットを検出しており、そのうちの北西側の1基を除いた、東西2間×南北1間の6基が支柱穴となる。

北側の壁の中央には竈が附属する。竈は黒褐色ないしは褐色の粘土を逆「U」字状に盛り上げて袖部を構築し、

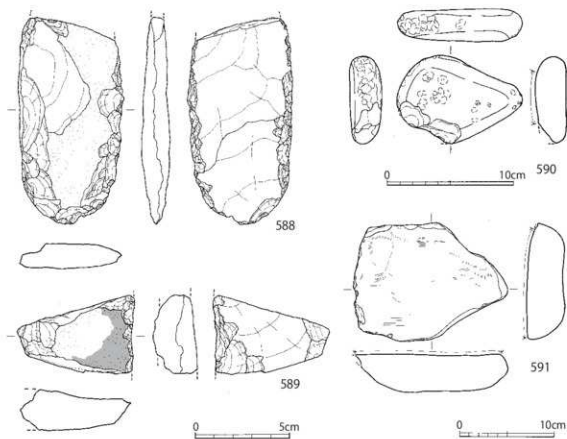


第170図 SH1049実測図 (1/50)



第171図 SH1049出土遺物実測図①(1/3)

袖部に囲まれた中を焚口とする。焚口には土器埋置等の祭祀痕跡は認められなかったが、竈を埋めた上に、長さ0.84 m、幅0.60 mの扁平な安山岩の巨石が置かれていた。竈を封じる目的で置かれた可能性が高い。竈を完掘した後、その下面を精査したところ、焼土小粒の混じる土層が確認され、土坑のプランを検出した。土坑は鶏卵形に近い平面形状を呈し、長径0.97 m、短径0.84 m、深さ0.34 mを測る。他の竈穴建物と同様に、竈構築前に部分



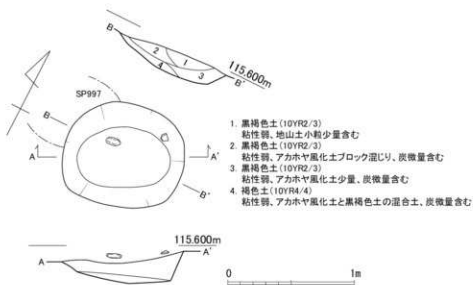
第172図 SH1049出土遺物実測図② (1/2・1/3・1/4)

的に掘り返して整地をして地盤を補強した痕跡である可能性が高い。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、磨石が出土している。遺構の年代は、古墳時代後期（6世紀後半）に位置付けられる。

SH750出土遺物（第148図）

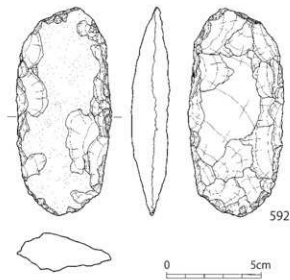
416～419は縄文土器である。416・417は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上着生B式に比定される。418は晩期の浅鉢で、口縁は外反し端部は丸く肥厚する。419は浅鉢の頸部片で、外面に横位の条痕を施す。晩期前半に位置付けられよう。421・422は弥生土器である。421は壺で、外反する口縁の上部を肥厚し、外端部に鋸歯状の刻みを施し、上端には円形の浮文を貼り付ける。422は壺の底部で、底部は高い上げ底となる。423は須恵器の坏蓋で、天井部には回転ヘラケズリを施す。424・425は土師器の甕で、口縁は外反し、胴部は丸く膨らむ。426は土師器の甕で、寸胴形の器形を呈する。427は土師器の鉢か。口縁部直下に貫通する孔を穿つ。420は土師器の胴部片で、外面に種子状圧痕が認められる。熊本大学で分析を行ったところ、特定はできなかったがアズキに似た種子の圧痕であるとの結果が得られた（分析の詳細は第3分冊の第8章参照）。428・429は土師器高坏の坏部片で、428は内面に、429は外面にそれぞれ種子状の圧痕が認められる。いずれも分析を行ったが、種子を特定できなかった。430は角閃安山岩の円礫を素材とする磨石で、上面を磨面とする。431は泥岩製の打製石斧で、上下両面に煤の付着が認められる。432は安山岩の剥片である。



第173図 SK737 実測図 (1/30)

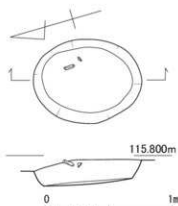
SH760 (第149図)

2区の南部、H5・I5グリッドで検出した竪穴建物である。西北部は縄文時代の竪穴建物SH955を、中ほどから南は古墳時代後期の竪穴建物SH29をそれぞれ切っている。平面形状は東西にやや長い方形を呈し、長辺5.00m、短辺4.83m、深さは比高で0.47mを測るが、標準的な深さは0.2~0.25m前後である。埋土は7層に分層されるが、1~3層は竪穴埋没後の掘り込みで、4・5層の上層と、6・7層の下層に大別される。壁面は斜めに立ち上がり、内部の断面形状は逆台形状を呈する。標準土層の第VI層を床面とし、この面で北東隅部に浅い土坑1基と、主柱穴となる4基のピットを検出した。北東の主柱穴の上面では完形の土師器坏(第150図444)が出土しており、柱を抜いて柱穴を埋めた後に埋置された可能性がある。また、南半部を中心に貼床層の広がり確認された。その範囲はSH29とほぼ重なることから、SH29の貼床とも考えたが、SH29の推定プランをはみ出す所もあり、またSH29では貼床層が認められなかったことから、この貼床はSH760のものとする。おそらくはSH29と重複した部分の地盤が弱いため、貼床を入れて床面を補強したものであろう。

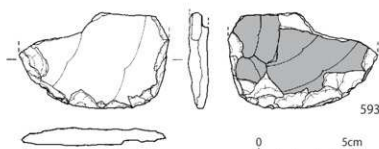


第174図 SK737 出土遺物実測図 (1/2)

また、北壁のほぼ中央で竈を検出している。竈は褐色の粘土を逆「U」字状に盛り上げて袖部を構築し、袖部に囲まれた内側を焚口とする。袖部の内側は壁面が被熱により赤変下部分も認められた。袖部の両先端には扁平な石材を立てて袖石とし、焚口の中央には支柱石が立つ。この焚口の前には方柱状の凝灰岩を置き、その西には同一石材とみられる折れた凝灰岩が立てられていた。この凝灰岩は本来天井部に渡されていたものとみられ、竈廃絶時に下ろされたものであろう。焚口の上には関係に近い土師器の坏や土器片があり、その上から大小の土師器壺(第150図442・443)が横倒しになった状態で出土した。また、竈の周囲からは土師器の壺や甗がまどまって、潰れたような状態で出土しており、竈の周囲に土器を並べた祭祀行為が行われていた可能性を示している。



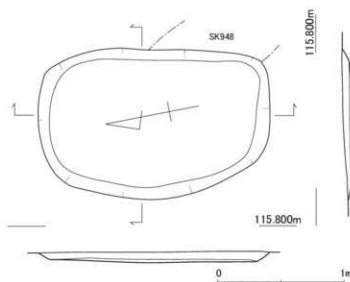
第175図 SK761実測図 (1/30)



第176図 SK761出土遺物実測図 (1/2)

この竈を完掘した後にその下面を精査したところ、やはり焼土を含む埋土が確認され、土坑のプランを検出した。土坑は鶏卵形に近い平面形状で、上部に一部が張り出す。長径1.70m、短径1.24m、深さ0.47mを測る。北端部はテラス状の段が付くが、ここが燻出しのビットとなり、排煙していたものとみられる。この土坑は他の堅穴建物と同様に、竈構茶前に部分的に掘り返して整地し、地盤を補強した痕跡と考えられる。

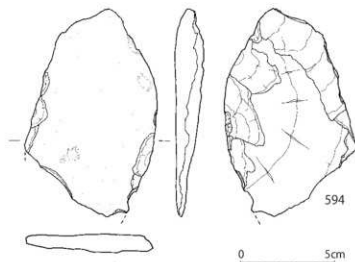
遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、半円形土製品、打製石斧、磨石等が出土している。特に竈やその周囲から出土したものが多く、遺構の時期は、古墳時代後期(6世紀後半)に位置づける。



第177図 SK948実測図 (1/30)

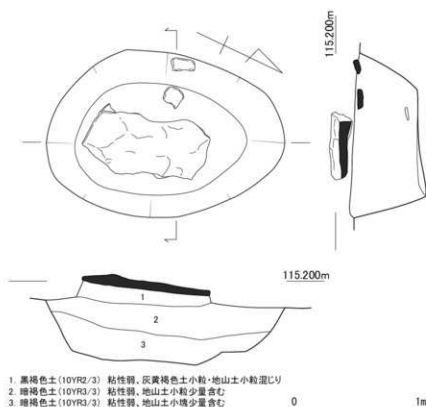
SH760出土遺物 (第150～152図)

433～439は縄文土器である。433は頭部で屈曲し胴部が球状に膨らむ器形で、外面に横位の区画沈線と単節縄文RLを施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。434は外面にランダムな条痕を施す。435は無文の深鉢である。436・437は浅鉢で、胴部で屈曲した後頭部から口縁が外反する。437は胴部屈曲部に沈線を施す。晩期後葉に比定される。438・439は深鉢の底部で、底



第178図 SK783出土遺物実測図 (1/2)

面周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。440は弥生土器の甕で、口縁上端を肥厚・拡張し内端部が内側に突出する。口縁外面には鋸歯状の刻みを施す。後期初頭に位置付けられる。441～443は土師器の甕で、口縁部は外反し胴部は丸く膨らむ。442・443は甕の熱焼部から出土したもので、442は胴部の中位にヘラ書き線が認められる。444・445は土師器の坏で、底部はケズリを施す。444は北東側支柱穴の上面に置かれていたものである。446は土師器の甕で、口縁部は正円ではなく楕円形状を呈する。胴部中位には2箇所に把手を貼り付け、中空となる底部の直上に外面側から貫通する孔を穿つ。447は土器片を転用し周縁を打ち欠いて半円形状とした土製品、448は土師



- 1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土小粒・地山土小粒混じり
 2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む
 3 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む

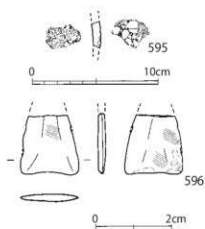
第179図 SK789実測図(1/30)

質焼成の管状土錘である。449～454は石器である。449はホルンフェルスの円礫を素材とする磨石で、上下両面を磨面とする。450は片岩製の磨製石斧で、上下両面は層状に剥離して失われ、わずかに刃部が残る。451～454は打製石斧で、石材はいずれも安山岩である。455は方柱状の凝灰岩で、側面には加工による面取りが施される。側面的一端には被熱痕が認められる。甕の前におかれていた石材と元は同一で、甕の天井石であったものを甕廃絶時に床面に下ろし、その際に折れた先端を立てて置いたものとみられる。

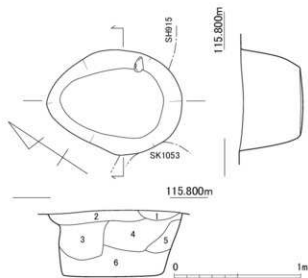
SH773 (第153図)

2区の北西部、F4・F5・G4・G5グリッドで検出した堅穴建物である。西辺の中央はSK727に切られ、中央北寄りではSK842を切っている。平面形状は方形であるが台形に近い。

長辺3.96m、短辺3.89m、深さは0.50mを測る。南西側の大部分は古墳時代前期の堅穴建物SH896のプランを検出しているが、当初は別遺構とは判断が付かず、一部を掘り下げてしまっている。また、こうした状況もあり、床面では北壁沿いに2基のビットを検出しているが、南側では明確な遺構を見つけることができなかった。従って支柱の数や配置も不明である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器の他に打製石斧や石核、叩石等の石器、混入したのとして旧石器時代の流紋岩の石核が出土している。遺構の年代は、古墳時代前期後半に位置づける。

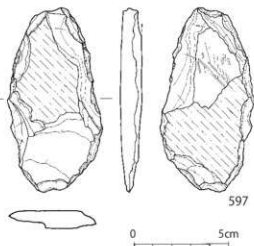


第180図 SK789出土遺物実測図(1/3・1/1)



1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化粒子少量・炭微量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、炭微量・黄褐色土小粒微量含む
3. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
4. 褐色土 (10YR4/4) 粘性強、アカホヤブロック混じり、黒褐色土が斑状に混じる
5. 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性あり、黄褐色土ブロック混じる
6. 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性あり、黄褐色土ブロック・アカホヤ少量、炭微量含む

第181図 SK791 実測図 (1/30)



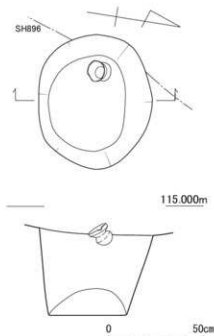
第182図 SK791 出土遺物実測図 (1/2)

SH773出土遺物 (第154・155図)

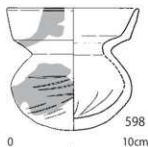
456は弥生土器の甕である。口縁部は外に折れ、端部はやや肥厚する。457は土師器の甕で、口縁は外反し端部は丸くおさめる。458・459は土師器の高坏で、坏部と脚部の接合は円盤充填による。460は流紋岩の石核で、一部に原稜面を残す。旧石器時代の遺物の混入である。461は安山岩の原石で、一部に剥離痕を残す石核である。打製石斧の素材として持ち込まれたものか。462・463は打製石斧で、いずれも安山岩を素材とする。464は蛇紋岩製の磨製石斧の破片で、表面に研磨整形による擦痕が認められる。465は安山岩の円礫を素材とする叩石で、上面中央に敲打痕が集中的に残る。側面の一部には被熱の痕跡が認められる。

SH801 (第156図)

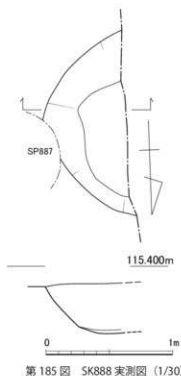
2区の中央部、G-5・H-5・H-6グリッドで検出した堅穴建物である。遺構の重複が著しく、中央から南西部にかけては古墳時代の堅穴建物SH731とSH1049、南は古墳時代後期の堅穴建物SH916、北東部は弥生時代の堅穴建物SH860、東は縄文時代の堅穴建物SH956、西は古墳時代後期の土坑SK903とそれぞれ複雑に切り合っている。SH731のところでも触れたが、SH731は本来SH801に切られる遺構であるが、調査する順番が前後して先に掘り下げてしまっており、



第183図 SK851 実測図 (1/30)



第184図 SK851 出土遺物実測図 (1/3)



第185図 SK888実測図(1/30)



第186図 SK888出土遺物実測図(1/3)

これにより南西側の遺構の状況が不明になってしまった。また、SH860も一段下げる段階まで切り合い関係を逆にとらえているなど、埋土が酷似するために混乱する状況があった。切り合い関係を整理すると、SH801が切る遺構は、年代的に古い順にSH956、SH860、SH1049、SH731、SH916・SK933となる。

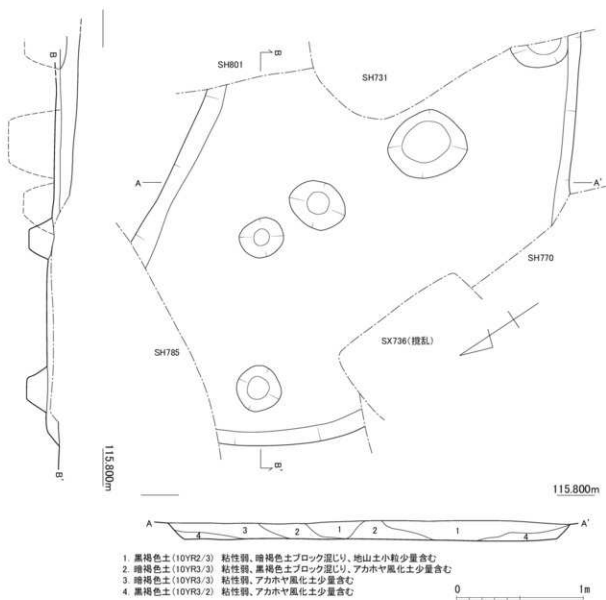
SH801の平面形状は方形で、長辺6.78m、短辺6.46m、深さは比高で0.58mを測る。埋土は4層に分層され、2~4層の下層の上を大きく上層の1層が被覆する。標準層序の第VI層を床面とし、この面で9基のピットを検出している。東側では南北に4基のピットが1列に並ぶように見受けられるが、西側でこれに対応するピットの並びはなく、主柱は4本となる可能性が高い。東壁際で5箇所焼土の広がりを確認している。

また、北壁の中央には竈を付設する。竈は東側に長さ約0.65mの扁平な板石を1枚、西側には長さ約0.35~0.45mの板石2枚を並べ、短軸を上にして斜めに立てて袖石としている。袖石の角度は20~25°である。袖石の外側にはにぶい黄褐色の粘土を盛り上げて袖部を構築する。袖石の中が燃焼部で、その中央に支柱石と、その南に焼土面の広がりが見られた。燃焼部には廃絶時の土器埋置等は見られなかったが、竈の周囲で成形に近い土器甕や鉢等が出土しており、土器を用いた何らかの祭祀行為が行われたものとみられる。竈を完掘した後、その下面を精査したところ、焼土・炭混じりの土層を埋めた土坑が検出された。土坑は不整形を呈し、長径1.18m、短径0.91m、深さ0.39mを測る。竈構築前に部分的に掘り返して整地し、地盤を補強した痕跡と考えられる。

SH801からは縄文土器、弥生土器、土師器、磨製石鏃、打製石斧、鉄鏃等の遺物が出土している。遺構の年代は、古墳時代後期(6世紀後半)に比定される。

SH801出土遺物(第157・158図)

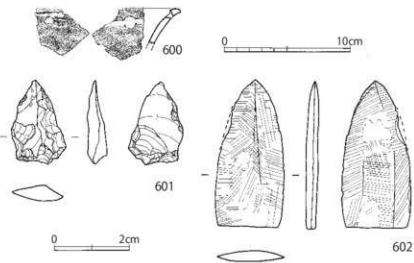
466~470は縄文土器である。466・467は外面が無文で、内面口縁下に1条の沈線を描き深鉢で、後期後葉に比定される。468は外面に横位の細沈線を描き深鉢で、晩期前半の深鉢か。469は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上着生B式に比定される。470は浅鉢の細片で、外面に赤色顔料の塗彩が認められる。471は弥生土器の甕で、口縁部を拡張し、外面に鋸歯状の刻みを、上端にハケ目を施す。472~479は土師器である。472は薄手の器壁をもつ甕で、古墳時代前期の搬入品とみられる。473~477は甕で、口縁は外反し、胴部は丸く膨らむ。478は鉢で、口縁部は短く外に折れる。479は鉢で、底面にはケズリを施し、一端に掘り込みの深い工具痕が残る。473~479は古墳時代後期に位置付けられる。480~482は石器である。480は粘板岩製の磨製石鏃で、基部を欠失する。481・482は打製石斧で、周縁部に細かく調整刃を施す。石材はいずれも安山岩である。483は鉄製の手鏃で、刃部の両端を折り返す。



第 187 図 SK933 実測図 (1/30)

SH896 (第159・160図)

2区の北西隅部近く、F-4・G-4・G-5グリッドで検出した堅穴建物である。検出当初は数棟の堅穴建物が複雑に切り合ったものと認識して調査をすすめたが、最終的には同一の遺構で大きな方形の堅穴建物となった。長辺7.65m、短辺7.16m、深さは比高で0.98mを測る。北西隅部には短い張り出しがあり、切り合う堅穴建物のわずかな残存部としてこれをSH896Bとし

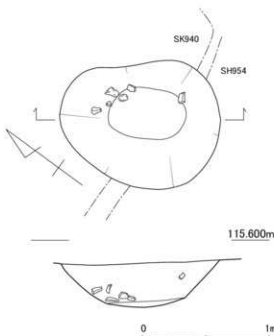


第 188 図 SK933 出土遺物実測図 (1/3・1/1)

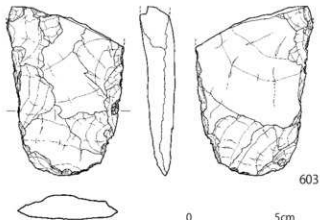
た。また、南東隅部にある張り出しはSH946として区別した。複数の遺構の切り合いという前提で調査を進めたため、遺構全体を通した土層断面の作成が十分に行えていないが、西側に設定したベルトでは、下層は細かい堆積が見られるが、上層は微妙な差異はあるものの黄褐色土粒の混じる黒褐色土が全体を被覆している。床面は黄褐色ローム質土で、中心に炉穴とみられる東西に細長い土坑と、床面で無数のピットを検出している。主柱穴は4基とみられ、また位置的にSH896Bの主柱穴(2本)と推定されるものもある。また、SH946との境目で焼土のつまった長方形の土坑を検出しているこの土坑はSH946の中心からは外れるが、SH896に付属するものには位置が合わないため、SH946の炉跡である可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、磨製石斧、叩石、鉄斧、鉄鏃、鉄刀子が出土している。特に鉄製品がやや多く出土している点は注意され、遺構規模としても古墳時代前期では最大規模の堅穴建物であり、集落の中核的な施設であった可能性が高い。

SH896出土遺物(第161～165図)

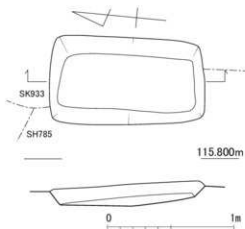
484～501は縄文土器である。484は内湾する立ち上がりで内面に縄文を施す。485は摩滅により不鮮明であるが、外面に半葦竹筒状工具によるC字状の爪形文を施す。これらは中期の船元式の可能性が高い。486は内湾する口縁の外面に横位の区画沈線と、区画内に単節縄文RLと、端部が鉤手状に折れる沈線を施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものである。487は外面が無文で、内面口縁



第189図 SK725実測図(1/30)



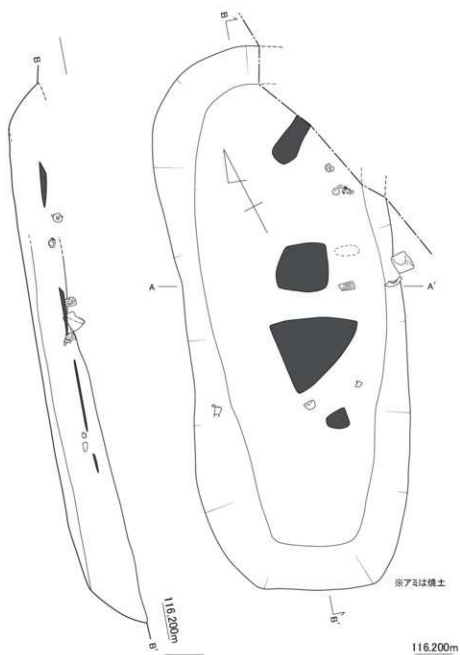
第190図 SK725出土遺物実測図(1/2)



第191図 SK736実測図(1/30)

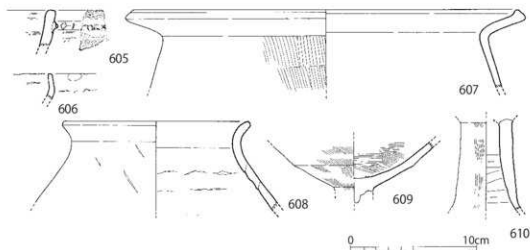


第192図 SK736出土遺物実測図(1/3)

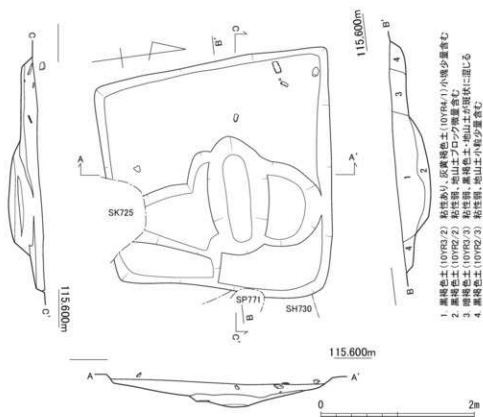


1. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性あり硬く締まる、黒褐色土(10YR2/2)ブロックを多量、焼土・炭細粒微量含む
2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/2)小塊少量、灰・焼土粒少量含む
3. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり硬く締まる、地山土・アカホヤのブロック少量、焼土小粒・灰少量含む
4. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒・炭塊混じる
5. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒・灰少量含む
6. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒・炭微量含む

第 193 図 SK747 実測図 (1/30)

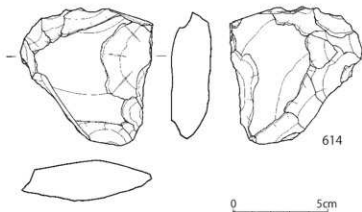
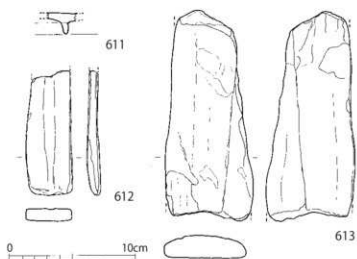


第194図 SK747 出土遺物実測図 (1/3)



第195図 SK940 実測図 (1/50)

下に1条の沈線を施す。488～491は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせるもので、晩期後葉の上管生B式に比定される。488は凸帯が幅広く高く、489・490は凸帯が高いのに対し、491は凸帯が微隆起線状である。492～494は無文の深鉢である。496・497は後期末葉の浅鉢で、外反する口縁の上端が上方に折れ、外面に1条の沈線と内面口縁下には沈線状の段が付く。496の内面には1箇所種子状の圧痕が認められる。499は浅鉢で、内面に種子状圧痕が認められる。500・501は口縁が内傾し端部が外反する浅鉢で、いわゆる逆「く」字口縁を呈する。晩期終末に位置付けられる。502～509は弥生土器である。502・503は中期の下城式甕に伴う甕で、弧状の多条沈線を施す。504・505は外面に多条の凸帯を巡らせる甕で、505は外面に赤色顔料の塗彩が認められる。506は甕の頸部で、1条の刻目凸帯を巡らせる。507は甕で、胴部屈曲部に刻みを施す。前期の所産か。508・509はいわ



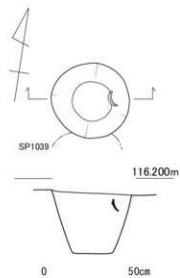
第196図 SK940 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

ゆる粗製甕で、509は胴部に多条の粗い沈線を施す。

510～532は土師器で、SH896に伴うものである。

510～514は甕で、511・512は小型品とみられる。いずれも口縁が外反し、胴部は丸く膨らむ。515～520は壺である。515・516は二重口縁壺か。518は長頸壺、519・520は小型丸底壺である。521～529は高坏で、坏部は中で屈曲し口縁は外に開く。坏部と底部の接合は円盤充填による。524・529は内面にそれぞれ種子状圧痕が認められる。530・531は器種不明、532は甕の破片で、530・531は外面に、532は内面に種子状圧痕が認められる。495は口縁端部に細かい刻みがみられることから縄文土器として図示してしましたが、土師器の鉢の可能性が高い。口縁上端に1箇所、種子状圧痕が認められる。種子状圧痕が認められた資料は分析を行ったが、種子を特定できたものはなかった。

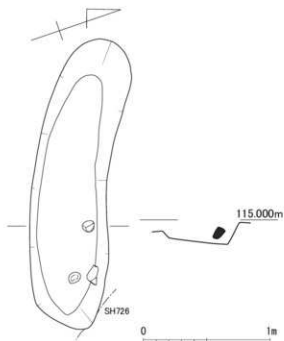
533～551は石器である。533は凹基無茎式の打製石



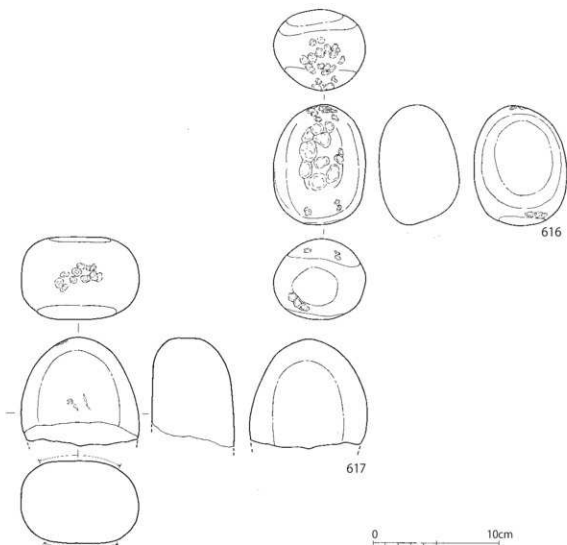
第197図 SP759実測図 (1/20)



第198図 SP759 出土遺物実測図 (1/3)



第199図 SD728実測図 (1/30)



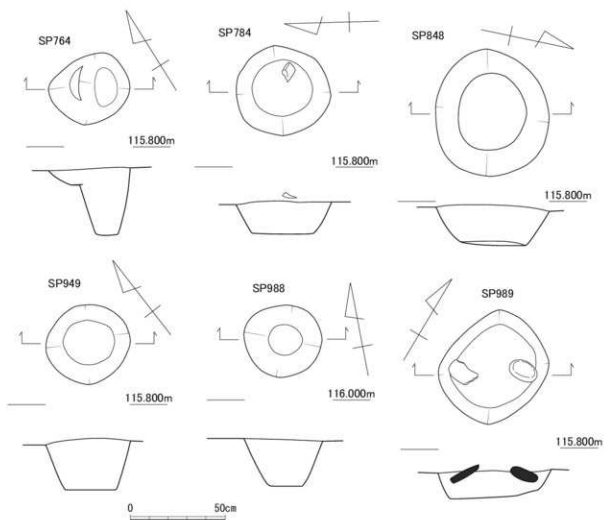
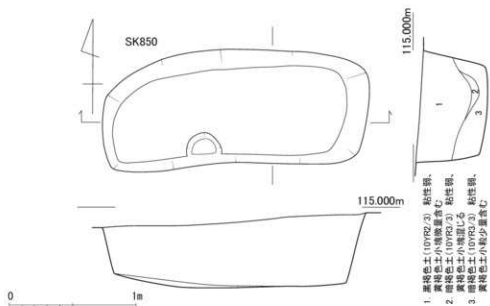
第200図 SD728 出土遺物実測図 (1/2)

鉄で、姫島産黒曜石を素材とする。534は粘板岩製の磨製石鎌で、先端部をわずかに欠く。535はチャート製の石鎌である。536は安山岩の剥片。537は磨製石斧であるが、全体に敲打痕や剥離痕を残しており、研磨段階の未製品の可能性が高い。538～544は打製石斧である。周縁に細かい調整剥離を施すが、544は剥離が乏しく未製品の可能性が高い。石材は542が千枚岩である他は安山岩である。545は磨製石斧の刃部片で、砂岩を素材とする。546は磨製石斧の破片で、表面に研磨による擦痕が残る。石材は千枚岩である。457～551は叩石で、547・548は礫の側面を使用し敲打痕が残る。549～551は細長い礫の上下両端を主な使用部とし、そこに集中的に敲打痕が認められる。549～551は石器製作に伴う叩石の可能性が高い。

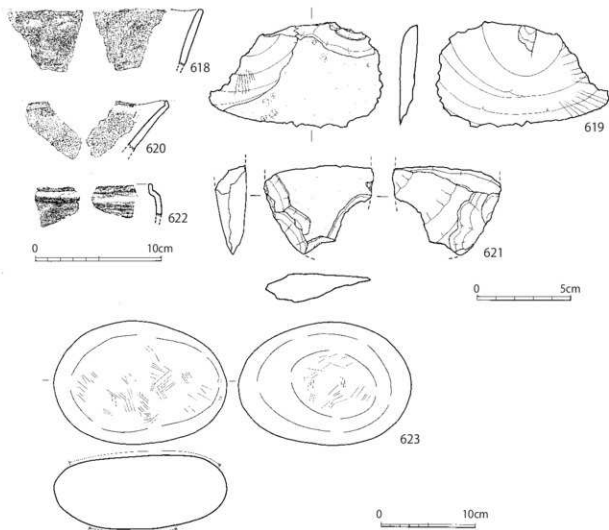
552～554は鉄製品である。552は板状鉄斧で、刃部は片刃である。553は鉄鎌で、茎部は断面径が丸く、身部は扁平となる。554は刀子である。

SH916 (第168図)

2区の南部中央、H5 グリッドで検出した竪穴建物である。北側は古墳時代前期の竪穴建物SH731と古墳時代後期の竪穴建物SH801と重複しており、本来であればSH916がSH731を切っているはずであるが、SH731を先に完掘した後にSH916を検出したため、前後が逆転している。平面形状はやや歪な方形を呈し、長辺4.34m以上、短辺2.60m以上、深さ0.44mを測る。埋土は4層に分層され、レンズ状の堆積となる。床面は標準土層の第



第201图 2区遺構実測図 (1/30・1/20)



第202図 2区遺構出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/4)

VI層で、この面で7基のピットを検出しているが、支柱穴の配置は明確ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、獣土、打製石斧が出土している。須恵器の出土から、古墳時代後期後半の遺構と判断される。

SH916出土遺物 (第167図)

555～561は縄文土器である。555～557は同一個体とみられるもので、外面は頸部を無文とし、胴部文様帯に単節縄文RLを施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものであろう。558は胴部屈曲部に1条の沈線を施す。559・560は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。559は口縁に対して凸帯が平行にはなっておらず、凸帯が口縁を水平に巡るのではなく連弧状になる可能性もある。561は深鉢の底部である。562は土師器の壺で、内外面にミガキを密に施す。563は須恵器の坏蓋で、天井部は丸く回転ヘラケズリを施す。564は獣土で、胎土にスサを含み木舞の痕跡が残る。565・566は打製石斧である。566は背面・腹面ともに煤の付着が認められることから、火を受けたものとみられる。石材はいずれも安山岩である。

SH946 (第168図)

2区の中央西寄り、G-Iグリッドで検出した竪穴建物である。北側は大型の竪穴建物SH896に大きく切られており、残存する範囲はわずしかかない。平面形状は方形を呈し、長辺5.30m、短辺2.36m以上、深さ0.59mを測る。土層断面の層序は9層あり、うち1・2層はSH896の堆積層で、残る7層がSH946の土層である。床面は黄

褐色土ローム質土で、この面で検出できた柱穴等の遺構はないが、SH896との境目にある焼土の詰まった方形土坑は、位置的にSH896に付属するものの可能性は低く、SH946の炉跡である可能性が高い。検出した範囲に限られるが、柱穴がみられないため、主柱穴は2基の可能性が考えられよう。SH896の床面にあるピットのどれかが該当するものと思われるが、特定できていない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。遺構の時期は、古墳時代前期後半に位置づける。

SH946出土遺物（第169図）

567～573は縄文土器である。567は波状口縁の深鉢で、口縁部内面に沈線状の段が付く。568は外面に粗い条痕を施す深鉢で、晩期前半であろう。569～571は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。このうち569は凸帯の形状が特徴的で、外反させた口縁部の上に粘土を足して新たに口縁部を追加することで、凸帯状にしているようにも見える。凸帯の出現を考える上でポイントになりそうな資料である。572は浅鉢で、外反する口縁部の内外面に沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。573は深鉢の胴部で、外面に種子状圧痕が認められる。分析の結果は不詳であった。574・575は弥生土器である。574は口縁部を欠くが、外面に2条の刻目凸帯を巡らせるもので、中期の下城式壺に比定される。575は甕の底部である。576は土師器の小型丸底甕で、口縁部を欠く。

SH1049（第170図）

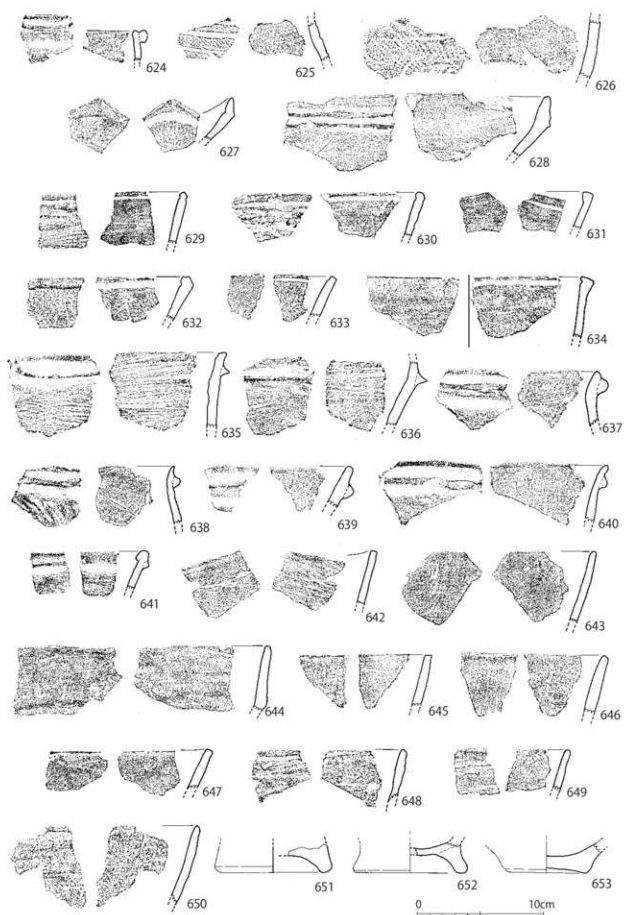
2区の中央、G-5・H-5グリッドで検出した竪穴建物である。上部は全面が古墳時代後期の竪穴建物SH801に切られ、南西部は古墳時代前期の竪穴建物SH731に大きく切られている。SH801を掘り下げる過程で、周囲が床面に達した深さでも中央部で床面がでないことから面的に精査したところ、方形に掘り込むプランを確認し、遺構の存在を把握した。平面形状は方形を呈し、長辺400m、短辺389m、深さ0.50mを測る。遺構の切り合いが多く、全体を通した土層断面の観察はできなかった。床面では6基のピットを検出しており、うち北東側中央寄りの深い柱が主柱穴になるとみられるが、その他の主柱穴は明確ではない。また、北東部を中心に関係の土師器甕や残りの良い高坏等の遺物の出土がみられた。遺物は縄文土器、土師器、土器片、打製石斧、礫器、石皿、土玉が出土している。出土遺物から、古墳時代前期後半の遺構である。

SH1049出土遺物（第171・172図）

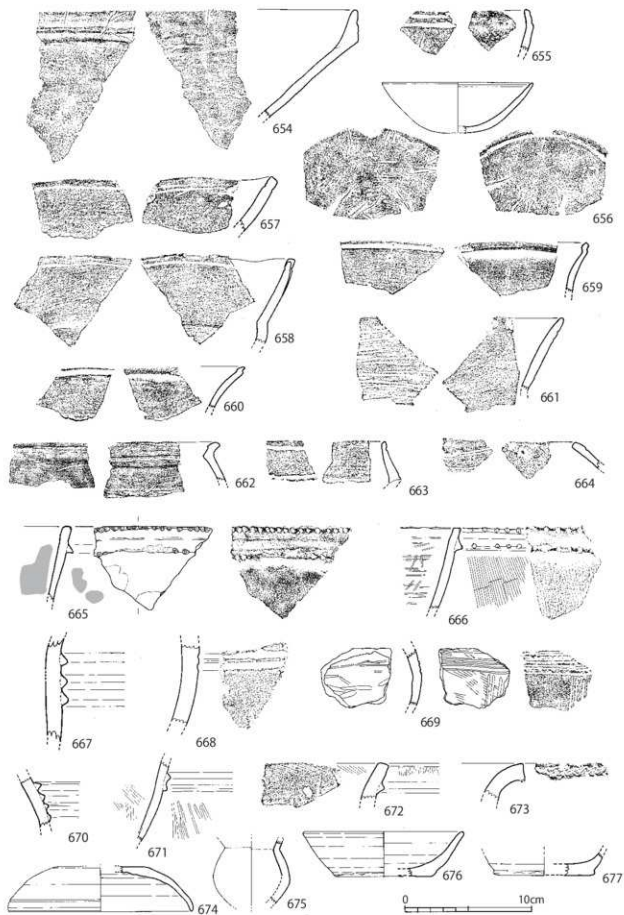
577は縄文土器である。口縁は内傾し、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。578～586は土師器である。578～581は甕で、口縁は外反し胴部は丸く膨らむ。外面には煤の付着が認められ、578は被熱のためか表面が大きく剥離している。582・583は小型器台で、582はボウル形を呈する受部、583は脚部である。584～586は高坏で、坏部は平坦な底面から屈曲して口縁が外に開く。脚部は下端で屈曲し、裾部が広がる。坏部との接合は円盤充填である。587は土玉で、外面に細線が巡る。588～591は石器である。588・589は打製石斧で、いずれも背面に自然面を残す剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。589は背面原稜面に被熱の痕跡が認められる。石材は588が安山岩、589はアイサイトである。590は砂岩の円礫を用いた叩石で、左端部を中心に敲打痕が残る。側縁の一端を打ち欠いており、礫器に転用した可能性もある。591は泥岩製の石皿で、上面を使用面とし、細かい条痕が認められる。

SK737（第173図）

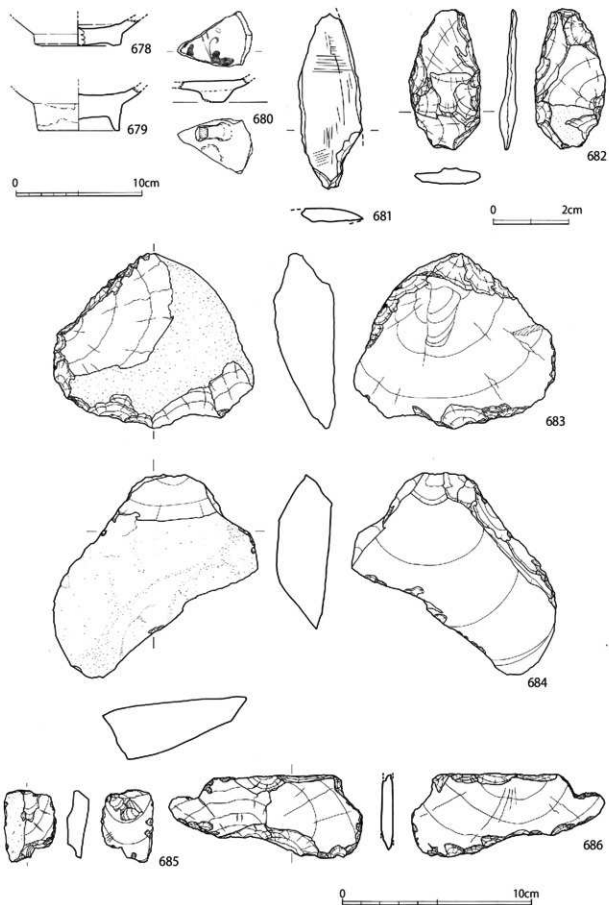
2区の中央西寄り、H-4グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、北西部ではピットSP997を切っている。長径0.97m、短径0.83m、深さ0.27mを測る。埋土は4層に分層され、細かい堆積状況を示す。遺物は中央の検出面あたりで打製石斧1点が出土した他、細片ながら縄文土器、土師器が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。



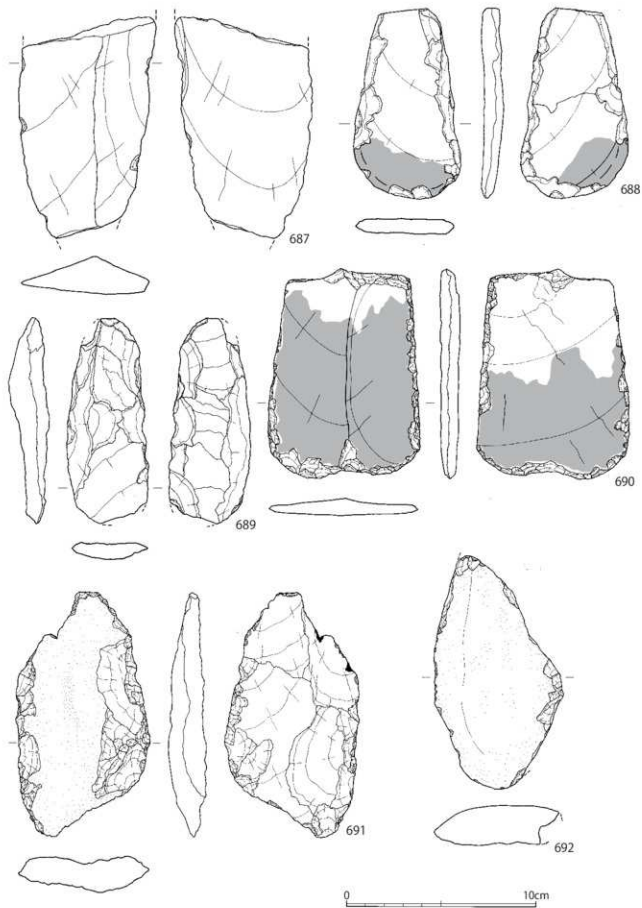
第203图 2区出土遗物实测图①(1/3)



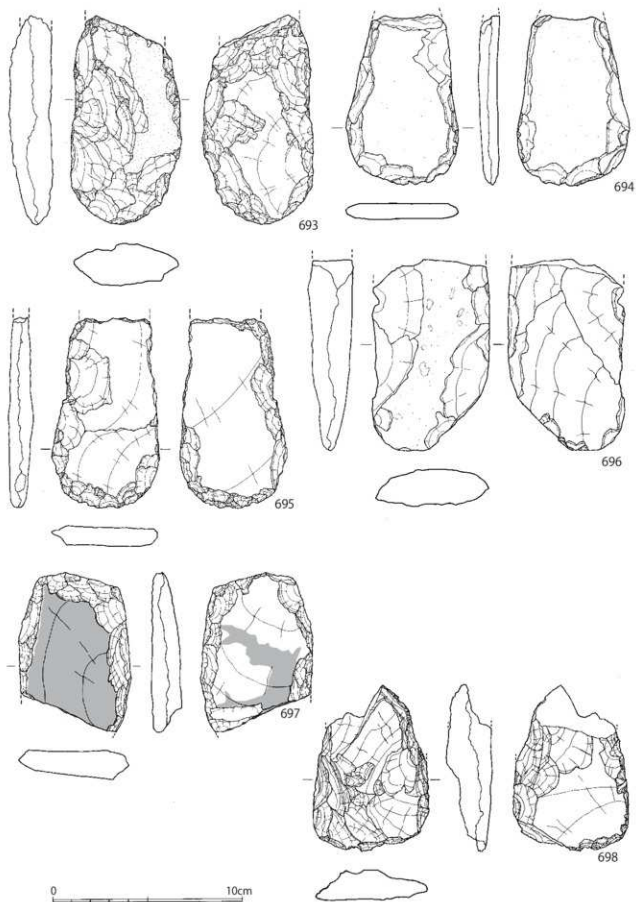
第204图 2区出土遗物实测图② (1/3)



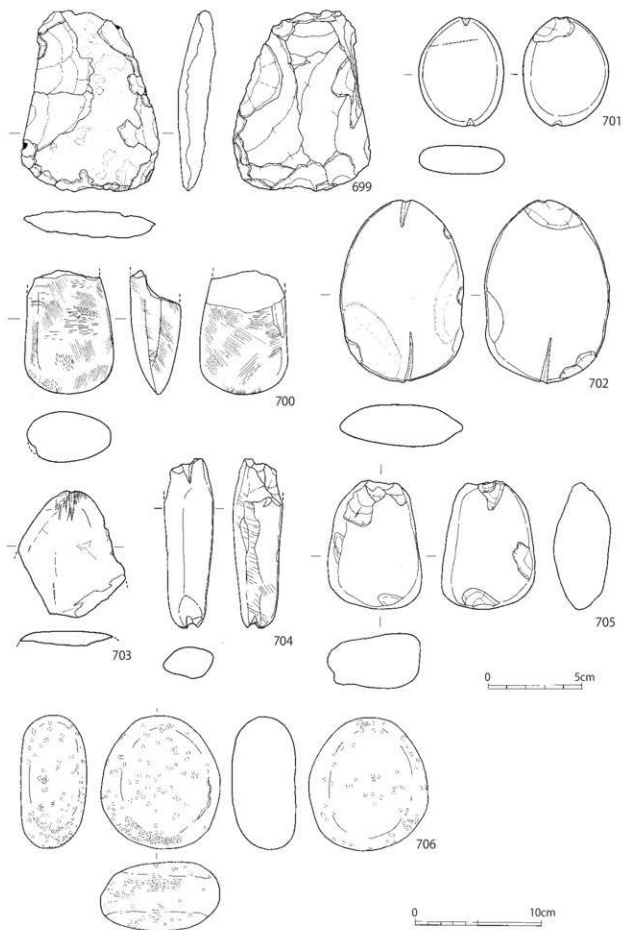
第 205 图 2 区出土遺物実測図③ (1/3 · 1/1 · 1/2)



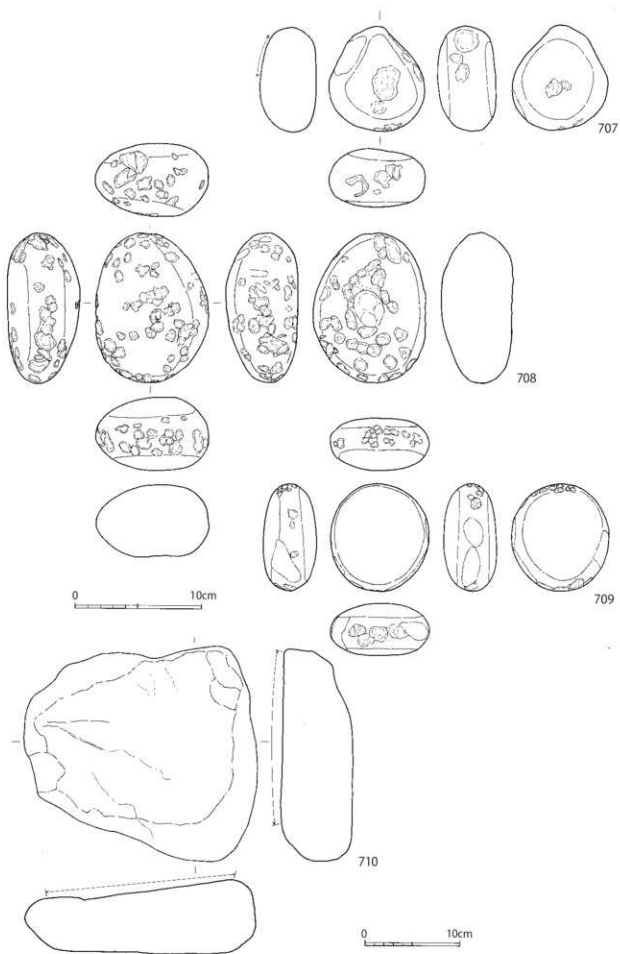
第206图 2区出土遺物実測図④(1/2)



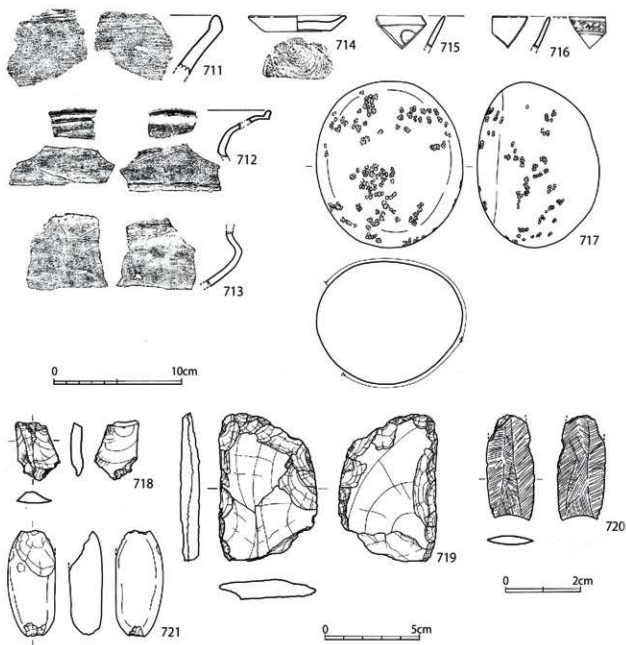
第 207 图 2 区出土遗物实测图⑤ (1/2)



第 208 图 2 区出土遗物实测图⑥ (1/2 · 1/3)



第209图 2区出土遗物实测图⑦ (1/3·1/4)



第210図 1・2区出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

SK737出土遺物 (第174図)

592は打製石斧である。背面に自然面を残す安山岩の剥片を素材とし、周縁部に細かい調整割離を施す。

SK761 (第175図)

2区の南部、H-5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SK955を切る土坑で、平面形状は略楕円形を呈し、長径0.87m、短径0.66m、深さ0.20mを測る。遺物は土師器、打製石斧が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK761出土遺物 (第176図)

593は打製石斧である。上部を欠失するが、刃部を中心に細かい調整割離を施す。表面の一部には煤の付着が認められる。石材は泥岩である。

SK783 (第177図)

2区の中央西寄り、H5グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みのある長方形を呈し、長辺1.84m、短辺1.17m、深さ0.09mを測る。掘り込みは浅い皿状を呈し、床面は平坦である。遺物は縄文土器、土師器、打製石斧が出土している。遺物が少ないため時期比定の決め手を欠くが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK783出土遺物 (第178図)

594は打製石斧である。背面に自然面を残す安山岩の横長剥片を素材とし、周縁部に調整剥離を施すが、剥離は粗く未製品の可能性が高い。

SK789 (第179図)

2区の北西部、G4グリッドで検出した土坑である。重機により表土を除去した際に扁平な安山岩の巨石が出土したため、その位置を止めて周辺の遺構検出を行ったところ、土坑の輪郭を検出した。位置的には古墳時代前期の大型竪穴建物SH896の上にあたり、その埋没後に構築された遺構である。平面形状は略楕円形を呈し、長径1.89m、短径1.32m、深さ0.62mを測る。安山岩の板石は長さ約1.00m、幅約0.50mで、大人5~6人でようやく持ち上げることができるくらいの重さがある。こうした板石は、上田原東遺跡では竈を埋めた後にその上を封じるように置かれる例があるが、この周囲には竈はなく、この場所に置かれた理由は不明である。何か別のもの、痕跡の残りにくい有機物が何かを埋めて封をした、あるいは竪穴建物SH896の廃絶に伴い置かれた可能性もある。遺物は弥生土器、土師器、磨製石鎌が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、SH896との切り合いや土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK789出土遺物 (第180図)

595は器種不明の土器細片である。外面に無数の凹みがあり何らかの圧痕の可能性が考えられたが、分析の結果は不詳であった。596は磨製石鎌で先端部を欠失する。石材は蛇紋岩である。

SK791 (第181図)

2区の中央部、G5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SH915を切る土坑で、平面形状は鶏卵形を呈し、長径1.07m、短径0.82m、深さ0.50mを測る。埋土は6層に分層される。遺物は土師器、打製石斧が出土している。遺物が少なく遺構の時期比定は困難であるが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK791出土遺物 (第182図)

597は打製石斧である。両面に節理痕のある千枚岩を素材とし、側縁部に調整剥離を施す。

SK851 (第183図)

2区の北西部、G4グリッドで検出した土坑である。位置的には古墳時代前期の大型竪穴建物SH896の西壁の中央付近に位置し、これを切っている。平面形状は略円形を呈し、長径0.71m、短径0.60m、深さ0.47mを測る。検出面の西壁寄りで、土師器の小型の

二重口縁壺の完形品が出土している。土師器壺は底部を下にして口縁部がやや傾いた状態で出土しており、元々は正位置で置かれていたものが土圧等で傾いたのであろう。何らかの土器を用いた祭祀行為の痕跡と思われる。出土土器から、古墳時代前期後半の遺構と判断される。

SK851出土遺物（第184図）

598は土師器の小型二重口緑甕である。球状の胴部から頸部で屈曲し、口縁は外反した後中はほどで上方へ折れる。外面には黒斑が認められる。

SK888（第185図）

2区の中央西壁際、H-4グリッドで検出した土坑である。西側は調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は円形を呈し、長径1.47m、短径0.66m、深さ0.41mを測る。遺物は縄文土器、土師器が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しい。土師器が出土していることから、古墳時代の遺構と判断される。

SK888出土遺物（第186図）

599は縄文土器である。口縁は外に開き端部がわずかに内に折れ、外面に2条の沈線を施す。口縁部の内側には段が付く。後期中葉の太郎迫式に比定される。

SK933（第187図）

2区の中央部、G-5・H-5グリッドで検出した土坑である。北は縄文時代の竪穴建物SH770、西はSH785とそれぞれ一部分が重複しているが、縄文時代の竪穴建物の方が先に検出して掘り下げており、この両者との平面での関係は押さえられなかった。一方、東は古墳時代の竪穴建物SH801・SH731と重複し、西の一部はSK736に切られている。SH731についても調査順序を間違えており、本来はSK933がSH731を切るものである。SK933は楕円形状の平面形状を呈するとみられ、長径4.33m以上、短径2.33m以上、深さ0.27mの規模を測る。埋土は4層に分層される。床面では5基のピット状遺構を検出している。遺物は縄文土器、土師器、土器片、磨製石鏃、石鏃未成品が出土している。土師器の出土から、古墳時代の遺構と判断される。SH770から出土の須恵器が、SK933との切り合い関係の把握ミスから取り込まれたものであるなら、SK933は古墳時代後期ということになるが、可能性に止めておきたい。

SK933出土遺物（第188図）

600は縄文土器である。口縁は外反し、端部は丸く肥厚する。口縁直下に補修孔を穿つ。601は姫島産黒曜石の薄片に細かい調整剥離を加えて三角形に加工しており、打製石鏃の未製品と思われる。602は黒色粘板岩製の磨製石鏃で、基部は平坦である。

第5節 古代・中世の遺構と遺物

2区における古代の遺構は土坑4基と少ない。中世の遺構はわずかにピット1基があるだけである。

SK725（第189図）

2区の北部中央、G-5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SH954と古代の土坑SK940の境目に位置し、この両者を切っている。平面形状はやや歪な円形を呈し、長径1.27m、短径1.02m、深さ0.37mを測る。内部の掘り込みは丸みをもち、断面形はボウル形を呈する。土坑の北半の床上から数点の遺物が出土している。遺物は土師器、打製石斧が出土している。年代比定できる遺物に乏しいが、SK940との切り合い関係から古代以降の遺構である。

SK725出土遺物（第190図）

603は打製石斧である。上半部を欠くが、周縁部に調整剥離を施す。石材は安山岩である。

SK736 (第191図)

2区の中央部、G-5・H-5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の堅穴建物SH785と古墳時代の土坑SK933をそれぞれ切っている。平面形状は長方形を呈し、長辺1.23m、短辺0.71m、深さ0.19mを測る。掘り込みは逆台形状を呈し、床面はほぼ平坦である。遺物は縄文土器が出土しているが、重複するSH785から巻き込んだものである。他に年代比定できる遺物はないが、SK933との切り合い関係から古墳時代以降となり、SK933が古墳時代後期後半であるなら、SK933はそれ以降、古代にまで下る可能性が高い。

SK736出土遺物 (第192図)

604は縄文土器の浅鉢である。外反する口縁の端部を上方に折り、外面に1条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。

SK747 (第193図)

2区の南東隅部、H-6グリッドで検出した土坑である。古墳時代後期の堅穴建物SH750の南東部と重複しており、SK747がSH750を切っている。北側の一端が調査区外に続くが、平面形状は南北に細長い楕円形状を呈し、長径4.40m、短径1.74、深さ0.49mを測る。埋土は6層に分層され、ほぼ全体に焼土や炭が混じっている。土坑の上部では4箇所に焼土の広がり認められた。遺物は弥生土器、土師器が出土している。SH750との切り合い関係から古墳時代後期以降であり、古代に下る可能性がある。

SK747出土遺物 (第194図)

605・607は弥生土器である。605は外面口縁下に1条の刻目凸帯を巡らせるもので、中期の下城式甕に該当する。607は甕で、外反する口縁の端部を上方に積み上げる特徴から中期に比定される。606は土師器の鉢か。608は土師器の甕で、口縁部は外反し端部は丸い。古墳時代後期に位置付けられる。609・610は土師器の高坏で、古墳時代前期の遺物である。

SK940 (第195図)

2区の北部中央、F-5・G-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は方形を基調としてやや台形状を呈し、北東隅部は古墳時代の堅穴建物SH730に、南辺の一端は古代の土坑SK725にそれぞれ切られている。遺構の規模は長辺3.28m、短辺3.12m、深さ0.34mを測る。遺構の形状や規模から堅穴建物の可能性も考えられたが、支柱穴等の付属する遺構が認められないことから土坑として扱った。埋土は4層認められ、3・4層を切って1・2層が掘り込む状況が見て取れる。土坑内部には不定形の掘り込みがあり、これが1・2層の掘り込みと一致する。つまり、この不定形土坑はSK940埋没後のもので、両者に直接の関係はない。その他に床面で検出された遺構はない。遺物は弥生土器、土師器、砥石、礫器が出土している。細片ではあるが古代の土師器が出土しており、古代の遺構と判断する。

SK940出土遺物 (第196図)

611は土師器の高台付椀である。612・613は砥石で、612は上面を、613は上下両面を使用面とする。石材はいずれも結晶片岩である。614は風化したホルンフェルスの周縁に粗い剥離を加えて刃部を作り出すもので礫器とした。縄文時代早期頃の石器が混入したものであろう。

SP759 (第197図)

2区の南東隅部、I-6グリッドで検出したピット状遺構である。平面形状は略円形を呈し、長径0.41m、短径0.39m、深さ0.43mを測る。ピットの上部から白磁皿が出土しており、遺構の時期は中世前期に位置付けられる。

SP759出土遺物（第198図）

615は中国産の白磁皿である。内面及び外面の上部に施軸し、外面下半から底部は露胎となる。

第6節 その他の遺構

本節では前節までで取り上げた遺構以外で、帰属時期が不明なものを中心に報告する。なお、ピット等小規模な遺構については詳述しないので、第3分冊巻末の遺構一覧表を参照されたい。

SD728（第200図）

2区の北西隅部、F-4グリッドで検出した溝状遺構である。東西に細長く延びるもので、長さ2.30m、幅0.60m、深さ0.25mを測る。遺物は弥生土器の可能性のある土器片の他に叩石・磨石が出土しているが、時期比定できる遺物が全くなく、遺構の時期は不明である。

SD728出土遺物（第201図）

616は砂岩の円礫を用いた叩石である。上面及び長軸の上下両端を使用しており、敲打痕が認められる。617は角閃安山岩の円礫を素材とした叩石・磨石である。上面を磨面とし、上端側面を叩石としており敲打痕が残る。

2区遺構出土遺物（第202図）

618はSP764から出土した縄文土器で、無文の深鉢である。619はSP784から出土した安山岩の剥片で、背面に自然面を残す。こうした剥片は打製石斧によく見られ、619も打製石斧の製作に伴って生じた残滓の可能性はある。620はSP848から出土の縄文土器で、口縁は波状を呈し、内面に1条の沈線を施す。621はSP949出土の打製石斧である。大部分が欠失するが、側縁に調整剝離が認められる。石材は砂岩である。622はSP988出土の縄文土器である。623はSP989から出土した台石である。砂岩の円礫を素材とし、上下両面を使用面として両面に細かい擦痕が残る。

第7節 包含層その他の出土遺物

表土除去時や遺構検出時等、遺構に伴わずに出土した遺物のうち主要なものを第203～209図に示す。

624～664は縄文土器である。624は口縁部に紐状の隆帯を貼り付けて拡張し、上端部に沈線状の凹みがみられる。後期の鐘崎式あたりに位置付けられようか。625は横位の区画沈線に単節縄文RLを施す。626は胴部片で、単節縄文RLを施す。627は波状口縁の深鉢で、内面口縁下に1条の沈線を施す。これらは後期中葉に比定される。628は口縁部が三角形に肥厚し、外面に凹線を巡らせるもので、後期後葉の三万田式である。629～634は外面が無文で、内面口縁下に1条の沈線を施す深鉢である。後期後葉に比定される。635～641は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施すもので、晩期後葉の上管生B式である。635・636は凸帯が高くシャープで、635は凸帯が口縁に伴行して1周するのではなく連弧状となる。637～640は凸帯が高く、断面形状が蒲鉾状に丸みをもつ。上管生B式に一般的断面三角形の凸帯とは趣が異なり、635～640は上管生B式の中でも古相を示す可能性がある。642～650は無文の深鉢である。651～653は深鉢の底部で、651・652は高台状に高い上げ底となる。654～663は浅鉢である。654は口縁が断面三角形に肥厚し、外面に2条の凹線を施すもので、後期後葉の三万田式に比定される。655は内傾する口縁の外面に2条の沈線を巡らせる。656はボウル形の浅鉢で、内面口縁下に1条の沈線を巡らせる。657・658は外傾する口縁の内外面に粗い沈線を施す。659・660は外反する口縁の端部が上方に折れ、内外面に1条の沈線を施す。これらは後期後葉～末葉に属する。661は外面に粗い多条の沈線を施すもので、晩期前半に比定される。662は内傾する頸部から口縁が外反し、端部は丸く肥厚する特徴から晩期後葉に位置付けられる。663は口縁が逆「く」字状を呈し、外面に沈線を施す。晩期終末に比定される。664は口縁が内傾

し、外面に細沈線文を施すもので、後期後葉の注口土器であろう。

665～673は弥生土器である。665・666は外面口縁下に1条の刻目凸帯を配し、口縁外端部に刻みを施す甕で、中期の下城式に比定される。667・668はいわゆる粗製甕で、667は多条の凸帯を、668は沈線を施す。669～673は壺である。669は胴部で、横位の多条沈線と、そこから垂下する多条沈線が見られる。重弧文を施すもので、下城式に伴う壺である。670は外面に断面三角形状、671は断面「M」字状の凸帯を巡らせる。692は外反する口縁の外面に刻みのない凸帯を貼り付ける。673は口縁が強く外反し、端部に波状文を施す。674は須恵器の坏蓋で、天井部は丸く、天頂付近に回転ヘラケズリを施す。675は小型の土師器壺、676・677は古代の土師器坏である。678・679は白磁碗の底部で、678は見込み部に段が付く。680は施軸陶器の向付で、鉄絵で文様を描く。志野の製品である。

681～710は石器である。681は緑色片岩製の磨製石鎌片で、剥離痕が残る未製品とみられる。682は黒色粘板岩製の磨製石鎌で、研磨痕がみられない整形段階の未製品である。683はホルンフェルスの剥片の側縁に粗い剥離を施した礫器か。684はホルンフェルスの剥片で、表面が風化している。683・684は縄文時代早期頃の石器の可能性が高い。685は緑色チャートの剥片である。686は黒色粘板岩の剥片で、磨製石鎌の素材であろう。687は凝灰岩の縦長剥片である。688は周縁に剥離痕残る石斧であるが、刃部を研いっており磨製石斧の未製品である。表裏ともに煤の付着が認められる。689～699は打製石斧である。690・697は被熱の痕跡が認められる。691・692・696は未製品か。石材は693・695・697が安山岩、694は緑色片岩、696は閃緑岩、698はホルンフェルス、699はデイサイトである。700は砂岩製の磨製石斧で、基部を欠失する。701～705は石錘である。701～704は素材礫の長軸にスリット状の切れ目を入れて縄掛け部を創り出す。石材は701が砂岩、その他は粘板岩である。705は打欠石錘で、砂岩の円礫の長軸部に粗い打欠きを加え縄掛け部とする。706～709は叩石・磨石類である。706は角閃安山岩の円礫を用いた叩石で、特に下端部を集中的に叩いている。707は砂岩製の叩石で、上下両面の中央部に使用による凹みがみられる。708は上下両面、側縁部に顕著な敲打痕を残す。709は叩石・磨石で、上下両面を磨面、側縁部を叩石としている。710は台石で、上面を使用面とする。

第210図は排土からの採集品であるが、出土場所が1区と2区のいずれかが特定できないものを掲載した。711は縄文土器の深鉢で、外反する口縁の端部が上方に折れる。712・713は縄文土器の浅鉢で、712は外反する口縁の端部が上方に折れ、外面に1条の沈線を施す。713は胴部の中位で屈曲する。714は土師器小皿で、底面に回転糸切り離し痕が残る。715は中国産の青磁碗、716は中国・景德鎮窯の青花碗で、いずれも中世の遺物である。717は砂岩の円礫を用いた叩石・磨石で、上面及び右側面に敲打痕が残る。718は緑色チャートの剥片である。719は安山岩の縦長剥片を素材とする打製石斧で、側縁部に調整剥離を施す。720は磨製石鎌で、先端部を欠失する。石材は黒色粘板岩である。721は細長い安山岩の円礫を用いた打欠石錘で、長軸両端を打ち欠いて縄掛け部を創り出す。

第1表 上田原東遺跡(1区) 遺物観察表(土器・陶磁器)

神田番号	区画	遺構	口葺(形状・高さ)	厚瓦(形状・高さ)	瓦葺	瓦葺	文様・調整	内面	外面	内面	外面	土質	石	石灰	その他	備考
第014	2 1区	深鉢		2.8-a	灰層・研砂		外周									
第134	5 1区	深鉢	口葺	2.4-a	土層・土質・一部研砂		外周									
第154	6 1区	深鉢		5.7-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第174	7 1区	深鉢		6.4-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第184	8 1区	深鉢		8.5-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第194	9 1区	深鉢		6.0-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第204	10 1区	深鉢		13.8-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第214	11 1区	深鉢		4.9-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第224	12 1区	深鉢		5.4-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第234	13 1区	深鉢		4.8-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第244	14 1区	深鉢		1.8-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第254	17 1区	深鉢		2.8-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第264	23 1区	深鉢		4.6-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第274	24 1区	深鉢		3.1-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第284	25 1区	深鉢		4.2-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第294	27 1区	深鉢		6.9-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第304	29 1区	深鉢		2.6-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第314	33 1区	深鉢		3.2-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第324	34 1区	深鉢		4.0-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第334	35 1区	深鉢		3.6-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第344	36 1区	深鉢		3.7-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第354	40 1区	深鉢		4.7-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第364	42 1区	深鉢		4.7-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第374	43 1区	深鉢		3.4-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第384	44 1区	深鉢		3.8-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第394	45 1区	深鉢		4.4-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第404	46 1区	深鉢		3.5-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第414	47 1区	深鉢		3.5-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第424	48 1区	深鉢		3.7-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第434	49 1区	深鉢		2.0-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第444	50 1区	深鉢		3.9-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第454	51 1区	深鉢		4.9-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第464	52 1区	深鉢		4.5-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第474	55 1区	深鉢		2.2-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第484	56 1区	深鉢		4.5-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第494	57 1区	深鉢		15.2-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第504	58 1区	深鉢		11.2-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第514	59 1区	深鉢		20.0	灰層・土質・一部研砂		外周									
第524	64 1区	深鉢		2.4-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第534	63 1区	深鉢		4.7-a	灰層・土質・一部研砂		外周									
第544	65 1区	深鉢		3.0-a	灰層・土質・一部研砂		外周									

標記番号	区域	遺構	副構	口径 (最大幅)	原高 (残存高)	崖部径	文様・副構		色澤		土質		備考	
							外周	内周	外周	内周	焼成 石	長石・石英 量		
第19回	66 1区 SH537	縄文土器	鉢		5.8-a		32F・巻口多環文様付・ 研磨	32F・粗い3連々	黒褐色	黒褐色～褐色	多	少	多	
	67 1区 SH537	縄文土器	瓦鉢		2.9-a		研磨		黒褐色	黒褐色	少	少	多	
	68 1区 SH537	縄文土器	底部		1.2-a	6.0	F・研磨		黒褐色	黒褐色	少	多	多	
	69 1区 SH537	弥生土器	器底		6.7-a		32F・粗口突帯・研磨		黒褐色	黒褐色	少	多	少	
	70 1区 SH537	弥生土器	壺		3.9-a		F・粗口突帯	F	黒褐色	黒褐色	少	少	多	内面灰白着色 内面内容物の痕跡あり
	71 1区 SH537	土師器	小型丸底壺		9.9		32F・不定方向の凸條付	32F・粘土層を1周・筋圧直	黒褐色	黒褐色	少	多	多	内面に朱紅色の遺跡 跡あり 外周縁部による凹溝
	72 1区 SH537	土師器	甕		15.6		40F・32F	工具付・32F・指押性	黒褐色	黒褐色	少	少	少	外周灰白着色 外周縁部による凹溝
第20回	73 1区 SH537	土師器	甕	(13.3)	25.5		40F後付・32F	工具付	黒褐色	にぶい・黒褐色	少	少	少	内面灰白着色
	74 1区 SH537	土師器	甕	(15.6)	19.7-a		32F・外方向の凸條付・F 方向の凸條付	32F・F	黒褐色	黒褐色	多	多	多	内面灰白着色
	75 1区 SH537	土師器	甕	11.3	25.7		32F・凸條・凸條付の凸條付・ 筋圧直	32F・凸條・凸條付の凸條付・ 筋圧直	黒褐色	黒褐色	少	少	多	外周灰白着色
	76 1区 SH537	土師器	甕	(14.0)	25.3		32F・研磨	32F・F・筋圧直・組合直	黒褐色	黒褐色	少	少	多	外周灰白着色
	77 1区 SH537	土師器	甕	19.8-a			工具付	40F後付・32F	黒褐色	黒褐色	少	多	多	外周灰白着色
	78 1区 SH537	土師器	甕	(10.6)	23.3		F・研磨・一部3連々・32F	F	にぶい・黒褐色	にぶい・黒褐色	少	少	少	外周灰白着色
	79 1区 SH537	土師器	甕	11.3	13.35		32F・F	32F・F	にぶい・黒褐色	にぶい・黒褐色	少	少	少	内面凹溝あり
	80 1区 SH537	土師器	小型丸底壺		6.6-a		F・F方向の凸條付	F・筋圧直	黒褐色	黒褐色	少	少	少	内面凹溝あり
	81 1区 SH537	土師器	三斗笠		7.3	6.8~7.6	筋圧直・F	F	黒褐色	黒褐色	少	多	少	外周灰白着色
	82 1区 SH537	土師器	三斗笠		4.0-a	(5.2)	F	工具付	にぶい・黒褐色	にぶい・黒褐色	少	少	少	外周灰白着色
第21回	83 1区 SH537	土師器	高杯		3.7-a	4.6	F・工具付	しぼり直・F	褐色	褐色	少	少	少	内面へろ文号
	84 1区 SH537	土師器	高杯		11.3-a		40・F後付・研磨	32F・F	黒褐色	黒褐色	少	多	多	内面凹溝あり
	85 1区 SH537	土師器	高杯		8.5-a	10.8	40F・32F・研磨	40F	黒褐色	黒褐色	多	多	多	内面凹溝あり
	86 1区 SH537	土師器	高杯		7.8-a	12.0	40F・凸條付の凸條付	40F	黒褐色	黒褐色	多	多	多	内面凹溝あり
	87 1区 SH537	土師器	高杯		9.4-a	(11.4)	F・32F	F・32F・F	黒褐色	黒褐色	少	少	少	内面凹溝あり
	88 1区 SH610	土師器	鉢	(10.7)	3.35		F	F	にぶい・黒褐色	にぶい・黒褐色	少	少	少	内面赤褐色
	89 1区 SH620	縄文土器	深鉢		4.4-a		F	F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	少	成文口縁
	100 1区 S620M	縄文土器	深鉢		2.7-a		織文・花綱・研磨	F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	少	
	101 1区 S620	縄文土器	深鉢		102.1区 S620		F・突帯・F	F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	少	
	103 1区 S620M	縄文土器	瓦鉢		3.1-a		F	F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	少	
第22回	104 1区 S620	縄文土器	瓦鉢		2.4-a		F	F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	少	1ヶ所穿孔あり
	105 1区 S620M	弥生土器	甕		4.4-a		F・研磨・粗口突帯	F・筋圧直・3連々	にぶい・黒褐色	にぶい・黒褐色	少	少	少	
	106 1区 S620	弥生土器	甕		5.4-a		F・32F・凸條付	工具付	黒褐色	黒褐色	少	多	少	
	107 1区 S620C	弥生土器	甕		2.0-a		32F	32F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	少	口縁に浮文 外周縁部凸條付
第23回	108 1区 S620	弥生土器	甕		2.9-a		32F・F・研文	32F・F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	少	口縁に浮文 外周縁部凸條付
	109 1区 S620S720	弥生土器	高杯		5.7-a		F	F	にぶい・褐色	にぶい・褐色	少	少	多	口縁に浮文 外周縁部凸條付
	110 1区 S620	弥生土器	甕	(18.8)	16.2-a		32F・F方向の凸條付	32F方向の凸條付・F・筋圧直	黒褐色	黒褐色	少	多	多	外周灰白着色
	111 1区 S620	土師器	甕	(15.0)	7.5-a		40F後付・工具付	32F・筋圧直	黒褐色	黒褐色	少	多	多	外周灰白着色
	112 1区 S620	土師器	甕	12.3	18.7		32F・研磨・筋圧直	32F・F・筋圧直	黒褐色	黒褐色	多	多	多	外周灰白着色

神田番号	区域	道州	郡	口数 (精算時)	職数 (精算時)	郡界理	文書・図表		色紙		加工		備考
							外国	内国	外国	内国	石	石	
第069回	113 1区 S-620	土師郡	土師郡 裏	13.7	29		32号・下・後1号/方向0号・下・ 32号・前0号・下	茶褐色	茶褐色	少	少	内面1号付書	
	114 1区 S-620	土師郡	土師郡 裏	6.6a	a		32号・前0号・下	茶褐色	茶褐色	少	少	外面1号付書	
	115 1区 S-620	土師郡	土師郡 小笠原武彦	7.0a	a		工1号	茶褐色	茶褐色	少	少	外面1号付書	
	116 1区 S-620	土師郡	土師郡 鉢	0.8	6.3 ~ 6.7	3.4	工1号	茶褐色	茶褐色	少	少	外面1号付書	
	117 1区 S-620	土師郡	土師郡 郡付	14.2	12.5 ~ 13.0	(11.6)	32号・外方向1号/方向0号・外 方向0号・前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	118 1区 S-620	土師郡	土師郡 郡付	14.8 ~ 15.3	4.7a		32号・前0号・2号	茶褐色	茶褐色	多	多		
第070回	120 1区 S-620	土師郡	土師郡 郡付	6.4a	8.4a	14.1	32号	茶褐色	茶褐色	少	少	内面1号付書	
	121 1区 S-620	土師郡	土師郡 郡付	7.9a	12.3	11.6	32号・前1号/方向0号・工1号 下・下	茶褐色	茶褐色	多	多		
	122 1区 S-620	土師郡	土師郡 高杉	16.2	12.3	11.5	32号・2号	茶褐色	茶褐色	少	少	内面2号付書	
	123 1区 S-620	土師郡	土師郡 高杉	14.0	5.0a		32号・下・前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	124 1区 S-620	土師郡	土師郡 高杉	16.4	4.4a		32号・下	茶褐色	茶褐色	少	少	内面1号付書	
	125 1区 S-620	土師郡	土師郡 高杉	16.4	4.4a		32号・下	茶褐色	茶褐色	少	少	内面1号付書	
	126 1区 S-620	土師郡	土師郡 高杉	7.2a	7.2a	0.0	013号・2号	茶褐色	茶褐色	少	少	内面1号付書	
	127 1区 S-620	土師郡	土師郡 高杉	2.0a	9.4a		32号・前1号	茶褐色	茶褐色	少	少		
第071回	130 1区 S-604	土師郡	土師郡 裏	9.4a	2.0a	6.0	下・前1号	茶褐色	茶褐色	少	少		
第072回	131 1区 S-612b	土師郡	土師郡 深鉢	5.4a	5.4a	6.58	下・工1号	茶褐色	茶褐色	少	少		
第073回	133 1区 S-614	土師郡	土師郡 深鉢	4.1a	4.1a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	134 1区 S-558	土師郡	土師郡 深鉢	3.7a	3.7a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
第074回	135 1区 S-558	土師郡	土師郡 深鉢	7.1a	7.1a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	136 1区 S-558	土師郡	土師郡 鉢	6.5a	6.5a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
第075回	137 1区 S-558	土師郡	土師郡 鉢	7.1a	7.1a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	138 1区 S-558	土師郡	土師郡 鉢	6.5a	6.5a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	139 1区 S-558	土師郡	土師郡 鉢	7.1a	7.1a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	140 1区 S-558	土師郡	土師郡 鉢	2.5a	2.5a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	141 1区 S-558	土師郡	土師郡 鉢	3.1a	3.1a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	142 1区 S-558	土師郡	土師郡 鉢	3.7a	3.7a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
第076回	143 1区 S-570	土師郡	土師郡 環蓋	10.6	2.3a	15.6	前1号	茶褐色	茶褐色	少	少	外面1号付書	
	144 1区 S-570	土師郡	土師郡 環蓋	13.0	2.5a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多	外面1号付書	
	145 1区 S-570	土師郡	土師郡 裏	14.0 ~ 15.2	14.2		前1号	茶褐色	茶褐色	少	少		
第077回	146 1区 S-570	土師郡	土師郡 裏	16.2	29.1a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多	外面1号付書	
	147 1区 S-570	土師郡	土師郡 高杉	4.2a	4.2a		前1号	茶褐色	茶褐色	少	少		
	148 1区 S-570	土師郡	土師郡 深鉢	3.2a	3.2a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	149 1区 S-570	土師郡	土師郡 深鉢	3.5a	3.5a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	150 1区 S-570	土師郡	土師郡 深鉢	6.8a	6.8a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
第078回	151 1区 S-568	土師郡	土師郡 裏	11.8	5.7a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	152 1区 S-568	土師郡	土師郡 裏	6.8a	6.8a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	153 1区 S-568	土師郡	土師郡 鉢	2.1a	2.1a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	154 1区 S-568	土師郡	土師郡 鉢	6.1a	6.1a	(7.0)	前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	155 1区 S-568	土師郡	土師郡 鉢	4.8a	4.8a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	156 1区 S-568	土師郡	土師郡 鉢	5.2a	5.2a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
	157 1区 S-568	土師郡	土師郡 鉢	2.4a	2.4a		前1号	茶褐色	茶褐色	多	多		
第079回	164 1区 S-519	土師郡	土師郡 瓦鉢	1.3a	1.3a		前1号	茶褐色	茶褐色	少	少		
	165 1区 S-519	土師郡	土師郡 面	4.2a	4.2a		前1号	茶褐色	茶褐色	少	少	外面1号付書	
	166 1区 S-519	土師郡	土師郡 環蓋	1.0a	1.0a	3.1	前1号	茶褐色	茶褐色	少	少		
	167 1区 S-519	土師郡	土師郡 瓦鉢	(4.48)	(2.8)	8.4	前1号	茶褐色	茶褐色	少	少		

博覧館名	区域	遺構	副構	口径 (保存場)	原高 (保存場)	崖跡径	文様・図様		色澤		土質		備考
							外周	内周	外周	内周	焼成 石	基石・石塊	
第19回 常陸博 第86回	172.1区	SN547	土	3.6-a			外周	三方向の字	黒灰褐色	黒灰褐色	少	少	
	177.1区	SN591	瓦鉢	3.0-a			外周・内周	研磨	灰褐色	灰褐色	少	少	
	179.1区	SN596	瓦鉢	5.7-a			外周	研磨	茶褐色	茶褐色	多	多	内面種子圧痕か
	182.1区	SP933	深鉢	2.6-a			外周	字	茶褐色	茶褐色	多	多	
	183.1区	SP933	深鉢	4.8-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	184.1区	E4・E5 検出時	深鉢	3.8-a			外周・内周・行後脱離	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	185.1区	E4・E5 検出時	深鉢	5.0-a			外周・内周・行後脱離	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	186.1区	C5 検出	土	4.6-a			外周・内周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	187.1区	E6 検出	深鉢	3.3-a			外周・内周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	188.1区	表土	深鉢	3.4-a			外周	字	茶褐色	茶褐色	多	多	
	189.1区	C5・C6 検出	土	4.6-a			外周	字	茶褐色	茶褐色	多	多	
	190.1区	C6-E6 検出	深鉢	4.5-a			三方向の字・行後脱離	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	191.1区	D5・D6 検出	土	5.8-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	192.1区	C6 検出	深鉢	4.3-a			行後脱離	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	193.1区	C6 検出	深鉢	3.9-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	194.1区	E4・D4 検出	深鉢	4.2-a			外周・三方向の字	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	195.1区	C5 検出	土	2.6-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	少	少	
	196.1区	E4・D4 検出	瓦鉢	2.1-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
197.1区	D5 検出	瓦鉢	2.5-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多		
第20回	198.1区	B5 検出	瓦鉢	3.4-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	縄文RL
	199.1区	D5 検出	土	3.2-a			外周	字	茶褐色	茶褐色	多	多	
	200.1区	D5-D6	土	2.3-a		断面	外周	字	茶褐色	茶褐色	多	多	
	201.1区	C5 検出時	深鉢	2.4-a			外周	字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	202.1区	E4・D4 検出	土	5.4-a			外周・三方・朝目	三方・字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	
	203.1区	C6・E6 検出	土	4.2-a			外周・三方・字・首文脱離	三方・字	黒灰褐色	黒灰褐色	多	多	字文
	204.1区	E4・E6 検出	土	1.7-a			外周・文様	研磨	灰褐色	灰褐色	多	多	
	205.1区	博士	土	2.9-a			同配字・位字	同配字	灰褐色	灰褐色	多	多	
	206.1区	表土	土	0.8-a			同配字・位字	同配字・後脱離	灰褐色	灰褐色	少	少	
	207.1区	E4・E5 検出	土	3.0-a			同配字	同配字	灰褐色	灰褐色	少	少	玉組口縁
	208.1区	表土	土	1.7-a			朝目・筋輪	朝目	灰褐色(筋土)	灰褐色(筋土)			同位置
	209.1区	C5・C6 検出	青瓦	1.7-a			筋輪	筋輪	白灰色	白灰色			筋輪裏面
210.1区	表土	土	8.0	1.3	5.6	同配字・同底糸切り磨し	同配字・仕上げ字	粉褐色	粉褐色	少	多		
211.1区	表土	土	8.8	1.2	6.0	同配字・同底糸切り磨し	同配字・仕上げ字	粉褐色	粉褐色	少	多		
212.1区	表土	土	2.8	2.8		同配字・同底糸切り磨し	同配字	黒灰褐色	黒灰褐色	少	少		
213.1区	表土	瓦質土器	4.8-a			三方向の土器字・字	三方向の土器字・字	灰褐色	灰褐色	多	多		

第2表 上田原東遺跡(1区) 遺物観察表(石器)

神宮番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第3区	1		採集	向軸状石器	流紋岩	2.1	1.75	1.05	4.6	
第9区	3	1区	SH662	打製石斧	安山岩	16.2+ a	7.3	1.45	198.3	被熱あり
第11区	4	1区	SK557	剥片	流紋岩	4.3	3.2	0.8	6.8	旧石器
	15	1区	SK591	打製石斧	安山岩	12.2	5.4	2.2	174.0	
第17区	16	1区	SK591	打製石斧	安山岩か	14.9	6.7	1.9	230.0	
	18	1区	SK595	楔形石器	礫岳産黒曜石	1.9	3.5	1.1	5.6	
第19区	19	1区	SK595	打製石斧	千俣片	9.5	5.6	1.5	97.0	未成品
	20	1区	SK595	打製石斧	安山岩	9.0+ a	5.6	2.6	123.0	
	21	1区	SK595	打製石斧	安山岩	16.6	8.8	1.5	339.1	未成品
第21区	22	1区	SK642	敲石	砂岩	10.75	7.3	6.5	639.6	
第25区	26	1区	SK664	磨製石鏃	結晶片岩	3.7+ a	3.7	0.55	8.5	未成品
第27区	28	1区	SK666	打製石斧	安山岩	6.9+ a	5.4+ a	1.4+ a	52.0	
第29区	30	1区	SK675	打製石斧	安山岩	11.4+ a	7.1	2.1	187.6	
	31	1区	SK691	剥片	安山岩or流紋岩	5.0	3.8	0.8	15.8	
第31区	32	1区	SK691	磨石・敲石	泥岩	12.1	7.0	6.1	740.0	
	37	1区	SH687	横刃型石器	安山岩	5.1	13.0	1.5	114.6	
第37区	38	1区	SH687	打製石斧	安山岩	6.3+ a	5.4	1.7	51.6	
第39区	39	1区	SK665	打製石斧	安山岩	24.8	10.0	2.6	510.0	未成品
第45区	54	1区	SH535	打製石斧	安山岩	12.9	5.9	1.8	155.0	未成品
	60	1区	SH536	砥石	砂岩	4.5+ a	4.9	1.7	60.0	
第47区	61	1区	SH536	打製石斧	安山岩	12.1	5.4	2.2	203.0	
	62	1区	SH536	石皿	砂岩	35.1	26.0	12.0	16000.0	
	89	1区	SH537	打製石斧	安山岩	14.8	4.9	4.05	301.7	89A～Cと接合
	89A	1区	SH537	打製石斧	安山岩	6.6+ a	4.9	2.05	94.6	
第53区	89B	1区	SH537	打製石斧	安山岩	9.7+ a	4.6	2.15	138.8	
	89C	1区	SH537	打製石斧	安山岩	6.35+ a	4.7	1.8	68.2	未成品
	90	1区	SH537	打製石斧	安山岩	7.75	4.1	2.1	72.5	未成品
	91	1区	SH537	打製石斧	千俣片	11.2	5.4	1.6	98.9	
	92	1区	SH537	打製石斧	安山岩	8.9+ a	7.9	2.1	172.9	
第54区	93	1区	SH537	打製石斧	安山岩	8.3+ a	8.4	2.9	234.3	未成品
	94	1区	SH537	敲石	千俣片	7.7	6.3	3.3	220.5	
	95	1区	SH537	台石	砂岩	17.4	21.1	5.3	2730.0	
	98	1区	SH610	敲石	花崗岩	9.1+ a	7.5	5.0	480.0	
第54区	99	1区	SH610	剥片	千俣	4.4	3.7	1.5	16.9	
第57区	127	1区	SH620	磨製石鏃	粘板岩	2.4+ a	2.5	0.4	3.1	
第58区	128	1区	SH620	石皿	安山岩	31.2	36.5	7.6	1200.0	
第66区	138	1区	SD558	剥片	千俣	5.0	3.7	1.6	20.9	
第68区	147	1区	SH570	敲石	安山岩	14.0	11.4	6.8	1610.0	
	156	1区	SD556A	投擲	不明	7.1	4.95	4.5	226.7	
第73区	157	1区	SX556B	磨石	安山岩	8.8+ a	10.7+ a	5.3+ a	589.7	
	158	1区	SX556B	石皿	礫岩	30.9	26.8	13.95	15000.0	
	159	1区	SX556B	台石	安山岩	16.8	23.4	5.5	3560.0	
第75区	168	1区	SX619	打製石斧	珸岩か	10.75	5.7	1.4	115.2	
	169	1区	SX619	打欠石鏃	安山岩	5.75	5.7	2.15	95.4	
第77区	171	1区	SX534	石皿	安山岩	22.5	25.5	8.5	6500.0	
第79区	175	1区	SX549	砥石	泥岩	8.1+ a	2.6+ a	1.8+ a	33.2	二次的加工あり
第84区	181	1区	SK616	打製石斧	珸岩か	9.6	5.6	1.2	86.1	
	216	1区	C-5 検出	縦石刃	流紋岩	2.1	1.0	0.15	0.4	
	217	1区	C-6 検出	剥片	流紋岩	2.2	3.6	0.6	2.7	旧石器
	218	1区	D-5 検出	石鏃	礫岳産黒曜石	1.9	1.4	0.45	0.6	
第88区	219	1区	E-4・E-5 検出	打製石斧	安山岩	7.9+ a	4.0+ a	1.4+ a	53.8	
	220	1区	C-5 検出	磨製石斧	蛇紋岩	6.2+ a	6.2	2.4	84.8	
	221	1区	表土	敲石	安山岩	11.9	10.5	9.0	1570.0	
	222	1区	表土	敲石	千俣片	11.2	7.6	5.2	580.0	

第3表 上田原東遺跡(1区) 遺物観察表(土製品)

標図番号	区域	遺構	種類	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第45図	53	1区	SH535	半円形状土製品	土器	3.4	3.1	0.6	6.6	
第50図	88	1区	SH537	板状土製品	土	4.0	5.3	0.9	19.5	
第54図	97	1区	SH610	半円形状土製品	土器	5.1	2.7	1.1	15.8	費の転用
第57図	125	1区	SH620	半円形状土製品	土器	7.8	3.3	0.7	22.8	
第62図	132	1区	SK612	半円形状土製品	土器	4.2	3.3	0.8	11.1	
第73図	155	1区	SX556B	半円形状土製品	土器	5.9	3.7	0.6	17.3	
第79図	173	1区	SX548	半円形状土製品	土器	3.9	2.3	0.4	5.6	外面スス付着
	174	1区	SX548	土鏝	土	3.7	1.3	1.3	5.9	穿孔0.3cm
	176	1区	SX549	女兒人形	ビニール?	5.1+α	(最大幅) 2.7	0.3	13.6	
第82図	180	1区	S597	半円形状土製品	土器	3.0	3.4	0.7	8.0	
第87図	214	1区	調査区壁	土鏝	土	4.6	1.2	1.2	6.1	穿孔0.3cm

第4図 上田原東遺跡(1区) 遺物観察表(金属製品)

標図番号	区域	遺構	種類	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第57図	126	1区	SH620	刀子	鉄	(9.3)	2.2	0.3	13.8	外面:一部木質残存
第68図	148	1区	SH570 埴'	耳環	銅	(3.5)	0.6~0.7	0.8	14.3	銅芯地に鍍金、内径1.9cm
第75図	170	1区	SX619	釘	鉄	(3.5)	0.6	0.3	2.0	
第79図	178	1区	SX614	銭貨	銅	2.2	2.2	0.1	4.3	10円硬貨か
第87図	215	1区	東壁	釘	鉄	(5.7)	0.2~0.5	0.2~0.5	5.9	

第5表 上田原東遺跡(2区) 遺物観察表(土器)

標記番号	区域	遺構	器種	口径 (残存高)	底径 (残存高)	文様・模様		色澤		加工		備考
						外面	内面	外面	内面	角間石	粘土	
223	2区 SH770	縄文土器	深鉢	3.1 + α	3.7 + α	3.7 + α・3.8 + α		明褐色	明褐色	少	少	
224	2区 SH770	縄文土器	深鉢	5.5 + α	6.45 + α	果腹・頸帯	果腹・三角	明褐色	明褐色	少	少	
225	2区 SH770	縄文土器	深鉢	6.45 + α	4.7 + α	果腹・3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
226	2区 SH770	縄文土器	深鉢	4.7 + α	3.1 + α	果腹・3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
227	2区 SH770	縄文土器	深鉢	3.1 + α	3.1 + α	3.7 + α・3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
228	2区 SH770	縄文土器	深鉢	4.3 + α	5.2 + α	3.7 + α・3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
229	2区 SH770・輸出	縄文土器	深鉢	5.2 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
230	2区 S770	縄文土器	深鉢	2.3 + α	1.5 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
231	2区 S770a	縄文土器	深鉢	1.5 + α	1.5 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
232	2区 SH785	縄文土器	深鉢	3.9 + α	3.7 + α	3.7 + α・3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
233	2区 SH785	縄文土器	深鉢	3.7 + α	3.7 + α	3.7 + α・3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
234	2区 SH785	縄文土器	深鉢	11.8 + α	11.8 + α	3.7 + α・3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
235	2区 SH785	縄文土器	深鉢	7.2 + α	3.8 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
236	2区 SH785	縄文土器	深鉢	3.8 + α	4.1 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
237	2区 SH785	縄文土器	深鉢	4.1 + α	2.4 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
238	2区 SH785	縄文土器	深鉢	2.4 + α	4.2 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
239	2区 SH785	縄文土器	深鉢	4.2 + α	4.7 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
240	2区 SH785	縄文土器	深鉢	4.7 + α	2.7 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
241	2区 SH785	縄文土器	深鉢	2.7 + α	7.5 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
242	2区 SH785	縄文土器	深鉢	7.5 + α	2.0 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
243	2区 SH785	縄文土器	深鉢	2.0 + α	2.4 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
244	2区 SH785	縄文土器	深鉢	2.4 + α	3.8 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
245	2区 SH785	縄文土器	深鉢	3.8 + α	1.5 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
246	2区 SH785	縄文土器	深鉢	1.5 + α	4.8 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
247	2区 SH785	縄文土器	深鉢	4.8 + α	2.5 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
248	2区 SH785	縄文土器	深鉢	2.5 + α	3.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
249	2区 SH785	縄文土器	深鉢	3.3 + α	6.7 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
250	2区 SH785	縄文土器	深鉢	6.7 + α	3.1 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
251	2区 SH785	縄文土器	深鉢	3.1 + α	2.7 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
252	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.7 + α	1.7 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
253	2区 SH871	縄文土器	深鉢	1.7 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
254	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
255	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
256	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.7 + α	2.7 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
257	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.7 + α	2.7 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
258	2区 SH871	縄文土器	深鉢	1.7 + α	4.2	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
259	2区 SH871	縄文土器	深鉢	4.2	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
260	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
261	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
262	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
263	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
264	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
265	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
266	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
267	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
268	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
269	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
270	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
271	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
272	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
273	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
274	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
275	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
276	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
277	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
278	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
279	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	
280	2区 SH871	縄文土器	深鉢	2.3 + α	2.3 + α	3.7 + α		明褐色	明褐色	少	少	

地域番号	区域	遺構	面積	口数 (推定)	墓数 (推定)	外周	内周	色調	外周	内周	角石	基石	備考
第104号	2区 SH054	夯土器	礎	(24+)	327・317・317	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	少	少	
281	2区 SH055	夯土器	礎	42.1+	采銅焼竹・327	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	多	多	
283	2区 SH055・SH760	礎文土器	礎		327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
284	2区 SH055	礎文土器	礎	3.9+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
285	2区 SH055	礎文土器	礎	10.8+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
286	2区 SH055	礎文土器	礎	3.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
287	2区 SH055	礎文土器	礎	1.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
288	2区 SH055	礎文土器	礎	1.9+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
第108号	2区 SH056	礎文土器	礎	(7)	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
289	2区 SH056	礎文土器	礎	(7.2)	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
290	2区 SH056	礎文土器	礎	6.4+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
291	2区 SH056	礎文土器	礎	4.2+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
292	2区 SH056	礎文土器	礎	6.8+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
293	2区 SH056	礎文土器	礎	3.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
294	2区 SH056	礎文土器	礎	3.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
295	2区 SH056	礎文土器	礎	2.1+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
296	2区 SH056	礎文土器	礎	4.3+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
297	2区 SH056	礎文土器	礎	11.3+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
298	2区 SH056	礎文土器	礎	6.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
299	2区 SH056	礎文土器	礎	7.2+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
300	2区 SH056	礎文土器	礎	12.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
301	2区 SH056	礎文土器	礎	(33.4)	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
302	2区 SH056	礎文土器	礎	1.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
303	2区 SH056	礎文土器	礎	3.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
304	2区 SH056	礎文土器	礎	3.1+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
305	2区 SH056	礎文土器	礎	3.1+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
306	2区 SH056	礎文土器	礎	3.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
307	2区 SH056	礎文土器	礎	1.9+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
308	2区 SH056	礎文土器	礎	1.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
309	2区 SH056	礎文土器	礎	5.0	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
310	2区 SH056	礎文土器	礎	1.8+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
311	2区 SH056	礎文土器	礎	3.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
312	2区 SH056	礎文土器	礎	5.0	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
313	2区 SK1000	礎文土器	礎	5.0+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
第111号	2区 SK1000	礎文土器	礎	10.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
314	2区 SK1000	礎文土器	礎	6.0+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
315	2区 SK1000	礎文土器	礎	3.3+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
316	2区 SK1000	礎文土器	礎	3.3+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
317	2区 SK1000	礎文土器	礎	2.0+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
318	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.3+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
319	2区 SK1000	礎文土器	礎	13.0	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
320	2区 SK1000	礎文土器	礎	3.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
321	2区 SK1000	礎文土器	礎	2.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
322	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.1+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
323	2区 SK1000	礎文土器	礎	1.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
324	2区 SK1000	礎文土器	礎	2.4+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
325	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
326	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
327	2区 SK1000	礎文土器	礎	5.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
328	2区 SK1000	礎文土器	礎	3.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
329	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.1+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
330	2区 SK1000	礎文土器	礎	1.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
331	2区 SK1000	礎文土器	礎	2.4+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
332	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
333	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.7+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
334	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
335	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
336	2区 SK1000	礎文土器	礎	4.6+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	
337	2区 SK1000	礎文土器	礎	5.5+	327	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	多	多	

碑の番号	区域	遺構	跡構	口径 (身持高)	高さ (身持高)	彫刻等	文様・彫刻		色調		加工		備考
							外面	内面	外面	内面	高石	長石	
第129回	338 2区 SH660	赤土器	土器	5.0 + a	9.3	小形丸底壺	327・三角尖弁・打手	打手・打口後行・打口・打口直・打口	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
	339 2区 SH660	赤土器	土器	3.4 + a	3.4 + a	深鉢	縄文・浅鉢・丁型尖弁	丁型尖弁	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	少	少	
第130回	346 2区 SH29	縄文土器	深鉢	3.5 + a	3.5 + a	深鉢	縄文・打手	来通・打手	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	
	347 2区 SH29	縄文土器	深鉢	3.7 + a	3.7 + a	深鉢	打手・打手	来通・打手	明褐色	にぶい・黄褐色	多	多	
第131回	348 2区 SH29	縄文土器	深鉢	6.8 + a	6.8 + a	深鉢	打手・打手	打手	明褐色	にぶい・黄褐色	多	多	
	349 2区 SH29	縄文土器	深鉢	5.7 + a	5.7 + a	深鉢	打手・来通	打手	明褐色	にぶい・黄褐色	多	多	
第132回	351 2区 SH29	縄文土器	深鉢	1.6 + a	1.6 + a	深鉢	打手	打手	明褐色	黄褐色	少	少	
	352 2区 SH29	縄文土器	深鉢	13.4	3.8	深鉢	打手・打手・打口・打口	打手	明褐色	黄褐色	少	少	内外面打痕あり
第133回	353 2区 SH29	赤土器	土器	3.2 + a	3.2 + a	深鉢	打手	打手	明褐色	黄褐色	少	少	内外面打痕あり
	354 2区 SH29	赤土器	土器	4.7 + a	4.7 + a	深鉢	打手・打手	打手	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	内外面打痕あり
第134回	355 2区 SH29	赤土器	土器	18.2	5.3 + a	深鉢	打手・打手 (打口)	打手・打手 (打口)	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	
	356 2区 SH29	赤土器	土器	22.0	9.5 + a	深鉢	打手・打手 (打口)	打手・打手 (打口)	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	
第135回	357 2区 SH29	赤土器	土器	10.8	32.1	深鉢	打手	打手	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	
	358 2区 SH29	赤土器	土器	30.5	28.1	深鉢	打手・打手 (打口)	打手・打手 (打口)	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	
第136回	359 2区 SH29	赤土器	土器	32.6	31.2	深鉢	打手・打手 (打口)	打手・打手 (打口)	明褐色	黄褐色	少	少	
	360 2区 SH29	赤土器	土器	16.7	31.5	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	
第137回	361 2区 SH29	赤土器	土器	17.6 ~ 18.4	8.6	深鉢	打手・打口後打手	打手	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	口径 18.5 ~ 21.6
	362 2区 SH29	赤土器	土器	28.7	30.1 ~ 30.4	深鉢	打手・打手・打口直	打手・打手・打口直	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	口径 24.9 ~ 28.7 口径 3 (本貫通 2) 外面打痕あり
第138回	363 2区 SH29	赤土器	土器	25.2	31.6	深鉢	打手・打手・打口	打手	明褐色	黄褐色	少	少	口径 23.0 ~ 26.7 口径 2 外所
	364 3区 SH29	赤土器	土器	2.8 + a	2.8 + a	深鉢	打手・打手・打口	打手・打手・打口	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	内外面打痕あり
第139回	372 2区 SH724	縄文土器	深鉢	2.2 + a	2.2 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	内外面打痕あり
	373 2区 SH724	縄文土器	深鉢	2.7 + a	(7.2)	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	にぶい・黄褐色	少	少	内外面打痕あり
第140回	374 2区 SH724	赤土器	深鉢	3.0 + a	3.0 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
	375 2区 SH724	赤土器	深鉢	3.7 + a	3.7 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
第141回	376 2区 SH724	赤土器	深鉢	2.2 + a	2.2 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
	377 2区 SH724	赤土器	深鉢	3.6 + a	3.6 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
第142回	378 2区 SH724	赤土器	深鉢	(15.6)	5.8 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
	380 2区 SH724	赤土器	深鉢	2.5 + a	2.5 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
第143回	381 2区 SH726	赤土器	深鉢	1.9 + a	1.9 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
	382 2区 SH726	赤土器	深鉢	2.3 + a	2.3 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
第144回	383 2区 SH730	赤土器	深鉢	4.2 + a	4.2 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
	385 2区 SH730	赤土器	深鉢	2.9 + a	2.9 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり
第145回	386 2区 SH730	赤土器	深鉢	5.1 + a	5.1 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	多	多	内外面打痕あり
	387 2区 SH730	赤土器	深鉢	5.5 + a	5.5 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	多	多	内外面打痕あり
第146回	388 2区 SH730	赤土器	深鉢	6.8 + a	6.8 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	多	多	内外面打痕あり
	389 2区 SH730	赤土器	深鉢	5.6 + a	5.6 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	多	多	内外面打痕あり
第147回	390 2区 SH730	赤土器	深鉢	4.5 + a	4.5 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	多	多	内外面打痕あり
	391 2区 SH730	赤土器	深鉢	5.7 + a	5.7 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	多	多	内外面打痕あり
第148回	392 2区 SH730 打手	赤土器	深鉢	4.8 + a	4.8 + a	深鉢	打手・打手	打手・打手	明褐色	褐色	少	少	内外面打痕あり

採石場番号	区域	遺構	遺構	口広 (坪数)	範囲 (坪数)	基壇 形状	外周	文様・装飾		色調		胎土	備考
								内周	外周	内周	外周		
303	2区	SH730	縄文土器	5.8+α		粗い土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
389-2	2区	SH730	縄文土器	2.7+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	内周種子圧痕か
394	2区	SH730	縄文土器	3.0+α		赤土	3.7+行・行・朝日文様	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
395	2区	SH730	縄文土器	4.6+α		赤土	3.7+行・朝日文様	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
396	2区	SH730	縄文土器	3.6+α		赤土	3.7+行・朝日文様・行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
397	2区	SH730	縄文土器	3.2+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
398	2区	SH730	縄文土器	1.8+α		赤土	3.7+行・行・土	黒色	黒色	黒色	黒色	多	外周黒色あり
399	2区	SH730	土師器	5.4	7.7	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	少	内周赤色あり
403	2区	SH731	縄文土器	5.7+α		赤土	3.7+行・行・朝日文様	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
404	2区	SH731	縄文土器	2.7+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
405	2区	SH731	縄文土器	3.2+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
406	2区	SH731	縄文土器	2.5+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
407	2区	SH731	縄文土器	2.8+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
416	2区	SH750	縄文土器	3.4+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
417	2区	SH750	縄文土器	2.4+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
418	2区	SH750	縄文土器	2.7+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
419	2区	SH750	縄文土器	4.3+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
420	2区	SH750	土師器	3.6+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
421	2区	SH750	縄文土器	1.8+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
422	2区	SH750	縄文土器	0.3+α	(8.6)	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
423	2区	SH750	土師器	11.8	3.4	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	少	
424	2区	SH750	土師器	12.8	5.8+α	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	少	
425	2区	SH750	土師器	19.2	8.8+α	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	少	
426	2区	SH750	土師器	10.0	8.4+α	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
427	2区	SH750	縄文土器	5.3+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
428	2区	SH750	縄文土器	3.8+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
429	2区	SH750	土師器	3.2+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
432	2区	SH760	縄文土器	2.8+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
434	2区	SH760	縄文土器	3.0+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
435	2区	SH760	縄文土器	5.2+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
436	2区	SH760	縄文土器	4.5+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
437	2区	SH760	縄文土器	5.8+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
438	2区	SH760	土師器	1.9+α	(5.0)	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
439	2区	SH760	縄文土器	2.5+α	7.4	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
440	2区	SH760	縄文土器	16.0	3.0+α	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
441	2区	SH760	土師器	15.4	8.3+α	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
442	2区	SH760	土師器	16.0	32.3	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
443	2区	SH760	土師器	13.2	24.3	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
444	2区	SH760	土師器	14.2	6.9	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
445	2区	SH760	土師器	14.2	6.8	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
446	2区	SH760	土師器	30.0	31.5	赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	多	
456	2区	SH773	縄文土器	6.6+α		赤土	3.7+行	黒色	黒色	黒色	黒色	少	

碑の番号	区域	遺構	跡構	口径 (身好高)	高さ (身好高)	彫刻	文様・模様		色調		加工		備考
							外面	内面	外面	内面	高石	長石	
第134回	457 2区	SH773	土師器	雲	3.5-a	丸	32字	32字	褐色	褐色	多	少	
	458 2区	SH773・SH896	土師器	胡弓	1.8-a	丸	行	行	灰白色	灰白色	多	少	
	459 2区	SH773・SH896	土師器	高耳	8.0-a	丸	行・工斗字方・0	七蓮の番・行	灰白色	灰白色	少	少	
	466 2区	SH801	縄文土器	丸	4.5-a	丸	行・後3字	行・後3字	黄褐色	黄褐色	少	少	
	467 2区	SH801	縄文土器	丸	3.8-a	丸	行・後3字	行・後3字	黄褐色	黄褐色	多	少	
	468 2区	SH801	縄文土器	丸	3.8-a	丸	行・後3字	行・後3字	黄褐色	黄褐色	多	少	
	469 2区	SH801・SH1016	縄文土器	丸	3.3-a	丸	32字の0行	行・後3字	明褐色	明褐色	少	少	
	470 2区	SH801	縄文土器	丸	2.2-a	丸	行・後3字	行・後3字	明褐色	明褐色	少	少	外面赤色顔料
	471 2区	SH801	赤土器	垂	1.4-a	丸	320・麻織文	320・麻織文	明褐色・明褐色	明褐色	多	多	
	472 2区	SH801	赤土器	垂	5.6-a	丸	32字・工斗字	32字・工斗字	明褐色	明褐色	少	少	
	473 2区	SH801	土師器	丸	14.2	10.0-a	32字・03字	32字・03字	明褐色	明褐色	多	多	外面：黒色塗り
	474 2区	SH801・SH1016	土師器	丸	16.0	10.3-a	03字・03字	03字・03字	明褐色	明褐色	多	多	
	475 2区	SH801・SH1016	土師器	丸	20.2	9.0-a	胡弓・行・行	03字・03字	明褐色	明褐色	多	多	
476 2区	SH801	土師器	丸	17.7	22.4	03字・32字	03字・32字	淡赤茶褐色	淡赤茶褐色	多	多		
477 2区	SH801	土師器	丸	18.5	16.0-a	03字・03字・32字	胡弓	灰白色	灰白色	多	少	外面黒色塗り	
478 2区	SH801	土師器	丸	24.3	13.2	03字・行・行	行・32字	淡褐色・黄褐色	淡褐色	多	少		
第138回	479 2区	SH801	土師器	丸	15.4~17.0	9.9	03字・行・行	32字向の行・32字	明褐色	明褐色	多	少	
	484 2区	SH896中央土	縄文土器	深鉢	2.4+a	丸	行	茶織文	明褐色	明褐色	多	少	
	485 2区	SH896	縄文土器	深鉢	2.9-a	丸	平織直交文	行	褐色	褐色	少	少	
	486 2区	SH896	縄文土器	深鉢	2.1+a	丸	縄文直・麻点文	行	淡赤褐色	淡赤褐色	少	少	
	487 2区	SH896	縄文土器	深鉢	3.7-a	丸	行	行	明褐色	明褐色	少	少	
	488 2区	SH896	縄文土器	深鉢	11.1-a	丸	茶織文・行・32字	茶織文・後行・32字	明褐色	明褐色	多	少	
	489 2区	SH896	縄文土器	深鉢	3.0-a	丸	32字	32字	明褐色	明褐色	多	少	
	490 2区	SH896	縄文土器	深鉢	2.5-a	丸	32字	32字	明褐色	明褐色	多	少	
	491 2区	SH896	縄文土器	深鉢	4.1+a	丸	03字・行・胡弓	03字・行	明褐色	明褐色	多	少	
	492 2区	SH896	縄文土器	深鉢	5.4-a	丸	03字・行	03字・行	明褐色	明褐色	多	少	
	493 2区	SH896	縄文土器	深鉢	3.7-a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	少	
	494 2区	SH896	縄文土器	深鉢	6.4-a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	多	
	第161回	495 2区	SH896	土師器	丸	2.2-a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	多
496 2区		SH896	縄文土器	深鉢	5.3+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	少	
497 2区		SH896	縄文土器	深鉢	2.5+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	少	
498 2区		SH896	縄文土器	深鉢	3.3+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	少	
499 2区		SH896	縄文土器	深鉢	3.5+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	少	
500 2区		SH896	縄文土器	深鉢	1.9-a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	少	少	
501 2区		SH896	縄文土器	深鉢	3.2+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	少	
502 2区		SH896	赤土器	垂	4.0-a	丸	行・後3字	行・後3字	黄褐色	黄褐色	多	少	
503 2区		SH896	赤土器	垂	3.4-a	丸	行・後3字	行・後3字	黄褐色	黄褐色	多	少	
504 2区		SH896	赤土器	垂	2.9-a	丸	行・胡弓	行・胡弓	明褐色	明褐色	多	多	外面赤色
505 2区		SH896	赤土器	垂	5.4+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	多	
506 2区		SH896	赤土器	垂	2.7-a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	多	
507 2区		SH896	赤土器	垂	3.1+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	多	
508 2区	SH896	赤土器	垂	4.9+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	多		
509 2区	SH896	赤土器	垂	6.6+a	丸	03字	03字	明褐色	明褐色	多	多		
510 2区	SH896	土師器	丸	15.0	5.1-a	03字	03字	明褐色	明褐色	多	少		

地区番号	区域	遺構	面積	口数 (推定)	墓数 (推定)	文書・遺物		色目		胎土		備考
						外国	内国	外国	内国	陶器 瓦	灰石	
第161回	2区 SH890	土器	甕	(12.0)	6.2+α	和正通・行・23行	和正通・320α・24行	黒茶褐色	茶褐色-黒茶褐色	多	多	少
	2区 SH890	土器	甕	(21.4)	20.7+α	和正行	和正行・320α・24行	黒茶褐色	茶褐色	多	多	少
	2区 SH896	土器	甕	(21.4)	20.7+α	和正行	和正行・320α・24行	黄茶褐色	黄茶褐色	多	多	少
第162回	514 2区 SH896	土器	甕	(19.8)	11.3+α	和正行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	515 2区 SH896	土器	甕	(19.8)	7.1+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	516 2区 SH896	土器	甕	(19.8)	7.1+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	517 2区 SH896	土器	甕	(19.8)	9.6+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	518 2区 SH896	土器	小管丸底甕	10.0	11.6+α	和正行・23行	和正行・23行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	519 2区 SH896	土器	甕	(10.4)	4.2+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	520 2区 SH896	土器	小管丸底甕		6.8+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	521 2区 SH896	土器	高坏	20.0	6.4+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	522 2区 SH896	土器	高坏	(19.0)	4.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	523 2区 SH896	土器	高坏	14.4	3.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
第163回	524 2区 SH896	土器	高坏		4.8+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	525 2区 SH896	土器	高坏		7.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	526 2区 SH896	土器	高坏		2.9+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	527 2区 SH896	土器	高坏		8.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	528 2区 SH896	土器	高坏		8.4+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	529 2区 SH896	土器	高坏		1.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	530 2区 SH896	土器	甕		1.9+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	531 2区 SH896	土器	甕		2.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	532 2区 SH896	土器	甕		5.1+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
	533 2区 SH896	土器	甕		3.6+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多
第167回	555 2区 SH916	縄文土器	深鉢		5.4+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	556 2区 SH916	縄文土器	深鉢		5.4+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	557 2区 SH916	縄文土器	深鉢		8.3+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	558 2区 SH916	縄文土器	深鉢		5.2+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	559 2区 SH916	縄文土器	深鉢		6.5+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	560 2区 SH916	縄文土器	深鉢		2.9+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	561 2区 SH916	縄文土器	深鉢		3.0+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	562 2区 SH916	縄文土器	深鉢	(10.8)	10.5	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	563 2区 SH916	縄文土器	深鉢		12.2	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	567 2区 SH946	縄文土器	深鉢		2.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
第169回	568 2区 SH946	縄文土器	深鉢		5.7+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	569 2区 SH946	縄文土器	深鉢		4.1+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	570 2区 SH946	縄文土器	深鉢		4.5+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	571 2区 SH946	縄文土器	深鉢		6.1+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	572 2区 SH946	縄文土器	深鉢		2.2+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	573 2区 SH946	縄文土器	深鉢		3.1+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	574 2区 SH946	縄文土器	深鉢		4.9+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	575 2区 SH946	縄文土器	深鉢		3.0+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	576 2区 SH946	縄文土器	深鉢		6.1+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	577 2区 SH1049	縄文土器	深鉢		2.9+α	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
第171回	578 2区 SH1049	土器	甕	10.9	9.9	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	579 2区 SH1049	土器	甕	13.7	20.9	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少
	580 2区 SH1049・SH1731	土器	甕	18.1	27.6	和正行・23行	和正行	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少

碑の番号	区域	遺構	遺構	開口 (発祥高)	高さ (発祥高)	彫刻等	口元 (発祥高)	文様・彫刻		色調		加工		備考
								外面	内面	外面	内面	高石	長石	
581	2区	SH1049	土塀跡	雲	8.4±a			行・船主題		にぶい・黄褐色			少	外底型痕跡あり
582	2区	SH1049	土塀跡	雲行	8.3			3行・10		淡黄褐色			少	外底型痕跡あり
583	2区	SH1049	土塀跡	高行	4.2±a	9.6		行・3行		黄褐色			少	外底型痕跡あり
第171回	584	2区	SH1049・ SH731	土塀跡 高行	13.0 13.2	10.1		舟船行・行・3行		褐色			少	
585	2区	SH1049	土塀跡	高行	3.4±a			3行・行		灰白色			少	
586	2区	SH1049	土塀跡	高行	10.0	(12.0)		行・3行・1行		灰白色			少	
587	2区	SH1049	土塀跡	不明	2.2±a			行・3行・1行		灰白色			少	
第184回	588	2区	SH851	土塀跡 小笠丸遺構	9.6			行・舟船行・3行		黄褐色			少	
第186回	589	2区	SH888	土塀跡	2.6±a			行・10		黄褐色			少	外底型痕跡あり
第188回	600	2区	SH933	土塀跡	3.0±a			舟船行・行・10		黄褐色			多	
第192回	604	2区	SH735	土塀跡	3.5±a			3行・舟船行		黄褐色			少	
605	2区	SH747	舟車土塀	舟車土塀	2.9±a			舟車土塀		黄褐色			少	
606	2区	SH747	土塀跡	舟車土塀	2.0±a			舟車土塀		黄褐色			少	
607	2区	SH747	舟車土塀	舟車土塀	6.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
608	2区	SH747	土塀跡	雲	(30.4)			舟車土塀		黄褐色			多	
609	2区	SH747	土塀跡	高行	(14.6)			舟車土塀		黄褐色			多	
610	2区	SH747	土塀跡	高行	4.8±a			舟車土塀		黄褐色			多	
第198回	611	2区	SH810	土塀跡	7.1±a			舟車土塀		淡黄褐色			多	
第198回	612	2区	SH759	土塀跡	1.7±a	(2.6)		舟車土塀		淡黄褐色			少	
第198回	613	2区	SH759	土塀跡	4.2±a			舟車土塀		淡黄褐色			少	
618	2区	SH794	舟車土塀	舟車土塀	4.5±a			舟車土塀		黄褐色			少	
第202回	620	2区	SH848	舟車土塀	9.8±a			舟車土塀		黄褐色			少	
621	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	2.7±a			舟車土塀		黄褐色			少	
622	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	2.7±a			舟車土塀		黄褐色			少	
623	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	5.4±a			舟車土塀		黄褐色			少	
624	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	5.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
625	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
626	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
627	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
628	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
629	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
630	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
631	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
632	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
633	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
634	2区	SH775	舟車土塀	舟車土塀	4.9±a			舟車土塀		黄褐色			少	
635	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	6.0±a			舟車土塀		黄褐色			少	
636	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	5.1±a			舟車土塀		黄褐色			少	
637	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.3±a			舟車土塀		黄褐色			少	
638	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.3±a			舟車土塀		黄褐色			少	
639	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	3.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
640	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.5±a			舟車土塀		黄褐色			少	
641	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	3.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
642	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.3±a			舟車土塀		黄褐色			少	
643	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	5.6±a			舟車土塀		黄褐色			少	
644	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	5.2±a			舟車土塀		黄褐色			少	
645	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.1±a			舟車土塀		黄褐色			少	
646	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	4.7±a			舟車土塀		黄褐色			少	
647	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	3.1±a			舟車土塀		黄褐色			少	
648	2区	SH808	舟車土塀	舟車土塀	3.8±a			舟車土塀		黄褐色			少	

城跡番号	区域	遺構	跡構	口数 (残存数)	基壇 (残存数)	基壇形状	外周	内周	色調	内周	外周	内周	外周	土質	備考
第203回	649	2区 出土	縄文土器	3.4+α		条型段行	条型段行	行・後法主		灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰石	多
	650	2区 1区6号出土	縄文土器	6.7+α		32行・巻目条溝	32行・巻目条溝	行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	少	少
	651	2区 1区5号出土	縄文土器	2.1+α		行	行	行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	少	少
	652	2区 出土	縄文土器	2.6+α	(8.6)	行	行	行		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多
	653	2区 出土	縄文土器	2.5+α	6.0	行	行	行		褐色	褐色	褐色	褐色	多	多
	654	2区 1区5号出土	縄文土器	8.5+α		32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多
	655	2区 1区5号出土	縄文土器	3.3+α		32行	32行	32行		灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	多	多
	656	2区 出土	縄文土器	4.0	(12.0)	32行	32行	32行		灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	多	多
	657	2区 出土	縄文土器	4.4+α		32行	32行	32行		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多
	658	2区 出土	縄文土器	6.7+α		32行	32行	32行		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多
	659	2区 1区4号出土	縄文土器	4.0+α		32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多
	660	2区 1区5号出土	縄文土器	3.3+α		条溝	条溝	行		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多
661	2区 出土	縄文土器	5.7+α		32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多	
662	2区 埋没調査区出土	縄文土器	3.2+α		32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多	
663	2区 出土	縄文土器	3.3+α		32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多	
664	2区 出土	縄文土器	2.2+α		行	行	行		淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	少	少	
665	2区 出土	縄文土器	6.0+α		32行・埋没帯・行	32行・埋没帯・行	行		淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	少	少	
第204回	666	2区 出土	赤土器	6.4+α		970号・32行・朝目	970号・32行・朝目	行・32行		黒茶褐色	黒茶褐色	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多
	667	2区 1区5号出土	赤土器	7.7+α		32行・行	32行・行	行		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多
	668	2区 出土	赤土器	6.5+α		970号・行	970号・行	970号		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多
	669	2区 出土	赤土器	4.5+α		朝目段行・段	朝目段行・段	行・後法主		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多
	670	2区 出土	赤土器	4.0+α		行	行	行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多
	671	2区 出土	赤土器	6.4+α		32行	32行	32行		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多
	672	2区 出土	赤土器	2.4+α		970号・32行	970号・32行	行・後法主		黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	多	多
	673	2区 出土	赤土器	3.0+α		32行・埋没帯・行	32行・埋没帯・行	32行		黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	多	多
	674	2区 出土	赤土器	3.5	(14.5)	970号・32行	970号・32行	32行		灰色	灰色	灰色	灰色	少	少
	675	2区 出土	赤土器	5.2+α		行	行	行		褐色	褐色	褐色	褐色	少	少
	676	2区 1区5号出土	赤土器	3.55	(7.6)	32行・埋没帯・行	32行・埋没帯・行	32行		褐色	褐色	褐色	褐色	少	少
	677	2区 1区5号出土	赤土器	1.8+α	(6.8)	32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	少	少
第205回	678	2区 出土	白磁	2.1+α	(6.8)	溝跡	溝跡	溝跡		灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	少	少
	679	2区 出土	白磁	3.5+α	6.4	溝跡	溝跡	溝跡		灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	多	多
	680	2区 出土	陶器	1.9+α		溝跡	溝跡	溝跡		灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	多	多
	711	1・2区 出土	縄文土器	4.7+α		行・条溝	行・条溝	行・条溝		褐色	褐色	褐色	褐色	多	多
	712	1・2区 出土	縄文土器	3.7+α		32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	多	多
	713	1・2区 出土	縄文土器	4.4+α		32行	32行	32行		赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	少	少
第210回	714	1・2区 出土	土師器	7.7	5.2	埋没・32行・埋没帯・行	埋没・32行・埋没帯・行	埋没・32行・埋没帯・行		褐色	褐色	褐色	褐色	少	少
	715	1・2区 出土	土師器	2.6+α		溝跡	溝跡	溝跡		灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	少	少
	716	1・2区 出土	土師器	2.5+α		溝跡	溝跡	溝跡		灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	少	少
															黒色 埋没調査

第6表 上田原東遺跡(2区) 遺物観察表(石器)

探出番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第95区	232	2区	SH770	敲石・磨石	安山岩	10.3	10.7+ a	5.8	90.0	
	233	2区	SH770	打製石斧	安山岩	6.5+ a	6.2+ a	2.1+ a	80.0	
	234	2区	SH770	打製石斧	安山岩	8.8+ a	5.0+ a	1.9+ a	116.0	
	235	2区	SH770	打製石斧	安山岩	4.05+ a	5.7	0.65	20.4	
	236	2区	SH770	磨製石鏃	粘板岩	3.1+ a	1.4+ a	0.3	1.3	
第99区	259	2区	SH871	敲石	安山岩	6.1+ a	10.0	5.2	394.4	
	260	2区	SH871	刈込	安山岩	5.9	4.7	2.3	60.3	風化面あり
	261	2区	SH871	打製石斧	安山岩	8.3+ a	6.5	2.2	128.5	
	262	2区	SH871	打製石斧	安山岩	8.1+ a	4.3	1.7	72.3	
	263	2区	SH871	横刃型石器	頁岩	5.4	7.0+ a	0.75	29.5	一部風化あり
第100区	264	2区	SH871	石斧	砂岩か	11.4+ a	5.55	3.0	298.7	未成品
	265	2区	SH871	石皿	霏賢安山岩	9.6+ a	12.2+ a	5.2	876.8	被熱あり
第102区	275	2区	SH915	打製石斧	安山岩	12.4+ a	7.4	2.4	208.7	未成品
	276	2区	SH915	打製石斧	砂岩	5.9+ a	5.6	1.9	71.0	
第104区	282	2区	SH954	磨石・敲石	砂岩	7.7+ a	9.7	6.6	670.0	
	291	2区	SH956	刈込	金山産砂岩	5.5	8.8	0.7	50.3	
第108区	292	2区	SH956	打製石斧	凝灰岩	14.7+ a	11.1	3.5	430.0	
	293	2区	SH956	打製石斧	子伴石	11.7	5.8	1.9	1470.0	
	312	2区	SH981	打製石斧	緑色片岩 千枚岩	or 10.8	4.6	1.1	62.4	
第111区	316	2区	SK1000	打製石斧	子伴石	8.3+ a	6.3	1.5	98.6	
	317	2区	SK1000	十字形石器?	砂岩	9.9+ a	6.3+ a	2.1+ a	122.2	
	318	2区	SK1000	二次加工剥片	子伴石	5.7	11.3	2.9	181.1	
第115区	321	2区	SK812	打製石斧	安山岩	10.5+ a	5.3	2.5	141.7	
	321・368	2区	SK812・SH29	打製石斧 (複合資料)	安山岩	18.5	5.7	2.3	264.0	複合資料
第121区	328	2区	SK970	敲石	砂岩	10.7	9.1	5.2	680.0	
第123区	329	2区	SK1053	原石	流紋岩	6.0	13.0	3.6	387.6	全体的に摩滅
第125区	332	2区	SD774	打製石斧	安山岩	7.2+ a	5.4	2.8	171.6	
	340	2区	SH860	磨石	砂岩	10.4	5.5	5.1	65.0	
第129区	341	2区	SH860	打製石斧	泥岩か頁岩	8.2	4.6	1.2	50.2	
	342	2区	SH860	打製石斧	安山岩	12.4+ a	6.2	2.7	211.2	
	343	2区	SH860	打製石斧	不明	10.0+ a	6.9+ aか	1.7	103.1	
	344	2区	SH860	打製石鏃	姫島産黒曜石	1.9+ a	1.2+ a	0.4	0.5	
第131区	345	2区	SK776	打製石斧	安山岩	12.2+ a	6.3	1.4	107.8	
	366	2区	SH29	紡錘車	蛇紋岩	3.7	3.8	0.9	20.6	穿孔径1.0
第136区	367	2区	SH29	打製石斧	安山岩	5.2+ a	7.2	1.3	57.7	
	368	2区	SH29	打製石斧	安山岩	9.4+ a	5.6	2.1	122.3	
	369	3区	SH29	切目石鏃	粘板岩	10.7	2.8	1.15	50.8	
第137区	370	2区	SH29	石皿	砂岩	22.8+ a	25.1+ a	8.3 ~ 10.1	8,000.0	
	371	2区	SH29	石皿	安山岩	26.7	33.8	9.5	1500.0	
第139区	379	2区	SH724	打製石斧	安山岩	6.2	9.8	1.35	76.5	未成品
第141区	384	2区	SH726	打製石斧	安山岩	7.5+ a	4.0	1.95	77.1	
第143区	401	2区	SH730	石片	砂岩	5.3+ a	2.4	1.85	17.3	
	402	2区	SH730	打製石斧	安山岩	10.45+ a	6.8	2.25	166.3	
第145区	410	2区	SH731	磨石	安山岩	5.3+ a	12.1	4.4	400.0	
	411	2区	SH731	打製石斧	安山岩	3.9+ a	6.1	2.0	54.3	
	412	2区	SH731	打製石斧	安山岩	10.7	6.0	2.2	134.4	石皿の転用か
	413	2区	SH731	碧玉		2.3	0.5	2.0	0.8	
第146区	415	2区	SH731	石皿	安山岩	25.3	35.3	14.1	23200.0	
	430	2区	SH750	磨石	角閃石安山岩	7.4+ a	5.4+ a	5.9	306.2	
第148区	431	2区	SH750	打製石斧	泥岩	6.4+ a	4.8+ a	1.3	31.8	表裏面2層付
	432	2区	SH750	剥片	安山岩	4.0+ a	6.6	1.5	41.0	
第151区	449	2区	SH760	磨石	砂岩	10.6+ a	7.9	4.9	474.1	
第152区	450	2区	SH760	磨製石斧	片岩	6.7+ a	4.7	1.3	55.5	
	451	2区	SH760	打製石斧	安山岩	12.0+ a	7.0	3.1	241.6	
	452	2区	SH760	打製石斧	安山岩	6.5+ a	7.1	1.6	95.0	
	453	2区	SH760 削片	打製石斧	安山岩	5.4+ a	6.4	2.5	103.1	
	454	2区	SH760	打製石斧	安山岩	9.5+ a	6.5	1.5	127.4	
第154区	455	2区	S-760 削片	削片	凝灰岩	30.8+ a	20.3	16.4	8000.0	被熱あり
	460	2区	SH773	石核	流紋岩	8.7	3.3	2.6	74.0	旧石器
	461	2区	SH773	石核	安山岩	8.9+ a	14.3	7.0	1260.0	

採回番号	区域	遺構	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第155区	462	2区	SH773	打製石斧	安山岩	10.7	5.0	1.0	51.7	未成品
	463	2区	SH773	打製石斧	安山岩	9.4+ α	5.0	1.7	97.8	
	464	2区	SH773	磨製石斧	蛇紋岩	7.0+ α	4.7+ α	1.3	49.7	
第158区	465	2区	SH773	台石	安山岩	13.5+ α	15.3+ α	4.9+ α	97.0	以付着
	480	2区	SH801	磨製石鏃	粘板岩	2.1	1.1	0.25	0.6	
	481	2区	SH801	打製石斧	安山岩	9.3+ α	6.7	1.4	73.1	
第163区	482	2区	SH801	打製石斧	安山岩	13.9	5.7	2.8	244.3	
	533	2区	SH896	石鏃	郷島産黒曜石	2.4	1.8	0.4	1.3	
	534	2区	SH896	磨製石鏃	粘板岩	3.3+ α	1.2	0.25	1.8	
	535	2区	SH896	石鏃	弁ト	2.7+ α	1.15	0.65	2.5	
	536	2区	SH896	剥片	安山岩	7.3	3.8	1.7	56.6	
	537	2区	SH896	磨製石斧	花崗岩か	13.6+ α	5.5+ α	3.0+ α	291.5	未成品
	538	2区	SH896	打製石斧	安山岩	13.9	6.0	2.05	260.3	
第164区	539	2区	SH896	打製石斧	安山岩	8.0+ α	5.0+ α	1.3+ α	49.7	
	540	2区	SH896	打製石斧	安山岩	6.0+ α	6.1	1.5	57.6	
	541	2区	SH896	打製石斧	安山岩	9.25+ α	7.6	1.8	157.7	未成品
	542	2区	SH896	打製石斧	千枚岩	6.9+ α	5.0	1.4	65.6	
	543	2区	SH896	打製石斧	安山岩	13.6+ α	7.0	2.1	183.6	
	544	2区	SH896	打製石斧	安山岩	19.0	6.8	4.5	640.0	未成品
	545	2区	SH896	磨製石斧	砂岩	6.6+ α	5.1	3.05	124.7	
第165区	546	2区	SH896	磨製石斧か	千枚岩	3.95+ α	4.7+ α	1.0	27.1	
	547	2区	SH896	礫石	安山岩	9.1	6.5	5.9	51.0	
	548	2区	SH896	礫石	砂岩	6.7	7.6	3.5	23.0	
	549	2区	SH896	礫石	砂岩	15.6	6.8	4.3	59.0	
	550	2区	SH896	礫石	砂岩	5.8	4.45	3.0	100.8	
第167区	551	2区	SH896	礫石	砂岩	9.7	4.4	3.0	20.0	
	565	2区	SH916	打製石斧	安山岩か	10.5	4.2	1.5	71.6	
	566	2区	SH916	打製石斧	安山岩	5.3+ α	4.9	1.5	54.8	表面被熱あり
第172区	588	2区	SH1049	打製石斧	テ付付	11.0+ α	5.6	1.5	119.8	
	589	2区	SH1049	打製石斧	テ付付	4.2+ α	6.2+ α	2.3+ α	59.0	一部被熱あり
	590	2区	SH1049	礫器・礫石	砂岩	6.95	9.8	2.5	226.4	
	591	2区	SH1049	石皿	凝岩	12.5	16.3	4.1	1140.0	
第174区	592	2区	SK737	打製石斧	安山岩	11.0	5.0	2.0	117.7	
第176区	593	2区	SK761	打製石斧	凝岩	5.1+ α	8.0	1.05	42.8	表面被熱あり
第178区	594	2区	SK783	打製石斧	安山岩	11.0+ α	7.0	1.5	97.3	
第180区	596	2区	SK789	磨製石鏃	蛇紋岩	1.6+ α	1.5	0.2	0.8	
第182区	597	2区	SK791	打製石斧	千枚岩	9.7	5.0	1.1	57.8	
第188区	601	2区	SK933	石鏃	郷島産黒曜石	2.2	1.4	0.5	1.2	未成品
	602	2区	SK933	磨製石鏃	粘板岩	3.9	1.8	0.3	2.8	
第190区	603	2区	SK725	打製石斧	安山岩	8.95+ α	6.2	1.35	99.1	
第196区	612	2区	SK940	砥石	結晶片岩	9.8+ α	3.6	1.0	59.5	
	613	2区	SK940	砥石	結晶片岩	16.5	7.0	1.8	328.8	
	614	2区	SK940	礫器	結晶片岩	7.2	7.0	2.1	123.9	
第200区	616	2区	SD728	礫石	砂岩	9.5	7.3	6.2	630.0	
	617	2区	SD728	磨石・礫石	角閃安山岩	8.6+ α	9.3	6.4	730.0	
第202区	619	2区	SP784	剥片	安山岩	5.5	9.1	0.9	49.2	
	621	2区	SP949	打製石斧	砂岩	4.7+ α	5.8	1.7	31.5	
	623	2区	SP989	台石	砂岩	13.0	18.25	7.9	2770.0	
第205区	681	2区	H-6 検出	磨製石鏃	緑色片岩	4.6+ α	1.7+ α	0.4+ α	3.3	未成品
	682	2区	G-5 検出	磨製石鏃	粘板岩	3.7	1.9	0.5	2.1	未成品
	683	2区	G-4 検出	礫器	結晶片岩	9.3	10.6	3.2	331.1	縄文早期
	684	2区	確認調査以外	剥片	結晶片岩	10.7+ α	10.8+ α	2.9	265.3	縄文早期
	685	2区	検出時	剥片	弁ト	3.8	2.7	1.2	11.1	
	686	2区	G-5 検出	剥片	粘板岩	4.4	10.2	0.7	29.9	
第206区	687	2区	G-4 検出	剥片	凝灰岩	11.8+ α	7.3	2.0	124.6	
	688	2区	I-6 検出	磨製石斧	テ付付	10.1+ α	5.7	1.2	72.8	表面被熱
	689	2区	確認調査以外	打製石斧	テ付付	10.9+ α	4.3	2.1	88.2	
	690	2区	表土	打製石斧	安山岩	11.1	8.1	1.1	113.8	表面・裏面被熱
	691	2区	G-4 検出	打製石斧	安山岩	13.0	7.1	2.0	160.5	未成品
692	2区	表土	磨製石斧	花崗岩か	12.4+ α	6.9+ α	2.1+ α	234.6	未成品	

押込番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第207区	693	2区	確認調査片浮	打製石斧	安山岩	11.1+ α	5.8	2.3	180.0	
	694	2区	確認調査片浮	打製石斧	緑色片岩	9.0+ α	5.9	1.1	88.1	
	695	2区	G-5 検出	打製石斧	安山岩	10.0+ α	5.7	1.3	96.2	
	696	2区	検出	打製石斧	閃緑岩	10.1+ α	6.2	2.4	163.1	
	697	2区	H-5 検出	打製石斧	安山岩	8.5+ α	6.0+ α	1.6+ α	102.1	二次焼熟
	698	2区	F-5 北壁	打製石斧	緑泥石	8.8+ α	6.1	2.3	124.4	
第208区	699	2区	検出	打製石斧	片浮体	9.6	7.3	1.9	133.9	
	700	2区	表土	磨製石斧	砂岩	6.5	4.6	2.6	101.5	
	701	2区	G-4 検出	切目石鏃	砂岩	5.7	4.5	1.5	58.1	
	702	2区	表土	切目石鏃	粘板岩	9.6	6.6	2.1	190.8	
	703	2区	検出	切目石鏃	粘板岩	6.6+ α	5.65	0.75+ α	34.4	
	704	2区	検出	切目石鏃	粘板岩	8.9	2.6	1.7	59.2	
	705	2区	G-5 検出	打製石鏃	砂岩	6.8	5.0	2.9	153.8	
第209区	706	2区	東壁	敲石	角閃石安山岩	10.5	9.4	5.1	748.0	
	707	2区	G-6 検出	敲石	砂岩	8.3	7.6	4.5	396.1	
	708	2区	表土	敲石	片浮体	11.8	8.8	5.6	718.6	
	709	2区	表土	磨石・敲石	砂岩	8.5	7.7	4.1	401.2	
	710	2区	H-6 調査区壁	台石	礫岩	24.1	24.6	7.5	6620.0	
	717	1・2区	排土	敲石・磨石	砂岩	13.2	11.6	9.7	2060.0	
	第210区	718	1・2区	排土	剥片	片一	3.1	2.25	0.6	4.6
719		1・2区	排土	打製石斧	安山岩	7.8	5.2	1.0	53.5	
720		1・2区	排土	磨製石鏃	粘板岩	2.8	1.25	2.05	1.1	
721		1・2区	排土	石鏃	安山岩か	5.6	2.5	1.8	38.0	

第7表 上田原東遺跡(2区) 遺物観察表(土製品)

押込番号	区域	遺構	種類	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第143区	400	2区	SH730	半円形状土製品	土器	3.2	2.6	0.75	7.3	下城式供の転用
第145区	408	2区	SH731	壁土	土	6.4	6.5	4.1	107.7	
	409	2区	SH731	円形土製品	土	3.6	3.2	1.3	14.3	
第151区	447	2区	SH760	半円形状土製品	土器	3.8	2.9	1.05	12.4	赤生塗の転用
	448	2区	SH760	土鏃	土	3.0+ α	1.4	1.4	5.9	穿孔径0.4
第167区	564	2区	SH916	壁土	土	8.6	5.0	3.3	70.9	
第171区	587	2区	SH1049	土玉	土	2.2	1.7	0.7	4.5	穿孔径0.4

第8表 上田原東遺跡(2区) 遺物観察表(金属製品)

押込番号	区域	遺構	種類	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第136区	365	3区	SH29	鉄鏃	鉄	3.7+ α	3.1+ α	0.2	8.1	
第145区	414	2区	SH731	鉄鏃	鉄	19.3	0.5~0.7	0.5~0.7	26.8	
第158区	483	2区	SH801	手鏃	鉄	9.3	2.9+ α	0.2	20.7	
	552	2区	SH896	板状鉄斧	鉄	9.8+ α	4.2	0.6	129.3	
第165区	553	2区	SH896	鉄鏃	鉄	7.4+ α	0.5~1.6	0.2~0.5	9.0	
	554	2区	SH896	刀子	鉄	5.3+ α	1.8	0.3	11.5	

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第28集

上田原東遺跡

— 県道三重新設線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2) —

（第1分冊）

2024（令和6）年3月29日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分市牧緑町1番61号
TEL 097-552-0077

印刷 明治印刷株式会社
〒872-0001 大分県宇佐市大字長洲607
TEL 0978-38-0135
